

---

# 風はあるから ~風の双子の物語~

まどか風美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風はあるから ～風の双子の物語～

### 【Nコード】

N8035K

### 【作者名】

まどか風美

### 【あらすじ】

男は時折、自分の立場を引け目に思う。自身の将来を思い、立ち竦むこともある。けれど、彼は空を知っていた。その愛すべき空を教えてくれた、掛け替えの無い相棒と暮らしていた。

他にも幾人かの人に、心を許すことが出来た。だから男は、とにかく今を懸命に生きられる。

これは男 - ファーボルグ・ファーディアと、その相棒 - 飛行妖精の

フータが紡ぐ、誰かの愛おしい、世界の片隅を映じた物語。

「神は細部に宿る」とは昔から知られた格言のようなものですが、これを自分なりに実践してみようと思い、書き上げたのが本作品です。舞台は異世界、ジャンルはファンタジー文学です。

枚数は400字詰め換算で550枚。全38回を、毎週金曜の夜・原則1話ずつのペースで公開していくつもりです。長い連載になりますが、よろしければお付き合いくださいませ。

(おまけ：筆者の twitter ホーム <http://twitter.com/mdkkm>)

## 第1回

男と飛行妖精が、空を渡って行く。

耳覆いの付いた古ぼけた革製の飛行帽と、風除けのゴーグルとにほぼ隠されて、男の表情は良く分からない。だが、飛行時にはきつと理想とされる鞍の上での男の姿勢、アームレストにしっかりと添えられた、良く使い込まれた革製の手袋をはめた両手、それらが彼を経験豊富な飛行家と確信させる。無駄の無い平均的な体付きに、腕の筋肉がやや豊かなようだ。姓はファールボルク、名はファールディア。それが男の名だ。ただ、彼は記憶の最初からファードと呼ばれていたし、だから彼自身、人からはそう呼ばれるのが自然だと思っていた。

背に鞍とファードを負っている飛行妖精は、スカーラル・シーだ。首から前肢、前肢から後肢、後肢から尾の付け根へと、両体側に四角く発達した飛膜、飛行時にそれをより広げる特殊な前肢軟骨、平たいへらのような形の尻尾。殆どムササビの飛び姿である。目立つ違いは先ずその大きさで、頭から尾の付け根までが2m程度、更に尻尾も同じくらいの長さを持っていた。額から2本長く伸びた、純白のこ毛に包まれた触角状の器官もまた特徴的だ。これらだけでなく、この飛行妖精は全身が毛足の長い、真っ白な体毛で覆われている。

スカーラル・シーは風の妖精だ。その証拠に虹彩の色が、風の精霊力に関わりのある全ての妖精に共通する、瑞々しいレモンイエローだった。目全体の形はリス科を思わせ、丸くて大きい。この風の妖精は、飛膜の下に自ら力強く風を起こし、何処までも滑空していた。なるほど、飛行妖精であった。

このファードの相棒にも無論名前がある。フータと言うのがそれだ。風の精霊にちなんだ、ファードのようにスカーラル・シーに背

を借りる連中の間では、ポピュラーな名付けだった。

見渡す限りの豊かな森である。ファードとフータは、その上を気持ちよく飛行していた。ここ数日は汗ばむくらいの陽気もあり、今日も暖かだ。樹冠の緑は、この瞬間にも濃く深くなっていくようだった。自身が落とす影も濃い。その影が迫ったり遠ざかったり忙しくなく、二人は高木の上を滑っていった。

この国の首都、ヴァルチエリアの郊外を飛び立って、既に小一時間ほど飛行していた。開発が進むこと目覚ましい首都ではあるが、高層建築や、密集した住宅地域は案外早く横切れて、飛行のかなりの部分、こうして緑に輝く屋根を眺めているのだった。

ファードは先程から手元と、周りの景色を見比べていた。視線を落とす先には、鞍に備わった飛行時計やコンパス、小さな書類を挟めるクリップなどがある。クリップに挟んであるのは、小さく折り畳んだこの地域の地形図だ。コンパスも逐一チェックしているし、方角は間違っていない。目的地の小さな村は、そろそろ見えてくるはずだった。

鞍から身を乗り出すようにして下に注意していると、木々の間にようやくその細道を見付けた。先へ進めば森が小さく開け、通過の際、一軒の民家らしき建物の屋根を認めた。この道はこの辺りの山地を越え、南部地方へと出るもので恐らく違いなく、建物は道沿いに建っていた。比較的大きいようだし、宿屋や飲食店などと思われ

た。  
ファードは相棒の鼻先を巡らせた。道を聞くために、下りてみようと思ったのだ。

建物の前が小さな広場のようになっていて、それが上からは開けて見えたのだった。フータは飛膜の下に風を溜め、垂直に、静かに舞い降りる。踏み固められ、乾いた土から、埃が渦を巻いて舞い上がった。

「おう、おう。風乗りとは、随分久しぶりに見るのお」

身軽に鞍から降り立つと、ファードはそう背中に話しかけられた。

飛行帽を顎の下で固定する帯に手をかけたまま、体ごと振り向くと、建物の戸口に揺り椅子を出したじいさんが、肘掛けに両手をつけて身を起こし、皺に半ば埋もれた目を大きく見開いて、こちらを見ているのだった。

「こんにちは。突然、空からすみません」

飛行帽とゴーグルを取ると、日に焼けた人懐こい顔立ちが表れた。短く刈った亜麻色の髪を素早く整えつつ、老人に歩み寄る。

「ここは食事処じゃよ」

老人はゆっくりと、静かに深く息を吐きながら背もたれに体を預け、揺り椅子を小さく、その様子は多分動きの化石を見ているくらい決まり切っていて、前後させ始めた。戸口の脇の手摺りに、馬が一頭繋がれ頭を垂れている。持ち主も彼と同じ様に食事中なのかも知れないが、開け放しの戸口の奥はしんとしていた。この細道は、長く延びるとはいつても主要な街道ではない。ここだけ時の流れが遅くなっているような、そんな印象を受けた。

「もし、あなたが宿を探してるなら、もう一山越えなきゃならん」

「その宿があるのは、白葉はくようの村ですか？」周辺に葉裏の白い樹種が多いことから、そう名付けられたという小さな村の名を、ファードは口にした。

「そうじゃよ」老人はじっくりと肯定した。「その道を行けば、じきに着くじゃろ」

「そうですか」元より念のための確認だったが、それでもほっとする。

「旅行かね？」

「いえ、そこに届け物があるんです」ファードは愛想よく苦笑した。「ついさつき、急な依頼を受けまして。それで飛び出してきたんですよ」

「ああ。そうじゃった、そうじゃった」老人は頭頂部へ手をやると、掌を吸い付けそうなるその印象に相違して、軽やかに二、三度撫でた。「風乗りっちゅうのは、そういう連中だったな。最近、さっぱ

り用を頼まなくなったから、忘れとつたぞい」

「ええ、まあ」この一瞬は自然な愛想のよさも消えて、表情が少し翳った。でも本当に一瞬だ。「では、行きます。お時間を頂戴してしまいました。申し訳ありません」

「ご覧の通り、暇な爺じゃて」老人は全く気付いた風もなく、少し意外なくらい芯のある笑い声を立てた。「息子夫婦がやつてる店じやがな、新鮮な山の幸を使った料理なら、何でも出すよ。良かったら、届け物の帰りに寄っていきなさい」

「ええ、是非。そろそろ昼かって時に、仕事が入りましたからね」飛行帽を被りながら、これは心からの笑顔で答えた。フータの背に跨り、我が身を鞍に安全ベルトでしっかりと固定する。ゴーグルを下げる前に、老人に目礼した。相手は右手をちょこつと挙げ、応えてくれた。

一気に舞い上がる。強い日差しに些か漂白された青空へ、再び戻った。

「聞いての通り、あと一息だ」目指す方向へ鼻先を向けさせながら話しかけると、フータは低く一声唸った。このような単純な発声しかできないようなのに、スカーラル・シーは人語（分節を持った言葉）を良く理解することが出来、余談ではあるが、これは未だに脳科学者や言語学者たちを悩ませている問題でもあった。「お前の好きなミズナラもありそうな森だな」首を巡らせ、ファードは言う。

「あの店なら好物を出してくれそうだぞ。まあ、時期的にドンダンは無理だろうがな」

フータがまた唸った。不満げだ。「そうばやくなよ。さっさと仕事を終わらせて、昼飯にありつくでしょう」

それを合図に、フータの体がぐんと速度を増した。緑濃い山陰に隠れる一瞬、純白の全身が、陽光を涼やかに反射した。

風乗り。

スカーラル・シーの背に在って空を行く者のことを、この世界ではこう呼ぶ。だからファードは風乗りだった。初めて風に乗ったのは15の時だから、キャリアの方はもう20年以上になる。フータは初飛行のその日から相棒であるけれども、付き合いそのものは、彼が風乗りとして生きてきた時間より更に数年長かった。

旧い友人の背の上に在ることは、ファードにとって何よりも心安らぐ一時だった。けれど、今は例外のようである。瞳の色に本来の明るさが無い。憂鬱に翳っている。

『おう、おう。風乗りとは、随分久しぶりに見るのぉ』

白葉の村を目指しながら、思い出されるのは老人の一言だった。なんだ、いきなりご挨拶だな、そんな風に不快に感じたのではない。それどころか、老人は率直に真実を述べただけなのであって、それがファードの眉を曇らせる。

かつて風乗りは、経済、文化、あるいは軍事、要は国家の根本を担う、国からも手厚く保護された重要な職業だった。スカーラル・シーの飛行能力は優秀だ、人や荷物を負いながら経済速力（飛行妖精に適用された場合、この語は最も体力が持続する速度という意味を持つ）は実に時速150km、一日に千数百kmの距離を飛べた。新鮮な情報を、重要な物品を、陸路、海路を行くよりも遙かに速く運んでくれる風乗りは、なるほど国を問わず庇護の元に置かれ、大切にされただろう。数千km四方の広大な国土を有する当国ならば、尚更のことである。

だが時代は下り、人類は技術を発達させるようになる。最初に風乗りの存在を脅かしたのは、飛行船だった。この空を行く船は、速度では風乗りに劣るものの、一度の輸送能力では遙かに風乗りを凌駕した。

やがて飛行機が実用化される。輸送能力についてはスカーラル・シーと大差無い、現時点でも小型の単発機が主流だが、この乗り物は飛行妖精よりもずっと速く飛べた。大型化への歩みも無停止まっではない。数は少ないが双発機はもう飛んでいるし、より多発の



大型機が活躍を始めるのも、そう遠いことではないと思われた。

陸上での革命は、何といても自動車の誕生に尽きるだろう。木炭、石炭、最近はガソリンエンジンも急速に普及し、大型の車両もどんどん使われるようになっていく。勿論、鉄道も陸上輸送の主力の一つだ。蒸気やディーゼル、電車はまだ各国とも、電力網の整った大都市圏での近距離輸送に限られるようだが、その敷設は盛んである。一方で海上に目を転じれば、かつての帆船に代わり、大型の自走船が普通になってきていた。

物品輸送のみならず、情報伝達の面でも技術革新は相次いだ。電話やラジオ、テレビはもうどの家庭でも見慣れた、ごく有り触れたものになっている。特筆すべきはデジタルデータ専用の広域ネットワーク網で、最初一部の大学や研究機関が築いたそれが民間へ開放されるや、それまでは低調とも言えた二値情報汎用端末の各家庭への普及が、驚くべき伸び率で進行することになった。小型化の得意なメーカーが、携帯できる端末を開発しているとの噂もある。

これらの変化は、風乗りの長い歴史と比べればごく短い間の出来事だ。しかしその短い間に、風乗りはかつての有利さを坂から転げ落ちるようになつていったのだ。特にファードが風乗りになつたのは、もうその落下は近々落ち切るのがほぼ明らかだと、誰からも思われていた頃だった。国策だった風乗りの育成も、その頃までには数社の民間企業が行う、私的で小さな事業になっていた。それに伴って風乗りの数も、全盛期の数十分の一にまで落ち込んでいた。仕事も緊急の物品・人物輸送など、飛び込み的な、全体からすればごく一部に限られたものになっていた。

それでも以前は、空を少し行きさえすれば、何人かの仲間と擦れ違つたものだった。

だがこの頃は違う。ファードとフータが、空で他の風乗りを見かけることは無くなった。先程の老人が好例で、人々からも次第に忘れられつつある。

ファードとフータは、彼らが拠点とする首都ヴァルチエリアを含

む、この国の東部地方と呼ばれる一帯において、風に乗る最後の組と言われていた。国土は広く、人々は風乗りを忘れかけている。本当のところはどうか分からなかった。他の地域には案外多く残っているのかも知れない。國中探しても、ファードとフータの組だけなのかも知れない。

今日のように空を行っても、彼らは他の風乗りに出会わない。

ただ一つ、それは明らかだった。

## 第2回

ここは首都ヴァルチエリアの中心部で、官庁街とも繁華街とも文化街とも呼べるような、とにかく人の営みが高く集積した地区だ。

国会議事堂や中央省庁を始め、国立博物館、最古の国立大学、または巨大企業の本社屋や毎日賑わうショッピングモールなど、優美さや威容を第一印象とする建築物が多い中に、古い様式と近未来のそれとが融合した洒落た外観で一際目を引く、5階建ての建物があった。立地とその見栄えから首都の新名所の一つにも数えられるようになった、歴史民俗資料館“時の三精霊”の建物だ。来し方を振り返れば今が知られ、未来も夢見られる。その開設理念が名前の由来だった。

そろそろ、館前の広場にも帰宅の人通りが増えてくる、夕方時である。入館無料の館内に、折しも3人の女の子が入ってきたところだった。全員が深い茶のブレザーに水色のブラウス、クリーム色を基調にしたチエックのスカートと、胸元に同じチエックのリボンをつ結んでいる。この資料館の近くに校舎のある、国立高校の制服だった。スカートの丈の短さは今風でも、シルエツトや色合いなどは地味目だろう。だがこの制服は、才子の目印として名高いものだった。事実、学力レベルが全国屈指というだけでなく、政界、財界、科学技術、様々な重要分野で活躍する人々で、この高校を母校とする者は非常に多かった。甲高い笑い声が響く。才媛ではあっても、この3人に堅苦しいところは無いようだった。年頃の女の子らしく、屈託なくはしゃぎあっていた。

「あー、懐かしい」ブルネットの長い髪を頭の両脇に分け、それらの根元をオフホワイトレースのリボンで飾った少女が、独特の柔らかい抑揚を付けて言った。「ここへ来るの、中2の夏休み以来かなあ。自由研究で東銀器（ちやうど）のこと調べたんだよね」彼女はエスカレーターの手摺りから身を乗り出し、次第に眼下に遠ざかるエントランス

ホールを見て、楽しそうだった。

「調べただけじゃなくて、実践も伴ってただろ」別な少女がからかうように応じる。肩を少し越えて真っ直ぐ伸ばしたブロンドに、何本かの細い三つ編みがアクセントを添えていた。「何処かのお師匠さんとこ押し掛けて、大皿打ってきたーって。レポートと一緒にその皿受け取ったセンスの顔、今でも忘れんわ」その時は呆れた行動力だけじゃなくて、皿の出来映えでもみんなを驚かせたんだよな。

「けどな、碧みどり。そんな身を乗り出したら危ないって、そんな時も言われんかったか？」

「あんたもだ。藍あゐ」3人の先頭を切ってエスカレーターに乗り込んだ、年相応の瑞々しい黒髪を短めに、軽く流すようにカットした快活そうな少女が、お子様行動については大差ない、ブロンド娘にきっぱりと告げる。「てかあんたたち、本当についてくんのか？」ぶっきらぼうな言い方には、呆れたような、気恥ずかしいような、微妙に調子が入り交じっていた。

「勿論一緒にしますがな」ブロンドの藍が揉み手をしそうににやにやしている。「ミュウの男がどんな人かなんて、そりゃ興味ありまっせ」

「うんうん」ブルネットの碧の笑顔も、同じ興味にとても眩しい。「だからそんなんじゃないんだってば」黒髪ショートのミュウが、うんざりしたように溜息をついた。「ファードは家に下宿している人。今日は夕飯の買い物に付き合ってもらっただけ。何度も言ってるでしょ」

「同じ屋根の下あ…ふふっ」最上階まで貫く高い吹き抜けの、いずこか無限遠の辺りに熱っぽい眼差しを向けながら、碧が呟いた。

「色々想像して後で幻滅すれば？ もう40近いおじさんなんだから」相手にするのも馬鹿らしくなったのか、ミュウは素っ気ない。

「いやいやあ。ミュウ嬢を虜にしたナイスミドルですかー。こらあますます興味ありますな」藍は腕を組み、何度も大きく頷いた。「そろそろ蹴り散らしてやってもいいよね？」ミュウの声が一段、

低くなる。

「ほんとに蹴ろうとすなっ！」ゆらりと膝を上げた相手の右足は、縮みきつた鋼のバネを連想させる。藍は器用に、移動階段の数段を一瞬で後ずさった。「落ちたらふつーに死にますヨ？」

「どんな人くらいかは公表しましよ〜」自分を挟んで攻防が繰り広げられ、ミュウの膝頭が鼻先にあつても碧はマイペースだ。

「風乗り」言葉を放り出すと同時に、更に上階へ行くエスカレーターへ、ミュウは足早に乗り換えた。

「それ以外には〜」

「ノーコメントです」

「碧い。あんた、ほんま勇氣あるわ」

散々騒いだ末、ようやく目的の4階に着いた。

この階では、主にこの国の交通や流通の歴史を、必要ならば時間を切り口にしたものの代表と言っていていいだろう。かつては世界規模で歴史の特定部分のみならず、全てにおいて深い関わりを持っていた、風乗りの展示である。かなりのスペースが割かれたその一角に、ミュウは用があつた。

平日の閉館間際の館内に、来館者は数える程のようだ。落ち着いた照明の調子もあつてか広い空間は一層深山に似て、微かな気配がむしろ、より深い静けさを誘うように感じられる。

その寂しげなフロアの奥の方から、低く朗々と男の声が響いていた。展示を回つて移動する。視界が開けた先に数人の若い女性と（質問やメモが熱心なところを見ると、大学のゼミの課題など、そのようなものだろうか）、当館の制服に身を包み展示解説をしている男の姿があつた。制服を着た男はファードだった。

ファードの姿を認めた所でミュウは立ち止まった。20歩ほど間を置いている。

「あの人？」

その様子に藍も一旦は声を低めた。ミュウが頷く。

「まだお仕事中だね」ミュウの肩に掴まり、背後から覗くような仕事で、碧は好奇心を隠そうとしない。

「私、待つから。二人ともバイバイ」

口を開きかけたら機先を制せられ、藍はぐつと言葉に詰まる。「ミュウちゃんが冷たいや」情けない声で、ようやくそれだけを言った。

「ここ、5時半に閉館だったよね？」碧は左の掌を軽く仰向けせ、可愛い腕時計を確認している。5時20分だった。「それではみんなで待ちましょー」彼女は右手を振り上げた。事は了承され、可決されたのだった。

「碧…」藍は声を震わせ、そつと目頭を押さえている。「あんたの自然体っぷりに、あたしゃ時折感動する。それ以外はうざいけど」「うざいって、ひどーい！」

本当に心外そうに、碧は腕を振り回し藍を打ちのめしにかかった。藍は顔半分を口にして逃げ惑い始める。適当に身をよじってはポカス力何発かくらい、益々声高く笑った。

「ちよつと」ミュウは慌てた様子で二人の腕を掴み、エスカレーター降り口の所まで引張って行った。「騒いだら迷惑じゃない。ファードの仕事の邪魔、しないで」

先程からのすげない態度に加え、上からみたいなこの物言いが止めたのか、藍の表情が急に強張った。「…おーお。こりゃあんなの方が姉さん女房みたいやね」両足を心持ち開いて腕組みをし、ミュウを見据える。

ミュウの形のいい眉がきりきりっと吊り上がった。碧は口の中で、やばつと呟く。

「そんなにファードを紹介して欲しいんだ」ミュウも正面から相手を見据えた。

「そつちこそ、なんでそんなに隠したがるん？ やっぱつきおうとるんやろ」藍はふんと、鼻を鳴らした。

「あんたね…」津波の前に波が引くようだった。直後、漆黒の瞳に

火花が散る。「ファードは人だつ！それを珍獣みたいに…あんなんかに興味本位で、へらへら付き纏って欲しくはっ」

ミュウはあつと言葉を飲んだ。藍の顔からさつと血の気が引き、表情が歪んだのだ。

「あら」

そこへ、柔らかな声がつつと入り込んできた。碧ではない。3人が振り返ると、当館の制服を着こなした妙齢の女性が、美しい歩き方で近付いてくるところだった。「風野<sup>かざの</sup>さん、こんにちは。今日も来てくれたんですね」浮かべた笑みも、また柔らかかった。

「あつ…」ミュウの体が、一遍に二回りくらい小さくなる。「こんにちは。すみません…」耳まで赤くして俯いた。

「今日はお友達とご一緒なんですね」ミュウの様子を見ても、この女性の自然な物腰は変わらなかつた。そして、藍と碧に向き直る。

「お二人とも初めまして。私はファン・ミヨン。当館では、解説員たちの総責任者として働いています」

「あ。ご丁寧に、どうも…」丁寧に頭を下げる、大人然とした相手の様子に、藍もすっかりペースを譲ってしまったようだった。しどろもどろで頭を下げる。

「この子は、キアノス藍つて言います！」ぴよんと飛んで藍の片腕を取った碧が、藍の代わりに紹介した。「そして、私は水里碧<sup>みずさき</sup>です」

「お元気ですね」ファンは目を細めた。「キアノスさん、水里さん。ようこそ『時の三精霊』へ」

「あのっ、ファンさん。お騒がせして済みませんでした」びゅんっ、と風切りの音を残して深く頭を下げ、同じ勢いで上体を起こし、「えとっ、じゃあ帰りますっ！」ミュウはいきなりきびすを返した。

「ちょ！ほんま帰んの？」驚きが先に立ち気まずさを一瞬忘れたのか、藍がミュウの腕を掴みかけた。相手の方が遙かに速い。

「そつだよ、ミュウちゃん」ミュウの衝動的過ぎる行動には、誰もついていけないはずだった。ところが碧だけは、全く影のようにそ

の動きに付き従っている。皆があれっと思う間に、彼女はミュウを事も無げに捕まえていた。

「上善は水のごとし、でございますう」碧は得意げであり、自身、その意味を良く把握していないようでもあった。

「またこれや」藍が頭を抱えている。「そういう、訳分からんのは堪忍言うとするし」

「ええと、つまり」ファンも碧の言動に惑わされつつ、それでも状況を把握しようとした。ミュウの存在がヒントだった。「ファーボルグさんにご用なんですよ。もうすぐ閉館ですし、お待ちになつたら？」

「はい」嬉しそうに答えたのは碧だ。「そこでファンさん。ファーボルグさんって、どんな人なんですか？」

「碧い？」ミュウは強く囁いた。悲鳴のようでもあった。

「なるほど」全てを承知したという風に、ファンは頷いた。「ファーボルグさんも意外と隅に置けないんですね。普段はそういうお話余り感じさせない方みたいだけど」急にあどけなく微笑んだ。

「巨大な誤解が生まれつつあるように思う」何か焦りを感じ押し引く色々試みるが、ミュウは一向碧から逃れられなかった。相手はただ甘えるように、自分の右腕に両腕を絡めているだけなのに何故か。ミュウはますます情けなくなった。

「風野さんは身近すぎて、言いくいとこもあるのかしら」ファンは振り返った。ファードと来館者の女性たちは、各展示の前を遣り取りしながら移動していて、今はエスカレーターへの降り口からも彼らの姿が見えた。「そうですね。一言でいえば、何でも一所懸命にやれる人、でしょうか」

「真面目な方なんです」碧が相槌を打つ。

「ええ」ファンも頷き返し、「ファーボルグさんが、途中からここへ来られたというのは、ご存知ですか？」藍と碧を均等に見た。

「えっと…」藍がミュウの方をちらつと見、遠慮がちに答えた。「元々は、風乗りのエースだったって聞いてますけど…」



「私も大体は、風野さんから聞いたんですよ。それと、この風乗りのコーナーを企画するために、たくさんの方々にヒアリングをする機会もありました」ファンは思い出している。ファードの事を語る人々は、異口同音に、彼の風乗りとしての力量の高さを認めたものだった。同時に相棒のフータについても、その群を抜く飛翔能力の優秀さを誉めそやしていた。「そんなファールボルクさんが、事情があつて今の展示解説つてお仕事に就かれた訳なんですけど…大変なのつて、分かりますか？」

藍も碧も首を振った。

「このお仕事は、基本は接客なんです」ファンは再び対応を続けるファードを見た。「接客の基本姿勢と同時に、聞いてくださる方により良く伝えるための、解説の技術も身に付けなければなりません。ファールボルクさんは、風乗りの知識は勿論豊富でしたが、最初その点で苦労されてました」

ファンは更に、この職場でのファードの仕事を列挙した。それらは特別プログラムの企画と実施、展示の企画や作製、来館者に無料で配る資料の作成、付属図書館に収める資料の収集補佐、“生き証人”としての講演など、実に多岐にわたっており、これらに4階における自主的運営（当館では、各階が競い合つて担当フロアの魅力増進や問題解決に努め、ひいては館全体を盛り上げる、言わばチーム制が導入されている）の、まとめ役という立場も加わった。藍と碧は目を丸くした。

「ファールボルクさんは中途でいらした方ですけど、新しい職場は殆ど未知の世界だつたと思います。本当に、思い切つて飛び込んでこられました」一旦言葉を切つたファンには、色々と思ひ出すことがあるらしい。「分からないことはご自分で調べられるのは勿論、年下のスタッフを捕まえて教えを乞ふことだつてしていました。それは簡単なようできて、実はすごいことだと思つんです」

「今でも良くあることなんですけど」ファンの素直な称賛に引つ張られるように、ミュウが自然と口を開いた。「この仕事を始めたば

かりの頃は特に、家でも毎晩、遅くまで勉強していました。お夜食を持って行ってすごいねって言うと、きょとんとした顔で見返されるんです。お金を貰うんだから、当然だろって…」

「かつこええな」藍が青い瞳を生き生きさせている。「かつこ悪いことを一所懸命やれる人って、うち、ほんまかつこええ思うわ」

「そうですね」藍の若々しい率直な物言いに、ファンは胸が空くようだ。「今では私たちの方が助けられています。ファーボルグさんの姿勢に、勇気を頂いているんですよ」

「なあ、ミュウ」

藍がミュウの袖を引いた。碧の興味が、今度はファンに向けられた。良い潮だと思ったのだ。

「うん？」

「ん…さっきのこと」相手がかつこちを見たので、そっぽを向いて言う。「調子に乗ってたわ。怒らせちゃって、ゴメンな」

「ううん」ミュウも俯き、決まり悪そうに応じた。「私もなんか変な意地張ってた。こっちこそ、ゴメン」

「でもさ」藍も視線を落とした。ローファアの爪先を見詰める。「あんたの言う通り、あたし確かにファードさんのこと、興味本位だった」

「うん…」ミュウは寂しげに微笑んだ。「別に藍だけって訳じゃないよ。ファードが最後の風乗りって言うと、大概の人はそうだもん」しかし顔を上げ、藍を再びまともに見た時には、もうわだかまりの無い笑顔だった。「でもこれで藍も、今日からはファードの理解者だよな」

「うん。もちろんや」

照れ臭さは残るが、気持ち良く笑い合えた。同時に閉館のチャイムが鳴った。

「あら、もう時間なんですね」ファンは本当に意外そうだった。「では、私は閉館の作業がありますから…皆さん、またいらしてくださいね」丁寧な頭を下げ、ファンは去って行った。

背中を見送っていると、すれ違いざまに「一言三言、ファードと言葉を交したようだった。ファードはそのままこちらに近付いてくる。」「弥祐<sup>みゆう</sup>」少し呆れた感じの、彼の声だった。「今日はまた随分騒がしかったな。お客さんが笑ってたぞ」

「ミュウはつつと言葉に詰まる。」

「ファードさん!」

「うおっ!?!」

ファードには足下からよきつと、突如碧が生えてきたように見えただの。

「サイン、下さいませんか?」

「あ、ああ……」

気が付けば、キャラクターのデザインされた小さなメモ帳と、サインペンを手にしていた。何か釈然としないままペンを走らせる。サイン自体は、講演会などでせがまれぬ訳ではなかった。

「弥祐の友達かい?」ファードは思い出したように聞いた。

「はい! 私が水里碧でっ」

「キアノス藍です。初めまして」二度とも代わりに紹介されてしまわないように、怪訝に思われない程度で素早く頭を下げた。

「ファールボグ・ファアディアだ。よろしく」筆記用具を返しながらファードも名乗った。「弥祐がここへ誰かを連れてくるの、初めてじゃないか?」

「うん。今日は連れてこられたんだよ」ミュウ? 弥祐が、冗談めかして答えた。

「おっと、もうチャイムが鳴ってたんだ。悪いが3人とも、一度外へ出てもらえるかな」閉館作業に取り掛かるため、ファードはきびすを返しながら言った。

「うん。いつものとこで待ってるから」

「ミュウちゃん、ほんとに逢瀬みたいだね」

碧の笑顔は何処まで本気なのか決して悟らせることが無く、何か強く出づらい。

「馬鹿なことやってないの。じゃ、ファード。後でね」弥祐は振り返り振り返り、両手で碧を追い立てて行く。

「お騒がせしました。さようなら」会釈をし、藍が最後に続いた。

「サイン、ありがとうございました」碧はメモ帳を持った手を、下るエスカレーターに沈んで、見えなくなるまで振っていた。

「ああ。また今度、ゆっくり遊びに来てくれ」

ファードは1階のスタッフに、4階からは最後の来館者が3人降りたことを、インターフォンで伝えた。

### 第3回

「すみません、遅くなりました。4階チェック終了です」

“時の三精霊”の解説員たちは、閉館から閉館までずっと展示室で来館者を迎え続けるのではなく、日に何回かの交代で立っている。

フロアにいない間はプログラムを練ったり資料を作成したり、デスクワークに時を費やす。解説員たちにとって晴れの舞台が展示室なら、舞台裏が5階にある事務室だ。ファードがその事務室へ戻ってみると、自席で書類相手の作業をしていたファンが目を上げて出迎えてくれた。この建物の内部は広く、一つのフロアの閉館作業も複数のスタッフが手分けをして行っている。チーム4階のリーダーでもあるファードは、閉館作業の最終チェックも任されていた。全てを見回れば当然一般スタッフよりは戻りが遅くなる。更に今日は作業の開始が少し遅れた。事務室の中は、一見して閑散としていた。一般スタッフは勿論、他のフロアのリーダーたちも既上がったように、総責任者であるファンを待たせてしまったようだった。

「いいえ」しかし、ファンに気にした様子は全く見られない。むしろ仕事を楽しみながら待っていたようで、生気のある笑顔だった。

「今日もお疲れさまでした」

「お疲れさまです」緊張は俄に霧散して、今初めてその存在に気が付かされる。いつもの遣り取りに、いつもの感慨だった。

「それと…これ。お渡しします」ファンは大判の封筒の中を探り、葉書大の紙片を差し出してきた。三方がミシン目で閉じられている。

「お給料の明細です。先月もありがとうございます」

「ああ、どうも。ありがとうございます」

ファードは軽く一礼して明細を受け取ると、すぐに着替えに向かった。この場合は至極もつともな振る舞いで、ファンも何一つ怪しんではないだろう。けれどファードは、急にいたたまれなくなつてその場を離れたのだった。また過ぎてしまったんだ、一月という

決して短くない時間が。それを思い出したのだった。

更衣室の扉を開ける。壁を探って、必要なだけ明かりをつけた。自分のロッカーの前に立ち、暫し迷う。結局その扉は開けずに、ロッカーの列に挟まれた通路にしつらえられた、背もたれの無い簡素なベンチに腰掛けた。ゆっくりとした手付きで明細の封を切る。

見慣れた額面が、支給総額の欄に印字されていた。分かり切っていたはずなのに、またいつもの深い溜息が、無人の更衣室にこぼれた。

もろもろの天引き後、交通費を含め手取りで14万そこそこ。それがファードの、月々の収入だった。

交通費全額支給、社保完備。ただし雇用契約は1年ごとに更新で、1000円弱の時給制、賞与も無い。それが今のファードの働き方だった。つまり二等雇用者である。辞めるか、減首されない限りは自動的に契約が更新され、無論賞与も有り、各種手当での面でも優遇される一等雇用者とは、どう足掻いても格差があった。それにこの施設は首都が金を出し、運営は民間会社に任せた、いわゆる業務委託だった。自治体としては、支払う委託費は当然少ない方がいい。そこに競争入札が絡んできて、そもそもファードらの労働力は適正な価格で買い取られているのか？ そんな疑念もあった。

ファードは元より楽しみの少ない男だった。自分一人だけなら、この収入でも何とかやっていけただろう。

だが、ファードにはフータという家族がいた。飛行妖精とはいっても、彼らもこの星に暮らす野生動物には違いない。それにスカル・シーは元来適応力が高く、人間が用意した生活環境、本来の自然な生活環境、両方を不規則に往復するような二重生活も十分に可能だった。つまりファードも、普段はフータを自然の中で自活させ、生活費を抑えることは出来た。しかしそのやり口は、風乗りには昔から恥ずべき行為と戒められていた。当然だろう、このやり方は取りも直さず、相棒を半ノラとして生活させるということだ。フータはファードに空を教えてくれた、言わば恩人だ。貶めようなど

とは、そもそも初めから考えようも無かった。

ここで思い出されるのがフータと共に進む、風乗り本来のとも言える配送の仕事である。ファードの本業はそちらだ、そして足りない分を、言わば余技を活かした解説の仕事で補っているのだろう。

現実には、そうでは無い。

実際には、風乗りとして受ける配送の仕事の方が、今の彼には副業であった。休暇や時間外など、“時の三精霊”から解放されている時に下宿先の弥祐の実家から貰う、不定期の仕事なのだ。

後で事情を述べる機会もあるだろうが、その弥祐の実家自体が、今では配送の仕事を殆ど請け負えなくなっていた。また、風乗りが人々の記憶から消えかけ、流通の手段と見做されなくなってきた。昨今、他の同業者から仕事を取ることも難しかった。上でファードの収入を“月々の”と断ったのは、まさにそれが正しいからであった。

ファード自身、以前は一等雇用者であった。風乗りのエースとして働いていた頃のことだ。運営方針の転換を受け入れられず、やむなくその企業を去ることになった後も、別の企業で風乗りの、一等雇用での復帰を希望していた。

けれど風乗りは、既にあの日、世界から“自然死”を告げられていたのだった。

自分はただ、甘やかな期待に身を任せてしまっただけなのだろうか？

いずれにせよ、一度手放した一等雇用者の地位は一般的にも回復困難で、風乗りとしての生き方しか知らなかったファードには尚更だった。生きるために就いたこの解説員の仕事でも、一等に昇格出来る道は用意されていない。

ファードは、今の職場でも前向きにあるつもりとしているし、信頼もされていた。しかし貯蓄の残高は、一向に増すことがなかった。

自分も雇用市場では決して若くない年齢に差し掛かった。次第に身動きが取り辛くなっている。その一方で、自分もフータもまだまだ

だ生きるのである。例えば年金という、多くの人々にとっての将来の拠り所も、舵取り役としての存在感を示せない国のお粗末な態度が、それを虚しい約束事と思わせるようだ。

こういう時、ふと将来を思ってみる。そして立ち竦む。

更衣室の扉が叩かれるまで、じっと考え込んでいたようだった。

「はい？」はつとして、慌てて返事をした。

「ファーボルグさん？」鉄製の扉を通して、ファンの声は少しくぐもっている。「どうかされましたか？ 少しお時間がかかっているようですが…」

「いえ、大丈夫です」そんなに長く考え込んでいたのだろうか。「すみません、すぐに行きます」急いで立ち上がり、着替え始めた。

「いえ、特に何も無いならいいんです」本当に心配していたのだろう、声がはつきりと柔らかくなった。「でも、お連れさんがお待ちなんでしょう？ 早く行ってあげないとかわいそうです」

そうだった。ファンはもう何の心配事も無いようだが、彼は大いに慌てた。

「遅い」

職員用の通用口から駆け出てすぐに、ファードは弥祐の不機嫌な顔にぶつかったのであった。

「悪かった」先ず本心を言う。「ファンさんとちょっと仕事の打ち合わせをしててな」そこは隠しておいた。

「ふうん」壁にもたれた弥祐は、ふいつとあちらを向いてしまう。

「友達は？」

「先に帰った」相手が普段通りだから、弥祐も自然に振り返れた。

本人の飾る気の薄さを健気に補う美しい桜色が、口許に綻んでいる。

「ファードね、気に入られたみたいだよ」

「なんのことだ？」

「今度、ファードに特別プログラムをお願いするんだって。すっごい盛り上がった」特別プログラムとは、要はオーダーメイドの展



示解説のことだ。参加者のリクエストを元に、解説員が一からプログラムを構成する。そのような性質から、日常的な展示解説が無償で行われているのに対し、こちらの方は有償だ。利用者も普通は、学ばせたい事柄のはつきりしている学校など、公の立場の人々で、別段制限は無いものの個人での依頼となるとまず稀だった。

「特に水里つて子か？」短い遣り取りだったが、本当に印象的な子だった。ファードはつい笑ってしまう。

「藍の方も。担任やクラスのみんなも巻き込むってさ」弥祐も楽しそうだ。

「そうか。じゃあ依頼が来たら、頑張るとするかな」

「うん。ファードなら平気だもんね」一度相手を見て微笑み、もたれていた壁から背を離れた。「じゃ、お買い物行こ。おばあちゃんもフータもきつと待ってるよ」先に立って歩き出す。

「今日の献立は何だ？」ずっと大きい歩幅ですぐに横に並びながら、聞いてみる。

「おばあちゃんはお魚がいいって言ってたけど……」細い指先をおとがいにあて、考える仕草。「フータは飽きちゃわないかな？」

「平気だろ。あいつもさっぱりしたものが好きらしいからな」

「ファードは？」

「同じもので十分だ」

「うん、肉よりも魚。感心感心」澄ました作り顔で、年長者みたく言った。「じゃ、今日は西の市場で決まりだね。帰りがけ『街中野菜畑』でお野菜も見ていい？」

「ああ。今日は箱で買うのか」

「見ないと分からないよ」

「ふうむ」結構真剣に何かを思索する。「お前が見ている間、先に戻ってばあさんの3輪バイクを借りてくるか」

「どんと担ごう！男ならっ」ファードの二の腕辺りを威勢良くはたいた。乾いた小気味の良い音がわぁんと広がって、高いビルの間を朗らかに駆け登っていく。

「気安く言つな。お前の箱買いは半端無いんだよ」大人げなくも結構本気の抗議が含まれているようだ。

「生活の知恵だよ。フータだってたくさん食べるんだし、基本ですよ。基本」弥祐は可笑しそうに意に介しない。

石畳の広い歩道は、仕事帰り、学校帰り、家路につく人たちで混雑し始めている。行き交う人々の間を、二人はゆつくりと歩いた。足早に擦れ違つていく人々の、一様に表情の薄い顔が見分けられる。その乏しさは空虚の表れではなく、内に色々な在り方を隠しているはずで、今はそんな事も気に留めることが出来た。

「おばあちゃんのバイクじゃなくてフータを連れてきたら？ いつも通り、お夕飯の前に飛ぶんでしょ？」

他の職業よりは比較的早く引ける、その僅かな時間も利用して、フールドは配送の有無に関わりなくフータと出来るだけ空を供にしようとする努力をしていた。週に二日の休みも加えれば結構な飛行時間のようだ、風乗りを生業としていた昔に比べれば、それでも格段に少ないのだった。

「異論は無いが、あいつを商店街に連れて行くとなにかと騒がしくなるからなあ」

「そうだね。あんまりおまけしてもらつても、こつちが困るもんね」堪え切れずといったように、弥祐は噴き出した。

「下手すると買った分よりも多くなるからな」以前実際にそんなことがあったのか、フールドも苦笑している。

二人の傍らの路上から、かたたん、かたたんと小さく音が響きだす。やがてその音を響かせていた鉄路の上を、2両編成のネットモビルが、仕事帰りの人々を満載して追いつがり、追い越していく。見送ると何回か、パンタグラフから火花を飛ばした。

空は頂近くの高い方から、次第に宵闇とその日の名残日が分かれていくようだった。魚鱗石で覆われた昔ながらの建物たちが、少しずつ赤味が勝つていく光をまだ虹色に、柔らかく反射している。一方で新しい、ガラスとコンクリで出来た高層ビル群は、それを強く、

鋭く弾き返していた。

夕日は高層ビル群の間に傾こうとしていた。それだって明日という舞台初日への、高まりに違いなかった。

## 第4回

平日の今日、ファード自身は仕事が休みだった。

“時の三精霊”は原則月曜日（祝日の場合は翌日か、連休後の最初の平日）と年末年始、年に4度の館内特別点検期間を除いて開館しており、スタッフたちはシフト制で休むことになっている。完全週休2日の内、ファードの休みは月曜と木曜に当たっていた。

休暇の一日、彼が無為に過ごしているようなことは全く無い。配送のアルバイトが入ればこなすし、無い時でもフータに空を満喫させる。自身の勉強や、特別プログラムの準備に追われることもある。また、下宿先である、弥祐の実家の商売を手伝うこともしばしばだった。

別に重複して書いたのでは無い。弥祐の実家、“風野商店”が手掛けるのは配送業だけで無いからこのような言い方になる。風野商店は首都ヴァルチエリアの郊外住宅地に在って、それなりの坪数はあるが古びた木造の一軒家である。その住居兼店舗では、他に書店と駄菓子屋も営まれていた。それを知ったばかりの頃のファードならずとも、不思議な商売の組み合わせだと思っただろう。

店舗は南道路に面していて、その奥が家族たちの生活の場だ。特に1階は各部屋とも北面する訳だから、差し込む光は少ない。だが、何処にも彼処にも隈無く手入れが行き届いているから、木の柱や床板の温かなつやが、決して暗さを感じさせなかった。

台所も常にぴかぴかに磨き上げられている。使い込まれた様子から、部屋全体が主の手に馴染んだ、一つの道具のように見えた。そんな台所で、一人の年老いた女性が働いている。年老いてはいるが背筋はぴんと伸び、足下もしっかりしていた。小柄で線も細いが、黒い瞳には生命力が輝いていた。弥祐の祖母、風野商店の店主でもある、風野陽かほのひかりだった。

陽は湯を沸かそうとしている。コンロは3口あった。その1口か

ら保温カバーを取り去ると、輪に並んだ火招石かじょうせきが露になった。数時間前、昼食の支度をして以来だが、手を近付けるとそれらはまだかなりの熱を持つているようだった。これなら湯沸かしに必要な熱を得るのに、さほど時間はいらないだろう。

彼女は、後ろの棚から広口の小さな瓶を取り出し、中のきめ細かな白粉を一滴みとちよつと、火招石の輪にまんべんなく振りかけた。こうやって四大の母の名を冠した触媒を振りかけてやれば、火招石は周囲を淡く均質に満たす火の精霊力を凝縮し、高温を発するようになる。今では火力に優るガスコンロもだいぶ普及した。しかし、温度調節の点では火招石の方が繊細で、利用し続ける家庭も多かった。陽も昔から使い慣れているという以上に、このコンロが好きだった。彼女に仕込まれて、孫の弥祐も良くこれを使った。

やがて小さなやかんが眠たげに、単調に鳴り始めた。二人分の緑茶を淹れ、書店と駄菓子屋、どちらにも通じる短い廊下を、陽は書店の方へ進む。

「ファード」奥から店へ出ると、出入り口目の一段低まった所がレジカウンターになっている。履物をつっかけながら、陽は呼びかけた。返事は無い。

「ほ？」カウンターに湯飲みの乗った盆を置き、書棚を回ってみた陽は呆れた声を出した。「なんだ。またそんなもの、読んどのったか」

「ん？ ああ」ファードが読んでいたのは週刊の求人誌だった。「つい、気になつちまつてな」少しぼんやりした様子で、雑誌を書棚に置いた。

彼は新しく入荷した本や雑誌を、書棚に並べる作業を手伝っていた。そろそろ一休みの時間だと、陽はお茶を用意したのだった。

「ふむ」狭い店内故、書棚も決して大きくはない。そこに何誌もの雑誌を、客が目的の物を直ぐに見分けられるよう、各誌表紙を必要だけ見せて配置していくファードの手際を見ながら、慣れてくれたものだと思う。「なんぞ、いい仕事でもあつたかい？」

「いつも通りさ」口許を皮肉に歪める。「結局、俺の希望ってのは高収入で時間も自由になる仕事なんだ。虫のいい話だ」十分な収入で、将来にわたり自分とフータの生活を保証する。そして余暇に風乗りも続けていく。現状のまま満足を得ようとすれば、自ずとそのような希望になってしまふのだった。

「今の仕事に、不満があるようにには思えんがの」今日の昼食の時も、展示解説でいい案が浮かんだと言って、問題解決に喜ぶ姿を目にしている。

「仕事の内容はいいんだ」空には上がれないが、実際やりがいのある仕事だとは思っている。「ただ、な…」言葉を濁した。

「稼ぎが少ないか」陽が代弁する。

「まあな」渋い表情になった。

「それなら仕事を増やすか、最初から待遇のいい所へ行くしかないじゃろ。お前さんののは、堂々巡りに見えるかの」

「…」

「ファード」陽の口調は劣るようだ。「わしと違って、お前さんが風乗りで食えなくなったのは好きこのんでじゃない。気持ちは分かる」

陽自身、以前は風乗りだった。これで風野商店の商売の一つに、配送業のある理由がはつきりする。陽の仕事なのだ。しかし、ずいぶん前に相棒に先立たれ、自身も年老いた。配送業は続けているが、風乗りとしては自らの意志で鞍を降りていた。

「だがお前さんの、その風乗りへの未練をどうにかしない限りは、いつまで経っても辛いだけではないかの？」

「…ばあさんは自分で商売を始める時、不安は無かったのか？」

「また随分昔のことを聞くね」陽は小首を傾げ、良く思い出そうとしている。「…そうだね。あの頃は不安がどうしたの言う前に、とにかく、ただ必死だっただけのようない気がするよ」

「そうか…」

「自営を考えたか」心持ち、身を乗り出した。

「考えたことなら何度かあるさ」小さく笑う。「だがそもそも俺に、商才があるとは思えないからな」

「お前さん、商売を学んだことはあるのかい？」

「いいや」

「そうだな。なら、言い切れもせんじやる。埋もれさせとるだけかも知れんぞ？」

フードは再び黙り込んだ。自分に埋もれた商才があるとは、やはり思えない。その一方で、だからと言ってこும்行き詰まっしてしまっている自分に、何か弱さはないのかとも思う。他にやりたいことなど見付けられないと考えているのは、単なる決めつけではないのか？ いや、それどころか、もしや心の奥底では、自分でも気付かぬ内に現状に身を委ねてしまっているのではないか。疑おうと思えば疑えるのだった。

「お前さんの悪い癖は、そうやって何でも一人でやるうとするところじゃよ」突き放すでもなく、分かった風でもなく、丁度よい距離感の感じられる言い方だった。「商売に明るい、誰かと組んでもいいじやる。わしだって、随分いろんな人に世話になったもんだよ」「…もつと根本的な問題がある」これを自分が指摘しなければならぬのは、一体どんな皮肉なのか。「風乗り自体が、もう用無しなのかも知れない」

この言葉がフードを拘束する重しの全てなのだろう。陽も元風乗り、当事者だから共感出来る。「確かに、家に来る仕事は少ないの」先ずは頷いて見せた。

風野商店が請け負う配送で緊急性が高い、もしくはかなりの遠方である、そういった風乗りを必要とするような依頼は、本当に数が少なくなっていた。もつとも、風野商店の配送部門自体が、大手運送会社間の営業競争の煽りを受け、かなり以前から開店休業に近い状態ではあった。今の顧客は、昔から臍原にしてくれている人々が殆どで、店が風乗りを抱えていることも知られている。そんな情け深い人々の間にも、遠方へ早く確実にというと、全国展開している

大手の方が好まれる、ブランドイメージのようなものが出来上がっているのだろうか。少ない依頼の内訳を見ても、陽自らが3輪バイク（今の彼女の相棒だ）を運転し、配送に赴けば、事足りる仕事が殆どだった。

「ファード」だが一方で、風乗りを引退している陽はファードほど当事者でも無く、別に思うところもあつた。ぬるくなつてしまつたお茶をファードと啜りながら、彼女は少し改まってこう切り出した。「飛行機だの飛行船だの車だのバイクだのは、本当に、風乗りの居場所を奪つてしまつたのかの？」

「え？」不意を突かれ、その問いに打たれたようだった。

「ほつほ」ファードの驚きようが楽しいのか、朗らかに笑う。「ま、わしも、最近になつて思つたことなんじゃが」

「ただいま」

「ほ？」陽が続けて何かを言おうとした時、弥祐の声が隣の駄菓子屋の方から聞こえてきたのだった。「帰つてきたようだね」

書店の店先は、4枚のアルミサッシで屋外と仕切られ、もう季節もいいで中央の2枚は開け放されている。見守っていると、普段は閉め切つている端のガラス戸の向こうに弥祐がひよこつと顔を出し、笑顔になつた。

「おばあちゃん、こつちだつたんだ」

控えめに新刊広告の張られたガラス戸を回り込んで、彼女は店内に入ってくる。建物は一つだが、書店と駄菓子屋自体は壁で仕切られていた。

「お帰り、弥祐」陽は立ち上がり、笑顔で出迎えた。「『ごようのかたは ほんやさんへ』の札、出してなかつたかの？」

「あれ？ 出てなかつたよ？」言うなり、またひゅつと外へ出ていつてしまう。待つ間も無く戻ってきて「下に落ちてた。風か何かかな」

「済まないね」

「ううん…でもやっぱり、駄菓子屋の方に誰もいないのつて物騒だ



よね」

「ほっほ。またいつものお小言だね」孫との遣り取りを楽しんでいるようだ。「まあ、この辺りに黙って持って行くような悪いのはおりやせんよ。それに現金も置いてないしの」彼女の答えもいつも通りなのだが、実際駄菓子屋を無人にして、問題が起きたことは一度も無かった。

「心配なら犬を飼うのもいいかもな」フアードが会話に加わる。「良く躑ければ、人を雇うより役に立つぞ」

「いいかも…の前に、ただいま」弥祐は微笑み、挨拶を言った。

「おう。今日は早かったな」

「うん。お店手伝ってくれて、いつもありがと」陽が駄菓子屋にいるのなら、書店ではフアードが店番をしているとは思っていた。だがこうして、仕事が休みの日でも家にいてくれる彼を実際に見ると、弥祐は何だか嬉しいのだった。

「色々世話になってるからな。当然さ」フアードは屈託なく笑った。例えばこの家では彼だけでなく、フータも世話になっている。それだけでも他の下宿では望みようも無い、ずいぶんと助かることだった。

「すぐ着替えて手伝うね」制服の短いスカートを翻し、先程陽も使った出入り口から奥へ駆け込もうとする。

「弥祐、お待ち」そうやって家のことを良く手伝い、今年は家計のため、自宅から通える国立の難関校にも合格してみせた自慢の孫を、陽は呼び止めた。

「なあに？」きゅっと止まり、振り返る。

「今日は手伝いはいいよ」良く弾む鞠のような孫を見ると、自然と笑みになる。「その代わり、今からフアードに荷物を頼むから一緒に行ってやってくれないかい？」

「荷物はいいが、なんで弥祐も一緒なんだ？」

配送の仕事はいつもフアードとフータでこなしていたし、今日に限ってと、彼は不思議に思ったのだった。横では弥祐も首を傾げて

いる。

「さつき聞いたじゃろ。飛行機だの飛行船だのなんだのは、本当に風乗りの居場所を奪ってしまったのかね、と」孫に視線を移した。

「弥祐はどう思う？」

「え？」これには弥祐も面食らった。「またなんで、そんな問答をしていたの？」

「本当に、風乗りのやるべきことは何も残っていないのかね？」そう繰り返して、二人を均等に見て出題者の笑みを見せた。「それを今から街へ行つて、二人で確かめておいで。弥祐も行くのは、フードはどうも考えすぎで、あんたみたいな自由な目が要るからじゃよ」「うん。何だか良く分からないけど」弥祐は眉根を寄せて、真剣に考えを巡らせているようだった。「とにかくついてって、おばあちゃんの謎掛けに答えられればいいんだね」

「ついでに夕飯の買い物とか、そういうのはいいからね」陽がのんびりと言う。

「あれ？ 冷蔵庫の中、なんかあつたっけ？」

「わしは適当に済ますから、たまには外で食べてきてもいいよ」

「え、でも……」

「まあその辺は成り行きかね。そうそう、フータで行くからね。そのつもりで準備するんだよ」

これを聞き弥祐は目を輝かせた。楽しそうに頷くと、殆ど飛ぶように、今度こそ奥へ駆け込んでいった。

「ほっほ。元気元気、素直素直」自室へ向かう孫の足音を聞きながら、陽は心底楽しそうだった。

「街って、都心か？」その傍らではフードが訝しんでいる。

「そうじゃよ。どれ、先に荷物を渡しておくかね」配送部門の専用カウンターは、書店スペースの一角に設けられていた。陽はそのカウンターの後ろの、天井まで届く大きなスチール棚から、風野商店の荷札が貼られた小包を取ってきた。

「都心なら、ばあさんの3輪バイクの方が便利だろう……」小包を受

け取り、ファードは宛先を確認した。

「案外そうでも無いんじゃない」

「ばあさん、これ」宛先を知ったファードの顔色が、少し変わっていた。

「そうじゃよ」陽は真面目に頷いた。「昔、お前さんが働いていた会社じゃよ。受取人も知つとるな」一度言葉を切り、確かめるようにファードを見る。「たまのばあのお使いだよ。頼んだからね」

弥祐は先ず洗面所へ向かった。これからまた出掛けるが、それでも帰ったら手洗い、うがいを済ませないと何だか気持ちが悪かった。「おじいちゃん、お父さん、お母さん。ただいま」自室のある2階へ上がるには、居間の前を通り抜ける。壁は少し陽に焼けてしまっているが、畳はまだ替えただけで、目に爽やかで鼻に心地良い。居間の片隅には弥祐の腰くらいまでの高さの、簡素な木製の棚が置かれていた。その上の一輪挿しの側に並んでいる写真に向かい、弥祐はいつも通り、ただいまを言った。

一枚のモノクロ写真には、笑み崩れた表情が如何にも柔和な印象の、初老の男性が写っている。もう一方はカラー写真で、今のファードとさほど歳のかわらなさそうな男性と、弥祐によく似た女性が寄り添い、微笑んでいた。弥祐の祖父と、両親だった。

弥祐にきょうだいは無い。今は祖母と二人暮らしだった。子供好きだった祖父が駄菓子屋を、本好きだった両親が書店をやると言い出して、結果、風野商店のおかしな営業形態ができ上がった。陽は、一人になっても商売を小さくしなかった。手伝う弥祐も忙しいが、その色々ある毎日が、実は祖父や両親の遺し、陽が守った、彼女の抛り所のような気が今はしている。

二人暮らしになって暫くして、ファードとフータが下宿に来てくれたのも大きな支えになっていた。今日のようにファードが店にいるのを見ると、最初に胸を軽く締めつけられて、それからすぐに満たされていくような、不思議な心持ちになる。時折ファードと一緒に

にフータが見せてくれる、箱庭のような人々の営み、全身に感じさせてくれる心地良い風も、彼女は大好きだった。

2階の自室に入って、学習机の上に鞆を置いた。習慣に背き明日の支度は後回しにしなければならぬ。

広くは無いが南向きで明るく、風通しも良い部屋だった。ポプリの香りと適度な数のぬいぐるみや小物が、部屋に慎ましく色合いを添えていた。そんな調和の中であって、やや的外れに自己主張の強い飾りが一つある。机の脇の壁に貼られた、大きなモノクロのポスターだ。

それは大手運送会社が随分前に印刷し、顧客などに配った、一枚もの大判カレンダーだった。そこに刷られた年号を見てもそうだが、版面の陽に焼けた具合からもその歴史が感じられた。破れもあるが全て丁寧な補修されている。ただ、使われているのは書籍修理用の特殊なテープのようで（セロテープのような経年劣化が無いので、本の修理に向いている）、何処で手に入れたのか、それは少し不思議だった。

カレンダーには、やや粒子の粗い一枚の写真が全面に使われている。その中央では、スカーラル・シーに跨った若い女性がカメラへ向き、鮮やかな笑顔を見せていた。背景は弥祐の好きな箱庭のような自然や家並みで、かなりの高度を飛行中のようにだった。カメラマンがやはり飛行妖精に乗り、並行して撮影したのだろうと思われる。写真の中の女性は飛行中なのにゴーグルを額に押し上げ、口許の覆い布も引き下げていた。太陽はちゃんと彼女の前面にあるようで、表情は鮮明に写されていた。その目許が居間の写真にあった、弥祐の父親に良く似ている。この女性は、若い頃の陽だった。

この頃の陽の話を、弥祐は何度も聞いていた。特に小さな頃は、相手が困り果てようと繰り返しせがんで、しっかりと記憶に刻みつけようとしていたみたいだった。陽の語る挿話は、彼女の小さな背丈を世界の果てまで伸ばしてくれた。驚くほど多様な動物たちに出会い、植物の肌に触れた。人々の暮らしぶりもまた同様に多様で、

彼女は高地の寒村を、乾いた街の埃立つ目抜き通りを、巨木の中の回廊を、目を輝かせながらさまよい歩いた。大気や日差しはこの世界に何処までも均質に広がるようで、その実生き物が空間的に棲み分けるように、これらもまた豊饒なモザイク様をなしており、それがまた弥祐の果てない好奇心を楽しませた。彼女が風乘りに憧れるのは、ごく自然なことだったろう。このカレンダーも、恥ずかしいからと何度祖母に頼まれても、一向に剥がす気は無かった。

「よし」鞍に跨りやすい服装に着替え、飛行帽にゴーグル、手袋、一応の防寒着も持った。ファードはもう屋根を開けてしまっただろうか？

1階の一番北側に、陽のかつての相棒、カレンダーにも写っている彼が暮らしていた部屋があり、今はフータが使っている。その部屋は飛行妖精の離着陸のために、屋根が開閉出来るようになっていた。ただし手動で、仕組み自体だいぶ古いので、男のファードでも一人ではちよつと苦勞するのだった。

いつも持ち歩くのよりは大きめの手提げに、荷物を手早く詰め込んだ。体の向きを変えるなり振り回すように肩にかけ、階段目指して駆け出した。

## 第5回

風野商店のある郊外から都心まで、フータで飛べば10分ちよつとである。バスは平均でその3倍強、馬車しか使えないなら、最初から小旅行くらいのつもりで行かないと難しいだろう。フータの速度と、最短距離を行ける利点は大きい。

腰に巻いたベルトの3点で鞍としつかり繋がれてはいても、弥祐は常にファードの腰にも手を回すよう言われていた。今もしつかりと回している。そして、気に留める間も無く流れ去る足下の景色を黙って見詰めていた。いつもなら、それでも目に付いた何かについて色々とファードに話しかける彼女である。だが、今は黙っていた。屋根を開けたり、フータに鞍を載せたりしている間から、ファードの様子が少し硬いようだった。話しかけ辛いのがあった。

やがて、目に付く緑が極端に少なくなってきた。賑やかな街角を歩いている最中は、頭上の街路樹や道端の花壇をいかにも爽やかに感じるものだが、今高い所から一望したそれらは、むしろ砂漠に蝕まれゆく世界をふと想像させる、悲しき囚われの緑だった。首都の中心部に近付いている。初めて空から見るその様子に、弥祐は目を見張った。

思ったほど広い通りは少ないのだと知った。圧倒的なのはそれら大通りの間を縦横に走る、やたらと数の多い細道だった。舗装の墨色が手を加えすぎた迷路のようにこんがらがっている。細道が囲む土地のひとかけらには、大小様々の建物が互いに身じろぎなんかできっこなく、各々ただ真っ直ぐに固まっついていて、そんな小片が地上にモザイクをなしていた。真上を過ぎる時に見下ろせば、建物の谷間谷間が黒く見えるようだった。細い針の束を先端の方から眺めた、あの黒さをふと思いきこさせた。

夕暮れへと向かう時間帯で、特に大きな通りには人の行き交いが激しい。乗り物の数となると更に多かった。流れの所々で黒煙が筋

を引いているのが見える。石炭や木炭を燃料とする古い車が、ここまでがたびし聞こえそうな様子で、渋滞ののろのろに一息ついていった。すぐ後ろについてしまった、こちらはガソリン車らしいオープンカーが気の毒に思えてしまう。黒煙の上をすつと追い抜いていくと、片側3車線の一番中央寄りに2頭立ての小さな馬車が一台、どろろという訳か入り込んでいた。左の車線が流れ、詰まっていた車間が空くたびに御者はそちらへ逃れようとしてしていたが、待つてやる車も無いようで、かえって全体の流れを悪くしていた。クラクションや罵声が高くなって近付き、低く遠ざかっていく。いくら騒音といたってこんな高所まで届くものかと、弥祐は驚くしかなかった。何処まで飛んでも乗り物の流れは悪いようだった。良く見ていると、渋滞を縫うように動き回るバイクや自転車、時には歩行者もあるようだった。それらが更に交通の邪魔になっていた。

高層のビルが増えてきて、フータの高度も徐々に上がっていくようだ。道を失いたくないならば、主要な道路も上空なら開けているだろうから、それらをなぞるように進む方が良いだろう。ファードは方角も確かなのか、一直線に目的地へ進む行き方を選んだようだった。

周囲を威圧する岩山のようなビルの群れは、巨大銀行の各本店が集まった一角だ。それらの頂を越え、大きな街道の交わる広い交差点の上に差し掛かった。そこで信じ難い大混雑が起こっている。先ず目に付くのは、全長10mはある2両連結の長大なセミトレーラーだ。それが路上駐車車の車に邪魔されて右折し切れず、完全に交差点を塞いでしまっている。2本の大通りの一方には、ネットモビルの線路も通っていた。自動車や馬車と並んで、上下線とも交差点の手前で停車を余儀なくされている。高みから一望すれば、四方のずっと先まで黒々と車両に埋め尽くされているようだった。この事態の収拾は一見でも容易そうでは無い。問題のセミトレーラーを牽くのは、8頭の大形妖精馬だった。体高2mを越すそれらの生き物が、周囲の苛立ちに煽られるようにいきり立ち、御者も近付けない

ような有様だった。

交差点から随分離れた所で、パトカーがやけっぱちのようにサイレンを鳴らし続けている。その上を弥祐らはすいすい過ぎていった。「なんか、すごいね」眼下の混沌に気圧されてか、先程までの気まぐずい雰囲気も弥祐はきれいに忘れていた。いつも通り、広い背中に話しかけていた。

「前に飛んだ時よりも、一段と酷くなってるみたいだな」ファードの受け答えも普段通りのものである。

その時、フータが低く一声唸った。眼下の秩序なく荒んだ有様を、不快に思っているらしかった。

先を急ぎたいが建物の森は自然の森と違い高さが極端に不揃いで、そもそも飛ばせる環境では無い。もつとも、周りは空ばかりという状況でも無い限り速度には常に自制があるもので、それは飛行家の良心みたいなものだろう。

旋回のため速度を緩めながら、壁のあちこちにひび割れの補修あとが白く目立つ、背は高いが古ぼけたビルの上を過ぎようとしていた時だった。足下で不意に歓声が上がったようなので、弥祐は覗き込んだ。数人の男女の姿が見える。そこはどうかやら病院の屋上らしかった。看護婦が2人と、歳も様々な寝巻き姿の子供たちが3、4人、屋上出入り口の鉄扉の前でこちらを見上げていた。そろそろ病室へ戻ろうとしていた時に、こちらを見付けたようだった。

「見て見て！ 風乗りよ！」

「うわー、久しぶりに見るなあ」

若い看護婦二人は、額に手をかざしながら声を弾ませている。

「なぜのりー？」

子供らの内、中学生くらいの女の子は看護婦と同じように目を輝かせている。他方まだ小学校に上がるか上がらないか、それくらいに見える子らはきよとんとしていた。今日、初めて風乗りを知ったのかも知れなかった。

「そうだよー。風乗りさんだよー」



「おねえちゃん！」

看護婦の一人が一番背の小さな男の子の両肩に手を置き、しゃがみ込んで身を寄せると、その男の子が弥祐を指さして叫んだ。

「ゆうくん良かったねえ。後ろに人を乗せた風乗りさんに会うといことがあつて、昔から言うんだよー」

「あつたあつた、そういうの」もう一人の看護婦が思い出したように言う。「私は一度何処かへ行っちゃったうちのわんこと、もう一度会えたことがあつたよ」

「あ、いつちやう」

他の男の子の声を合図に、全員が手を振ってくれた。弥祐ははにかみながら、それでもはつきり分かるように手を振り返した。

都心でも最中央の地区へ入った。遠目ながらすぐに目的地の巨大な建物が目に付く。地上50階、地下3階建てというのは、一私企業の本社屋としてはなかなか類を見ない規模だろう。その隆盛ぶりには他にも有りがちな鉄とガラスとコンクリに、ただ無骨に覆われているのでは無かった。曲面を多用した優雅なデザインの外壁を、憎らしい様子で着こなしていた。屋上近くの外壁に、“HML”と大きなロゴが取り付けられている。多年にわたり物流業界の最大手として知られ、この国有数の巨大企業でもあり続ける、ハンス&マクレガー・ロジシステム、略称HMLの本社屋であつた。ファードがかつて一等雇用者として、そして風乗りのエースとして勤めた、その企業でもあつた。

ファードの胸に様々な思いが去来する。彼とフータは世界中を駆け巡り、人と物・情報を繋ぐのが仕事であつたから、この本社屋で過ごした時間自体は少ない。各地の支店で荷の受け渡しと確認、打ち合わせをした時間の方がずっと多いだろう。それでも仕事を命じられ、報告に帰るのは常にこの本社屋内の配送部門・全統括室であつたし、かつては最上階に設けられていた、風乗りと飛行妖精のための発着場（厩舎）という、思い出深い場所もあつた。

フータは外壁に取り付けられたロゴ目掛け吸い込まれていくよう

だったが、目前でぐうつと速度を落とす。実は自分の背丈よりもずっと大きかったそのロゴの一字に、弥祐は少し身を反らした。

ホバリングのような状態でフータはゆっくり高度を下げていく。フールドは下を覗き込みながら、さて何処に降りたものかと考えた。下は正面玄関前の舗装された広場だった。社の敷地だが一般の通行人で一杯で、一部はエントランスへと続く、ガラスと鉄骨の低い大屋根に遮られていた。

離れた場所も結局歩道だから、ここも人通りが多い。言わんこつちや無い、これだからばあさんの3輪バイクの方が良かったんだと口の中で悪態をついていると、フールドは懐かしい声を聞いたように思った。

はっとして足下の人込みの中を探す。彼が見回しているのに気付いたのか、行き交う人の流れの中で、合図のように大きく両手を振る者があった。

「ここへ降りてくればいいよ！」

最早聞き違えようも無い。予想通りの人物が、大きな声で彼を呼んでいた。

「すみません、ちょっと場所を空けてもらえますか。頭上にご注意下さい」

見ていると、その男は勝手に交通整理を始めてしまった。通行人が事態を飲み込めないのも当然で、足下が少し騒がしくなった。

「信じられないよ」頭上に注意と言われた通行人たちが、次々にこちらを見上げ始めている。鞍の上で弥祐は隠れ場所を求めるようだ。

「あの人何なの？ 恥ずかしいよ」

「しかし、こうなったら降りるしかないぞ」

その言葉に異を唱える間も無く、残りの20m前後をフータは一気に落ち始めた。体が浮き上がりそうになり、弥祐は慌ててフールドにしがみつく。今度は急制動。フータの飛膜の下に、安全な着陸のための風が力強く渦巻いた。

その風が路上の埃を舞い上げ、人々は軽く顔を伏せた。幾重かの

人垣の真ん中へファードらは潔く着地したのだった。風がおさまると小さな歓声と、まばらではあるが拍手もあった。久々に見る風乗りが時ならぬ余興のように空から降ってきて、大抵の人が目を輝かせたようだった。

「皆さん、お騒がせしました。ご協力有り難うございます」

この人垣を作った張本人が、今度は事態の収拾に努め始めた。そのためか長く立ち止まっている人も無く、程なくして人垣はばらけてしまう。新たな通行人が振り返っていくものの、弥祐はようやく、強張っていた体を動かすことが出来た。

「大丈夫か？」

差し出された大きな手を見て、ようやく我に返ったようだ。ファードは一足早く鞍を降りていた。弥祐も慌てて固定具を外しにかかる。ファードも手伝ってくれた。

弥祐に手を貸し、鞍から降ろした後でファードはその男に向き直った。一度口を開きかけ、逡巡し、結局「ご無沙汰しています。部長」と、かつてHMLで上司だったその男を、当時の肩書きで呼んだ。

## 第6回

「うん」男は右手を差し出した。応じてきたファードの手を、その細身の体からは少し想像しにくい強い力で握り返す。「本当、ご無沙汰だね」口調も笑顔も柔和で、かえって皮肉が増すようだった。「いや…本当に申し訳ありません」ファードは頭を垂れ、恐縮するしかない。

その様子を見て男は朗らかな笑い声を立てた。そして急にはにかむように「実はあれから昇進してね。今では役員なんだ。下っ端だけれどね」と告げた。

「おお、そうだったんですか」

「まあ、異動した先の営業部門での出世だよ」

相手の声に幾分のわだかまりを感じたが、ここは素直に喜ぶべきだと思った。「部長…じゃないですね。カラさんなら順当ですよ。おめでとうございます」元上司を多くの人がそう呼ぶ愛称で言い換えて、ファードは屈託なく贅辞を贈った。

「余りいいことばかりでもないんだ」カラの言葉からほおつと硬さが抜けていく。「会議や事務仕事ばかりで、すっかり現場から足が遠のいてしまったからね」

カラは本当に残念そうだった。ああそうだ、この人は昔から現場の人だったな、とファードは懐かしい。

「そう言えば、ばあさんから荷物を預かって」たすきにかけた鞆から小さな包みを取り出し、貼られていた複写式3枚綴りの伝票から受領証を切り離れた。「カラさんがたまたま外にいてくださって助かり…」

「ご名答」相手の何かに気付いたような表情を見て、カラは微笑んだ。「今から二人が行くからって、さつき陽さんから電話を頂いて待ってただけなんだよ」

カラの微笑みは弥祐も捉えた。子供のように少し顔を赤くして俯

いでしまつ。

「ああ、すみません」カラは上着の内ポケットを忙しげに探り始めた。今の季節に合う明るい色合いの、趣味の良い背広だった。オーダーマイドなのかも知れず、体にぴったりだった。

「お忙しい所をわざわざすみません」

「構わないさ。丁度仕事が一段落したところだったんだ」その内ポケットから、朱肉のいらぬハンコが出てきた。「陽さんとは今でもたまに仕事の話をするんだ。その時に君の近況を聞いたりもする」「そうだったんですか」二人が今でも連絡を取り合っていたとは、ファード自身初耳だった。

「はい。これでいいのかな」所定の位置に印を捺した受領証をファードへ返す。

「ええ、確かに」ファードはそれを伝票入れへ挟み込み、鞆へしまつた。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません」相手の目を見ながら素早く上着のボタンをかけ直す、なかなか器用な所を見せながら、カラは弥祐へ向き直つた。「あなたが陽さんのお孫さんの弥祐さんですね。申し遅れましたが、私はカラマネン・ミカと申します。お話はおばあさまから良くお伺いしています」

カラは無駄の無い均整のとれた長身をきびきびと折り曲げた。その鋭さを感じさせる所作を、柔らかそうなシルバーブロンドの髪、瑞々しい白い肌、中性的な声の調子などが程よく和らげるようだ。陽気で理解のある貴族の青年のようで、上品な物言いが全く嫌みにならなかつた。

そんな相手に少し気圧され、弥祐は調子を狂わせていたのだろうか。「おば：祖母とお知り合いなんですか？」名乗るのを忘れ、先に先程から気になっていたことの方を聞いてしまった。

「ええ」カラは頓着する風でもなく、むしろ楽しそうだった。本小屋をちよつと見上げてから言う。「私とおばあさまは、以前この会社で一緒に働いていたんですよ」

これを聞き弥祐は目を丸くした。祖母が以前、HMLで働いていたこと自体は知っている。彼女の部屋に貼られた古いカレンダー、あれはHMLが作った物なのだ。だが祖母がHMLにいたのはその写真の頃の若い内だけだったとも聞いていて、確実に数十年は前の事だろう。今微笑む相手は20代の真ん中くらい、陽はおるかファードよりも若く見える。そこに至って弥祐の頭上にもう一つ疑問符が増えた。遣り取りから推してファードの上司だったようだが、それはそれでやはり随分若くはないか。

答えを求めるように相手の顔をまじまじと見詰めてしまつて、弥祐はあつと気が付いた。カラの瞳の色。弥祐やファードのような“精霊力と親しくない”人間には有り得ない、透き通るようなエメラルドグリーンだった。フータのような風の妖精のそれがレモンイエローであるように、この色は大地の妖精のシンボルカラーだった。つまり、カラは精霊力と親しいホモ・サピエンス4人種の内、大地の精霊力に連なる妖精人であつた（他に火・風・水に親しい者共がいる）。“森の賢者”フォレステルフの一人で、姓からして恐らく北部地方の森出身と思われた。

フォレステルフは平均で500年は生きると言われる、長寿の人類種だった。科学は最近着々と新知見が蓄積されつつある、遺伝子学の方面からこの長寿の謎に挑もうとしている。一方で芽吹きから類推して大地の精霊力 生命力と考える人々は、そもそも精霊力はタンパク質などの物質に還元出来るものなのか、根強く懐疑論を唱えていた。謎の解明は先の話だが、いずれにせよカラも見た目以上に齢を重ねている可能性は十分にあつた。陽より遙かに年長かも知れず、それならば若い頃の彼女と仕事をしていたとしても、不思議では無いのだった。

「ところでこの後なんですけど、何かご予定はありますか？」カラは先ず弥祐を、次いでファードを見て言った。「よろしければ、夕飯には少し早い時間ですが一緒にいかがですか？ いい店を知ってるんですよ」

その店の名はフアードも知っていた。ここからほど近く、フータのような人の間に暮らす者たちにも専用の小部屋で食事を出す、機械が人の足になる前には普通だった商売を今も守った、気楽に入れる店だった。彼の記憶にあるその店は、清潔ではあっても古ぼけていた。カラはそれを訂正して、少し前に改装したため店内はより広く、明るくなったと言い、それに伴ってより良い商売をするようになったと付け加えた。

「どうする？」

フアードに聞かれ弥祐は戸惑いながら思索した。フアードはまだ話したい事があるだろう、その遠慮の周りをぐるぐるしている内に、二人からどんな話が聞けるのか単純に興味が湧いてきた。外で食べてきても構わないとの陽の言葉も思い出した。結局、彼女も誘われることにした。

店の場所ならフアードが分かるから、彼と弥祐、フータは一足先に行くことにした。カラは休憩を延長するのに改めて秘書や部長にお墨付きを頂こうと笑いながら言い、一度社内へ戻った。そうだが、あの店もスカーラル・シーの相手は久しぶりかも知れないね、電話で事前に断っておく方が親切かな、と戻るついでに気を遣おうともしていた。

弥祐が先程目にした酷い渋滞を心配すると、カラは「車では行きません」と何か企みのありそうな目付きで笑った。「会社に自転車を預けてあるんです。仰る通り、この辺りでは歩くか自転車の方が早い。最初に社長が使い始めて、あつという間に預かり所まで出来たんですよ」

お昼とかみんな一斉に自転車で行くのかな、などということ、短い飛行の間にフアードと話した。

店に到着した。大通りからは一本はずれた静かな区画にあつて、南通りに面した2階建ての店舗正面は、何枚ものガラスと漆喰と魚鱗石とで出来ている。正面玄関脇の小さな椅子に、案内係の少年が真面目くさった様子で腰掛けていた。馬や飛行妖精も客とする店の、

いつもの光景だった。

上空からその少年に声を掛けようとした時だった。一瞬早く、少年が上目遣いに空を見て、椅子から飛び上がった。

「すげーっ！」我を忘れたように叫ぶ少年の表情は、全く年相応で上気していた。「ほんとにスカーラル・シーが来た！」

カラは電話を入れ、それが伝わっていたのだらう。少年は明らかに待ち構えていた。真面目に待機している振りをして、実は何度もあの上目遣いをしていたに違いなかった。しかし店の仕込みは確かなようで、少年は多少張り切りすぎと思われながらもてきぱきと、フータが店に入る準備をしてくれた。

フータを専用の個室へ預け、1階の人間の席のあるフロアに入った。カラも言っていた通り、まだ夕食には些か早い時間のはずだが、ここから見渡せる席の既に8割方は埋まっているようだった。見渡せない離れた所からも、楽しげなざわめきが幾重にも響いてくる。

「ああ、お待ちしていました」

声を掛けられ振り向くと、これも制服なのだろうが、給仕たちのぴったりとしたスーツよりは動きやすそうな服装の、壮年の男が一人、足早に近付いてくるところだった。

「フアーボルグ・フアーディア様と、風野弥祐様でいらっしやいますか？」

この男はこれからフータの世話をしてくれる、専門のスタッフだった。世話をする生き物のことを熟知していて、オーナー（フアー）の場合にはフータから見た相棒か）の出した大まかな注文を軸に、後は生き物の傍で様子を見つつ最適な世話をしてくれる。世話係はカラの連絡を聞き、実は自分も案内係と同じでそわそわしていたと照れ臭そうに笑った。「私もスカーラル・シーのお世話は久しぶりですからね。勿論、だからと言って失礼はございませんよ」

フアーと世話係はフータの味付けの好み、見慣れない人間と接した時の癖、フータのメニュー自体など、これから幾つか話し合うことがある。その様子を見て弥祐がフアーの袖を引いた。



「外で食べるっておばあちゃんに電話してくる」

「ああ、分かった」

「お電話ならあちらの物をお使いください」店の裏手から入ってきた弥祐に気を利かせ、世話係は正面玄関脇にある公衆電話を案内した。

フアードと世話係の相談が済むと、給仕に2階へ案内された。1階は壁面や床、調度類なども、自然の木目と落ち着いた光沢、柔らかな曲線で客をもてなす趣向のようだったが、2階は打って変わって全体が白色のヴァリエーションを基調にした、人工的な線が空間を画する、意図的にデザインを意識させるような演出だった。中央に配置された、幾種類もの色鮮やかな観賞魚の泳ぐ大きな水槽や、適度に配置された鉢植えの観葉植物なども、同じ意図を感じさせた。「弥祐がいるからこっちに案内したのかも知れないな」

フアードがそんなことを言った。通された席は乳白色の天板の丸テーブルで、それよりは純白のイメージに近い白を基調とした椅子が、丁度3脚あった。テーブルも椅子も何本もの細い鉄パイプを装飾的に組み合わせた見栄えで、確かに洒落かも、と弥祐は感心する。藍や碧の顔が思い浮かんだ。連れて来れば、きっと喜ぶだろうと思った。

この席へ案内してくれた給仕が、メニューを持って戻ってきた。一通りの食器をセットし、お冷を置く。「お決まりになりましたら、そちらのボタンでお呼びください」これを押すと、テーブルの上に吊り下げられたモビールのような飾りが回転して、注文が決まったことを給仕に知らせるのだそうだ。飾りの外見も席ごとに違って、2人の頭上の物は偶然にも、太陽や月などの天体と、スカーラ・シーが意匠化されていた。

「これ、見逃したりしないのかな」

「給仕たちが控えている所では、音と光でも知らせてるらしいけどな」

一頻り感想を言い合ってようやくメニューを開くと、また先程の

給仕が戻ってきた。後には大股に歩くカラの姿も見える。

「やあ、お待たせ」給仕に礼を言い、椅子を引いてから座るまで、殆ど音を立てない滑るような動きだった。

「いえ」ファードが手にしたメニユーを軽く持ち上げてみせる。「こちらは今席に通されたばかりですよ。随分急がれたのでは？」自転車を使ったにしても、結構早く思える到着だった。

「まあ、急いだから」その割には涼しい笑顔で、汗一つかいていない。「鍛えられているからね。人を避けながら走るのも、随分上手くなったよ」

このユーモアをきっかけに、食事は和やかに進むことになった。

この場の会話をリードしたのはカラだった。ファードも弥祐も口数の少ない方だから、という理由もあったが、彼は“森の賢者”らしく豊富な知識を持ち、それを興に高め得るユーモアとサービス精神にも富んでいた。ファードも弥祐も良く笑った。旧交は温められ、新しい親交が深まるようだった。

時間は過ぎ、後はデザートを残すのみ、という頃合いになった時である。カラがふと表情を引き締めた。場の空気が変わったのを、他の二人もすぐに感じ取った。

「ファード」4つの見守る目を感じながら、意を決したようにカラが口を開く。「折り入って相談があるんだ…単刀直入に言おう、社に戻る気は無いかい？」

## 第7回

「え？」

「HMLでもう一度働く気は無いかな」

カラは繰り返した。ファードが耳を疑ったのも無理はなく、それほど唐突で意外な申し出だった。これには当のファードのみならず、弥祐も戸惑った。

「驚くのも無理はないね」カラは微笑んで相手の緊張をほぐそうとする。「実は営業部門の僕が管轄しているポストに、一つ空きが出来たんだ。ちよつと思つ所があつてね、君に声をかけたんだよ」

「思つ所、ですか」ファードは益々訳が分からない。

「うん。順を追つて話そう」一口、水を含む。「仕事自体は企画提案営業という、最近になつて設けられたものでね。従来 of 営業は、ただ料金と早さを売りにうちの運輸網を使つてください、というよくなものだったけれど、企画提案営業の方はもっと能動的なんだ。お客様に先んじてお客様のニーズを発掘・分析して、解決方法を提示し、そのサービスを買っていただくようなことをしている」話す内に、次第に仕事人としてのカラが顔を出すようだ。「このポストには仕事を作り出す力、つまり企画力と、コミュニケーション能力が必要になる。そしてそれらは、両方とも今の仕事で君が身につけたスキルだ。違つかい？」

ファードははつととしてカラを見た。相手は頷く。

「君が『時の三精霊』で働いているのは陽さんに聞いた。それで以前、社用の帰りちよつと寄り道した事があつたんだ。その時は僕も余裕が無いし、君も忙しそうだしで結局声をかけそびれちゃったけど……」その時の印象は細部まで鮮明に、少しの苦労も無く思い返された。「遠目でちよつとの間見させてもらったんだけど、それでも君の来館者との遣り取りは柔軟で、人を惹きつけるものが感じられた。それに、風乗りコーナーの展示の幾つかは、君のアイデア

なんだってね」

「ええ、まあ」

「勿論、新しく覚えてもらうこともある。潜在的ニーズの調査方法やデータ分析、その他色々ね。でも」カラはぐつと身を乗り出した。「この新しい挑戦は、君にとってきつと実り多いものになるはずだ。それに応じてくれれば、一等雇用者として迎えられる。悪い話じゃないだろう？」

沈黙が落ちた。急に彼女の日常から遠ざかったものになってしまった二人の話に、弥祐はまだ、幾分追い付いていない。何かもやもやした気持ちを抱えながら、ファードとカラの顔を交互に見比べてばかりだった。カラは返事を待っている。ファードは軽く面を伏せ、考えているように見えた。

「…誘っていただき、嬉しく思います。ありがとうございます」やがて、ファードは深く頭を下げた。閉ざされていたと思っていた一等への道が、思いがけず通じていたのである。驚いた後、感謝の気持ちで沸き上がってきたのは本当だった。

「じゃあ…」

カラが更に身を乗り出した。それを見て弥祐は、目の前の遣り取りが結局何を意味するのかに、ようやく思い至った。慌てて口を開きかけた。

「いえ」ファードは身振りに向かってくる二つの感情を制す。「嬉しくは思いますが、自分の都合でお誘いに応じることは出来ません」  
「…フータかい？」

二つの深い溜息が同時にテーブルの上にこぼれた。カラは失望半分、納得半分の。弥祐は安堵の。椅子の背に再びもたれたのも、期せずして一緒だった。

「ええ」

ファードは頷いた。一等で復職出来れば収入は増える。今後の生活も見通しが付けやすくなるだろう。だがその分、日頃からの残業や休日出勤、仕事に拘束される時間は確実に増す。一方でフータと

過ごす時間が削られる、それが問題であった。その時間は今でもぎりぎりだ。スカーラル・シーは犬や猫とは違う、相棒と空を行ける。ただその一点が彼らを人の社会に繋ぎ止めている。飛行時間が十分でなく、自分はただ飼われているだけだと感じた時、彼らは迷わず本来の生息場所へ立ち去るだろう。ファードにとつて、それはフータを裏切ることだった。そうだ、自分はわがままだ。そしてそれを、弁明するつもりは無かった。

「でもね、ファード」カラは再び追う。簡単に引き下がるつもりも無いのである。「厳しい言い方をしようだけど、君の今の働き方で、将来に不安は無いのかい？」

「正直、不安はあります」

これを聞いて、弥祐はあっと上げそうになった声を危うく飲み込んだ。自分の無邪気な安堵を、ファード自身に厳しく指摘されたようだった。

「…君が社を辞める時は慌ただしくて、大事なことをつい聞きそびれていたね」テーブルの上で組んだ両手の指越しに、カラはファードを見詰める。「当時も、そして今も、君は何故そこまで風乗りにこだわられるんだろう？」

「それは」ファードの表情がふつと緩んだ。「あの日、フータに教えられたからだと思います。お前は風だ、空に行くことをやめられはしない…」と

「ふむ…先ず、あの日と言うのは？」

「我々、風乗り全員がHMLから解雇された、あの日ですよ」

ファード自身が淡々と“あの日”について語り出した。カラは驚き、押し黙った。

その日のことはカラも良く覚えている。関心の程度や可否の相違こそあれ、HMLの本社屋で働く千数百名の人々にとつても、それは当時たった一つの関心事であったはずだった。

「自動車や飛行機の発達は目覚ましく、道路網や空港の整備等、それらを効果的に運用する条件も整ってきたことで、風乗りは最早、

必要とされなくなったのだ」

これが本社に招集した風乗り全員を前に、当時の社長自らが語った理由だ。当日付をもって、HMLは全ての風乗りを解雇したのである。フアードも、そしてカラも、他の風乗り仲間と一緒にその言葉を聞いた。

フアードの記憶が静かに再現されていく。彼は放心状態にあった。今後を相談し合う仲間たちの姿も見えぬように、一人ふらふらと廊下にさまよいでた。

気が付けば、足は当時本社屋の最上階にあった飛行妖精の待機室、一般には既舎と呼び慣わされていたが、そこへ向かっていた。エレベーターを降り、飾り気の無さが今は冷たい廊下を一体どんな足取りで歩いたのか。くるぶしの上までしつかりと締め上げた飛行靴の分厚い底が、重く、硬い音を立てていたことだけは鮮明に覚えていた。

既舎に一歩足を踏み入れ立ち竦んだ。風乗り全員が招集されたのだから、彼らの相棒も全てそこに居るはずだった。今、この場所はまるでがらんどうだ。人の言葉を解するとは言っても、スカーラル・シーに解雇の概念が理解出来るとは思えない。だから彼らは、この場に常とは違う風を、しかも逆風を、人が言えば比喩となるそれを実際の気流として肌で感じ取り、じつと息を潜めているようだった。フアードはようやく自分の胸が痛んでいることを知った。よろけるように奥へ進んだ。

既舎のような、スカーラル・シーを一所に集める場所では、原則各個体に個室が割り当てられている。今は広い既舎に、空き部屋ばかりが目立った。天井の照明も、節約と称しあちらこちらで蛍光管が抜き取られていた。かつては最上階から下に、数階分が既舎だった時代もあった。最後の方は、規模縮小の果てに残ったはずのこの一床さえ、何かの諧謔のように広すぎた。社に登録されているスカーラル・シーの数は、全盛期に遠く及ばない、僅か十数頭に過ぎなかった。

フータの個室へ行く途中には、屋外の発着デッキへ直接通じる主通路があった。厩舎内の各個室は、先ずこの主通路を挟んで対称的に大きく二分されている。フータの個室は主通路の向こう側、東ブロックの、更に九つに割られた区画の一隅にあった。

俯いていたファードだったが、10歩手前でそれに気付き、目を見開いたのだった。薄暗い主通路の上でも、その白い姿は明るく浮き立っていた。フータがうずくまっていたのだった。眠っているように見えた彼が、ゆっくりと目を開く。ちらりとファードを一瞥したら、やおら身を起こし音も無く歩き出した。待っていたと解する事に、ためらいと確信があった。引き寄せられるように後を追った。

自然状態では地上に巣を作り、必要ならホバリングして高所の液果や堅果も食べるスカーラル・シーではあるが、どちらかと言えば空を行くのに都合が良いように、その体の造りは進化してきている。だから彼が四肢を使い、大きな尾を引きずって床を歩く様には、何処かぎこちなさがあった。ファードはすぐに相棒の尻尾に追い付く。再び立ち止まり、見守ると、相棒は外の発着デッキへ通じる鉄製の大扉へ近付こうとしているようだった。

フータは大扉の前でうずくまった。そして今度は、ファードの目をまともに見詰めてきた。リスクらしくドングリの形に開いた目、風の妖精である事を隠せないレモンイエローの瞳、何も変わらなかつた。だが今、その見慣れているはずの相棒の瞳が、唐突にファードの意識を引き抜こうとしてきたのだった。実際、彼は体を前に泳がせていた。よるけるまま壁面に手をついた。手元には大扉を開閉するスイッチがある。咄嗟に開ボタンを押していた。鉄製の扉が、軋みながら左右に開いていった。馬などのものとは違い、飛行妖精の厩舎はなるべく空に近い所にある。晴れ渡った午前 of 明るい光が、徐々に厩舎を空へ繋げていった。一陣の風が瞬く間にファードの後ろへ過ぎ去った。各自の個室で息を潜めていた他のスカーラル・シーたちが、一斉にざわめきだした。

「信じてもらえないかも知れませんが」ファードは自分の手元を見

詰めている。今語る出来事を慈しんでいる、そんな風に窺えた。「フータと目が合った時、あいつの言葉が聞こえたみたいだったんです。『何を迷っている。お前は風だ、空に行くことをやめられはしない』多分、そんな風に」



## 第8回

「そんなことが…」突拍子もない話のようだが、カラの表情に一笑に付そうとする気配はまるで無い。むしろ息を詰めて話を聞いていたことによくやく気付き、一つ大きく呼吸したくらいだった。「『双子』には、そういうこともあるってことなのかな？」

「さあ、それは…」実際、ファードにも答えられる質問では無かった。

ここでカラは、風乗りが使う意味で“双子”と言っている。風の妖精であるスカーラル・シーは、この星の動物相を構成する一員であると同時に、風そのものとも言える存在だ。故に風乗りの方も、ある程度風を読むことに長けていないと、そもそも彼らに背を借りる資格が無い。ファードは風への感受性が人並み外れて優れているようで、時には誰もが望める訳では無い高い領域で、相棒と一体の飛行が可能であった。このような、余人に一度でも特別な結びつきを実感させた風乗りと飛行妖精が、以後双子と呼ばれるのだった。双子である風乗りと飛行妖精は、何か強い共感で結びついていると言われているが、詳しいことは何も分かっていない。その結びつきは、今のファードの受け答えからも窺えるように、当事者にとっても無意識的なものらしいのだ。

ファードがHMLに在籍していた頃、風乗りを抱えていた他の企業なども含め、少なくとも把握出来る限りにおいて双子は彼とフリーのみだった。当時、彼が風乗りのエースと呼ばれた所以であった。「妙な話ですが、お前は風だと言われて何処か納得するところもあるんです」ファードは続けた。「風が空を渡っていくのを見ると、時折凄まじく郷愁を感じることがある。我ながら変だとは思っていませんがね」

「…」カラはふと昔のことを思い出す。自身HML所属の風乗りとして、働いていた頃のことだ。その日、彼は丁度ファードと組み、

難しいルートを越えようとしていた。気流の乱れる中、気の抜けない飛行が続いていた。集中力の維持をどれくらい長く強いられていただろう。突然、少し前を飛行していたファードとフータが、吹きつけてくる風に固くぶつかることを止め、するりと渦を巻き、その風をやり過ぎたように見えた。それはそう、まるで風が、風を上手くいなしたようだった。カラは目をしばたたかせる。ファードらは既になんでもない、風に固くぶつかるいつもの彼らだった。

あの出来事は当時思ったような、疲労が原因の目の錯覚では無かったのだろうか。

「私が空にしがみついていたことを、フータは私よりも見抜いているのかも知れません」ファードはコーヒークップを傾け、少しぬるくなった中身を飲み干した。「そんな自分にフータが背を貸してくれる限り、私はあいつを裏切れません。あいつ抜きで今後を考えると言うのは、やはり無理なんです」こう思える時、付きまとう不安はいつも薄らいだ。再び前を向き、歩き出す気になれるのだった。

ファードのこの愚直さ、不器用さは彼の弱みであり、同時に強さなのだと思った。カラ自身はあの全解雇の際、会社が提案した配置転換を受け入れ、今の営業部門へ異動した。つまり彼は、風乗りであることを捨てたのだった。彼は器用にリスクを避けたかも知れない。しかし時折、今この場でもそうだが、過去風乗りであった自分が何かを問い質してくる、そんな落ち着かない気分になることはあった。

「…ファード。これだけは言わせて欲しい」カラは心の中で首を振った。引き下がるか決める前に、まだ話し足りないことがあった。

「君はうちを辞めて、同業の他社へ掛け合いにいくと言っていたね」「ええ、そんな話もしました」

「そう言えば、HMLが最大手なんだから他所も追随するだろうって、僕も話した覚えがあるよ」

ファードは苦笑した。カラを含め、当時の同僚全員にそう説得さ

れても彼は思い止まらなかった。退職金の代わりにHMLの財産であつたフータを譲り受け、振り切るように社を去つた。

「君が辞めた数日後、新聞を見て溜息をついたよ。思った通り、大部分の同業が風乗りの全解雇を、しかも一斉に発表したんだ」

「…」

「そして、これは陽さんから聞いたことだけどね。その時点で方針が定まつていなかった社でも、現段階では契約期間の限定された二等でしか雇えない、そう言われたそうじゃないか」

「ええ」提示された賃金も人の足下を見るような額だったが、ファードは甘んじてその条件で雇われた。状況はいつか変わるかも知れない、それも風乗りが居続けてこそだと思つたのだ。しかし？「その社も結局、3ヶ月後には全解雇に踏み切りました」こうして世界から、風乗りを抱える企業は消滅したのだった。

「君が風乗りであり続けたい、特別な事情は察したつもりだよ」理解した上で、カラは敢えて言う。「けれど、今の君を取り巻く状況を見ていても、やはり風乗りはもう、この世界での役割を終えたんだと思う」

カラが静かに言つたことは、他ならぬ再宣告だった。周囲の喧騒が、少し遠のいたようだった。

「ファード。うちに一等で復職しても、時間の相談ならある程度応じられる。だから、もう一度考え直して…」

「違います!」

そう力強く遮つたのは、ずっと黙つて話を聞いていた弥祐だった。その声は決して張り上げたものではなく、けれどその分鋭さに特化したようで、それまで大声で自分の話に夢中になっていた隣の客が、刺されたように振り返つたくらいだった。彼女は俯き、テーブルの上できつく両手を握りしめていた。

ファードはすぐに悟つたが、声をかけるよりも早く、弥祐がきつと顔を上げた。

「風乗りはまだ、必要とされています」声が一度震えかけた。それ

を押さえ込み彼女は続けた。「今日はそれを確かめにファードと一緒に街へ行けて、おばあちゃんに言われたんです。おばあちゃんの言いたいこと、私には分かりました」一旦言葉を切った。彼女はこれから、新しい宣言を行うのだ。「風乗りはこれから必要とされます。居場所が無くなるなんてこと、絶対にありません」

「……」弥祐の瞳の中に揺れる光に、カラは圧倒されるしかなかった。「ファード」弥祐は慌てたように視線を外し、急に立ち上がった。

「随分長居しちゃったよ。もう出よう」テーブルの脇に、注文伝票と一緒に一枚の木札がかけてある。それを掴み、さっと身を翻した。大股に歩いて階段を下っていく。あの木札には、フータが通された個室の番号が記されていた。そこで待つているとの意思表示だろう。弥祐は挨拶も無しに行ってしまった。そのことによく気付けるくらい、彼女の衝動は激しかった。

「済みませんでした」深く溜息をついて、ファードは頭を下げた。「風乗りに憧れているところがあって、つい興奮したんだと思います。しかし、物の分からない子でもありません。後で良く話しておきます」

「陽さんのお孫さんで、君の一番近くにいる子だったね」カラは弱々しく微笑んだ。「いや。そんな彼女の前であんな話をした、僕がうかつだったんだ」

「そんなにお気になさらないでください」

「今すぐにも謝りたいが、あの様子では暫くそつとしておく方が賢明だろうね」

「分かりました。代わりに伝えておきましょう」

「ああ、頼んだよ……」椅子に深くもたれようとして、ふとまた身を起こす。「そうだ。君からの誤解も解いておかなきゃいけないね」

ファードは良く分からないといった顔をした。

「今日君を誘ったことだよ。陽さんに頼まれたみたくなかったが、そっじゃないんだ。これは前々からの腹案だね。いつもは陽さんが荷物を持ってくるのに、今日はたまたま君が来たから打ち明けてみた

んだ」

「そうでしたか。全く気にしていませんでした」

ファードはさっぱりとした笑顔を見せた。そのこだわらない様子に、カラもようやく自然に笑うことが出来た。

「彼女を待たせてはいけないね。僕らも出よう」テーブルの脇を探つて、注文伝票を手を取った。ファードが何か言いかけたのを身振りで制す。「誘ったのは僕だし、君にも弥祐さんにも悪いことをしてしまった。せめて僕に持たせてくれ」

ファードは頭を下げ、「お誘いのことは改めて考えます。いずれお返事できるまで、いま暫く時間をください」と言った。自身の思う所は述べたが、それでもカラは納得していないだろう。結局の所、ファード当人が今後の身の振り方をはっきり示し、誰をも納得させる必要があるのだ。

「そうしてくれると助かるよ。じゃあ、今の連絡先を教えておこう」上着の内ポケットから深い空色に染められた、革製の名刺入れを取り出した。

1階に降り、会計で支払いを済ます。会計係は注文伝票を伝票差しに、また別の伝票に判を捺して、カラに手渡した。カラはそれをファードに差し出す。礼を言つて、ファードは受け取った。

「じゃあ、気を付けて」

正面玄関は会計のすぐ後ろだ。挨拶を済ませたカラは、重厚な木枠に飾りガラスのはまるドアを押し開けた。風除け室があらわになり、ゆつくりとした間を置いて、木枠と飾り細工が景色を散らすガラスとに、再び隠されようとする。じりじりと弧を描いて閉じようとする飾りガラスの向こうが、ほんのり明るくなった。カラが最後の扉から表へ出て、一瞬、外の光を直に導き入れたのだと分かった。

カラを見送り、ファードは踵を返した。正面玄関とは正反対の、店の奥へ向かっている。最初この1階フロアへ入ってきた時に使った、あの出入り口を指していた。

ドアも無いその出入り口を一步またげば、簡素な木の床の細い廊下に出る。客席のあるフロアよりも照明が落とされていた。喧騒もにわかに遠くなった。

廊下の片側には、同じような作りの木製のドアが並んでいる。木札は弥祐が持つていったが、彫り込まれた数字は覚えていた。ドアに表示された部屋番号を横目に、迷わず進んだ。

目的のドアの前に誰かが立っている。近付くと向こうも気付き、安堵の笑みを浮かべ歩み寄ってきた。フータの世話をしてくれていた、あの壮年の世話係だった。

「先程お連れ様がいらして、もうお帰りになるので後のことは自分だと仰って…」

「すみません。ご迷惑をおかけしました」ファードは先程カラから受け取った、判が捺された伝票を差し出した。これは既に支払いを済ませた証明書で、これを確認しない限り世話係の仕事は終わらない。彼がファードの顔を見てほっとした様子だったのも、所在無く待たねばならない時間からようやく解放されたからだろう。

「はい、確かに」伝票を検め、世話係は頷いた。

「飛行妖精の方は何かご迷惑をおかけしませんでしたか？」

「いいえ、とても紳士的でした。お出ししたものも残さず食べてくださいましたよ」世話係はファードに一礼した。「では、案内係に屋根を開けさせます。本日は有り難うございました。また是非、お越しください」

ファードは一人、廊下に取り残された。

ちよつとためらった後、結局、ごく普通にドアを開けた。

戸口で一度立ち止まり、中の様子を窺う。先へ行くほど緩く広がったりと伸ばされていた。辿っていけば尻尾の付け根から背中まで、均整のとれた盛り上がりがあった。その盛り上がりの向こうに、弥祐の頭が覗いている。床に座り込み、フータの頭を抱えているようだった。

フータの左飛膜の脇をそつと歩み寄った。彼の丸い耳が、一見すると神経質な様子でこちらを追いかけている。弥祐が抱きついてい  
るから頭を動かせないのだ。傍まで来てみれば、その彼女は眠って  
いるように見えた。

声をかけようとした。それを察したように、弥祐が目だけを、力  
無く開いた。

「カラさん、帰ったの？」

「ああ」頬に涙の跡が見えたようだった。一步下がって壁にもたれ、  
窓から差し込むはちみつ色の光と、その中の細かな、ゆったりとし  
たきらめきを見詰める。「弥祐の気持ちを考えずに済まなかったと、  
謝っていたよ」

「…ごめんなさい」そつと、でも素早く目許を拭った。

「ん？」

「私、また短気起こしちゃった。カラさんにも謝らなきゃだよね…」  
「そうだな。だが、カラさんも分かっておいでだと思う。余り気に  
するな」

「カラさんはファードのこと、心配してくれてるだけなんだよね」  
一度興奮し、だから余計に隅々まで思い返せて、今は素直にそう言  
えた。

「昔からそういう人だった」ファードも頷いた。「自分よりも人の  
心配を先にしてしまう。HMLを辞める時から、心配かけっぱなし  
だ」

「でもさ、風乗りが必要ないっていうのは、断固反対だよ」

ファードは小さく笑った。釣られるように、弥祐も。

「…ねえ、ファード」少し間を置いて、弥祐は再び口を開いた。フ  
アードと話していると、こんな小さな笑いにも勇気付けられるよう  
だった。

「うん」

「一等等とか二等等って、なんなのかな…？」

ファードは腕を組み、息を長く、静かに吐いた。

「さつきね、フータとも話してたんだ」フータの額から長く伸びる、2本の触角状の器官の間を、彼女は優しく撫でた。彼の穏やかな息遣い。「ファンさんがね、ファードのこと褒めてたんだよ。ほら、藍や碧と一緒にだった日。今ではファンさんたちの方が、ファードに助けられてるんだって」

「やけに騒々しいと思ったら、そんな話だったのか」あの閉館間際の出来事は、今でも良く覚えている。

「そういう話にしたのは碧だよ」ちよつと拗ねたように言い、静かな調子に戻す。「そして、今日はカラさんが褒めてたね」

「どうだろうな。そういうのは、自分では良く分らんからな」

弥祐は微かに首を振った。彼女の髪と、フータの毛足の長い体毛が擦れ合って、静かな室内にさらさらと音がこぼれる。

「ファードは、一所懸命が当たり前の人だから」あの日、ファンはそう言っていた。弥祐は深く頷ける。カラも陽も、きつとそう思っている。「そう言うのも分かるけど、そこは認めてよ」

「だからね、一等とか二等とか、余計に変だと思うんだ」弥祐はゆつくりと、フータに預けていた身を起こした。背はファードに向けたままだ。細い体だった。これが普段、小振りなバネのように躍動しているとは、うなだれて背が丸くなりがちな今、俄には信じ難かった。「なんで頑張って仕事して、結果を出しても、肩書きだけで差別されなきゃならないんだらう？」

ファードは黙っていた。搾取出来る労働力が多いほどいい、そう企むのは雇う側の本能だとか、連中は顧客満足度には一家言あっても従業員満足度なんぞは思いも寄らないんだろ、良くサービスの質を云々する割には、などと、もつともらしいことを言うのは簡単だった。今は理屈より、もつと深く差し込む何かが必要なのだ。

「私…」弥祐は急に小さな肩を震わせた。「悔しいよ。なんでファードとフータが不安に思わなくちゃいけないの？ フータだっていい子だし、働ける。報われる資格が無いはずない」彼女は立ち上が



り、振り返った。気丈に見張った目は、しかし今にも涙をこぼしそうだった。「ねえ」掠れた声で言う。「ファードは、悔しくないの……？」

弥祐は、本当に目に力のある子だった。この力を正面から受け止めれば、誰でも例外なく打たれた気持ちになるだろう。気付かされたり、反省を促されたり、今のファードはぐつと心を引き締められた。どう伝えれば、彼女の問いに誠実に答えられるのか。思い巡らし、彼女の涙が頬を滑り落ちる前に、心を決められた。

「弥祐」ファードは天井を見上げた。折しもそれは、モーターの力でゆっくりと開かれつつあった。「上がるのか」壁から背を離し、彼女の正面に立つ。

「上がる？」目から力が散じた。虚を衝かれたようだった。

「空へさ」もう一度見上げると、暮色を濃くし始めた空と、幾重にも折り畳まれていく天井とが半々に見えた。「そこで、ゆっくり話をしよう」

## 第9回

弥祐は次第に不安になりつつある。

あの店の個室を飛び立ってから、フータはずっと上昇を続けている。垂直に上がっている故に、ペース自体は緩やかだ。だが時間になれば、もうかなり経過しているように思われた。地上から見た際に、かなりの高さの一つ、更に上にもう一つ、標高線のように浮いていた雲々の小群を、もうどちらも追い越している。空気の乾燥も、街の埃っぽい感じから質が変わったような気がした。上がる前、彼女は用意した防寒具を身に付けるように言われていた。今はその上着を通して、肌寒さを感じるようになっていた。

これまで何度かフータに乗せてもらっている彼女でも、こんな高い空への上昇は今日が初めてだった。そして、話をしようと言った当のフータが黙ったまま、口を開く素振りも見せなかった。「フータ、高いよ」不安がついに言葉になった。「どこまで上がるつもりなの…?」

腰に回された手に力が込められて、彼女の心中をより良く伝えてきた。フータは遠くまで見渡してもう少しだと思ふ。「そうだな」頭上を眺める。「あの雲の上まで行こう」大きな雲の一塊が、ゆっくりと風に流されていた。雲を目印に正確な距離など測りようもないが、今のペースなら越すのに暇取ることはないだろう。弥祐の両腕が、一瞬強張ったようだった。そんな訳は無いのに、背中を強く叩かれた気がした。

目標の雲の上に出た。フータはホバリングを始めた。吹きつけてくる風に時折たゆたうだけで、錨を降ろした船のようだった。

その変化を感じて、弥祐は薄く目を開いた。状況確認の必要がある、平気一瞬で終わるから。ちらっとだけ視線を横へ遣れば、それで済むはずだった。彼女は一気に目を見開いてしまっている。映じる光景が、恐れをきれいに拭い去っていた。声にならない歓声を上

げ、押し付けていた額をファードの背中から離し、体を起こした。

雲は切れ切れに浮かぶだけで、ずっと遠くまで、そして遙か下まで、視線を遮るものは殆ど無かった。目と同じ高さに気の早い星々が光って見える。一方で大地は、黄金色に燃えるようだった。光の粒子が絶え間なく降り積もり、同じ波が隅々まで洗っているのだった。

大地を向こうの方まで辿っていけば、この星の丸みに行き当たった。丸みの画する外側に、今日の陽が沈もうとしている。それに接して一際明るいのは、夕陽を無数の輝点にして見せる、遙か遠くの大洋だろう。切れ切れに浮かぶ雲は、その位置取りで染まり具合が異なるようだった。夕陽にかかりそうなのは、眩く白熱している。高い所には赤紫の、海の手前には薔薇色の星雲があった。大きな雲になると、それらがまだらになっていたりする。弥祐はゴーグルを額に押し上げた。大事に使っていて、ガラス面はほぼ無傷だったが、それでもこの一枚の隔たりがもどかしく思えるのだった。

視線を手前に引き寄せてみる。恐らくはお花畑であろう整然と区分けされた中のくすんだ赤や紫、繁茂する森の黒さ、それらが時折変化を添えるものの、大地の基調はあくまでも他の色を沈ませる、しかしそれ自体美しい蜂蜜色だった。少しして、色彩よりも目を引くものに気付く。これだけ高く上がって初めて見分けることの出来た、地図に押し込められて化石になっていない、生きた地形だった。飽かず続き、変化にも富む大地の起伏を目で追えば、自然ダンスに誘われそうな一曲のベースラインが聞こえてくる。その上で自由に展開する主旋律も見えた。例えば平地に鋭く突き入り、かと思つと素早く退く山裾は、そんなものだろう。更に近くまで視線を引き寄せてくると、ずっと地面に近い所に色彩で頑張っているものを見付けた。真っ赤な火の玉が空中に静止しているようである。多分、バロネット（浮遊のための気体を充填する、流線型の気体袋）に夕陽を強く反射した、一艘の飛行船だった。

暫く迷った後、好奇心が勝り思い切つて真下を覗き見た。自分が

落ちたか大地が舞い上がったか、一瞬後悔した。何とか踏み止まり呼吸を落ち着けて見続ける。足下は首都の中心部だ、街区は広く、人には車やネットモビルの助けがあつてようやく使いこなせるくらいのはずだった。だがその広がり、今見た限りではなんて拍子抜けする狭さだろう。弥祐は確かに高い所から一望して、自然や街並みが模型のように眺められるのが好きだった。足下の首都は、今はちよつと小さくなりすぎて、箱庭を想像するのも難しそうだった。

風が下から吹き上がってきて裸の目を叩いた。目を閉じ、首を引っ込める。その風は追ってくるようだった、飛行帽の耳覆いに絡みついて思い掛けなく悲しげに唸り、はつと世界を裏返した。音も光も俄に静まつていくようで、急に不安になった。

「弥祐」

高く上がって初めて呼んでくれた声が、弥祐をいつものように落ち着けてくれる。

「この世界のことをどう思う？」

抽象的な聞き方だったがここまで連れてきての事なのだから、今彼女に差し出されている、この全てを前にしてどうかと問うのだろう。弥祐はもつと心を静かにして、時間をかけ、五感で言葉を捕まえようとしたり。けれど一体、何と言つて表現したら良いのだろう。相手はとてどもとて、とにかく大きい。

「なんか、上手く言えないよ…」観念して、感じたままを言うことにした。「すごく広くて、静かで…私たちしか生き残ってないみたいで…」不意に言葉に詰まり、涙がこぼれそうになった。彼女は自分でも驚いた。

「どうした？」

振り返ろうとする気配に、弥祐は慌てて首を振った。

「うっん…とにかく綺麗だね。もう、言葉なんて無いよ」

「そうだな」何かを懐かしむようにファードは言う。「漠然としすぎて、途方に暮れちゃうよな」

「…」ファードらしい言い方も、と小さく笑う。

「なあ、人は見えるか？」

「ええ？」 弥祐はどきりとした。「見えっこないよ」

「別にふざけた訳じゃない」

弥祐はファードを見上げた。口調もそうだが、ゴーグルの奥の眼差しも、常にも増して落ち着いているようだった。弥祐はあつと思つた。彼女も知らなかったファードを、今見ているのだと思つた。

「こつやつて高い空へ上がる度に、俺はつくづく思うんだ。人間なんて結局、このだだっぴろい世界と比べりゃちっぽけなもんなんだつてな」

「世界と比べて…」 弥祐はもう一度、彼方まで目を走らせる。

「さつき、悔しくないのかつて聞いたな？」

顔を戻してみたら、ファードも首を回してこちらを見ていた。目を合わせ、頷く。

「空を知らなかったら、俺もそう思つて腐つてただらうな」 そうならなかったことへの晴れがましさ、口許に浮かんでいる。「だが、稼ぎが多かろうと少なかろうと、誰だつてこのだだっぴろい世界の中じゃ片隅であくせくやつてることに違いは無いんだ。空がそれを教えてくれた」

無論、ファードだつて納得している訳ではないのだ。しかし今の世の中、人は一体誰に勝つて勝ち組で、誰に負けて負け組なのだろう。世界の片隅で今日も滑稽に、あくせくやつていることは誰も同じなのに。空がファードに教えたのは、相対化の視点だった。

要するに、拘つても転がらないと駄目なのだろう。最近の労働の在り方は確かに病んでいるし、やる気の出にくい状況ではある。しかし、そうだと言つて現状に腐り自身が苔むしては、結局は声を上げても力にならないし、時機にも恵まれないのだ。

さつき、この世界を大きいと感じた。ファードの視点の大きさと思い比べてみた。自然、こんなことを言っていた。

「…ファードは、空では王様なんだね」

「王様あ？」 今度はファードが驚かされた。「そんな大層なもんじ

やないだろう」

「私設定なんだからいいじゃない」

呟くように言った弥祐は、ファードの背に額を押し当てた。そのまま少しじっとしている。瞳を閉じ、ファードの腰に回した両手は組んでいて、それはまるで、祈る姿のようだった。

「ファード」そして再び顔を上げた彼女に、もう沈んだところは無かった。声が弾んだ。「私、さっき大見得切っちゃった!」

「なんのことだ?」話の変わりようと弥祐の変わりよう、両方に翻弄されている。

「ほら、言っちゃったじゃない。おばあちゃんの言いたいこと分かりましたって」

「ああ」彼女の剣幕に驚いた、カラの顔が思い出された。

「実は駆け引きだったのだよ。本当のことはまだ誰も知らぬ。ククッ」

「そうか」時折、可笑しみが先に立つ言い方をすると思った。「だが、お手上げて訳でもなさそうだな?」その言葉の内容からも、明るい口調からも、彼女が何かしら価値のあることを見付け、それを胸の内で大切に扱い始めているのが感じられた。

「なんとなくなんだけどねー」ちよつと思案顔をした後、「おばあちゃんにヒントを貰うにしても、もうちよつとまとめてからじゃないとね」口調は如何にも優等生だが、顔付きは新しい遊びを見付けた子供みたく、何処か自慢気だった。

「頼もしい限りだ。ばあさんが何を言いたいのか、俺にはさっぱりだったからな」

二人で笑い合おうとすると、弥祐がくしゃみをした。肩を抱き、体を小さくする。

「ああ、確かに冷えてきたな」もう陽は沈んでいて、後は散乱した無数の光の欠片が空の低い所を薄明るくしているだけだった。それに高所で元から気温が低い。弥祐の、本来は街中で着るような防寒具では、そろそろ凌ぎ切れないかも知れなかった。

「…あつたかいココアが飲みたい」小さく鼻を嚙りながら訴える。

「まだ入るのか？」フアード自身は満腹だった。

「甘い物と飲み物は別腹だよ」澄まし顔で言った。「両方一緒なら、尚更だね」

フアードは苦笑した。「アイルの店でいいか？」古い馴染みが経営している店を提案した。そこなら弥祐も知っているし、一部がオープンカフェのようにもなっているので、フータが一緒でも大丈夫だった。

「いいね！アイルさんのお店なら甘酒もいいかな」後に引かない甘さと、この店独特の香味が弥祐のお気に入りだった。以前、使っている米が違つとアイル本人に聞いたことがあるが、その米の名はちよつと覚えていない。なんたらヤポニ力だったか、学名か何かを聞かされたのだ。

「長いこと付き合わせて悪かつたな、フータ」フアードが話しかけると、フータは首をちよつとだけ動かし、何でもなし様子でこちらを見た。「さあ、下りよう」

見ようによつては、いつもの何事にも我関せずといった感じのフータだった。でも今は、少しだけ普段と違つような気もした。弥祐はふと、風の妖精は空の全てを体に刻み込み、生まれてくるものなのかも、などと考えた。だとしたら、今の彼の態度はいつもの無關心とは異なり、過去空に教えられ、今日僅かでも空を知った者を自分と同じ空の続きと思ひ、ただ自然体でいるだけなのかも知れなかつた。

そんなことに気を取られていたので、フアードが鞍の上で体重を移動させたのに応じられなかった。不意に体が傾いて、思わず声を出しそうになる。フータは緩やかに弧を切り始めていた。

弧を描きながら、下りてもいく。そうやって大きな螺旋の跡を残しながら、フータはゆっくりと、地上へ近付いていった。

やがて、薄明に白く浮かび上がった姿が真つ直ぐに駆け始める。

その高さから、その角度で下れば、アイルの店へは丁度良いのだ。

## 第9回（後書き）

今回で物語前半の部が終了です。続けて、物語が動き出す後半部もお楽しみ頂ければと思います。



## 第10回

「号外だよ！ 号外だよ！」

空で弥祐と語り合ってから数日後のことだ。今日もファードは“時の三精霊”での仕事を終え、帰宅するところだった。バス停へ向かい、5分くらい歩いた後だろうか。周りを高級百貨店、何面ものスクリーンを持つ大きな映画館、国立古典劇場などに囲まれた、ちよつとした広場のような場所を通り抜けるのだが、待ち合わせや一時の休憩などに良く利用され普段から賑やかなその一角に、何かの人だかりが出来ていた。その人だかりの真ん中で、表情にまだあどけなさの残る少年が、出し過ぎで枯れたのか、それとも単に変わりがひよろりと高い彼は、多くの人々に囲まれても、まだ首から上を宙に突き出していた。

「事故だよ！ 大きな事故だよ！ フェンサリサの大トンネルで、大事故発生だよ！」

ファードは最初、これもこの場で良く見掛ける、販促や路上パフォーマンスの類いだと思っていた。だから気にも留めずに人垣の脇を通り過ぎようとしたのだが、少年がそう報じた途端、打たれたように立ち止まった。「ああ、すみません」すぐ後ろを歩いていた人を驚かせてしまい、慌てて謝罪する。謝罪しながら、体はもう、人垣の中へ分け入ろうとしていた。

何度か空を掴んだ後、ようやく一部を手に入れた。大新聞の一紙が発行したその号外は、本紙よりも判が小さく、2つ折り4ページで、紙の質が悪いのかとても手にざらついて感じられた。

掴み取った紙片を守りながら人を掻き分け、やつと押しながらよろめく塊の外へ脱出できた。自然と足早に歩きながら、早速目を通し始める。一体何段抜きと言うのか、驚くほど大きな見出しが先ず目に飛び込んできた。

「フェンサリサ大トンネル 崩落」

白抜きの大文字がそう読めた。ファードは眉をひそめ、思わず立ち止まった。

ファードは繰り返し記事に目を通した。郊外へ向かうバスの中、吊革に掴まり不安定に揺られている今も、その行為以外は忘れたように読み返している。

その事故が起きたのは、本日の13時ごろだった。

峻険な大山脈を東西に横断して貫く、フェンサリサ大トンネル。総延長20km超、実際には複数のトンネルを露天の道路で繋ぐ一つのルートなのだが、そのほぼ中間点、ルート中最長のトンネル(6748m)の半ば辺りでもあって、下りながらの長い右カーブが続く地点での、大型トラックを含む自動車数十台による多重衝突だったという。事故車は全て激しく炎上。その高熱がトンネルを支える鉄骨を歪ませ、広範囲での天井・壁面崩落という、更なる惨事を招いた。広大な山脈の最深部で起きた事故は初動を遅らせ、長いトンネル内最深部での消火・救助活動は容易に困難を予想でき、被害の拡大が懸念されている。事実、この記事が書かれた発生から2時間の時点では、炎の勢いを幾らかでも弱めることすら、絶望的と思えるほどの状況のようだ。目撃者の証言から、当局は現在のところ先頭を走っていた大型トラックのスピードの出し過ぎ、もしくは居眠りが事故の原因と見て調べを進めている。死傷者の数については、まだ何も判明していなかった。

とにかく凄まじいばかりの事故である。誰であっても胸を痛めずにはいられないだろう。それは無論、ファードも例外ではなかった。だが、彼の感じるこの痛みには、単に事故の大きさを思っただけではない、彼だけに特別な痛みも、実はない交ぜになっている。

順を追って話していこう。先ず問題のトンネルの名称に見える“フェンサリサ”であるが、これは平均標高で4000m超、この国の中央を北の海際から南の海際まで、実に二千数百kmにわたって

縦断し、国土を完全に東西に2分する、途方もない大山脈の呼称である。それにしても平均で4 km超の標高とは、一体自然はどれだけの力を見せ付けるのか。この山脈を挟んでの行き来は、考えなくたって容易くない。国家東西分裂の危機は常にあつたろう。ところがこの国は、国土が現在ののように定まった遙か昔から今日まで、長きにわたり一つの国として成り立ってきた。分裂しなかった（分離独立派が負けた内戦とか、民衆による大規模な分離独立要求運動とか）経験すらなく、時折分離独立を是とする者がマスメディアに登場したとしても、殆どの人々はこういつた連中に常に冷淡だった。まったく奇跡的な統治の在り方のようで、特に同胞と他国人にならざるを得なかつた人々から、または内外の歴史・政治学者などから、賛嘆の声が良く聞かれた。

この天然の大要害の向こうへ行くのに、人々はどのようにしてきただろう。一つは越えようとせず海を迂回する方法で、海路は古いけれど今も壮健な東西の大動脈だった。だが船便は緊急の用件にはもどかしく、物や人の移動が激しくなるばかりの昨今では、山脈を避けるだけの短い航路は慢性的に大渋滞の有様で、一便当たりの積載量の改善によって緩やかではあるが、時間の空費という問題は益々深刻になってきている。速さを補う流れはかなり以前から、一方で数年来は、根本的に新しい大動脈の開発が切に望まれていた。

海路以外では空路と陸路ということになるが、空路はどうだろうか。先ず最初に触れておかなければならないのは、フェンサリサ上空の特徴的な気流の在り方だ。それは年間を通じて続く予測不能な大気の大運動で、山脈の北端から南端まで、こちらも二千数百kmの嵐の帯となつて、どこからも越させじと空を行く者を阻んでいるのである。これのために、飛行機や飛行船など、近年発達著しい航空技術を以てしても、現在もなお、これらの乗り物で山越えを果たすことは出来ていなかった。勿論、一度海上へ出て山脈を迂回する空路も考えられるが、飛行船は速度がほぼ船と同じ、運搬能力では劣るので利用がためらわれ、速度では群を抜く飛行機も、単発の小

型機が主流の今は積載量で見るべきものがないため、こちらもコストの面で折り合いがつかない。故に、海伝いに山脈を迂回する空路は、そもそも開発自体が行われていなかった。

ただ、空路には素晴らしい例外が一つあった。風乗りである。風を読み、風と共に行き、気流と対峙するのではなく挨拶を交せる彼らは、今のところ唯一、フェンサリサを見下ろしながら越えて行ける存在だった。彼らは昔から船便の遅さを補う役割を担っていた。積載量では飛行機と同等か、むしろ貧弱なくらいという欠点はある。しかし、フェンサリサをまともに越えて行ける彼らは、他のどんな手段よりも短時間で、山脈を挟んだ2地点を結ぶことが出来た。この点で彼らには需要があった。

残るは陸路であるが、これはどうだろう。フェンサリサの大山脈は個々の山々が幾重にも重なり、連なつて形作られている。周辺部は比較的なだらかな低山が多く、実際その辺りには大きな舗装路も敷かれ、リゾート施設などに繋がっていた。だがこの山の重なりは、山脈の中央部へいくほど高く、切り立った姿を見せ始める。周辺部のようなならかな山頂が、東西に連なる箇所が一ヶ所でも発見されれば、道路敷設の可能性は高くなるだろう。その期待を胸に、過去幾度となくルート踏査が行われた。そして調査隊は、山脈最深部へ近付くたびに、跳躍したように急に上へ逃げる山頂を見上げ溜息をついてきた。この辺りに棲む、ネコ科の動物やカモシカの仲間にはその先にも道があるだろう。この山脈を越えて東西を行き来した、まだ船も十分に発達していなかった頃の人々にも、道はあっただろう。しかし現代の人々に、大量輸送のための道は、どうも厳しいようだった。

このルート踏査は現在も続けられている。その一方で、人は陸路における別の可能性も考えた。山頂や山腹に道を敷くのが難しいのなら、山を貫いて敷けばよい。この大胆な計画が持ち上がったのが、今から約70年前だった。惑星<sup>ほし</sup>の背骨のごときこの大山塊に風穴を穿とうというのだから、ルート踏査の規模だけでも数倍になった。

延べで万単位の人員が動員され、結果が出るか分からない事につき込むにしては、莫大と思える費用が国庫から捻出された。しかし人々は、ついにほぼ理想的なルートを発見するのである。計画が動き始めてから、既に20年近くが経っていた。その後、経済の難しい時期があり10年ほどの中断期間はあったが、今から40年と少し前、それは着工された。いつか計画された場所で出会うため、岩塊の東西から、巨大な掘削機がフェンサリサ大トンネルを穿ち始めたのである。

ここで思い出して欲しい。風乗りは科学技術の数々の勝利により、この世界での居場所を徐々に失っていったのだ。そして、フードがその仲間入りをした数年の後には、前述の山越えの需要ただそれだけが、風乗りを世界に繋ぎ止める、たった一本の糸になっていたのである。他の、自動車や鉄道、飛行機などで代替可能なルートでは、補佐名目という以外に彼らが用いられる機会殆ど残されていなかった。フェンサリサ大トンネルは、丁度そんな状況の中、歴史に残る難工事の末に開通している。

この建築物は20km超という総延長の外にも、大トンネルと呼ばれるに相応しい特長を幾つも持っている。滑らかな舗装路は、馬車専用が一車線、自動車専用が三車線の上下八車線が備わり、鉄道も上下二本ずつが敷かれていた。物の動く道ばかりでは無い、情報が行く道も抜かりなく用意されていた。特筆すべきは、近年普及の著しいネットワーク用の基幹ケーブルが、海上の小島伝いの架線等、従来的な方法よりも早く実現され、初めて東西のネットワーク網を繋いだことだろう。電話は将来の利用者増を、テレビは多チャンネル化を睨み、それらも新しい、潮風に蝕まれることのない基幹ケーブルを手に入れた。電力についても送電線が準備されたが、こちらは東西で定められる交流の周波数が異なる関係で、東西での電力の融通は、もう少し先になりそうである。

フェンサリサ大トンネルは人々の待望久しかった、海路と並ぶ新しい東西の大動脈であった。妖精馬の牽く大型馬車が、自動車が鉄

道が、山越えの風乗りと遜色ない時間で、風乗りよりもずっと安全に（フェンサリサを越えるのは、風乗りといえどもやはり危険を伴う行為なのである）、一便単位では船に劣るものの、数の力で海路を凌ぐ輸送を行えるようになったのであった。

そして、フェンサリサ大トンネルが開通したその日、風乗りは、世界から自然死を宣告されたのである。

バスが大きく揺れた。ファードは吊革を掴んだ右腕に強く力を込めたが、それは一時の苛立ちを、紛らわせるためのものようにも見えた。彼は大トンネルの開通記念式典が執り行われた日のことを、苦々しく思い出している。その模様は全国にテレビ中継され、彼もHMLの風乗り仲間と一緒に画面の中の華やかな式典を見守った。同僚たちは、職場の休憩室に備え付けられた古ぼけた小さなテレビを囲み、口々に将来の不安を言い合う。風乗りを使った配送業務の相次ぐ縮小により、仲間の数も、一頃に比べれば随分少なくなっていた。ファード自身も、大トンネルの開通により風乗りの立場が益々難しくなることは予感していた。だが同僚たちのように、これで風乗り廃業とまでは懸念していなかった。それも今思えば、努めて信じようとしていかなかっただけなのかも知れない。

当時から業界最大手だったHMLは、大トンネル開通から1年も待たずに、風乗りの全解雇に踏み切った。その敬意無き業務整理のあり方を、同僚らは嘆くよりむしろ、白けた目で眺めていたようだ。社が提示した他部門への配置転換も、生活のためと淡々と受け入れ、風乗りを捨てていった。そこまで割り切れなかったファードは、諦めたくなかったのか、それとも信じたくなかったのか、結局はどちらだったのだろうか。いずれにせよ、それ以来彼はこの世界の中で、風乗りとしての誇りは忘れずともずっと宙ぶらりんのままで、それもまた否めないことだった。

フェンサリサ大トンネルの名は、耳目にする度に追い縋ってくるようで、何度でも、その宙ぶらりんを彼に思い出させようとする。

気が付くと、もう何度目か、また号外の最後まで読み通していた。吊革から手を放し、両足でバランスを取りながら紙面を折り返す。今度は最初からではなく、記事の途中に目を落とした。気になる所があるのである。

今の所、今回の多重衝突の原因は、先頭を走っていた大型トラックにあるらしいと報じられていた。これが横転して道を塞いだ所へ、後続の車が次々に突っ込んだという。事故車は全てガソリンエンジンを積んでいた。大トンネルの換気事情が主な規制理由だというが、このトンネルへは、木炭・石炭自動車、蒸気機関車などの、煤煙が気になる乗り物はそもそも乗り入れ出来ない。引火性の強い燃料を積んだ車ばかりだったというのも、事故を大きくした要因の一つだろう。紙面では、別囲みの記事でこの大型トラックのことがもう少し詳しく報じられていた。搭載している、出力と低燃費を高い次元で両立させた、新世代のエンジンが話題になったこと。量産体制の確立は後のこととし、月産数台の規模から製造が始められようとしていたその車両を、いち早く一つの企業が多台数注文し、結果的に向こう2年間、買い占めたことも話題になったこと。その企業がHMLであった。

先日会ったばかりのカラの顔を、思い出さずにはいられない。大トンネルの崩落は道路部分に収まらず、鉄道も不通にしたという。壁面伝いに引かれた各種のケーブルも絶望的だろう。HMLに監督責任のあるトラックが原因で、東西の大動脈の一つが完全に機能を停止し、犠牲者の数もかなりなものになると考えられた。これは社の信用を揺るがしかねない、大きな事件であるはずだった。

そしてカラは、役員に昇進したと語っていたのだった。営業部門といえば、広報などと共に外部からの批判の矢面に立たされそうだった。カラほどの立場になると、問題をどれだけ抱え込まれることになるのか、正直ファードには分かりかねる。ただ漠然と心配するより外ないのが、少し情けないような気がした。

## 第11回

ファードがバスに揺られている頃、カラは一人エレベーターに乗っていた。まるで静止したように上昇するそれは、HML本社ビルの、役員専用のエレベーターだった。これを利用できる者はさほど多くないのに、ゴンドラの大きさは一般社員用の物より余程ゆとりがあった。一人で乗るのが悪いような気がしてくる。彼は今、47階に位置する役員会議室へ向かっている最中だった。緊急の役員会議が招集されていた。

低い階から乗ったため、静止に身を委ねる時間も長かった。軽く押し付けられる感覚が来て、束の間の放心から復帰する。頭が切り替わる一瞬、自身が運動していたことを思い出す滑稽さについて、他愛ないと取るか新鮮と見るべきか、そんなことをちらと考えた。音も無く、扉が左右に開いた。

廊下が真っ直ぐに伸びている。照明の上質さからして、やはり一般のオフィスなどとは違うと改めて思った。器具が上等なだけでなく、照らされ方にも入念な配慮が感じられるのだ。けれどここは、普段から人気の無い廊下だった。カラの部下を初め、多くのスタッフたちはただ明るいだけが取り柄のような、もっと雑な光の元で一日の大部分を過ごしている。

廊下を進む。落ち着きが堆積したような真紅のじゅうたんは、一足毎に足首まで埋もれるほど毛足が長かった。雲を踏むようでかえって落ち着かず、何度歩いても慣れそうになかった。

ここを歩く時は常よりも大股になるようだ。気負っているとも、この細長い空間に馴染めないからともつかない。いつも落ち着かない気持ちを意識しそうになると、会議室の扉が見えてくるのだった。

壁に備え付けられた機器に、カードキーを通した。光は通しても視線は通さないガラスの扉が、すっと左右に開く。この本社屋で、各部署の出入りにカードキーが用いられること自体は珍しくなかつ



た。しかし、ドアが自動という場所はそう多くなかった。

広さの点では20人前後の役員数に見合い、さほど無い会議室だ。だが、出入り口の向かいの壁面は全面がガラス張りで、見通しは周囲の同じような高層ビルに遮られる部分も多いのだが、一応空の続きにしているような気分になれた。室内中央に、その長楕円形の天板が樹齢数千年の古代スギの一枚板だという、巨大なテーブルがどつしりと据えられている。席はまだ半分も埋まっていないようだ。カラは末の自席に向かった。

椅子の一脚一脚が、一度座れば長身のカラもすっぽり包み隠してしまうような大きさだ。革張りの座面や背もたれは、体を預けると沈み込んでしまうほど柔らかい。彼が普段自分のオフィスで使っていて、一般社員にも宛てがわれている事務用の椅子の方が、ずっと座り心地が良かった。事務用といっても、作家など座業の人たちに昔から定評のある、座った人をフオローする機能に優れた椅子なのだ。

すぐに浅く腰掛け直し、各自の席に配布されていた書類を手に取る。表題を見ると、フェンサリサ大トンネルでの事故に関し最新の事実をまとめた資料で、第2版となっていた。だとすると第1版は、新聞社発行の号外に、何を裁断した余り紙かと勘違いしそうな“指示書”がクリップ留めされていた、あれのことだろうか。そのみすぼらしい紙片には、恐らくは秘書室の誰かの手なのだろうか、肉筆で「急ぎ通読し、現時点で為すべきことをせよ」との、社長の指示が書かれていた。自分のオフィスで、息急き切った秘書室スタッフからそれを手渡された時、準備不足に過ぎる“書類”に先ず驚き、直後、その正当性に言葉を失った。

営業部門に身を置く彼のその時点で為すべきことは、取引のある顧客から事実確認や苦情があった際の対応を、急ぎ取り決めることだった。各課のリーダーを集めた彼は、この事実を全スタッフに説明することを求め、現段階での受け答えのおおよその基準を話し合い、とにかく顧客に不信感を与えないように、先ず我々が落ち着き、

しつかりした対応を行っていいこうと確認し合ってきた。この場へやって来る直前のことである。

その第1版から第2版まで、置かれた時間は短かった。その間に付け加えるに値する、新しく知り得た事実はあるのだろうか。カラも念のため、現場に近い支店の営業責任者に問い合わせはしてみたが、やはり独自の情報は掴んでいないようだった。現時点では誰もが報道に頼る以外、術は無いように思うのだが。

第2版にざっと目を通し終わる頃、新たに入室してきた誰かが真つ直ぐこちらへ向かってくるようで、それを背中を感じた。足に力を込め、椅子を少し後ろへ下げると同時に、大きく重たい背もたれをくるりと回した。

「ごくろろうさん」

そう挨拶してきたのは、営業部門最高責任者のダーナーという男だった。カラの直属の上司に当たる。カラは素早く立ち上がり、返礼した。

「何か新しいこと、掴んだかね？」性急な物言いのようだが、営業畑で多くの人々に接してきたこの人間の初老の紳士は、結局、相手に不快感を与えたりしない。柔らかな眼差しは相手に警戒心を抱かせず、いつの間にかその懐に入り込むのを手助けする。落ち着いた、それでいて良く通る声も、自然相手の心を捕まえた。

「いいえ。報道以上のことは私もまだ存じません」

「それは？」先程までカラが目を通していた資料に、ダーナーは目を遣った。

「事実関係をまとめた新しい資料だそうですが、今の時点で社はどのような手を打ったかなど、結局、報告がアップデートされているだけでした」

「そうか。まあ、信憑性も考えればね」ダーナーは頷いた。「場所が場所、事故の規模が規模だけに、やむを得ないのだろう」

「この資料によると、既に現地に人を派遣したそうですね」そこには社独自の対策本部設置や当局への協力のため、危機管理部門の最

高責任者を頭に、必要な人員が先程出立したとあった。

「聞いてるよ」ダーナーはもう一度頷く。「善後策の具体的なことは、彼らが動き始めてからになるだろう」

「だとすると、この会議は具体的な案件の決定よりも、事実の共有と我々の意志統一が目的でしょうか？」

「それもあるが、喫緊の案件が無い訳でもない」ダーナーは微笑んで、「カラ君。今日の会議では、社長から君にお話があるだろう」

「私にですか？」理由が思い当たらず、意外に聞こえた。「特に新しい情報を持っていない事は、先程も申し上げた通りですが……」

「頼みごとがお有りだそうだ」そう言つてカラの肩越しに、卓の方をちらりと見た。そろそろ席も埋まりかけ、室内はそここの会話でざわめいていた。ダーナーも席へ向かうことにする。「なに、難しいことじゃない。取り敢えず、そのつもりでいてくれればいいよ」

ダーナーの背を見送り、カラは首を傾げながら着席した。例えば今の情報量の差一つを取つてみても、役員とは言え彼は経営の最中枢にいる訳ではない。他の上級役員も今一つ身動きが取り辛そうな中で、社長は自分に一体何を命ずるのだろう。

会議室にはカラたちが入ってきた西寄りの出入り口とは別に、東寄りにも自動ドアがある。考え込んでいるとその扉が開き、二人の人物が入室してきた。場が俄に静まり返る。社長と副社長の二人だった。

先に立つて歩く、少し猫背で別段どうと言うことのない体付きと顔立ちの男が、HML現社長、ゼンハイズ・ジーマンスだった。伸び放題の髪に櫛のあとは感じられず、白いシャツは清潔であつても皺だらけ、ネクタイもしていない。社長という割には若く見えるが、実際人間の男性でまだ48歳だった。就任3年目、40代で国内有数の大企業のトップまで上り詰めた切れ者ではあるが、服装を初め、何処かあらゆる物事に執着の無い風があつた。

「やあ、おまたせ」ゼンハイズがおよそ緊張感の無い声で言う。「社長室を出たところで、マクレガー君にお説教されてね」

「社長がまたサンダル履きでおいでになろうとしたからです」付き従っていた副社長が、小さく溜息をついた。彼女はその姓からも察せられる通り、HMLの創業者の一人、マクレガー・フィリップに連なる者で、孫だった。「本来ならばネクタイもきちんと締めていただきたいのですよ」彼女の服装は50代という年齢、彼女の立場、どの点からも自然な、上等な仕立てのスーツだった。

「社内ならみんな身内のようなものにねえ」誰へ言うのでもなく、ゼンハイズはぼやく。

「ここへ集まっていたいた方々は、どなたも一分一秒が惜しい方たちです」マクレガーは取り合わず、自分の席に向かう。「宜しく願います、社長」

まるで立場が逆の情けない遣り取りにも聞こえるが、マクレガーの口調や態度は至って真面目で、副社長という己の分を守っているように見えた。他の役員たちも一様に引き締まった表情を並べている。会議室の空気は、ゼンハイズの入室により変わったまま、ぴんと張り詰めていた。

## 第12回

「そうだね」マクレガーが引いてくれた椅子に腰掛けながら、ゼンハイズは幾分口調を改めた。「じゃあ始めよう。先ず今回の事故について、最初の情報交換をしよう。それから、僕からみんなへ頼みたいことが幾つかあるんだが、その内容を全員に知っておいてもらいたいんだ」

身振りで促すゼンハイズに一礼して、危機管理部門のNo.2が口を開いた。報道に基づいたものではあっても、彼が事故のあらましを語ることでこの情報は全員に共通の認識になる。人員の派遣は既に当局から本社に照会があったことを受けて、今後の捜査に協力を惜しまない姿勢を示すため、また、独自の情報収集に必要と判断されたために行われた。当局捜査本部の所在地が明らかにされ、社の対策本部はそこに隣接して置かれる予定とされた。物品の支援などは、その場所にほど近い社の支店、フェンサリサ東支店が行う手筈である。

ここで秘書室スタッフ数名が各役員の席を回り、新しい資料を配布した。

その新資料の参照を願いつつ、配送部門の最高責任者がゆっくりと説明し始める。問題の大型トラックに積まれていた、荷の内訳が明らかにされた。社の財産の損失額、荷主への賠償額、それら現時点で把握できる限りの、被害総額の見積もりも知らされた。

「その運転手、働かせ過ぎってことはなかったんだろうね？」

報告者の言葉が途切れた瞬間、ちよつと時間でも尋ねたような何気なさの、ゼンハイズの問い掛けだった。俄に空調の低い唸りが耳につく。人事部門の最高責任者が、僅かに身じろぎした。

「その懸念については、既に徹底調査を命じています」堂々とした態度で、人事の長は答えた。「あと2時間の内に結論が出るでしょう。しかし落ち度は無かったと、私自身は確信しています」

「うん」ゼンハイズは人事の長の痩せた顔を眺めながら、彼の顔面の陰影に球面幾何学的な解釈を試みているようだった。「膿があつてもね、まあ、徹底的に出し尽くせばいいさ」独り言を言った。

人事部門の最高責任者は、すっかり白くなつた頭を心持ち下げた。その仕草は始終穏やかな社長の口振りに応じ静かなものだったが、彼の頬からは、若干血の気が引いているようにも見えた。

「他に何か、伝えておきたいことがある人はいないかな？」ゼンハイズは気だるげな目付きで、会議の卓を囲んだ面々を一通り見回した。

「以上のようなです」社長よりも素早く確認し、適切な間合いでマクレガーが頷いた。

その後も会議は肅々と進んだ。議論が白熱することは有りそうもなかった。それくらいゼンハイズの指示は断固としていて、他の役員より何手も先を読んだ理由により、常に裏付けされていた。もし社長との間に遣り取りが必要であっても、短い質問が幾つかあれば事足りた。

「さて、僕からのお願い事はこれで最後だ」ゼンハイズは、先程追加で配られた積荷のリストをもう一度見るよう、皆に促した。口を開きかけ、ふと戸惑い顔になる。「このはやり病のことは、みんなも知ってるんだったかな？」傍らのマクレガーに顔を寄せ、そう確認した。

「ええ。トップニュースとは言いませんが、こちらでも連日報道はされています。ですので、薬品名や現状など、前提となる話は皆さんもご存じでしょう」マクレガーは澀み無く答えた。

「さつきそう説明を受けるまで、うかつにも僕は山向こうで何が起きているか、とんと知らなかったんだ」ゼンハイズは気まずそうに肩を竦めた。「うん。非常に困つたことになった」ぼさぼさの髪を両手でかき上げた。

ゼンハイズがリストのどの項目を指して嘆息しているのかは、すぐに見当がついた。その荷については、カラも報告された最初から気に

なっていたのだった。それは、数週間前から山向こうの小さな町を中心に急に流行り始めた、危険な伝染病に対処するための物だった。事故車はその病を予防するワクチンと、唯一と言われる特效薬を運んでいたのである。

「困ったね、凄く」ゼンハイザーは頼杖をつき、繰り返す。

何も困ることはなく、直ぐにでも事故で灰になってしまった分の代替品を補償すればよいのである。その通りなのであるが、事情がそれを許さない所がある。先ず、件のワクチンと特效薬の製造が、山のこちら側で行われていないこと。それ故に、今それらを必要としている山向こうへはこちらから輸送するしかないのだが、その重要な輸送路の一つである大トンネルが、そもそもこの事故で不通になってしまった。また、このはやり病は時として死に至る、危険なものではあるのだが、発生頻度としては稀な部類で、その点が更に状況を悪くした。古い記録を基に定められた薬品備蓄量は、いざ急激に病が広がれば充分でなかったことが明らかになり、市場流通分というものもこれでは期待する方が無理で、あと数日で備蓄が底をつくとの指摘が報道されたのは、つい先日のことだった。事故車が運んでいたのはまさに焦眉の急も急、外箱など、今必要無いものは全て省いてとにかく数を揃えた、待望の補充分だったのである。

薬品は今も急ピッチで製造されている。事故で失われた分には足りなくとも、当座をしのぐ量ならそれほど時を移さずに用意されるだろう。問題なのは、それをどうやって大急ぎで運ぶかである。山向こうに一番早く行けるトンネルは塞がった。海路では、備蓄が底をついた時間を更にどれだけ山向こうの人たちに強いるのか、あまり考えたくない現実がある。

「トンネルを駄目にしただけでも大変なのに、僕らはもつと酷い非難に晒されそうになっている。ここだけの話、他の荷のことは後回しでもいい。けれどこの薬のことに手を打つのは、今すぐじゃなくちやいけない」

社長は無理を言っているかのようにである。他の役員は皆押し黙っ

ている。カラの様子は少し違った。今、彼の脳裏には、かつて足下に眺めたフェンサリサの峰々が鮮やかに蘇っている。

「風乗りのことを思い出しているのかな？」

その言葉にはっとして目を上げると、ゼンハイズの視線とまともにぶつかった。

「申し訳ありません」重要な会議の最中に、一瞬でもそれを忘れたのは確かだった。カラは肝を冷やした。

「いや。それならば、かえって話が早くていいんだよ」

人懐こい笑みを向けられ、カラはある一つの可能性を思い付いた。そしてその確からしさ故に、むしろ戸惑った。

「君の昔の部下に、今でも風乗りを続けている男がいるそうだね」それを何時、どこでお知りになったのですか。正当な驚きのはずだが、相手の尋常でない？み所の無さを思えば、不思議がる方が愚かに感じられた。自身の思い付きが正しかったことの方に集中する。カラは気を引き締め、社長と向き合った。

「はい。社長は、その者に代替品を託そうとお考えですか」

「うん」その声は少し弾んでいるようにも聞こえる。「山向こうの人たちの不安を少しでも和らげるのに、風乗りはとてもいい薬だと思っけどね」

フェンサリサを挟んだ向こう側に速やかに荷を届けるのは、風乗りが最後まで託されていた、かつては彼らだけの使命だった。大トネルが機能を停止した今、薬品を預かるのは確かに風乗りの仕事と言えた。しかし、事はそう単純でもないのだった。

「風乗りを利用しようとお考え自体は、理に適ったものだと思います」カラは慎重に切り出そうとした。

「分かるよ。山の上の気流のことだろう」

「では今の時期、その気流が特に荒れていることはご存知ですか？」気を付けてはいたが、少し語気が強まったようだった。彼の大山脈上空には年間を通じ厳しい大風が吹き荒れていて、それは今もって風乗りと渡り鳥以外に山頂を見下ろす目を許さないほどだった。以



上は最早、一般常識である。しかし1年の今頃、丁度初夏を迎えてから1、2ヶ月の間のことだが、その乾いた嵐が更に猛然と勢いを増すという事実となると、こちらは気象に興味のある者や登山愛好家、風乗りなど、今でも限られた人々にしか知られていないことのようにだった。

「うん。それも知ってる」

ゼンハイズは余裕のある穏やかな態度を崩さない。カラは戸惑った。指摘することはまだある、しかし重ねて良いものか。

「やあ、済まない。ちよつと意地が悪かったようだね」ゼンハイズが急に見せたのは相手を思い遣るような仕草と表情で、思い掛けない印象を与えた。「そして、如何に風乗りであっても、今の時期の山は越えられない。過去、試みは数多くあったが、未だ誰一人為し得た者はいない。そうだったね？」

「はい」カラは内心訝しんでいる。社長は風乗りにすら手に負えない、今の山の苛烈さを知っている。ならば何故、風乗りに代替品を託そうなどと考えたのか。

「結論から言うかね、確かに荷物は預けるが、その風乗りは別に、山越えに成功しなくなっただっていいんだよ」

そういうことか。カラは静かに息を吐いた。

「今回の事故に対して、僕たちは全力で事後に当たらなければならぬ」ゼンハイズはカラから視線を外すと、俄に力強く、手振りも交え滔々と語り出した。「薬品の次に出せる分は、既に船に積み込むよう手配している。これから暫くは船便が主要ルートになる訳だから、それに合わせた運送態勢全体の見直しも始めている。それだけやれば充分か？ いや、まだやれることがあるだろう」ゼンハイズは続ける。言葉を浸透させていく。「船以外では飛行機が思い付く。今まで顧みられてこなかった海伝いの空路だが、場合が場合だけに開拓せざるを得ない。こちらの方も指示は出した」この社屋の何処かでは、今も関連部署が使命と交戦中で、精密な地形図の上にルートを引こうと必死になっているのだろう。

「更に僕らは、廃れたはずの風乗りの存在も知っている」ゼンハイズは、再びカラに目を遣った。「カラ君。この時期のフェンサリサが風乗りでも越えられないというのは、例外が一つも有り得ない、全くの不可能事かな？」

「いいえ」そう問われれば、こう答える外無い。

「ならば安全は十分に考慮した上で、二重遭難なんて馬鹿らしいからね、その例外にも賭けてみよう。その時初めて、僕たちは現時点で考えられる最大限の努力をした、そう胸を張れるんじゃないのかな？」

遅配が許されない物品の運搬については、HMLは既に負け戦に臨んでいる。船便では元より時間がかかりすぎ、空路もルート発見がそもそも成るのか、不確定要素が多すぎた。現時点で重要なのは、如何に少ない被害で急場を乗り切るかということである。ファードとフータは、要は社の“誠実さ”を引き立てるための、道化として引っぱり出されようとしているのだった。カラは口を開きかけ、慌てて言葉を飲み込む。彼は確かにファードとフータの友人だ。一方ではHML役員としての責任も、片時だって忘れたことがない。社の危機は、幾らかでも有利に転じて決着されねばならなかった。社長の考え自体に、誤りがある訳ではなかった。

「…私とその風乗りに、話をすれば良いのでしょうか」割り切れはしなかった。だが、それが自分に命じられることならば、引き受けねばならなかった。

「その人の名前はなんて言うの？」再びのんびりした口調に戻り、ゼンハイズが聞く。

「ファーボルグ・ファードディア。周囲からはファードと呼ばれる事が多いようです」

「じゃあ、これからすぐに出掛けて、先ずはそのファード君をここへ連れてきて」振り返り、秘書室スタッフの一人に合図した。頷いたその女性が、用紙数枚を綴じたものを手にカラに近付いてくる。

「それは風乗り君と話す時に参考になりそうな資料。その他の指示

は、君の朗報を聞きながら追って伝えることにしよう」

資料を受け取りつつ頷こうと目を遣ると、思い掛けず、ゼンハイズから楽しい笑顔を向けられた。

「僕もささやかながら、君の交渉の手伝いをするよ。社の大事な時だからね」

何をするつもりなのか聞く事も出来たが、その前にゼンハイズは別の秘書に何かを耳打ちされ、マクレガーと言葉を交していた。頷くと立ち上がる。

「じゃあ、会議はこれでおしまいだ」役員一同をざつと見回す。「力を合わせてこの難局を乗り切っていこう。僕もこれから一仕事だ」来た時よりはやや急ぎ目に、ゼンハイズは会議室を後にした。他の役員も立ち上がり、室内に再び多数の会話が満ちあふれる。中には風乗りが生き残っていたことに興味を示し、待ち兼ねた様子でカラに話しかける者もいた。広いガラスの向こうへ続く空は暮色を強め、世界は遠くの方から徐々に曖昧な光の中に溶け出し始めていた。使命を帯びた身であるのは知られている訳だから、気乗りしない会話を早々に切り上げるのは簡単だった。一礼をして、カラは足早に会議室を後にした。

### 第13回

時計は既に18時を回っている。この時間、風野商店は案外忙しい。

「ちよつと砂糖取つてくれる？」側にいるはずのファードにそう頼む弥祐は、振り向きもしない。学校から帰ったままの制服にエプロンという格好で、フル回転の夕飯作りに励んでいた。彼女はクラスで委員長をしている。そして彼女の通う高校では、新入生として落ち着いた今の時期、いきなり移動教室がある。その打ち合わせやら何やらで、今日は帰宅が遅くなったのだった。

「皿は何を出すんだ」ファードも慣れたもので、砂糖壺を弥祐の手元に滑らせた後はもう食器棚の前に立っている。「ばあさんが呼んでる。用があるなら、まとめて言ってくれ」ファード自身、この時間帯はいつも慌ただしく過ごしていた。仕事から戻れば一息つく間もなくフータを連れ出し、小一時間は空にいる。互いに名残惜しい気持ちを押し込めて帰宅すれば、今度は弥祐や陽の手伝いが待っている。

「取り敢えず大皿2枚と深皿1枚、大どんぶりと小どんぶりが1つずつ、それから取り皿と小鉢」使う食器は大体決まっているから、安心して大雑把に言える。数を言わなければ人数分だ。「茶碗やお箸も出してつて。今はそれでいいよ」弥祐は煮物の鍋に、分量の砂糖を迷いの無い手付きで放り込んだ。かと思うと皮剥き器を引っ掴み、ニンジンの皮を、一枚に繋がったままと錯覚させるほどの恐るべき手際で剥き始める。

ファードは書店の方へ顔を出した。駄菓子屋の方はもう閉まっていた。毎日薄暗くなつてきて、今日はもう子供も来なかつと陽が判断すると、こちらはおしまいになる。つまり、日の長さに合わせて閉店時間が違っていた。書店の方は、常に19時まで営業していた。

「そろそろ閉店作業を始めるよ」近くの書棚の陰から陽の小声だけが聞こえてきた。奥からそっと窺ってみただけのファードを、いちいち確認しなくても察知できるものらしい。ファードはサンダルを突っかけ、店へおりた。書店を閉める作業は、店内の様子を眺めつつ出来る所から進めていくようになっていた。見てみると出入り口脇の文庫棚の前に二人連れの客がいて、彼らが塞いでいない通路、店中央を書棚の列で仕切った、もう一方の通路を陽が動き回っていた。レジ回りで出来ることを片付けようと決めて、すぐに取り掛かる。

「ファードお！」

程なくして、奥から弥祐の呼ぶ声が聞こえてきた。陽が先程の書棚の陰から、今度はひよこっとな顔を出した。

「ほれ、早く行っておやり」囁くように促す。

ファードは足音を忍ばせて急いだ。頭の中では、店と台所の間の客に悟られないコミュニケーション方法について、これまでで何回目かの反省が始まっている。まったく、この時間のファードは忙しい。

台所と隣り合っている居間では、テレビが点けっぱなしになっていた。この家では珍しいことだ。大トンネルでの事故が気掛かりなので特にファードが頼み込み、今だけ特別計らいをしてもらっている。流し続けているのは、この時間帯に各局がこぞって放映している、些かエンタテイメント色の強い報道番組のひとつだった。居間の出入り口の前に来ると、自然と平らな画面へ目が向いた。その右隅に表示されているテロップが、強く気を引く。ファードは思わず足を止めた。

テロップには“HML社長 緊急記者会見”“HML本社より生中継”とあった。画面の中では、一人の男が束ねられたマイクを前に着席し、時折無数のフラッシュを浴びながら話をしている最中だった。綺麗にアイロンのあてられたシャツは着ているが、髪への無

頓着さはまだ残っている。ゼンハイズが会見を行っていた。

『私共もそれらを船に載せ替えただけでは、以後はともかく、今の急場への対応としては不十分だと考えています』ゼンハイズは頻りに喉元を気にしていた。その度に、きちんとしていたネクタイは歪んでいくようだった。『海伝いに飛行機で行けないか、現在のところ空路を策定中です』

記者団から小さななどよめきが上がった。思い切ったことをやると捉えられたのだ。コースは見付かりそうなのか、時間は船より早いのか。続けて幾つもの質問が飛ぶ。

『空路について確かなことは、もう暫くお待ち頂きたい』ゼンハイズはあっさりと言質問を遮った。そのようにあしらっても、知りたがりの記者たちの執着をこの話題から引き剥がせる、更なる隠し球を持っていた。『時間は限られていましたが、私共は先ず、可能な代替手段全てのリストアップに注力していたのです。その甲斐はあったと言えるでしょう。更にもう一つ、検討に値する手段を見付けられたのです』記者たちが怪訝そうに口を閉ざした一瞬の好機を逃さず、彼はその言葉をほうった。『私共は、以前我が社で働き、今もなお風乗りを続けている人物を把握しています。そして既に、その風乗りと交渉に入っています』

記者たちが先程よりも大きくどよめいた。だが、ファードはもつと驚いた。相手が画面に映った像であることも忘れて、思わず詰め寄りかけた。

『まだ風乗りが残っていたと仰るのですか』一人の記者が拳手も忘れ、上擦った声で聞いた。

『私共も、この事故が起きるまではそう思っていました。聞いた所ではもつと知られていてもおかしくない印象を受けましたが…』ゼンハイズは言葉を切り、一瞬物思う表情を見せた。『まあ私を含め、人は余り薄情だと後で驚かされるようです』

『その風乗りには、山越えをさせるおつもりなのです』別の記者が、まだるっこしそうに早口で問う。

『そのための交渉です』

『ちよつと待つてください！』会見の場は騒然とし始めた。一人の女性記者がたまらずといった様子で高々と右手を挙げ、有りつたけの声を張り上げたのはその時だった。

『はい、どうぞ』

ゼンハイズが促したため、場内が興奮の慣性を感じさせたまま静かになる。

『あの』まだ若い女性記者で、立ち上がる時には少し腰が引けた印象だったが、いざ話し出すと言葉の方はしっかりしていた。彼女は先ず、自分は気象予報士の資格を持つていと述べた。その上で、気象に通じた者には周知だが、一般には余り知られていない重要な山の事実を、一息に明らかにした。『私の記憶が正しければ、今の時期、フェンサリサ上空の気流は特に不安定になっているはずで、風乗りですら未だ誰一人越えたことが無い、それほどの酷い荒れようだと聞いています』

『それは本当なのか？』

この事実を初めて聞く者もやはり多いらしく、記者たちは周囲の誰彼にも情報を求め始めた。ゼンハイズは質問の意味を十分に理解したと仕草で示したあと、ゆっくりと切り出す。

『仰ることは、私共もしっかりと認識しています』疑問の解消を預けたように沈黙した記者たちを、彼はゆっくりと見回した。『ですから、私共は交渉に当たり…』

「ファード早く！ ちよつとこれ掻き交せて！」

弥祐の切羽詰まった声で、ファードは何処で何をしている最中だったかを思い出したが、表情は硬くしたままだった。無言のまま箸と木ベラを手に、火招石の発熱するコンロの前に立った。

「も」。たまにテレビが見たいって、それはいいけど夢中になっちゃうわらないでお」弥祐は自分の手元に集中していて、ファードの様子に気付かない。

「HMLの社長が面白いことを言っている」声も硬く話を始めるが、

フライパンに溢れんばかりに刻まれた野菜を一片もこぼさず、しかもきちんと火を入れる芸当なら手先が勝手にやってくれる。「風乗り、山越えをさせるつもりだそうだ」

「え？」今度は弥祐も手を止め、意外そうな顔で振り返った。「山つて、フェンサリサのこと？」

「そうらしい」野菜の山は汁気が抜けて、次第にその高さを低めていく。「昔HMLで働いていて今でも風乗りを続けている誰かと、何処かで交渉中とも言っている」

普段は一を聞いて十を知る所のある弥祐でも、これを聞いて直ぐ飲み込むには無理があった。ぽかんとファードの難しそうな顔を見詰めてしまう。

店の前で控えめに1回、車のドアが閉まったような音が聞こえた。



## 第14回

「ほ？」

最近は随分日も延びたが、さすがに書店の閉店も間近となると外は暗くなっていた。売れ筋の雑誌新刊を特に並べた小型の移動書架も、もう店先から下げる頃合いだった。今日は殆ど一人でやることになったが、外回りはあとシャッターを閉じるだけという所まで、陽は店を閉める準備を進めていた。そこへ、この平凡な住宅街では見るのも希な黒塗りの大型高級車が、滑るようによつて来て店の前で停まったのである。何事かと手を休め、様子を窺う。ガラスには濃い色がついていて、車内の様子は分からなかった。運転席から40格好の男が素早く、かつ同乗者の格を傷付けない行き届いた動きで降りてきて、頭を下げながら後部座席の店側になったドアを開けた。礼を言う聞き慣れた声と、続けて現れた長身を見て陽は意外に思った。運転手によつてドアはごく静かに、しかし確実に閉められた。

「ああ、今晚は」車中から自然と用意していた笑顔を向けて、カラは挨拶をした。「大変ご無沙汰しております。こんなお忙しい時間にお邪魔して、申し訳ありません」自分が相手のどのような場面に来合わせ、手を止めさせてしまったのかは、見れば直ぐに分かる。丁寧に頭を下げた。

「いいえ、こちらこそご無沙汰しています。片付けの方はもうあらかた終わっていますし、どうぞ、お気になさらないください」相手の来意は一先ず置いて、陽も頭を下げる。「それよりも、この間は弥祐がご馳走になったそうで…お礼が今頃になってしまったことこそ、お詫びしませんと」

「ああ、いえ」カラは気まずさに体を小さくした。「あの時は私からお誘いしたのですし…それに実を言うと、弥祐さんには失礼をしてしまいました」

「話は当人から聞いて、存じています」陽はゆつくりと首を振った。  
「悪いのはこちらの方ですよ。あの子の短気は昔から心配でしたが、さぞご不快だったでしょう」

「いいえ、決してそのようなことは」カラは神妙にうなだれた。「私の配慮が足りなかったのです。弥祐さんにはお詫びしたいと思っています」

「ええ、ええ。それならば、お越しいただいて好都合ですよ」陽は柔らかく微笑み、話を切り上げることにした。「色々とお話があったいらしたのでしょうか。さあ、中へどうぞ」背を向けかけて、ふと思いつく。「カラさん、お夕飯は？ 大したものはお出しできませんが、宜しければ済ませてみてください」

「つくづく時間を考えない訪問で、本当に失礼しました」そう言いつつ、カラは最初断りの言葉を探そうとしたが、結局は思い直した。「…そうですね。込み入った話になるかも知れませんが、お言葉に甘えさせて頂けるのなら助かります」

「ええ、勿論構いませんとも」

「では、30分くらい見ておいてください」先程から後ろで控えていた運転手に、カラは声をかける。「この辺りに待てる場所、ありますか？」

プロに向かつて余計な気遣いには違いなかったが、運転手は微塵も変わらぬ慇懃な態度で承知した。「お任せください。では、ご指定のお時間にお迎えに上がります」滑るように車に乗り込むと、殆ど道幅一杯のそれを危なげなく、店先から退去させた。

「今日はまた、随分大きな車でいらつしやいましたね」陽の知る限り、カラは大仰を好まない謙虚な男であったはずだが、役員に昇進したことも知っている。自然、皮肉に響いたかも知れなかった。

「社が急に回してくれたもので、やむを得ず…」実際、公共の交通機関を乗り継いで訪ねようとしていた彼を待ち構えていたのが、普段は上級役員しか利用の許されない、あの大型高級車であったのだ。社長の指示だそうで、彼自身戸惑っている。だが来意を考えれば時

間が惜しい。こう言うに止めておいた。

「ファードはいますか？」陽について店内に入りながら、カラは尋ねた。

「ええ。奥で弥祐の手伝いをしていると…おや、来ましたかね？」

そう陽が言い、カラが何のことか分からないでいると、本当にファードが奥から出てきた。台所の方が一段落して、こちらに戻ってきたのだろうか。

「カラさん！」

こちらを見るなり目を見開き、詰め寄って来そうな勢いを見せた相手を、カラは先ず意外に思った。

「やあ、ファード」しかしカラは普段通り接しようとする。「くつろいでいる所を済まないね。ちよっと話が有って来たんだが、時間はいいかな？」

「山越えのことですか？」

「え？」今度は驚きが素直に表に出た。「何処でそれを聞いたの？」

「いや」噛み合わない話に、勢いが行き場を失う。「さっき今の社長がテレビで会見していて、それで知ったのですが…」

「陽さん、その番組を確認させてもらってもよろしいでしょうか」「カラはうるたえた表情で相手を見た。「突然不躰を言うようですが、大事なことでして…」」

どやどやと大勢の足音が廊下をやって来た。目を上げると祖母とファード、それに何故かカラまでが、こちらに背を見せて身を寄せ合い、敷居越しに居間のテレビに注目しているらしかった。弥祐は、フライパンの野菜炒めを大きな深皿に移す最中の姿勢のまま、目を丸くして固まった。

「自分も途中しか見れなくて、会見が終わったのかまでは分からないんですがね」ファードは言った。画面は既にHML本社の会見場を映していなかった。今はスタジオの男性キャスターが、関連する他のニュースを読み上げている。

「他の局はどうなんだい？」

陽に促され、ファードは歩み寄ってリモコンを手に取った。順番に確認していても目当てのものは見られそうにない。軽く溜息をついて、リモコンをテレビ台の上へ戻した。「あとは海伝いの空路を考えているとか、そんなことも言っていましたね」

カラは軽く頭痛を感じ、額に手をやった。先程の会議の場で社長の言っていた“ささやかな手伝い”の意味が、やっと分かったのだ。特例で上級役員用の公用車を仕立ててやったり、テレビで先に“交渉の事実”を公にしまったり。要は自分への、あからさまなプレッシャーだった。

「社長の策略、ですか」

「まあ策略というか、悪戯というかね」

居間の畳に出された座布団は、日に干したばかりだったのか良い座り心地だった。その上で勧められるままに足を崩したカラは、ちよつと疲れた声でファードに答える。陽と弥祐は台所で慌ただしくしていて、テーブルには二人だけがついていた。

「その交渉は僕が命じられて、今これから始まるんだ」出された緑茶の目に鮮やかな色合いをちよつと楽しみ、カラは一口啜る。

「…」

「不愉快に思われても仕方がないね」悪戯に巻き込まれたのが自分だけでないことを、実際気の毒に思う。相手の沈黙をカラはそう取った。

「いえ、そうではないんです」何処か寂しげにファードは答えた。

「自分以外にも風乗りが残っていたのかと、そんな風に思ったものですから」

カラはそうか、と思った。自分にその事実が無いのに風乗りと交渉中と言われれば、誰だって他の風乗りの存在を思うだろう。カラは、ファードとフータの風乗りとしての孤独を知っている。社長に対し明確に怒りを覚えたのは、これが最初だった。

「ファード。ここで話を打ち切ってもいいんだ」この時、敢えてこう言うことにためらいは無かった。相手の目を見詰めた。

「いえ」ファードは表情を引き締めた。「お話は伺わせてください」  
「そうか」相手がそのつもりならば、自分も仕事を思い出す外無い。  
少し間を置いてから切り出した。「じゃあ話そう。君に運んでもら  
いたい荷物があるんだ」

「物はなんですか？」

「薬品だ。山向こうのはやり病のことは知ってるかい？」

ファードは頷いた。病のことを大枠で、というのも問題無いし、  
ここでカラの話を引き取るためのもう少し細かい情報も、手伝いを  
しながらの見聞きではあったがニュース番組から得ていた。「代替  
品ですね。例のトラックが運んでた分の」

「まだ100%の補填ではないけどね。予防接種に使うワクチンが、  
5ミリリットルのガラス容器に600本。後は特効薬、こちらは液  
剤と錠剤になるが、それぞれ600人と800人分だ。これらは特  
殊な保護ケースに収められる。触れ込みでは、10mの高さからコ  
ンクリの上に落としても中身を守るケースだそうだ。フータで曲乗  
りしたって平気だ」

「それはどれくらいの大きさなんですか？」

「鞍の後ろに充分括り付けられるし、重量もスカーラル・シーには  
問題無いよ」車中で会議のおしまいに渡された資料に目を通し、風  
乗りの経験からそう判断した。「目的地はリアテリア。我々の希望  
は、船便や飛行機よりも早く、そこまでこの荷を運んでもらうこと  
だ」リアテリアはフェンサリサにほど近い、山向こう最大の都市で、  
首都ヴァルチエリアとほぼ変わらない規模と比較して俗に西の首都  
とも呼ばれていた。そして、そこまで船便や飛行機よりも早くとい  
うのは、フェンサリサを越えていくことに他ならなかった。

「はい、お待たせしました」

そこへ陽がやってきて会話が途切れた。すたすと居間に入つて  
きた彼女は、両手で大盆を持っている。上には湯気の立つ数々の料  
理や、取り皿が満載されていた。テーブルの前に両膝をつく時も、  
彼女のバランス保持は完璧だった。「さあさ、カラさんも遠慮なく

どうぞ」

「やあ、これはごちそうですね」心からそう思った。一人暮らしが長いカラにとつて、このような、素朴でも温かな手料理は本当に久しぶりのものだった。体に良さそうな香りが、食欲を刺激した。

「手は洗ったのかい」自分も盆の上の物をテーブルへ移そうと、手を伸ばしてきたファードに向かい、陽はびしゃりと言った。

「さっきカラさんを案内したときに洗っただろう」洗面所に案内するようにつけたのは陽なのだし、一緒に済ませてきたと思うのが当然だと思った。「子供扱いしないでくれ」

悪いとは思ったが、カラは声を立てて笑ってしまう。

「弥祐」陽は涼しい顔で振り返ったのだった。「ほら、大丈夫だよ。入っただけで」優しく言った。

ファードとカラが同時に居間の出入り口に目をやると、様子を窺うように半分だけ覗いていた弥祐の顔がびくつと引込み、壁越しに彼女らしい葛藤を感じさせた数瞬後、観念したように姿を現した。すでに私服に着替えていて、手には飯櫃を抱えていた。服装はいつもの気軽な部屋着と違い、場面と着ている少女当人に配慮の行き届いた、誰の目にも好ましい物だった。

「ああ、弥祐さん。お邪魔しています」カラは居住まいを正し、弥祐に向き直った。そして頭を下げる。「先日は弥祐さんのお気持ちも考えずに軽率な物言いをしてしまい、さぞご立腹だと思えます。

当日のこと、今日までお詫びが遅れてしまったこと、重ね重ね失礼しました。申し訳ありません」

「いえ！ あのっ」飯櫃を抱えたまま、弥祐は畳にすくと正座した。「カラさんはファードのことを心配してくださっているだけでそれは分かってたんです。でも私、つかつとなってしまっただけで膝に抱えた物のせいであまり深くは頭を下げられなかったが、精一杯気持ちを示そうとした。「私こそ、済みませんでした」

「弥祐さん」カラは静かに首を振った。「あなたは、こんなにも風乗りの傍で暮らしている方です。やはり私の不注意だったと思います

す

「さ。二人とも、もう気が済んだでしょう」その間に食卓の準備をすっかり整えていた陽が、穏やかに呼びかけた。「冷めないうちに召し上げれ」

「はい。いただきます」もう一度弥祐に頭を下げたから、カラは遠慮無くそう言つて食卓に向き直るが、箸は取らなかつた。そそくさと自席に向かう弥祐を、ただ待っているだけではないようだった。

「お食事を続けて頂きながらで、構わないのですが」改まった様子でそう切り出す。「陽さんも弥祐さんも、私の話をお聞きくださいませんか」

## 第15回

「ええ、構いませんよ」

そう応じた陽自身、最初から箸を取ろうとはしていなかった。一度は手を上げかけた弥祐も、すぐに察して両手を膝に戻す。

二人に詫びた後、カラは自分の来意をかいつまんで説明した。「その薬品の今すぐに出せる分だけでも、我々に代わってフードとフータに運んでもらいたいです。病が広がっている地域にも、こちらは自業自得ですが私たちにも、もはや一刻の猶予ありません。今は風乗りの機動力だけが頼りなのです」

「御山の向こうへねえ……」陽自身何度も経験した山越えは、常に気を引き締めてかからねばならない、その一回一回を鮮明に思い起こせるほど特別な飛行だった。フェンサリサの名はそれだけでも強く彼女に響くが、彼女くらい世代になると、そこが“御山”であることがまたその名を重くする。フェンサリサにはこの星の唯一神、女神エレナの住まう館があると遠い昔から言い伝えられていた。昨今、その普遍の真理は次第に影響力を失っていくようである。だが陽のように、信じられてきたことを今もしっかりと胸に抱き続けている人々も、一方では少なくない。

「御山の嵐は、もう吹かなくなっただんですかね？」静かな口調だった。陽も元風乗りだ、仲間内にも恐れられた今のフェンサリサを、知らぬはずはなかった。

「それを承知の上で申し上げているのです」そう言い切る前に一瞬のためらいがあったことを、カラは自分でも意識している。

「ばあさん」フードが口を開いた。「確かに、今の時期の山を越えた風乗りは一人もいない」

「お前さんなら越えられると？」

「そうは言わない。だが、全く不可能だと決まった訳でもない。風乗りは、昔っからそうやって地図の白い部分を無くし、未知を無く



してきた。そうじゃないのか」

「小僧みたいなことを言うんじゃない、ファード」

陽の隣に座っている弥祐が、びくりと身を竦ませたのが分かった。決して荒げた訳ではなかったのに、この一言には、聞く者を一打ちする力がありありと籠もっていたのだった。

「そうやって冒険に憑かれた風乗りが、いったい何人亡くなってきたと思う。今の世に、好きこのんでの冒険など必要ありはせん」

沈黙が降りた。小さく溜息が漏れる。カラだった。「…確かに、もう取り繕う必要はないんだが」独り言のように呟いた。視線が集まっているのを感じて意を決し、顔を上げた。

「今からお話することを、僕はHMLの社員として言うつもりはありません」全員の顔を順に見回す。「皆さんを友人と願う、僕自身がお話することです」

3人は黙って頷いた。カラも頷き、先を続ける。

「ファード。さっきも言ったけど、君はこの話を断ってもいい。いや、断るべきなんだ」

「どういうことですか？」

「これは茶番なんだ。HMLは最初から、君とフータの成功を期待していないんだよ」

「…」ファードは訝しげに眉を上げ、更なる説明を求めている。

「確かに社は色々と手を尽くし、遅れを取り戻そうと必死みたいだ」頭の中で話を整理しながら、そうすることで自分も平静さを保っているふと感じる。「でも実際は違う。社の上層部は今に手を打つように見せて、実はこれからに手を打っている。つまり、意外性のある対策、テレビを通じた広報、これらは責任のある行動に見せかけて、本当は社の真摯な姿勢を社会に印象づけ、後の批判を幾らかでもかわそうとする、全てが保身のためだけの策なんだ」

「…パフォーマンスなんですか」

視線を落とした弥祐が呟いた。和解して直ぐに嫌な思いをさせてしまうようだが、カラは堪えて肯定するしかない。

「僕に君との交渉を命じた社長自身、今の山の状態を知っていた」  
胸が空くのを追いかけるように悩みが絡みついてくる、カラはそんなおぼつかなさを感じている。それでも最後まで伝えられた。「その上で、その風乗りは別に山を越える必要はないんだよ、二重遭難なんて馬鹿馬鹿しいからね。そう言ったんだ」

「…お話は良く分かりました」暫く黙って考えた後、ファードの声は落ち着いていた。「しかしカラさん、まさかその茶番に付き合つて、振りだけしろなんて言わないでしょうね？」

「受けるつもりなのか？」陽が先に非難の声を上げる。

「ああ」

「…ファードは冒険しにいくつもりなの？」

声の静かな感じで、弥祐が試してきてるのだとファードには分かった。直感的に悟るのか、こういう時の彼女は当人も気付かぬ真意を正確に見抜くことがある。自分の中に、本当に子供っぽい昂ぶりはないのか。答える前にもう一度、ファードは己の胸の内をきちんとして探ってみた。

「仕事に行くんだ」自信を持ってそう言えた。「無茶するつもりは全く無い。まずは正しい判断のために、山頂の風の状態を直接見てみたい。全てはそれからだ」

「そうは言うが…」珍しく、陽はうるたえているようだった。

「誰もが飛べる空じゃないから、風乗りには人よりちょっと余計に使命がある。ばあさんが言ったことだったな」

「つまりらんことを覚えているね」陽は深く溜息をついた。諦めのそれに思えた。

「僕は複雑な気持ちだよ」カラは言葉そのままの顔付きをしていた。「君は茶番に付き合うんじゃないと言う。でも真剣にやったところで、それはやはり茶番に付き合うことになるかも知れないんだ。本当にそれでいいのかい？」

「ここに風乗りがいると分かっているなら、芝居抜きでも話は来たでしょう」言葉にも表情にも、ファードに気負いはない。「お引き

受けしますよ。詳細をお願いします」

「そうか」カラも腹を括った。「詳細は本社で話そう。僕は君を迎えに来ただけで、契約書は本社にあるんだ」

「あの」弥祐が急に慌てだした。「もう行ってしまっんですか？」

「ええ」カラは頷く。「先程も申し上げましたが、事は急を要します。ファードとフータには、明朝すぐに山越えにかかってもらうかも知れません」

と言うことは、今夜の内に首都を発ち、遠くフェンサリサの麓まで移動する可能性もある訳だ。ファードが山越えを決意した時にふと思ったことで、きちんと考えてはいなかった。けれど弥祐は言っていた。

「私が付き添っては駄目ですか？」聞いた全員が目を丸くしたのが分かったが、勢いのまま続けた。「お話を伺っていて思ったんです。今のフェンサリサが危険なら、ファードとフータもいつも以上の良い状態でいえないといけません。私が居て手伝えれば、余計なことに気を遣わないで、集中できると思うんです」

「なるほど。それは仰る通りですね」

「あのな」申し出をまともに受け取ったらしいカラとは対照的に、また突拍子もないことを言い出したとファードは呆れている。「仕事は一日二日の勝負だろう。長くなる訳はないんだし、俺とフータだけでも大丈夫だ」

「いいや」陽はゆっくりと首を振った。「家主の言うことを聞かずに無茶をしに行くのだったら、弥祐だけは連れてっておやり。それにたとえ短い間でも、身の回りの世話をしてくれる者が居ると居ないのでは、やはり体調に差が出るだろ」

「ところで弥祐さん。明日、学校の方は大丈夫なんですか？」カラが聞く。

「はい。明日は祝日です」

「そうでした」カラは額に手をやって、自分のうかつさをおかしがった。「毎日会社ばかりだと、日付の感覚が無くなっていけません

ね：お申し出のことですが、アシスタントという名目で通せない話ではないと思います。私に任せてください」

「ありがとうございます！」

安堵に表情を崩し、弥祐は喜んだ。その正面ではファードが頭を掻いている。

「さあて、すつきりしたら猛烈にお腹が空いてきましたよ」カラモ笑顔を見せ、今度こそ箸を取った。「こんなごちそうを前にして、一体何をやってたんでしょう。いただきます」両手の親指の間に箸を挟み、手を合わせた。

「ああ、もう冷めてしまったでしょう」陽が慌てて腰を浮かす。「ちよつとお時間を。温め直しますから」

「ご心配には及びません」陽と、続いて立ち上がりかけた弥祐を押し止め、カラは茶碗を持った。「このような手料理は久しぶりですから。おいしいに決まっています」先ずは白飯のみを一口頬張って、眼を細めた。

## 第16回

通常の業務時間帯はとくに過ぎているはずだ。それでもHMLの本社ビルには全階に明かりが灯り、濃厚に人の気配が感じられた。自分が籍を置いていた頃から忙しい会社ではあったが、時が時だけに余計に残っている人が多いのだろう。だがそんな今の本社屋にもひっそりとした場所があった。エレベーターで上昇していくと、最初は満員だったそれは次第に空いていき、最上階に着く頃にはフード唯一人、ざわついた空気は階下へすっきり取り残されたようだった。

フードは最上階の、以前は飛行妖精の厩舎だった場所へ向かっている。今は倉庫として使われていると聞いたその場所に、フードとフータは1時間ほど前に到着していた。降り立つ際、壁面の巨大なHMLロゴがそのバックライトでぼんやり夜空に浮かび上がった、旧発着デッキを見下ろした。風雨が蝕んでいくのに任せたまま、偉容を纏った本社屋の中で、ここが見事に忘れ去られていた場所であることは明らかだった。これでは厩舎の中もどうかと不安に思ったが、有用な物も保管されている倉庫だと後から聞いた通り、最低限の手入れはされているようだった。大急ぎで保管物を片寄せて確保したらしい一角に、真新しい藁が敷き詰めてあったのには驚いた。フータの休憩用に用意してくれた物だろう。仕事を引き受けると決めてからここへ訪れるまで、そんなに余裕はないはずだった。今時の都会の真ん中で、これだけの量の新鮮な藁を速やかに用意したとなると、かなりの手際の良さだと思われた。

風野商店での食事の後、再び乗り慣れない公用車に収まって、カヲは一足早く本社へ戻った。フードも一通りの旅支度を急いで済ませ、弥祐を伴い向かうつもりだった。

「フードの分も私が支度しておくから、先に行つてよ」

弥祐は右腕をぶんぶん振り回して張り切っていた。その様子をお

かしそうに見ながら、陽がファードを安心させるように言った。

「山越えに必要な物は、私に任せておき」山越えには、普段の空とずいぶん違う所を飛ばねばならない。恐らくは弥祐の知らない、特別な装備が必要だった。「必要な物は、まだあのタンスの奥に押し込んであるんだろうね」

「ああ」ファードは頷いた。これなら自分は取り敢えず、夜間飛行の準備だけして出て行けば良さそうだった。「しかし、山越えの装備一式はかなり重いぞ。一人で持つてこられるのか」

ファードが心配すると、弥祐は不敵な笑みを見せたのだった。彼の二の腕に、いつか叩かれた時の鋭い痛みがよみがえる。なるほどと引き下がった。

本社に着いてからも、幾つか出来事があった。発着デッキに降り立つとすぐ、ファードとフータは数人の男女に出迎えられた。一人は両手に、恐らくは自分の部署で一番強力なライトを持って、デッキから二人を誘導してくれた男性社員だった。一人の女性は白衣を着ている。自己紹介で獣医だと述べ、伝染病が流行っている地域に赴く彼らには、予防注射を打ってもらうと説明した。もう一人の女性はファードを、人間相手の医者 of 所へ案内するために待っていた。獣医はファードより少し若く見えたが、その印象よりはずつと穏やかな物腰でフータに近付いた。この場で仕事を済ませてしまうつもりらしかった。

「鞍を外した方がいいですか？」

「いいえ。このままで大丈夫ですよ」

動物の相手をするのが心底好きそうに、獣医は眼を細めて言った。別の病気の予防で注射なら何度かされているから、フータはその単語に覚えがあるようだった。近寄ってくる彼女に、ちよつと身構えた目付きを向けている。ファードもすぐに別室に案内され、顛末は見られなかったが心配はしていなかった。以前の何度かでも、別に暴れだしたりはしなかったからだ。実際、後でそういう話は聞かなかった。

予防注射を済ませると、ファードはまた別室に案内された。依頼内容のより詳しい説明を聞き、契約を結ぶためだった。商談用の応接室のような小部屋に通された。カラともう一人、中年の男性社員が顔を上げた。

「弥祐さんは？」

問うカラに、ファードは一人で来た事情を手短に説明した。相手は頷き、次いで男性社員とファードとを引き合わせる。これからの打ち合わせは、この男性社員が担当することになっていた。それが済むと、カラはちよつといいかな、と言ってファードに向き直った。

「さつき聞き忘れたけど、君の方は明日の仕事、大丈夫なの？」

しまった、という顔付きになった相手を見て、まったく聞いてみて良かったよ、とカラは苦笑した。

「その電話は外にもかけられる。差し支えなかったら使うといいよ」奥の小さなテーブルの上の電話機を指し、カラは言う。「それから弥祐さんが同行する件んだけど、了承されたよ。ただ、君の私的な同行者じゃなく、僕をバックアップしてくれるスタッフの一人ということにしておいた。そうすれば、経費は会社持ちだからね」

カラはカラで色々やっているようだった。今度はファードが苦笑する番だった。「カラさんも、現地に行かれるんですか？」相手の言葉を解釈するとそうなるということにもふと気付き、聞いてみた。

「ああ、さつき通達があつてね」風野商店から本社に戻った後、彼は秒刻みで人に会っていた。「僕が現場の責任者だ。まあ、この措置には正直ほつとしていて」自身山越えの経験者で、元部下のファードとも気心が知れている。ごく控えめに言っても、自分以上の適任者が今の社にいるだろうかと思う。「君とフータの邪魔をしないように上手くやるつもりだよ。よろしく頼む」

「はい、カラさんなら安心です。こちらこそよろしくお願いします」「うん。それで、弥祐さんへの連絡なんだけど……」

言いかけたカラにファードは頷いた。無論最終的な判断は契約書を見てからだが、彼は引き受けるつもりでここへ来たのだ。「引き

受けた場合、やはり今夜中にここを発つのですか？」

「そういう依頼内容になってるね」契約の内容についてはファードが来る前、カラも男性社員から説明を受けていた。「説明を受けている間に正式に彼女をここへ呼んだ方がいいと君が思うなら、僕から彼女にそう連絡しておこう」

「よろしくお願いします」ファードは頭を下げた。

「じゃあ、君はなんとしても休暇を取らないとね」ドアのノブに手をかけながら、カラは微笑んだ。「ほら、早く連絡したまえ」

別の打ち合わせがあるということで、カラは部屋を出て行った。

休暇の相談なら職場の総責任者、ファン・ミヨンに連絡しなければならぬ。男性社員に待たせてしまう詫びを言い、ファードは受話器を取った。手帳を見ながら、先ず“時の三精霊”にかけてみる。

案の定、この時間では、いかに仕事熱心な彼女でも職場には残っていないかった。仕方がないので、緊急の連絡用にと教えられている彼女の自宅の番号にかける。プライベートな時間に申し訳ないな、とコールを聞いていると、3回目に彼女は出た。

「やっぱりファールボグさんが行かれるんですね」ファンも夕刻行われたHML社長の会見を見ていて、もしかしたらと思っていたのだった。「大丈夫ですよ。どのように休まれますか？」

今回は、時間に制約のある仕事だった。明日の夕方までに山越えが叶わないのなら、海路で山向こうの港まで行き、そこからは空路か陸路という通常のルートでも、積み卸しのロスなどを可能な限り減らし、夜を日に継ぐような行き方をされれば（実際にそうするのだろうか）十中八九山越えよりも早いだろう。弥祐には一日二日と言ったが、現実には明日の早い内までがファードとフータにとっての勝負の時間だった。ただ、山越えが成功すれば日帰りでこちらに戻るのちよつと難しい。勘案して、一応この場では明日明後日と申請しておいて、出勤可能なら明後日の分はキャンセルと、そのように相談することにした。

「そんなにお気を遣わずに。ファールボグさんが頑張っている間は、



「私たちも頑張りますから」ファンは彼が遠慮していると思った。「大変なお仕事に向かわれるのですし、後数日、お休みされても構いませんよ。休暇の日数をご心配ですか？」

「いえ、それは大丈夫ですが」

「そうですね。ファーボルグさん、あまりお休みされていませんものね」そう思い出して言う。几帳面な彼女の頭の中には、監督下にあるスタッフ数十名の休暇利用状況が、各人の正確な残り日数という細部に至るまで、完璧に記憶されていた。良く人から驚かれるが、折に触れてそういった情報に接している彼女なのだから、ごく自然と覚えてしまうのだった。

結局、ファンにやんわりと押し切られる形で明後日まで休むことになり、以降も状況を見て、必要なら遠慮せずに休暇申請すると約束させられた。

「あの、ファーボルグさん」何回か言いかけてためらっていたことを、ファンは結局聞くことにした。「今の時期の山越えが特に厳しいってこと、あの会いで初めて聞きました」元々知識欲は旺盛だし立場もあるしで、彼女は自分の職場で扱われている事柄なら、広く浅くではあっても概ね把握していると思っていた。風乗りコーナーの展示は、彼女も深く関わったものの一つだった。「このお仕事は、ファーボルグさんにしか出来ないものだと思います」

「それはどうでしょう」

「ご自分の意志で行かれるんですよね？」

「ええ」言い淀むこともなく答えられた。弥祐のことをふと思った。「何処まで行けるかは分かりませんが、やれるだけやってみようと思っただんです」

「そうですね……」相手は知っている人のようであり、知らない人のようでもあった。気を取り直し、他に連絡事項がないか聞いてみる。

「いえ、特にありません。ご配慮ありがとうございました」

「いいえ」今のは知っている人だった。自分の声が少し硬くなっていたことに、ここで初めて気が付いた。相手に悟られないように、

ほっと息を抜く。「明日はスタッフ全員でファーボルグさんの応援をしています。頑張ってください。そしてお気を付けて」

「はい。おくつろぎの所を失礼しました」

相手が切るのを待ち、受話器を置くフックを、ファードは指で押し下げた。

## 第17回

ファードは元の席に戻り、時間を取らせてしまったことを再度男性社員に詫びた。早速依頼内容の詳しい説明と、契約締結へ向けた話し合いが始まった。

詳しくはなつても、依頼内容は風野商店でカラから聞いた話に、推測で若干の細部を補ったものと大体同じだった。付け加えられた事としては、先ずファードとフータは今夜できるだけ早い内に首都を出発、フェンサリサの東側の麓にほど近い、HMLフェンサリサ東支店まで移動することが正式に求められた。その東支店が今回の山越えの拠点となる。

東支店は、ファードとフータにとつても懐かしい場所だった。西側の麓近いリアテリアに住所のある西支店と併せ、風乗りの山越えにまだ価値が認められていた頃も、それらは拠点だったのだ。東支店で可能な時間仮眠をとった後、積み荷の受け渡し、最後の打ち合わせや準備等、翌朝の日の出前から動き出し、日の出と同時に山越えに挑むスケジュールだった。

山越えが成功した後のサポートは、西支店に引き継がれる。戻りは社が仕立てた船で、フータ共々こちら側の港まで運んでくれるとの事だった。

一時的な雇用関係を結ぶだけでも、契約書には色々な事が書かれている。危険を伴う仕事内容だから、事前の両者の合意という点で特に事細かく文面が作られていた。その中の報酬に関する条項を読んだ時、ファードは思わず吹き出しそうになった。そこには仕事の結果によらず支払われる通常の報酬に加え、山越えが叶った場合追加で支払われる成功報酬についても書かれていたが、それがあり得ないと思える額なのである。カラに聞いた話を思い出し、なるほどと思った。落ち着いて契約書に署名し、このような場合にだけ使う判も捺した。

エレベーターが止まる。目的の最上階に着いたのだ。壁にもたせかけていた体を、背で一押しして起こした。頭の中に取り留めなく漂っていた短い間の出来事が、ふっと消えて無くなった。

ファードは廊下を進み、厩舎へ足を踏み入れた。吹き抜けていく微風をすぐに感じた。

ゆつくりと確かめるように歩を進める。風が吹き抜けていくのは、屋外の発着デッキに通じる扉が、彼らが到着した時のまま開け放たれているからだだった。その扉は風乗りが社から全解雇された際、彼がフータの声を聞いた、あの扉だった。

社が用意した藁のベッドにフータの姿はなく、そもそも使われた形跡がなかった。扉から外を窺ってみる。発着デッキが半円形に、本社屋の巨大な庇のように広がり、その周縁近くにうずくまるフータを認めた。注射の後、風を欲しがってあそこまで出たものらしい。そこはあのバックライトの薄明かりもあまり届かず、ほぼ満月に近い月明かりの方が優勢で、フータの体をほの青く染めていた。

ファードは歩み寄る。50階建てのビルの最上階だが、風は穏やかだった。周辺の巨大な建築群も明かりの無い所は無く、この国の経済の中心地らしい人の営みの激しさを物語っていたが、その明かりの殆どは庇の下から来るものだから、その場所は一際影が濃いように感じられた。

「待たせたな」

相棒の傍らに立ち声をかけた。フータは初めて目を開き、ファードを見上げ低く唸った。なるほど、相棒の陣取るこの場所には、殊の外心地よい夜風が吹いていた。風乗りが全解雇されたあの日にも、ここで風を感じた。それは苦い風だった。今は二人を天翔あまがけに誘い出す、黄金色の風だった。万年雪に冷たく乾かされて吹き下ろし、麓の深い森で薫る風に変えられる、あの神々しい山裾で感じる風だった。

扉の所に人の気配を感じる。二人分の人影を予想したファードは振り返り、意外そんな顔付きになった。思い浮かべた内、長身の影

の持ち主は確かに現れた。小柄で細い影は欠けていた。倉庫内を寂しげに照らす蛍光灯の光、屋外のバックライトの光、双方が及ばないために出来た暗がりの中から、カラが静かに歩み出てきた。

「弥祐さんはね」ファードの表情を見てカラは頷いた。「一足早く、社の公用車で現地に向かったよ」

カラは約束通り弥祐に連絡した顛末を、かいつまんで説明した。私的な同行者ではなく、彼の即席仮面部下として扱われると説明を受けた弥祐は、電話口の向こうで勢い込むようだった。少しつかえながら彼女は思う所を話した。後から思ったのだが、自分もフータの後ろに乗っていけば夜間飛行の負担になつてしまい、それでは同行が本末転倒になつてしまう。車などで会社の誰かが現地向かうのなら、便乗できないかとちょうど考えていた所で、聞き入れてはもらえないだろうか。

「先行して僕のサポート部隊の『本隊』が出発する事になつてたんだけど、彼らが出かける前で良かったよ」冗談めかして言うカラは楽しそうだ。「ちょっと寄り道して別動隊員を拾っていくよう、指示しておいたよ」

重たい荷物を担いだ少女が、息せき切つて現れなかった理由がはつきりした。スカーラル・シーは昼行性の生き物の割に夜目が利くが、ファードの方はそうもいかない。日中の飛行に比べ、夜間飛行は確かに余計に気を遣う。そこに同乗者への配慮も重なつてくるとなると、気の張り詰め方は普段と数段違つてくるのだった。

それにしても、弥祐はあれで結構人見知りする方なのだ。見ず知らずの社員に囲まれて車で揺られて行くよりも、本当ならフータの後ろに乗りたかっただろう。ファードは彼女の心遣いを、しみじみ思った。

「分かりました。では、自分も行きます」外される事はなかったが、飛行前の鞍の安全点検は可能な限り行われるのが習わしだ。鞍をフータに固定する幅広の各ベルトの具合も、自身を鞍に固定する3本の細いベルトも異常なかつた。飛行時計や方位磁針も問題なし。「

フータ、ちよつと浮いてくれ」夜間飛行の安全のために、今の鞍には赤く点滅する標識灯も取り付けられている。一つは鞍の上面後端に、もう一つはフータの腹側、鞍の固定に尻尾の付け根に回したベルトに取り付けられている。尻尾を持ち上げてもらうだけでは見づらいのだった。両灯ともきちんとして作動した。

「これ、今度電池を換えた方がいいよ」カラもチェックを手伝った。久しぶりでも案外覚えているものだと思った。片手で操作できる信号灯のシャッターを開閉させながら、明かりの強さを見て注意した。「まあ、今夜は問題ないだろう」鞍の脇のフックに、元通りぶら下げた。

「ここからなら、フータなら4、5時間かな」全ての点検が終わり、フールドは鞍に跨った。彼の腰に巻かれたベルトの留め具に、鞍から伸びた3本のベルトの金具をしっかりはめ込む手伝いをしつつ、カラはそう見積もった。

「夜間なら5時間以上かかるかも知れませんね」どのみち明け方までには着くだろうし、そのつもりでもあった。

「このあと少ししたら、僕も車で出られると思う」山越えの指揮官であるカラには、まだまだ事前に擦り合わせておかなければならぬ事が残っていた。それに個人的には、シャワーでもいいから浴びて一度さっぱりしておきたい。その機会は本社を発つ前にしかないように思えた。「君の方が早いだろうけど、仮眠はちゃんと取るようにね。東支店には配慮するよう言ってるから」

「分かりました」

「気を付けて」

フールドが頷いたのを見て、カラは数歩後ずさった。それを合図にフータの飛膜の下に飛翔の力が、彼の風が渦巻き始める。

風の間欠泉にぼーんと吹き上げられたようだ。フータは真上へ音も無く一気に、かなりの高さまで舞い上がった。

見上げるカラに挨拶をするように、彼らは一度空に小さな輪を描いた。フータの鼻面が西へ向く。飛行妖精の全身は全く自然体のよ

うなのに、跳ぶ虫がその直前に後足に蓄えるあの跳躍の力、それに似たものが今フータの体にふつと宿る、元風乗りのカラにははつきりと感じられた。矢は放たれた。彼らは直ぐに、ここより丈高い向こうの双子ビルの間に隠れ、見えなくなった。

彼らが掠め通ったビルの谷間の窓際に、慌てふためく人影が幾つか見て取れた。

## 第18回

HMLの本社ビルを飛び立ち、もう5時間が過ぎようとしている。日付はとうに変わっていた。今日になつて早々、時計やコンパスを明るくしてくれていた月も山の陰に隠れたが、入れ替わつて夜空を占拠した怖いくらいの数の星々が、今は懸命になつて、年老いた蛍光塗料の頼りない仕事を助けていた。

ファードは鞍の上で心持ち身を乗り出した。前方見渡す限りには、ずっと以前から、高みから重く沈んだような濃い闇の連なりが見えていた。夜空をおぼろな不規則線で画するそれは、フェンサリサの大山塊だった。高山の暗さはこちらの丘陵・平野へと流れ込んでいる。その広がりの中、儂い光の集まりがちらちらとたゆたっていた。東支店のある、適度に開け住みやすいと評判の、あの街の明かりに違いなかった。

街の灯を認めてから暫く、ファードの耳におなじみの風を切る音と、それに混じり低く重たい唸りが聞こえてきた。飛行機のエンジン音だった。

ファードは周囲を警戒する。自分の側方に張り出したフータの飛膜より高い所を先ず見渡し、次いで低い所に目を移した途端、右の飛膜の下、草原や田畑が広がる大地の上空、その濃い闇の中に点滅する赤い標識灯を見付けた。相手はこちらの標識灯に気付いているだろうか。必要ならすぐに回避行動がとれるよう、フータと共に身構えた。

飛行機が上昇してきた。心配をよそに、安全な距離を保ったまま、どうやらこちらと高度を合わせようとしているみたいだ。一時的に出力を上げたため、はつきりと見えていた排気管からの青い炎が、フータの横に並ぶとふつと星明かりに負けそうなくらいに弱まった。微かに照らされた機影は単発の複葉機で、丸みのある影が二つ確認できるから、前後二人乗りのようだった。



複葉機はそのまま並んで飛び始める。相手の意図を察し、ファードはフータに速度を上げさせた。あまり遅いと飛行機の操縦は難しい。

程なくして、後部座席の方で、絞られた強い光がリズムを伴い点滅し始めた。片手で操作可能な小型の信号灯を使い始めたのだ。レバー操作により素早く開閉するシャッターが、言葉を約束に従った光の点滅に置き換え、伝えてくる。直視してしまわないように気を付けつつ、ファードは光を読み始めた。

『コチラノ ショゾクハ エイチエムエル フェンサリサ ヒガシシテン』

月明かりが有れば機体の横にHMLのロゴが確認できたかも知れない。星明かりでは難しかった。しかしファードが働いていた昔から、東支店には確かにあのような複葉機があった。

『ソチラハ ヤマゴエノ カゼノリカ』

ファードも同型の信号灯を手についた。出発前、カラが状態をチェックして、元通り鞍の脇のフックへぶら下げてくれたものだ。そうだ、と返信する。

『シテンヘノ チャクリク チユウイ ヒツヨウ シジヲ キカレタシ』

ファードは訝しんだ。社で働いていた頃、今の様な夜遅くに東支店に戻る事は度々あった。発着の場である社屋前の広場は、幾つもの大型照明灯で昼のように明るく、風乗りたちは特に不都合無く巢に戻るようになっていた。あれから時が経ち、社会のスピードは益々上がって、長距離輸送のトラックなどはほぼ24時間体制で大陸中を走り回っていると聞いている。空からの便を出迎えた以前ほどではなくても、今の支店の敷地内にだって、この時間かなりの照明があるのではないか。そうは思うが、結局は現状を知らない者の憶測である。ファードは了解と送り、指示を待った。

『マハージアナ ガワヲ コエタ ノチ トケイトウヲ ケイユソノゴ シテンヲ メザサレタシ』ファードは再び眉を上げた。信

号は続く。『シテン チカク デハ ヤネヲ ハエ ヒロバハ シヨウ フカ ウラテニテ ユウドウ スル』

フアードは頭の中で地図帳を広げ、相手の言う所を勘案してみた。フェンサリサに源を発する、比較的大きな川を思い浮かべる。それが相手の言うマハージアナ川で、このまま進めば数分後には上空を横切るだろう。他方時計塔とは、目的地の街のシンボルにもなっている古い議事堂の大時計塔のことであり、指示に従えば川を過ぎた後、進路をぐつと南寄りに変えて目指すことになる。腑に落ちないのは、そうやって時計塔を経由すると、随分な遠回りを強いられるという点だ。今のまま飛べばそれで支店の正面に出られるのに、ぐるっと回って裏手から来いと言っているのである。下りるのも安全な社屋前の広場は禁止され、到着したなりに、暗がりも気にかかる狭い裏庭に誘導されるらしい。また、“屋根を這う”というのは風乗りたちの俗語で、可能な限り低く飛ぶというくらいの意味だ。後部座席に座っているのは元風乗りなのか、久しぶりに聞く表現だが、平屋から2階建てくらいの家屋が多い支店周辺の住宅街で、相手は本当にフータの腹で屋根掃除をさせるつもりだろうか。夜間のそんな場所での低空飛行は、言うまでもなく危険だった。

「ナニカ モンダイ アリヤ？」フアードはそう聞かずにいられなかった。返答まで少し間があった。

『クワシクハ ハマモト シテンチヨウニ キカレタシ』

それは、地上に落ちてきた星明かりを捕らえ束の間生かす、長い長い生け簀だった。マハージアナ川が見えてきたのだ。ハマモト支店長、懐かしい名だ。社員時代に世話になった男で、信頼の置ける人物だ。彼が出した指示なら何かきちんとした理由があり、希望に沿うなら詮索している時間は無いのだった。

「リヨウカイ シジニ シタガウ」

『アト ワズカ オキヲ ツケテ』

フアードが返答すると、後部座席の者は信号で、前部の操縦士は手を振って挨拶したようだった。複葉機は身を翻す。そのまま高度

を下げ、夜の底に堆積した闇の中に沈んでいった。

川に差し掛かる。左下にはそれに架けられた長く堅牢な鉄橋と、ちよつと轟音を上げながら渡りつつある列車が見えた。大陸を横断する長距離輸送用の路線だった。先頭の車両は2両連結のディーゼル車で、もう川の中程近くまで渡ったというのに、後に続く貨車の大部分はまだ橋の手前にあるようだった。旅客用の特急列車と違い、彼らの旅路はどこか帆船の旅を思い起こさせる。フータは彼らの後から川を渡り始め、彼らよりもずっと早く渡り切った。

地上、右手から光の点列がフードらの方へ近寄ってきて、これから行く先へ向きを変え伸びていく。街へ向かう街道を照らす明かりの列だった。その列はやがて光の結び目を一つ作り出し、それは24時間営業のガソリンスタンドに違いなかった。街の境にあつてここから先 km給油できまぜんなどと、街を出て行く旅人に看板で警告しているような店だった。その上空でフータは左に逸れた。時計塔を経由するためだった。

足下に徐々に明かりが増えてきた。それと星明かり、二つの微かな光に挟まれて、フードとフータは闇の中を音も無く滑っていく。目と同じ高さの辺りに、点滅する二つの赤い標識灯が見えてきた。大時計塔の全高をさらに高くする、2本の高い支柱の先端に取り付けられた光だ。大時計塔は、経済・政治的には街の中心中核を為しているが、地理的にはむしろ南東に外れた場所に位置している。周辺の高級住宅地から向かうにつれ、街の空は徐々に明るく、眠りも浅くなっていくようだった。今の時刻を見間違える心配のない所まで、ライトアップされた大きな文字盤に近付いた。草木も眠る今頃、その辺りは右目だけ眠り、左目は起きていたといった様子だった。中小のオフィスが入っている、ビルの上の方は暗い。だが、通りに面したその足下には、まだまだ明かりが多かった。目抜き通りには往来する人々の姿がちらほら認められ、乗り合いの車も暇そうには見えなかった。大時計塔を有する歴史ある議事堂には、やはり重文指定の古い駅舎が隣接している。あの鉄橋を渡り西へ進む列車は、

やがてこの駅に辿り着くだろう。煌々たる明かりの下、物や人の流れに渦を生じさせるこの場所は、全体がはつきりと目覚めていた。揃いの作業服を着た人が何人か、ゆっくりとホームを歩くのが遠目に見える。川を渡る所で追い抜いてきた貨物列車を、出迎える人々なのかも知れなかった。それほど大きくはないが、不眠はある街だった。

時計塔を軸に旋回し、北西寄りに進路を変える。もう一度郊外へ向かって飛ぶことになるが、暫くして、広大な敷地の中に高さの不揃いな集合住宅が、こちらに数棟、あちらに数棟と散らされて建つ、洗練された生活空間ではあっても飛行空間としては非常に厄介な、深夜でなくても飛びたくない迷路に入り込んでしまった。ファードの記憶には無く、社を辞めてこの街を訪れなくなった後に出来たものに違いなかった。ある建物の屋上を越した直後、さらに高い建物たちの間を擦り抜ける、などということが続けた。瞬きも忘れて飛んでいると、時折慌てふためいた気配が近くの窓から感じられ、気が散りそうになった。休日には多くの市民の憩いの場となる、印象的な規模の中央公園の上で一息つけた時、ファードはその狼狽の気配について考えてみた。あの集合住宅の中には、まだ眠りについていない家庭もあつただろう。その住人が、たまたま窓外をよぎった大きな影を目撃し、驚きの声を上げたのだ。スカーラル・シーと姿が良く似、体はずっと小さいムササビは、地域によっては空飛ぶ座布団などとその飛び姿が形容されている。ならば、人を負って飛べるほど大きいスカーラル・シーは、身構えていない人の目になんと映るだろう。やはり空飛ぶ絨毯なのだろうか。実際、この飛行妖精がおとぎ話で御馴染のあの魔法の道具のモデルだということは、巷間に流布する一説だった。

公園上空を抜けた。束の間の息抜きだった。ここから目指す東支店は近く、そこまでは低層の家屋の連なりだ。いよいよ、屋根を這わねばならないのだった。

現実には、送電線より幾らか高い辺りが妥協できるぎりぎりの高

度だった。ここなら大概の屋根も越せる。しかし油断は禁物だ、例えばこのような比較的新しい住宅地区の真ん中に、時折昔ながらの地主の屋敷があつてケヤキなどの大木が天を突いて聳えている。広い敷地に明かりは乏しく、大木は闇に潜んでいる。これには夜目の利くフータも欺かれかかつたらしく、彼の判断で間一髪回避行動は取られたが、自分の体から突き出た余計な出っ張りであるフードまでは救えなかった。彼だけは、顔から豊かに茂った樹冠に突っ込んだ。相棒の突然の不可解な動きは、無数の枝に体中を引つ掻かれ、そのへし折れるバネのきいた音には鼓膜を打たれ、すぐさま凄まじい実感を伴つて理解された。突然の嵐の来襲に、鳥が一羽転がるように飛んで逃げる。アオバスクのような夜に元気な鳥で、それまでは枝でのんびり鳴いていたのかも知れなかった。太い枝に致命的に激突する前に、からがら樹冠から逃れられた。冷たい汗が背を伝つた。

以降は街灯を頼りに道に沿つて上空を進み、はつきり先まで見通せる場所だけ突っ切つていく方針に変えた。時間は余計にかかったが、以後は何事もなく、東支店の社屋が遠目に眺められる位置までやつて来た。フードは懐かしい。今は暗くて見分けられないが、外壁は以前よりもつと酷く雨に黒ずんでいるのだろうか。あの場所へ、同じような遅い時間に戻つた事なら幾度もあるが、4階建ての社屋の窓という窓に、今日は記憶にないくらい多くの明かりが見て取れた。気が逸つてつい安易な指示を出し、むしろ彼より懲りているらしい相棒に冷静に却下され、もどかしく近付いていった。有るか無しかの流れを下るようだったが、それでも最後は行きたい場所へ辿り着く。やがて、彼らは小舟が静かに接岸するように、社屋の3階辺り、屋内からの白っぽい照明が漏れる窓辺に身を寄せた。

## 第19回

フータにホバリングさせながらファードは下を覗き込んだ。敷地裏手の角地で、裏門にも近い反対側の角には社員用の駐車場や駐輪場などがあるが、こちらは普段から人気の無い、踏み固められた地面を囲うフェンス沿いに丈の低い常緑の植木がまばらにあるだけの忘れ去られたような一角だった。この寂しい空き地に面しては、非常口が一つ設けられているはずだった。観音開きの鉄扉が、今は大きく開け放たれている。奥から漏れる弱い光を背に立った、二つの人影が戸口に認められた。一人は手に懐中電灯らしき明かりを持ち、こちらに向け頻りに振っている。複葉機が伝えた、裏手にて誘導とはあのことだろう。この空き地が下りる場所だ。

フータの飛膜の下に、着陸のための風が渦を巻いている。それが埃っぽい地面を掻き乱すようで、影は二つとも少し後ずさった。地面まで1mを残すくらいで制動の風がふっと途切れる、それでもフータの巨体は若猫のようにしなやかに、柔らかく地面に舞い降りた。非常口から一步屋内まで退いていた二人のうち、一人が待ち兼ねたように近付いてきた。「やあ、ファード！」50格好の人間の男性が満面の笑みで呼んだ。彼は右手を差し出し、当人の気持ちは伝わるが待ち受ける身にはもどかしい、そんな、いかにも人のいい小さな足の運びだった。

ファードも急いで鞍を降り、ゴーグルを額に押し上げ笑顔を見せた。「ご無沙汰しています、ハマモトさん」薄手の革手袋を外す間に、ようやく近くに来た右手をがっちり握り返した。この初老の小柄な男性こそが、HMLフェンサリサ東支店の長、ハマモト・エリックその人だった。

ハマモトはもうかれこれ20年、フェンサリサ東支店を預かってきた男だった。HMLがまだ風乗りにも山越えをさせていた頃からの支店長だから、ファードやカラとも古い顔なじみだった。彼はいわ

ば取り残された男だ。彼と同期の連中の大半は、既に本社に戻り重きをなしている。未だに地方の支店の長止まりの彼は、要するに出世コースからは外れた形だった。だが東支店をこよなく愛するハマモトにとって、そんな世間体、本当に何ほどのものだろう。彼は確かに才に恵まれた人ではない。ただ、欲もなく実直で、粘り強く行動できる人ではあった。

「こんな遅くまで、見張りご苦労だったね」ハマモトは振り返り、背後に控えていた若い男性社員にねぎらいの言葉をかけた。「後は私が引き受けるから、ゆつくり休んでくれていいよ」

男性社員はほっとした様子で一礼し、非常口から屋内へ戻っていた。懐中電灯を持ったままの右手の甲で、頻りに目元を擦っていた。

「君が来るのを見張らせていたんだ」戻っていく背を見送りつつ、ハマモトは説明した。「私はやつこさんに伝えることがあって、ついさつき出てきたばかりだから、待つ身の辛さはなかったが」

「降りる場所がすぐに分かったので、こちらは助かりました」

「社の機体に会ったろう。彼らが無線で一報をくれてね。それを私が伝えるまでは、やつこさんも時間が長く感じられただろうな」ハマモトは何度か頷く。「空で見張ってた連中も、こんな月の無い夜に良く君たちを見付けてくれた。後でねぎらっておかなくてはね」

「その機体と信号で遣り取りしました」気になって見受けた事を聞く、ちよつどいい機会だった。「様子がおかしいように見受けられたのですが、何かあったのですか？」

「そうなんだよ」ハマモトは思い出したように表情を曇らせ、溜息をついた。「まあ、それは追々話すでしょう。一等先に、君たちにはくつろいでもらわなきゃならん」そう言うと彼はしゃがみ込み、フータの顔を覗き込んだ。「長旅ご苦労だったね。ああ、お前さんも元氣そうで何よりだ。さあ、お前さんの寢床はこつちだよ」彼は孫にでもするようにフータに語りかけ、頭を優しく撫でた。フータは目を細め小さく唸った。

飛行妖精を休ませる厩舎は、かつてこの東支店にも勿論あった。

それは今、こちらでも倉庫や資料室など、本社屋と同じように物置として活用されている。ただ、東支店は以前から拡大する業務に対し慢性的容量不足で、一旦押し込めた物を少しでも片付け、フータのためにスペースを確保する事は出来なかった。そこでハマモトは、東支店のガレージの一つにフータを案内した。小型の配送車ばかり数十台格納されているそこは、いわば周辺を対象にした配送業務の基地だった。この時間帯は、荷が到着するとしても遠距離からの大型トラックだけで、作業は他のガレージで行われる。少なくとも明日の朝7時、このガレージでも荷の確認や積み込みが行われるようになるまでは、一角を仕切ったフータの寝床は安泰のはずだった。そしてフールドらは明日、それより早い日の出前には活動を始めるなければならない。

「フールド」必要な一角だけを照明で明るくし、改めて相手を見たハマモトは驚いた。「どうしたんだ。あちこち傷だらけじゃないか」「ああ、これは「驚かれるのも無理はないとフールドは苦笑する。「お恥ずかしい話ですが、来る途中、木に突っ込みまして」「痛みはあるが傷自体は浅いものばかりで、取り敢えず、手当ては後回しで良からうと思っていた。

「どこで？」ハマモトは更に目を丸くする。

「自分が飛んできた方の近くに、古い農家の屋敷があるでしょう」「東支店周辺の地理には明るいはずだった。だが、この屋敷林を思い出したのはうかつにも災難の後だった。

「あれか」ハマモトは納得する。「そうだった。夜にこの辺りを飛ぶのも、久しぶりだったね。新しい高い建物も増えてるし……」まじまじとフールドを見詰める。

「傷自体はたいしたことないですよ」

「確か、この棚に救急箱があったと思うよ」壁に寄せられて幾つかある、スチール棚の一つを覗き込みながら言う。「自分で手当てできるかな？ その間に、フータの鞍は私が外しておこう」



ハマモトは、重さと嵩のある鞍を持ち上げる時こそファードの手を借りたが、他の作業は一人で片付けた。彼は風乗りではないが、風乗りたちと付き合うのは好きだったようで、彼らがまだ働いていた頃はちよくちよく厩舎に顔を出し、話し込んで装具の扱いや飛行妖精の世話の仕方を覚えてようだった。一人で出来る部分の手当てをしながら、ファードは安心して任せていられる。フータも、ハマモトの世話になるのは初めてではないから、旅装を解いてくれる彼に気前よく協力していた。

「お腹は空いているかな？」ハマモトは木製の大きな器を抱えてきて、今はすっかり身軽になったフータの目の前に置いた。大きなサラダボウルといった感じのその器には、ミズナラの葉やドングリが山盛りになっている。フータは嬉しそうに食べ始めた。

「よく用意できましたね」続けて、水を汲んだアルミ製の容器を置いてやっているハマモトの背に、ファードは話しかけた。今、フータが寛ぐのは大量の新鮮な藁の上だ。それにミズナラなど、青葉はとにかく、ドングリの方はこの時期外れにどうやって確保したのだろう。本社で目撃した以上の手際の良さを、感じずにはいられなかった。

「昔のよしみは大事にするものだよ」無心に食べるフータに目を細めながら、ハマモトは答える。「前にこういったものを納入してくれていた業者と、今でも個人的な付き合いがあつてね。ドングリは他の生き物にも需要があつて、在庫があるのかも知れないね」

「本社でも、短い時間に藁が用意してあつたんですよ」

「さあて。向こうにも、私のようなのがいるのかな」ハマモトは立ち上がった。「裏手のシャッターを少し上げておこう。少々物騒だが、フータが番をしてくれるね？」

フータは食べるのをやめ、問うようにハマモトを見上げた。

「用を足したくなったらそこから外へ出るといい。まあ、積荷があるのは別の場所だし、ここに盗られるような物はないんだけどね」ファードはそうだった、と思った。下宿先である風野商店のフー

夕の個室には、専用のトイレ（勿論形状は人間用のそれと随分違う）が設置されている。それ故、意識していなかったのだ。

「西にちよつと飛ばばあの草原だ。きつと気持ちいいよ」ハマモトが笑うと、了解したようにフータもくつくつと喉を鳴らした。ハマモトはフールドに向き直る。「怪我の手当ては終わったかい？」

「ええ、あらかた」飛行中に無防備だったのは、顔の下半分と両腕の手首から肘にかけてだが、顔は咄嗟に伏せられたし、そのため傷は腕に集中していた。他は飛行帽や衣服が代わりに傷を負ってくれ、肌までは達していない。中身を片付け、救急箱をハマモトに返した。「じゃあ、今度は君の寢床に案内しよう。食事はどうする？」

「済ませてきました。大丈夫です」

フータは食事を終え、片方の飛膜の下に顔を埋めるようにしていた。もう一つつらうつらしているのだ。ハマモトは明かりを消した。二人はそつとガレージを後にした。

1階のガレージから、階段で2階へ上がる。良く磨かれ、蛍光灯の光を硬質に反射している長い廊下。屋外に面して続く、ありふれたアルミサッシの列。階段に近い側から事務室、会議室、応接室のドアがあり、突き当たりは支店長室だった。全てフールドの記憶に残るままだった。

「フールド」廊下の中程辺り、ハマモトが急に立ち止まった。「ほら。あれがお前さんたちに人目を忍んでもらった、その理由だよ」窓外を指さした。

示された方へ目を向けた。社屋正面の舗装された広場が一望できる。進入専用、出発専用と車の進路を分けている、縁石で囲われた芝生が幾つかあり、その芝生の島一つ一つに照明の高い柱が1本ずつ立っていた。広場の一角は、かつて風乗りの発着場でもあった。厩舎は4階にあったが、荷の積み下ろしのため一度下へ降りなければならなかったのだ。その頃に比べ、広場を照らす光の量は若干少なく感じられる。各照明灯が、一つの柱の頂に3器ずつ取り付けられた形状は昔と変わらないが、どの柱も例外なく、その内の一つか

二つ、電球を抜いて役立たないようにしてあるのだった。それでも今回の着陸に、支障があるようには見えなかった。

敷地の境の近くに、この社屋よりも背の高い、1本のケヤキの大木が残されているのも昔のままだった。先程自分が突っ込んだものもそうだが、この辺りでは、あの木は中世という頃の忘れ形見と言える。数百年前、周辺一帯は一面あの木の生い茂る、とても深い森だったのだ。あんな大木の成す森とは、一体どんな森だったのだろう。かろうじて想像のよすがとなるその大木の下に、支店の正門があった。ファードはそこで目を止めた。止めざるを得なかった。

「なんですか？ あの人ばかりは」

正門脇の警備員詰め所にまだ明かりが見えた。それだけでも珍しいが、鉄扉の格子の向こうにどういう訳か数十人単位で人が群れているのだった。人の群れは一度コンクリの支柱の陰に隠れ、敷地周辺を囲うフェンスが始まってはまだ暫く続き、どうやら正門前に半円形に広がっているようだった。あちこちに小型だが強力なライトが設置され、正門を真昼以上の明るさで照らしている。何人かはこちらに背を向け、大多数はこちらを凝視しているようだった。

「マスコミの連中だよ」言ったハマモトの声は、忌々しげだった。

## 第20回

「マスコミ？」言われてもう一度眺めれば、写真用、テレビ用、確かに何台ものカメラが確認できる。踏み台にでも乗っているのか、人の群れの上に覗いたレンズもあるようだった。

「お前さんたちを取材に来たんだよ」

全く思いも寄らぬ事を告げられた。ファードは声を失い、まじまじと相手の顔を見詰めてしまう。ハマモトは溜息をついた。

「衝撃的な大トンネルの事故、絶滅した風乗りの突然の復活、未だ成功例の無い山越えへの挑戦」ハマモトの声は少々芝居がかっている。「ハイエナよ、お前がこのエサに食いつかぬ事があるうか、だ。こちらにはいい迷惑だがね」

ハマモトが語るには、社長の記者会見があったその直後から、東支店へマスコミ各社からの取材申し込みが殺到し始めたのだそうだ。山越えと聞き本社ではなくこちらへ直接問い合わせってくる辺り、彼らの嗅覚には侮れないものがあつた。電話の呼び出しベルは一時事務室に嵐を呼び、あちこちで書類の山はなだれ幾つもの湯飲みが命を散らし、身構える間もなかつた社員たちは宙を舞った。何とか命を繋いだ彼らがこの事態を本社に伝えねばとようやく我に返った頃、ファードらは既に彼の地を発つた後だった。

「こつちに来るのは、とにかくいつ到着するか分からないの一点張りで彼らをあそこに足止めして、空でお前さんたちを待つ事だった。正面から下りた日には、大変な騒ぎになるだろうからね」ハマモトはファードを見上げる。「お前さんとフータにはゆっくり休んでもらわなくちゃいけない。申し訳ないとは思つたが、だからあんな風に裏から、屋根を這うように来てもらつたんだよ」

「そうだったんですか…」自然と深く頭が下がるというのは、まさにこんな時だろう。

「いやいや、無事で何よりだよ。それに、まだカラさんたちが到着

していないしね」

「そちらにも出迎えが？」

「道は絞れるからね。ただ、車はどうしても門をくぐらなければならぬし、裏門にもマスコミはいるからなあ」ハマモトは悩ましがだった。ファードらは本当に運良く彼らの死角をつき、安全な自陣へ飛び込めたのだった。

「まあ、その時にならないと分からない事で、ぼやいていても仕方がない。さ、部屋へ行こう」

再びハマモトが先に立ち案内した場所は、支店長室のすぐ傍の、普段は接客に使われる小部屋の一つだった。他の部屋よりは少し立派な作りの木製のドアを開ける。黒い革張りのソファの一つが隅へ寄せられ、代わりに簡易ベッドが入れられていた。閉め切られていた部屋で行き場の無かった革の臭いが、我先に廊下へ逃げ出した。「個室の方がいいだろうと思ってね」部屋に一つの窓を大きく開けながらハマモトは言った。夜遅くに仕事から戻った者のために、この社屋には休憩室も備わっている。昔はファードも使った部屋だが、そこは余り広くない場所に二段ベッドを幾つか入れただけの、ほぼ雑魚寝に近い部屋だった。「シャワーを浴びるかね？ 場所は昔と変わらないよ」

「いえ、そうしたいのは山々なのですが」着替えやタオルなどの荷物は、まだ到着していない弥祐に預けてあった。

「そうか。なら明日の朝でもいいね」ハマモトは頷き、ドアに手をかけた。「何か困った事があつたら遠慮無く言いなさい。私は支店長室に詰めているからね」

「はい。ありがとうございます」

「明日：いや、もう今日か。朝は5時に起こしに来よう。じゃあ、ゆっくり休むんだよ」

一人になり、ファードは初めて疲労を意識した。対になっていたソファの内、そのままにされていた方へ取り敢えず腰を下ろす。天板がガラスのローテーブルの上には、お茶のセットや簡単に摘める

菓子類、灰皿が用意してあった。傍らに目を移せば、ホテルで見かけるような小型の冷蔵庫まで持ち込まれていた。飛行帽やゴーグルなど、手にしていた飛行道具をソファの片隅に丁寧にとめた。礼儀としてそうしなればならないような気がして、一応冷蔵庫のドアを開けてみる。アルコール分の有無によらず、数本の缶飲料が冷やされていた。結局、緑茶のティーバッグの封を切った。電気ポットから湯を注ぎ、暫く湯飲みを見詰めていた。

そうしていると、弥祐やカラの事が気になり出して来る。そのまま考え込みそうになるが、軽く頭を振って押し止めた。彼らの事が気になるのなら、尚のこと今は自分に集中すべきだった。

3口で小さな湯飲みを空にした。窓を細めに開けた程度まで閉め、電気を消す。外の常夜灯の光が、小さな部屋を灰色に照らし出した。腕時計だけ外し、服はそのまままで簡易ベッドに横になった。毛布を引き寄せ目を閉じる。深い呼吸を3回、覚えているのはそこまですだった。

内なる衝動が一足飛びに閾値を超えていた。目を開いている。すぐにまだ夜明け前だと認識した。フードは身を起こし、ローテーブルの上の腕時計に手を伸ばした。5時10分前。このように深い眠りから一気に、しかも自然に目覚められるのは久しぶりだった。普段の半分も寝ていないのに既に頭は冴え、体も軽かった。

ベッドを出て明かりをつけ、窓際に寄ってみる。鈍い鏡になつてゐる窓を開けた。切れ切れの雲はまだ星明かりに沈んでいるけれども、それらを薔薇に紫に、その日最初の色彩劇は間も無く始まりそうだった。乾燥した涼やかな南風が入り込んでくる。上天気の日になりそうだと思った。

ドアがはつきりとノックされた。腕時計は5時5分前を指している。寝る前の約束通り、ハマモトが起こしに来たのかも知れなかった。フードもはつきりと返事をした。ところが、開いたドアの間からひよこつと覗いたのは、予想とは違う顔だった。

「あつ、もう起きてたんだね」

弥祐だった。その口振りからすると、彼女の方は窓際に立って出迎えたファードを見て、ちょっと意外に思ったらしい。

「おはよっ、ファード」

意外そうな表情を見せたのも束の間、直ぐに張りのある笑顔になって、彼女は体でドアを押しした。大きく開きつつあるドアを追って、肩から先に部屋に入ってくる。その突進力を利用して、廊下に一時置いていたらしい大きなポストンバッグを、両手で勢い良く持ち上げたのだった。荷物は両肩を支点に弧を描き、すぐに彼女を追い越していく。今度はそれに引っ張られつつも、軸のぶれない足取りで数歩進んだ。ファードは咄嗟に駆け寄った。荷物を受け止めてみると、なるほど、それはずしりと腰に響いた。

「ナイスフォロー」弥祐はというと、その間もずっと楽しそうにしている。

「お前、まだ寝てなくて大丈夫なのか」カラの計らいで、弥祐はHMLの公用車に便乗してここまで来たのだった。夜間とはいえ空の旅だったファードらより、到着はよほど遅かっただろう。そうであっても、手足を伸ばす間も惜しむのが目の前の少女だった。

「うん、へーき」実際、ドアの隙間から顔を覗かせた時から弥祐の顔色は良い。「車の中で結構寝られたから」

「そうか」今度は全身をきちんと使って、大荷物を安全にソファの上へ載せる。

「それより着替えとかなくて困ったでしょ」弥祐は早速バッグを開けにかかった。「着いたの4時ちょっと前だったんだよ。ハマモトさんが出迎えてくれてね、5時に起こすって言うから引き受けたんだ。ファードの方こそちゃんと眠れたの？」

当人は無意識だろうが、全く手を休めずのテンポの速い会話はリラックスしている時の弥祐だと思った。「ああ、意外と良く眠れたよ」偽りのない所を答えた。

「良かった」弥祐はほっとしたようだ。ファードの着替えやタオル、

洗面道具などをソファの上に並べた。「これも出しとく？」彼女はそれをバッグの口から少し覗かせて見せた。蛍光灯に照らされての表面の鈍い光沢が、皮革製品を思わせた。

「いや」ファードには、一目でそれが何であるか分かっている。「後で自分でやるからいいよ」

「足りない物とか無いかな？」

「ばあさんがやってくれたんだろう」

「うん。こっちは、私にはよく分からなかったし」

「なら平気さ」

「も〜ね」弥祐は首を一回ずつ左右に傾け、こきりこきりと一度ずつ鳴らした。「肩凝っちゃった。この防寒具、ほんとに重いね」

弥祐が手にしてファードに見せたのは、数千m以上の高空を飛行する際に着用する、防寒飛行服一式の一部だった。例えば体のもつとも外側に着るフライトジャケットやオーバーパンツは、外装は本革の2枚重ね、暖かな裏張りもふんだんに使われ、とにかく冷気の浸入を防ぐためしつかりした作りになっている。故に嵩張るし重い。風野商店を出る前に陽が言っていた通り、こちらの方は必要な物を熟知し、しまい場所も知っている彼女が準備してくれた。ならば忘れ物など無用な心配だろう。また、山越えをする機会がなくなり着ることもなかったこれらだが、時折風に当てたりジツパーの具合を確かめたり、ファードは手入れを怠らなかった。今更不具合の心配もないのだった。

「やっぱり、これは俺が持って出た方が良かったな」

「ううん」弥祐はかぶりを振った。荷物持ちは自分から言い出した事だ。「こういうのって最近は軽くて、水や風は通さないけど蒸れないっていろいろがあるじゃない。ほら、ゴアなんかかって」

「お前、それで作った防寒具の一式、いくらするか知ってるのか？」ファードは訳知り顔で、言葉には笑みが含まれている。

「高いの？」

「目玉が飛び出るぞ」弥祐が言うのは最近市場に出始めた、画期的



という宣伝文句が珍しくその通りの、新しい機能素材の事だ。確かに彼女の並べた通り、この素材で作られた防寒具やレインウェアは従来相反するしかなかった特長を併せ持つ。ただ出始めの常で非常に高価で、従来品の5、6倍の値段がつくのが普通だった。

「そうなんだ…」言つて、なにやら難しい顔をした。

「それにな、新しい物だからいいかつてなると、そう単純でもないんだ」

「なんで？」

「この防寒飛行服はそれこそ100年200年かけて風乗りたちが試行錯誤して、素材から縫製の仕方まで、色々突き詰めてきた物なんだ」バッグから覗かせて、まだ弥祐がそのままにしている皮革製品を指さす。「それもな、着てみると実に着やすいんだ。特に飛行姿勢を取った時、着ているのを忘れられるつてのが大事だ」

「へえ…」両手で持ち支える防寒具の革の表面には、時の経過による細かいひび割れが無数に認められる。そのくたびれた道具が、弥祐の目に急に眩しく見え始めた。「なるほど。新しい接着剤より膠なんだ」

「なに？」弥祐は時折良く分からないものの喩え方をする。一応慣れているはずだったが、今も面食らった。

「古い文化財を補修するのに、接着剤を使うでしょ」説明し始める弥祐の頬はちよつと紅潮している。「その場合でも最近出来たばかりの接着剤は使われないで、ずっと昔から有って効果や影響も確かな、膠が選ばれるんだつて。この防寒具も、最新技術に伝統の知恵が優つてるんだよね」

「まあ、確かにそうだな」そういう事か、と思うと同時に苦笑した。「とにかく持つてきてくれて助かった。俺はシャワーを浴びてくるよ」弥祐が出してくれた着替えに手を伸ばす。

「あ。それつて私も使えるのかな？」弥祐も慌ただしく自宅を後にし、車中泊だった。

「ちゃんと男女の別はある」そしてファードはにやりと笑う。「そ

れに今、お前はカラさんの部下なんだから。社員なら遠慮する必要はあるまい？」

「うん」弥祐も笑ったが、どうしても共犯者めいた笑顔になっていく気がした。改めてバッグを探って、自分の着替えなどを詰めた大判のビニール袋を取り出した。

2階の部屋を出て3階へ上がった。何処の廊下も階段も、明かりが消されている場所はない。ただ、人の気配はあってもそれはどこか遠く、泊まり込みの社員たちも、さすがに今時分は殆どが仮眠の最中なのだと思うた。

## 第21回

案内された場所は更衣室こそきちんと分かれていたものの、シャワー室自体は銭湯のような、大きな一室を真ん中で仕切っただけの作りのようで、仕切りは薄板、天井の方には隙間があり、それこそ石鹸の投げ渡しが出来そうだった。女性用のスペースは更に幾つかの個室で区切られていて、それは男性用も同じだろう。先に更衣室から水場を見回してみても、しかしまあ、これはうっかり女だけの話なんて出来ないね、と弥祐は苦笑した。けれども今はファードと話せるので都合が良かった。

程なくして、隣でも水場に通じるドアの開け閉めがあり、男性側のシャワー室から裸足の気配が伝わってくる。先ずファードで間違いなかるうが、弥祐は少し遠慮がちに声をかけた。

「なんだ？」

確かに彼の声で弥祐はほっとする。「話したいからさ、真ん中の仕切りに一番近い個室を使ってよ」

「ああ、わかったよ」

苦笑混じりの返事の後、少し間があつて水の流れる音が聞こえ始めた。弥祐も急いで準備を始めた。

個室に入り、頃合いの湯温を探り始めたらすぐ、ファードが話しかけてきた。

「気を遣わせて悪かったな」

「んー？」夜間飛行の負担にならないようにした事だとはすぐに分かるが、何よりも先ず昨日の汗を一流しするのに懸命な振りをして、曖昧な返事をする。

「そっこの旅はどうだった？」

「うーん。そうだねえ」強かった水量を少し慌てて適当な量まで戻した。「ワゴン車に私を入れて全部で6人でしょ。若い人ばかりで、最初それがちょっと意外だったかな」男性3人、女性2人の社員た

ちは全員20代で、中にはこの春に入社し、研修を終えたばかりの新人も1人含まれていた。

「無愛想なお偉いさんが乗ってると思ったか」

「あつ。その可能性もあったんだね」彼女はカラが迎えに来ると思っ  
ていて、それで意外と言ったのだが、指摘されて今更どぎま  
ぎした。「うゝ。若くて親切な人ばかりで良かったあ」

「そうか」

笑われると思ったが、その返事は思ったより穏やかな印象だった。  
「高校が同じの人が2人もいてね、しかも隣に座った女の人は担任  
までおんなじ。ちよつと無い偶然だよ」その偶然をみんなで興が  
つたのをきっかけに、後は年の近い若者どうし、すぐに打ち解ける  
事が出来たのだった。

「そうか」

「ファードつてば、さつきからそればかり」

「いや」声には笑みが含まれている。「旅を楽しめたのならそれで  
いいんだ」

ファードの声はシャワー室の固い壁に反響してくぐもっている。

その余韻の中に敏感に安堵を感じ取った弥祐は、多分相手の考えも  
読み取れた。ファードは自分の人見知りを知っている。

「…そうだよ」弥祐は呟いた。今、急に思い出したのだ。自宅前  
に横付けされたワゴン車の中に見知った顔を一つも見付けられなか  
ったあの時、自分は最初情けないような、失敗した気分になったで  
はないか。笑いが込み上げてくる。「うん。案外なんでもなかった  
よ」頭でも洗い始めたのか、隣からの水音が一層甲高くなった。彼  
女ははつきりと言うことが出来た。

「うん？」返事と同時に水音が急に小さくなる。「すまん、良く聞  
こえなかった」

「ファードはマスコミのこと知ってたの？」自分もやっぱり頭流そ  
つかな、どうしよつかなと冷静に思索しつつ、弥祐は聞いた。

「ああ」ファードはすすぎを再開したらしい。先程よりは控えめだ

が、床に落ちる水の音がまた大きくなる。「飛行機で出迎えられたよ。月も無い中、空で俺たちを待っていてくれたんだ」

「そんな大事だったの」素直に目を丸くする。

「そっちはどうだったんだ？」

「こつちも待つてた。勿論道沿いだけど」そのちよつとした事件を思い出す。「停まつてる車の脇を過ぎたら、なんか傍にいた人が慌てるらしかったんだよね。そしたらすごい勢いで追っかけてきて窓を開けて停まれ、停まれつて」

「上手い具合に捕まつて良かったな」

「最初はびっくりしたよ。でさ、裏門から入ることになったんだけどそつちにもマスコミがいてね。車囲まれて、止められそうになつたんだよ」

「平気だったのか」

「その時助けてくれたのがハマモトさんなの。その車に乗ってるのは当直の交代要員ですよ、ほら、若い連中ばかりでしょうって機転を利かせてね」社員扱いされた彼女は、その時慌てて顔を伏せたものだ。「マスコミの連中、無遠慮にじろじろ覗き込んでくるし。でも、実際事情を知つてそんな感じの人は乗つてない訳だし、そして案外素直に引き下がつたよ」

「まるで芸能人だな」

「そう！ それ、私も思つちやつた」得たり、とばかりに声が大きくなつた。「そしたらなんか人事。最初はちよつと怖かつたのにね」「とにかく無事に辿り着いて何よりだ。俺は先に出るぞ」

「え？ あ、うん」弥祐は慌てた。フードの方が先だったとはいえ、いつの間に洗浄工程にこうまで大きな差が出来たのか。

シャワー室を出たフードは、服を着る前に顔に剃刀を当てた。このような男の道具も洗面用具の袋の中にちゃんと入っていた。恐らく弥祐自身の気付きだろうが、普段の自分の行動を余さず見られているようで、少しこそばゆい感じがした。

シャツは勿論洗い立て、着慣れた中でも一番新しい物が着替えに

用意されていた。これから僅かな時間しかこれを着られないのがな  
んだか惜しい。山越えの際には、フライトジャケットの下にも特別  
な衣服を着込まなければならなかった。

支度を整え廊下へ出た。弥祐はまだのようなので、首や肩の強張  
りをストレッチでほぐしながら待った。暫くして女子更衣室のドア  
が開く。ふと振り返り、ぎよつとした。

「ごめん、言い忘れてた」

振り返ったファードの目に弥祐の右の肩から指先までが一瞬映じ  
たが、それは剥き出しのまま、所々で水の粒が光っていた。視線を  
感じたのか、それは勢いよく開けすぎたドアを適当な隙間まで戻す  
のと同時に、稲妻みたく物陰に引っ込んだ。細い隙間から髪の一部  
だけを覗かせて弥祐は続ける。髪からも滴がしたたっていた。

「カラさんとハマトさんが支店長室で待ってる。そう伝えてって  
言われてたの。すぐに行つて。荷物預かるから」

今度は右の肘までがドアの隙間から突き出された。ファードは近  
寄ろうとし、すぐに立ち止まらなければならなかった。

「あんまり近くに寄らないで！」

隙間の死角側に回るよう細心の注意を払った。そうして洗い物の  
入った袋や洗面用具入れを、こちらも可能な限り手を伸ばし、恐る  
恐る手渡した。

「ハマトさんに頼まれたから、私はフータの世話に行くね」

その言葉は言い終わるか終わらないかの内に、1000分の1秒  
で閉じられたドアに裁断され廊下に落ちた。ファードは暫くその場  
に突っ立ったまま、カラコ口と虚しく向こうへ転がっていくその言  
葉を見送った。やがて溜息をつき、頭を掻きながら支店長室へと歩  
き出した。

支店長室のドアを軽くノックした。ハマトの応じる声がする。  
ドアを開けると、旨そうな香りがファードを出迎えた。

部屋の様子はファードが知っている昔のまま、殆ど変わっていな  
いようだった。大きな窓を背にしたハマトの仕事机も、応接用の

ソファやクルミ材のテーブルも見覚えそのままに懐かしい。濃い茶の革を張ったそのソファに、カラとハマモトが腰掛けて待っていた。ファードや弥祐と比べると、二人の顔色は些か優れないようだ。二人の前のテーブルには朝食が3人分、こちらは出来立ての眩しい湯気を上げていた。

「おはようございます」ファードが挨拶すると、二人とも笑顔で返してくれた。

「慌ただしい夜だったけど、ちゃんと休めたかい？」気遣うカラの声は、心配したほど張りを失っていないようだった。「さ、そこへ座って」

「ええ、お陰様で」勧められるまま、ソファの空いている場所へ腰を下ろす。

「それは何よりだ」ファードのために緑茶を注いでやりながら、ハマモトが言った。差し出すお茶に頭を下げるファードの顔色を見て、遠慮はしていないと思った。「余り上等な寢床を用意できなかったからね。少し心配だったんだ」

「起き抜けて申し訳ないけど、最後の打ち合わせをしたいんだ」カラはテーブルの上の食事を指し示す。「朝食を摂りながらでね。これも済まないけど」

「全く構いません。いただきます」二人に倣ってファードも握り飯に手を伸ばした。海苔を巻いた手頃な大きさの物が、3つ皿に並べられている。他には卵焼きとキュウリの漬け物、味噌汁の具は豆腐と油揚げだった。簡単な献立だが、どの品にも人をほっとさせる旨さがあった。

「食堂のキシエンコさん、覚えてるかな？」焼きタラコの握り飯を頬張りながら、ハマモトが聞いた。

「ええ、覚えています」

ファードには底抜けに陽気で、そのたいへんな陽気さに見合う器が必要だったものか体付きもまた驚くほど立派な、中年の女性の姿がすぐに思い浮かべられた。ここで誤解の無いようしておくこと、

キシエンコは標準的な体型の人である。ただ、その体各部の寸法が、全て等しく平均の2、3倍となっている点で驚くほど立派なのである。彼女はこの国の北西の外れ、大きな内海に臨む街の生まれで、その辺りはジャイアント（巨人族）の伝承が数多く残されている地域でもあった。その妖精人自体はとても古い時代に滅んだと言われている。どっこい、その古い血は私や、他の大男大女の中に残されているんだよ。彼女はよく、食堂を利用する連中相手にそう言っていた。そう話す時の彼女の表情は、いつも決まって誇らしげだった。「彼女が用意してくれたんですか？」

「そう。さつき仕込みに来た彼女に会ってね、君が来てるって話したら随分喜んで、大急ぎで作ってくれたんだよ」

「だから簡単な物しか作れないって、頻りに気にしてたね」ハマモトを補ってカラが言い添える。

「とんでもないですよ」ファードも東支店に来た折には良く社員食堂を利用していた。彼女の大きな声は厨房から食堂の何処へでも届きそうで、彼は席に居て彼女との賑やかな会話を楽しみ、配慮の行き届いた食事も楽しんだ。大きな手が握ってくれた、自分らに食べ易い大きさの握り飯を味わっているとその頃の心遣いが思い出されてくる。ファードは懐かしくなった。

「厨房にいるだろうから、後でちよっと顔を出してあげたらどうだい。きつと喜ぶよ」

「ええ、お礼に行ってきます」ハマモトに言われずとも、ファードは元よりそのつもりだった。

その後は仕事の話になった。先ず、肝心の薬品を収めた保護ケースは既に用意されている。ファードがフータに鞍を載せるのを待ち、支店スタッフがその後部シートに固定する手筈だ。

「それから、地上との交信用に通信機を持ってもらいたいんだ」

それで地上の自分と遣り取りをしながら山越えのための風の道を探す。カラは更にファードに言い含めた。最初の道探しにかかる時間は1時間としよう、先ずそれだけフェンサリサ上空でトライして、



越えられそうになければ一旦地上に戻る。再挑戦するか否かは状況次第だろうけど、その時によく話し合って決めよう。いいかな？ 風と交渉するのには、1時間という単位は十分なものだった。ファードは承知した。

その他の段取りも一通り決まると、話題はマスコミへと移っていく。

「昨夜、僕は堂々と正門から乗り込んだよ」カラはハマモトと顔を見合わせて笑った。「むろん考慮の未さ」当然飲み込めていないファードに向かい、説明を始める。

## 第22回

カラの話はこうだ。何も情報を与えないままの方が、マスコミは却って危険だろう。ならば適切な情報を適宜提供し、幾らかでも彼らのコントロールを試みた方が賢い。弥祐らと同じように街に入るまで事情を知らなかったカラは、直ぐに手近の公衆電話からハマトトに連絡を入れ、その場で方針を固めたのだった。ハマトトは正門前に出向き、もうすぐ今回の山越えの責任者が到着する、簡単な話なら出来るとマスコミに説明、急遽開放した社屋の一室へ招き入れた。いつご近所から苦情が来るかってね、正直気が気でなかったんです、カラさんのお陰で助かりました。カラの話の合間に、実際ハマトトはほっとした表情で付け加えた。カラが到着したのは、マスコミに会見を告げたその20分後、会見場内のぐるりでは取材機器の位置取りを巡る激しい鏝迫り合いが続き、その輪の中では質問事項の最終確認が怒号となって飛び交う、ようやく訪れた取材の機会ということ、室内がまだ最前線の野戦病院のように殺気立っていた頃だった。

「部屋に一步入って、これはいなすにしても気を引き締めていかなきゃって、すぐに思ったよ」食後の緑茶を啜りながらカラは苦笑する。「ま、例えば他社との交渉の席とかで、こちらとしては是非ともまとめたい、でも相手に恩を売らせちゃいけない、そんな難しさはなかったけど。これなら使えそうだって交渉のタネを、一つ持ってたから」

「要するに紳士協定だよ」ハマトトが言った。

「そう」カラはフードに顔を隠して見せた。「君とフータは、私利私欲のため好んで今の山を越えようとしてるんじゃない。マスコミにはそこを思い出してもらって、今君たちを煩わすのはかえって損だと釘を刺したのさ。その代わり、僕が間に立ってなるべく木目の細かい対応をするって、交換条件は出したけど」

「社会的な信頼を気にする、まっとうな連中はそれで牽制しあうでしょうが」ハマモトが心配そうに言う。「中にはそんなもの、屁でもない連中もいますからなあ」

「そういうゴシップ専門みたいな連中は、もうどうしようもないよ」カラもそれは心配なのか、表情を曇らす。「この仕事が終わってからも、社としてケアが出来ないか働きかけていくつもりではあるけど……ファード、君も幾らかは覚悟しておいた方がいいかも知れない」「一先ず気に留めておけばいいのですね?」

「今の所はそれでいいだろうね」カラは頷いた。

「少なくともこの場では、口さがない連中の相手は私たちに任せておけばいいよ」

ハマモトがそう請け合うと、カラは意地の悪そうな笑顔を見せた。「確かにそうですね。私も一つ、ご教授願った方がいいかな?」

「いや、とんでもない……」ハマモトは直ぐに相手の真意を悟れたらしく、照れくさそうに下を向いた。

「何かハマモトさんの武勇伝でも?」ファードも自然と笑顔になり、聞いてみる。

「それがね」カラはまだにやにや笑っている。「僕が会見をしていると、ハマモトさんが急にその場に現れたんだ。真面目な顔付きで僕の方へつかつか歩いてきてね、僕もマスコミも、何かあったのかと固唾をのんだよ」

カラが言葉を切って顔を向けても、ハマモトはまだ恐縮したように下を向いていた。

「ハマモトさんはお耳をと言って、僕に妙案を耳打ちしてくれてね」大きな身振りでカラは続ける。「そのお陰で、僕は風乗りが『たった今』到着したことを、その場でマスコミに伝えられたんだ」

「なるほど」これは確かに愉快な話だった。ファードも膝を叩いて笑った。「一芝居打った訳ですね」

「僕は役者じゃないよ。あの時腹に一物あったのは、ハマモトさんだけなんだ」

「いや。もつと早く思い付いていれば、カラさんにも役者になっていただいたんですがね」必要もないのに、ハマモトはどこか釈明口調だ。「会見場の後の方にいた若い社員にこっそり確認したら、フアードらは今向かっている最中だと説明されたと言うでしょう。なら、この思い付きもまだ使えるなと…」

「後で辻褃合わせをしなくて済んだので、実際には感謝してるんですよ」カラは相手を宥めるように言った。「一度会見を切り上げるいいきっかけにもなりましたしね」

「マスコミは今、どうしてるんです？」ふと気になり、フアードは聞いた。

「まだ会見場にいるよ」カラはそのことで話があるんだ、と言った顔付きだ。「では出発の時間を風乗りと話し合ってきます、と言って会見を中座してきたんだ。それでどうだい。すぐに行けそうかい？」

「自分は大丈夫です」フアードは即答した。「フータの方は今弥祐が見ていますが、何も言っていないのでやはり平気でしょう」

「そうか」フアードがそう言うなら信頼できるし、弥祐はフータと一緒に暮らしている少女でもあった。カラは振り返り窓の外を見た。世界はもう今日溢れたての光に満ち始めている。次いで時計を見た。

「20分で支度できるかい？」

「出来ればあと10分ください」フアードは素早く思い巡らして答えた。「キシエンコさんに挨拶したいですし、出る前に山全体を、一度この場所から見ておきたいもあります」

「山を見るなら屋上かな」ハマモトが言った。周りが1階屋2階屋ばかりの只中にある東支店は、4階建ての社屋でも屋上は立派な見晴台だ。条件に恵まれれば、南北2000km以上にわたって連なるフェンサリサの大山脈が、それこそ視力の及ぶ限り臨まれるだろう。

「じゃあ、マスコミにはこう伝えよう」脱いで無造作にソファの背にかけておいた背広の上着を、カラは手に取った。「屋上で最後の

確認をして、その時間になったら直接出発するってね」

「分かりました」

カラが立ち上がったのを合図に、朝食を兼ねた最後の打ち合わせはお開きとなった。ハマモトは支店長室から二人を送り出す。カラは再び会見場へ、ファードは宛がわれていた部屋へ戻る前に、食堂へと足を向けた。

廊下から食堂へ通じる観音開きの扉は、もう営業時間帯と同じように大きく開かれていた。中へ入る時ちらと見ると、安物の黄みがかった白い塗装もファードが知る当時のまま、床に近い部分ばかり黒く汚れているのもそのままのようだった。急に湿度の上がった空気の中に、炊かれた米の香りがした。

食膳を受け取るカウンター越しに厨房を覗き込んだ。ああ、あの大きな背中だ。ファードの足にはきつとぶかぶかで、けれども厨房内を軽快に動き回る彼女はしっかりとサポートする、軽くて丈夫そうな白いサンダルだ。染み一つ無い、ファードには掛け布団のごとくに見える大判の割烹着だ。なんだかほっとして声をかけるのを忘れてみると、相手が急に振り返った。振り返る前からその驚きの表情が、顔に張り付いていたのは容易に想像できた。

「まあまああ」キシエンコはまるぶ様に近付いてきた。駆け出し始め、割烹着の端が台の上に置かれた包丁を引っかけそうになって、見ていたファードをひやりとさせた。途中、恐らく砂抜きの中なのだろうけれど、床に置かれ薄く水の張られた、アサリか何かがたくさん入った大きな金だらいを蹴飛ばしそうになった。幾つもの危機を無意識的に擦り抜けて、彼女はファードの手を取った。「ファードなのかい？ 良く顔を見せてちょうだい」

「落ち着いてくださいよ、キシエンコさん」右手を強く握ってくる相手の両手を、左手で落ち着けるように軽く叩きながらファードは笑った。仕込みをしていた相手の手は濡れていたが、一向気にならなかった。「間違いないくファードです。本当にご無沙汰しています」キシエンコはリングのみたく健康そうな頬を更に上気させ、幾らか

茶色味のある灰色の瞳を優しく潤ませた。久しぶりでも何でもいいよ、会社が大変なこの時に、よく来てくれたねえ。フータも元気かい。そう、それは良かったよ。最初こそ若干湿っぽかったが、気の置けない遣り取りはなんの助走も必要なく一気に始まり、いつまでも続けられそうだった。普段余り会話を楽しむことのないファードは、ついつつかり話し込みそうになった。

「あらあら。あなた、今からお仕事なんでしょう」

言われてはたと腕時計を確認すれば、余分に貰った10分は既に使い果たされようとしていた。ファードは慌て、キシエンコに暇を告げようとし押し黙る。注意してくれたのは彼女だが、努めても隠しきれていないその落胆ぶりに、申し訳ない気持ちになったのだった。

「仕事が終わったなら、また寄らせてもらいます」ファードははつきりと約束した。「その時はちゃんと食べに来ますよ」

「それならいい知らせがあるわ」そうと聞けば元より切り替えの早い彼女のこと、キシエンコは弾む声で言った。「あなたの好きだったA定食ね、また復活したのよ」

「一度無くなっただんですか」ファードがいた頃、A定食は主菜に旬の食材の天ぷらを据えた献立で、希望すれば上等な天然塩で食べられるところが彼のお気に入りだった。他の社員の評判も上々だったはずで、そんな人気メニューに一度でも見直しがあったというのは少々意外だった。

「仕入れにずっと使ってた市場がね、遠くに移転するって話が前にあったのよ」

「ああ」その話はファードも知っていた。何年か前、ずいぶんと紙面を賑わせていた話題だ。「移転先の土壌が汚染されてるのされないの、揉めてましたっけ」

「そうそう。こっちは移転を見越して仕入れ先を変えちゃってね、それでメニューも見直さなければならなかったの。でも結局、引越さなかったでしょ。旬の天ぷらも復活ってわけ」

今度来た時は、是非A定食を注文しましょう。今の旬は何か教えてもらったフードは、楽しみが一つ増えたと思った。笑顔のまま食堂を後にした。

## 第23回

時折足を速めたりしながら、宛がわれていた部屋へ戻った。部屋へ入るとベッドは既に整えられていて、昨夜使ったそのままだった湯飲みも、元通り盆の上に伏せられていた。ソファの上には防寒飛行服一式、ローテーブルの上には小さなガラス瓶と折り畳まれた大判の紙袋が一枚置いてあり、弥祐が持ち込んだ大きなポストンバッグは見当たらなかった。シャワーの後、戻った彼女が全てを整え、バッグは持つてフータの世話に向かったのに違いなかった。

ファードは着ているシャツのボタンに手をかけた。これから、8000m級のピーク上空であろうが高速で風を切って越えていけるような、完璧な身支度を行うのだ。

まずはアンダーウェアを替える。材質は綿より吸湿性に優れる化繊、細かい起毛があり暖かい。上下が繋がっているだけでなく、靴下まで一体にして冷気を防ごうという発想で、風乗りの間では頭陀袋と称されるものだった。上にはもう一枚、高山羊の毛（重さや保温性、加工性などで通常種に勝る。一般にはヒョウガオツノヒツジ）で織った、タートルネックを着る。後は、同じ高山羊の毛を限界まで密に織り込み、しなやかで肌触りも損なわれず、それでいて首元からの冷気は完全に遮断するネックガードを頭から被るのだが、そこまで装備してしまうとさすがに暑いので今はやめる。ちなみにこのネックガード、引き上げれば顔の下半分も覆うことが出来た。

革製のオーバーパンツを手を取った。ずしりと来る、懐かしい重さだった。これの外側が材料の2枚張りであることは既に述べた。元となるギンセ（銀背）ジャコウウシの皮は、加工すると優れた撥水性を示すようになるのだが、その代わり比較的薄く、引っ張り強度もやや劣る。そのための処置だった。更にこのパンツの裏側には、一本一本が中空になっているためにその空気層が抜群の保温性を発揮する、ホッキョクイタチの毛皮が全面に張られていた。パンツに



両足を通した後は、裾をたくしこんでショートブーツを履く。同じ革を3重張りにして更に堅牢化し、同じ毛皮が裏張りされた履き物だ。最後にブーツの履き口からも冷気の浸入を些かも許すまいと、化繊の短いスパッツを取り付ける。これで下半身の装備は完了だった。

オーバーパンツと同じ素材で、同じように冷気に対して激しく抵抗する作りのフライトジャケットも、暑さを避けて後回しにする。ファードは替えた衣服を畳み、ショートブーツが入っていた箱にそれまで履いていた飛行靴をしまう。それらを、弥祐が残してくれた大判の紙袋にひとまとめにした。

この場での準備がもう一つある。ファードはコップに水差しの水を注ぎ、ローテーブルの上に残されたガラスの小瓶を手に取った。茶色の瓶を傾けると、中から黄色っぽい錠剤が転がりだしてくる。瓶を小さく揺すって2錠出し、水で胃に流し込んだ。これは風乗りの間で昔から用いられている、高山病を防ぐ漢方薬だった。以前はありふれた物だったが、山越えが行われなくなって久しい今は既に入手困難で、ファードの手持ちもこの小さな一瓶だけだった。念のため残量を確認する。記憶の通り、フータに飲ませる分の余裕もまだあった。いくら飛行妖精といえども、この薬の助けを借りなければ、数千mの高空まで一気に駆け上がりはしないのだ。

薄手の牛革製の手袋と、ジャコウウシとイタチの知恵にあやかっただオーバークロブ、ネックガードや飛行帽などの小物は一先ず紙袋に入れた。辺りに目を配って忘れ物が無いか一応確認する。フライトジャケットを右肩にかけ、左手に紙袋を提げて、ファードは部屋を後にした。足早にフータのいるガレージへ向かう。

ガレージに入ってみると、相棒は既に食事を終えて寛いでいる所ようだった。傍らでは弥祐が、洗車の際にでも使う物を見付けてきたのか木製の踏み台に腰掛け、握り飯を頬張っている。彼女の献立も、自分らの朝食と同じようだった。もしかしたら、キシエンコが運んでくれたのかも知れなかった。

「ファードに気付くと、弥祐は急いで口の中の物を飲み込んだ。」「ずいぶん前に見た気はするんだけど」瞳が好奇心に輝いている。「それが風乗りが山越えをする時の、伝統的な格好なんだね」

「そんなに珍しいもんでもなかるうに」食事中で座り込んだままの弥祐が、ちよつと後も見せて、などとせがんでくる。渋々応えてやった。

「あ、そうだ。フータに体温計くわえさせておいたから。そろそろ見てあげて」

言われて膝をつき、相棒の口元を覗き込んだ。人間用のそれよりか幾回りも太く、長さもある水銀を封じたガラス管が、彼の口の端から突き出ていた。このガラスの厚みなら、スカーラル・シーの強い顎の力でうっかり噛んでも容易に砕けることはない。今は水銀を使わない体温計も出回り始めているが、飛行妖精が自然にくわえられるほどの大きさの物は、残念ながら見当たらないようである。

こちらが体温計に手をかける前に、フータは口をむくむくやって体温計を軽く口外へ押し出した。それを引き抜きチエツクする。全くの平熱だ。続けて彼の額から長く伸びた、2本の触覚状器官を手にとって眺めた。スカーラル・シーは、体調を崩すとこの器官に生えた白いにこ毛を強張らせたり、黒ずませたりした。悪い兆候の一片も見付からなかった。

「飯はちゃんと食ってたか？」弥祐に、相棒の食欲について確認してみる。

「もういつも通り」弥祐はわざと呆れたように言った。「何も問題ないでしょ？」

「ああ。俺共々、体調は万全だ」ファードはオーバーパンツのポケットを探った。「高山病の予防薬だ。ほら、飲め」相棒が開けた口に、彼のためには6錠放り込んでやった。フータは傍らの容器に鼻面を突っ込み、ざぶりと一口分の水を掬い上げ、錠剤を飲み下した。ファードは相棒に鞍を載せ始めた。途中から食事を終えた弥祐も加わり作業を急いでいると、他に人気の無かったガレージに、俄に

がらがらと音が響き始める。手を休めて見ると、ネクタイ姿の上に紺地のブルゾンのような物を羽織った男性が2人、1人は台車を押し、他方は手に荷物を提げて近付いてくる所だった。ブルゾンの左胸には、HMLのロゴが明るい空色の糸で刺繍されている。背広姿で通勤している社員も、勤務中はこのような簡便なユニフォームを着ている場合があるのだった。彼らは必要な作業のためにやって来た。フータが不快な思いをしないようにしつつもより手早く、鞍を載せ終えた。

台車の上には、黒地に角の補強金具の銀色が冷たく冴え、留め金も何やら物々しい、直方体の箱が置かれている。これがファードとフータの積荷、すなわち至急の運搬を求められている、予防ワケチンと唯一の治療薬が収められた保護ケースだった。前日風野商店で説明を受けていた通り、なるほどそれは鞍の後部シートに無理なく固定できる大きさで、ちよつと持たせてもらったが、二人乗りも可能なフータには余裕の重さだった。一通りの確認が済むと、台車を押してきた社員が鞍に固定する作業に取りかかる。

「もうご存じとお伺いしていますが」一方の社員が、手に提げた何かの機械を示しながら言う。「こちらがお持ちいただく通信機になります。ご利用方法を説明したいのですが、よろしいですか？」

通信機の本体は、ファードが想像していたよりもずっと大きく、ごつい感じの物だった。厚みはそれほどでもないのだが、縦横の大きさは子供用のリュックサックくらいあるだろうか。これではベルトに通して腰から提げたり、鞍の適当な場所に取り付けたりは出来そうになく、実際背負うようになっていた。飛行中に体が拘束されるようなものは好まないが、より堅牢、高出力と、高山上空での使用を考慮して機種を選定したと言われれば、それは道理で納得した。後回しにしていたネックガードを被り、フライトジャケットも着た最終的な装備で、体にきちんとフィットするよう、少し時間をかけて背負うベルトの調整をした。

「これ、山向こうからでも電波が届くんですか？」まさかとは思っ

だが、一応ファードは聞いてみた。

「いや。いくら高出力でも、それはさすがに」担当社員は予想通りの答えをする。「ただ、気象条件などによっては偶然に通信できるかも知れません」

ベルトの調整を手伝ってもらいながら、ファードはやはりそんなものかと聞いている。

「それから、出力が高い以外にもこの機種独特の取り柄があります。…きつくはないですか？」

「ええ。これでぴったりです」体を軽く動かして確認してみた。背負っているという感じはうまく消えたようだ。

「特定の通信機間に、専用の回線を設定できます。送信時にボタンを操作する必要がないので両手が塞がっていても平気ですし、電源さえ入っていれば、双方から同時に話すことも可能です。あ、電源スイッチはここですね」

ファードは教えられた箇所を後ろ手に探してみる。「これですか？」と確認し、その出っ張りの位置を覚えた。「両手が自由になるってというのは、ありがたいですね」

「まあ、電線の無い電話のような物です」話しながら、担当社員は持ってきた包みの中から小箱を取り出した。厚紙を芯に艶の無い灰色のビニールカバーを貼り合わせた、そんな素材で作った化粧箱だった。「更に両手を自由にする秘密兵器が、これなんですよ」楽しそうに小箱を開けた。

それらは要するにマイクとスピーカーなのだ、通信機本体とは打って変わり、拍子抜けしそうなほど小型の物だった。「これは現在、開発が進められている機種です」担当社員は説明した。「取引のある無線メーカーから評価用に借り受けて、テストしてきた物なんです。ただ、そうは言ってもうちの基準で、それこそ嵐の中から吹雪の中まで、あらゆる環境で数百時間試してきました。動作の方は保証しますよ」

手渡され、ファードはためつすがめつしてみる。最近は何耳に差

し込む物でもそう呼ぶようだが、ここでスピーカーとはつまり片耳用のイヤフォンであり、固定を確かにするためか、耳にかけるツルも付いていた。ただ、そうなるに残った物体がマイクということになって、こちらは爪楊枝よりちょっと太いくらいの、歪んだ黒い管としか思えなかった。

「これがマイクなんですか？」

「いきなりここまで小さくなると、確かに戸惑うでしょう」担当社員は理解を示した。「取り付け方をお教えしましょう。先ず、イヤフォンをお好きな方へつけて…そうですね、そしたら次に、耳にかけたツルにこいつを差し込んで…」

耳元で、担当社員がごそごそと指先を動かす音が大きく聞こえた。程なくカチリと硬い音が響いて、彼は離れる。

「マイクを端子に繋ぎました」ファードの右耳の辺りから、先程歪んだ管と称した物が今はほぼ真っ直ぐに突き出している。「お分かりの通り、このマイクは柄の部分可以自由に曲げられます。顔にちょうど沿うように、調節してみてくださいませんか」

言われた通りに調節してみる。管の先がちょうど口の端に届くか届かないか、それくらいにすると良いとアドバイスを受けた。

## 第24回

「これで装着は完了です。後はその」と、担当社員は鞍の上の飛行帽を指し示す。「帽子を被ってみていただいて、違和感がないか確認してみてください」

恐らくは通信機本体と繋ぐための物だろうが、耳にかけたツルの下方からは、プラグ付きのコードが1本伸びている。フードは先ずそれをネックガードの中に通し、背の方へ引き出すようにした。それから飛行帽を両手に持ち、いつもはやらないが、耳覆いを少し左右に広げながら頭を押し込んだ。ところが顎の下で紐を結び、耳覆いをしっかりと密着させてみても、イヤフォンは勿論のこと、耳にかけたツルも何ら不快にはならなかった。この良い結果に大胆になって、次はネックガードを両目の下辺りまでぐつと引き上げてみる。伸縮性のある布地が、更に耳覆いを締め付けてきた。それでも平気だったし、マイクの方もそこで自己主張することはなかった。「問題ないですね」再びネックガードを引き下ろし、フードは言った。

「では、動作確認をさせていただきます」フードが後へ引き出したコードを本体に差し込みながら、担当社員は弥祐を見た。「地上に置く分の機械と通信させてみようと思うのですが、やってみませんか？」

「え、いいんですか？」さつきから手持ち無沙汰だったのだ。弥祐は目を輝かせた。

「ええ。こちらの通信機を使っていたらいい」

と、担当社員がもう1セットの通信機器を準備しようとするや、「はい」弥祐は既にそれらを完璧に装備してしまっている。「やり方なら見ていましたから」微笑んでマイクを調整していた姿が、とうの昔に数十m先にあった。「これくらい離ればいいですか？」ガレージの反対側の突き当たりで、彼女は無邪気に大きな声を上げ

ていた。

「まあ」ファードは同情を隠せない。幾らかでも慣れている自分はいいが、初めての人にあれは気の毒だったろう。「たまに、ああいう事をする子なので」

「えっ？」担当社員の顔に突如表情が戻った。「ああ、ええ…あつ、そうですね」気を取り直すおまじないのように、彼は無闇に爽やかな笑顔を見せる。「チャンネルは設定してあるので、電源を入れれば通信できます」

『ファード、聞こえる？』

ファードはぎよつとした。これから通信という事で、彼は距離を隔てた弥祐へ自然と目をやっていたのだが、彼女の口が小さく動いたと見えたのは、明らかに担当社員が電源をと、何かを振り切るように声を張り上げた後だった。にもかかわらず、傍らの担当社員のその声がファードの耳に届く数瞬も前に、イヤフォンから弥祐の声が飛び出したのだった。色々と、現象の進み具合がおかしくなっているようだった。

「ああ」かろうじてではあるが、それでもファードは応答できた。流石である。「良く聞こえる。そっちはどうだ」

『なあに。その無闇に爽やかな笑顔』

ファードはたと自分の頬に手をやった。少し高音部はカットされているものの、それでも明るい弥祐の笑い声が即座に届く。

『この通信機すごいね。ほんと、すぐ隣で話してるみたい』

実際、彼女の言う通りだった。マイクの感度もイヤフォンの再現能力も実にいい。気を遣う飛行中、これらの性能不足に煩わされる心配も無いと確認できて、ファードは満足だった。

二人の社員のこの場での最後の仕事は、フータの用のため夜の前半開きになっていた裏手のシャッターを、完全に上げる事だった。既に夜は明けきり、空を薄青くする白い光が高い所を渡っている。電線にずらりと並んだ雀の群れが、今日1日の元気を余す所無く予告していた。風は幾分湿り気を帯びてきたようだが、改めて体を目

覚めさせてくれるような爽やかさだった。

「フータと屋上に行くよ」低く浮き上がり、待ちきれないといった様子で表へ滑空していった相棒を横目に、フードは言った。「そこから出発する」

「すぐ行つちやうの？」弥祐はボストンバッグ開きながら聞いた。防寒飛行服に着替えた後のフードの紙袋と、結局洗った髪が乾くまで肩にかけていた自分のタオルが最後の荷物で、今はだいぶ余裕が出来たから手早く押し込めた。「行つてらっしゃいできない？」殆ど乾いたものの櫛は入れていない髪を気にしながら、彼女は聞いた。

「いや、最終的にはカラさんの指示があつてからだ」腕時計を確認する。「まだ余裕があるな。俺は山を眺めてるよ」

「わかった」軽快な一挙動でバッグを肩にかけた。「私もすぐに行く」フードが頷いたのを確認して、階段へ走った。

待つていた相棒に跨り、一気に屋上より少し高くまで舞い上がった。どよめきが聞こえたようだったので振り返ると、正門の外で慌てふためいているらしい人影が幾つか見えた。中には大急ぎでカメラを構えている姿もある。朝食後にカラが再び臨んだ会見は恐らくまだ続いていて、大多数のマスコミは屋内にいるが、何らかの理由であそこに残っていた連中が騒いでいるのかも知れなかった。そう思うと、すぐに彼らの事など気にならなくなる。フータをゆるゆると滑らせ、屋上の一番西の端に着地した。

正面に聳え立つものから片時も目を離せないまま、フードは鞍を下りた。眼下には色も形も様々な屋根が、幅の広い連なりとなつて緩やかに下っている。それら規定で画したような波頭は緑濃い大草原まで流れ落ち、暫く緩やかに風になびいた後、彼方の山裾で再び深い森となつて沸き立つようだった。そこに在る上昇への志向は凄まじいようであり、しかしそんな途方もない勢いすら、何処かで蔽に阻まれずにはいられない。体の奥底深くに刻まれていた高まりが、その高みを見て共鳴するようだった。心打ち振るわざずにはい



られない、フェンサリサの雄大な山並みが、ファードとフータの眼前に圧倒的に在るのだった。

ファードはその峰々を凝視する。この国でも1、2を争う早さで毎朝陽光に染め上げられ始めるのである。その場所には、一見何も無いようであり、その実莫大な力が渦巻いているのだった。風を読む能力に長けた彼の目には、隠しようがなかった。山頂付近に薄くたなびいている、あれら幾筋かの雲。これだけ離れた麓から見上げたのでは、それらは峰々の上でのどかに憩う、それこそ絵画の一隅に刷かれた白絵具と常人には見えようが、その正体は尋常ならざる大気の奔流だった。相棒も今頭を持ち上げ、自分と同じものを見ている事が、確認しないでも分かった。

その力に魅入られていたようだった。何か暖かなものが俄に生じ、それではつと振り返ったのだった。見れば知らぬ間に、バッグを提げたままの弥祐が脇に寄り添うようにして立ち、空いた右手でファードの飛行服の裾を掴んでいるのだった。彼が驚いたように顔を向けても、弥祐は山を見詰めたままだった。来る途中どこかで鏡の前に立ったのか、髪に櫛が入れられているようなのが、無骨な彼の目にも分かった。

「近くから見るのは初めてか？」

ファードが訪ねると、弥祐はこくと頷く。

「でもね、テレビや写真でしか知らなかった頃から、ずっと思ってたんだ」眩しいような、寂しいような、そんな眼差しを山に向けたまま、弥祐は静かに話した。「この山のどこかに神様の家があるんじゃないかって、この山こそが、神様そのものなんじゃないかって」

会話が途切れた。こちらから見た山は東に面している。陽が高まるにつれ、大山塊はいよいよ燦爛として、対する者に言葉を失わせるようだった。

「…いつか、ファードは空の王様だねって言ったこと、覚えている？」

不意に、弥祐が訪ねた。

「うん？ ああ、覚えてるぞ」

「信じてる」正面を見据えたまま、弥祐は言った。「けど、気を付けて」

「…ああ。分かった」

屋上へ通じる鉄製のドアが、甲高く軋んだ。今度はすぐに、それに気が付けた。

「準備はいいようだね」会見を終え、その足で上がってきたのに違いない。ハマモトを伴って現れたカラの声は、引き締まっていた。

「いよいよ出発だ」

「分かりました」頷いてゴーグルを頭につけ、2種のグローブを嵌めた。ふと下の方が騒がしい気がして、ファードはそちらへ顔を向けた。

「マスコミが場所取りに忙しいんだよ」気が付いて、ハマモトが説明した。「いい絵を撮りたいだけなら余所でも良かるうが、カラマノン隊長は一号登山道のパーキングエリアにて指揮を執られるおつもりだ。そこに、あれだけのカメラを並べようというのだからね」  
「随分騒がしい中で指揮を執る事になるんでしょうね」ハマモトのユーモアに、カラは苦笑した。「でも、間近で山越えの様子を見守りたいのならやっぱりあそこだ。まあ、君たちがアタックしている間は、こちらも取材拒否させてもらうつもりだよ。集中したいからね」

肩に重たい撮影機材を担いだ者も、ハンドバッグと手帳を持っただけの者も、皆それぞれの全力で正面玄関を飛び出し、正門へ向け駆けている。正門前はちょっととしたカオスだ。出発の瞬間を収めようというのか、中には正門前に張り付いたまま、あるいはより良い場所を求めて、カメラ片手にフェンス沿いをうろついている者も何人か見受けられる。そういった連中と、会場から遅れて飛び出してきた人々が軽く揉み合ったりする。すると今度はその揉み合いを避けながら、何台ものバンが、けたたましくクラクションを鳴らし急発進していく。

その混乱を少し眺めた後、向き直り、ファードは頭を下げた。「

カラさん、ハマモトさん。色々お気遣いありがとうございます。  
お陰様で、自分もフータも良い状態で出発できます」

「うん？ なあに」

弥祐が唐突に言ったので、他の者の目も彼女に集まった。彼女は足元を見ている。フータが彼女の腿に急に頬を寄せたようなので、驚いたのだった。彼女が顔を向けたのを見ると、フータは目を細め、短く唸った。弥祐は直ぐにその合図を理解した。

「ファード」弥祐は朗らかに言った。「フータがね、私に感謝するの忘れてるねって」

「いや、そんなことはないぞ」カラにもハマモトにも愉快そうにされてしまい、ファードはついっつかり、うろたえた仕草を見せてしまった。

「うん。分かってるから」弥祐はフータの頭を撫でながら、更に可笑しい様子だった。「フータも気を付けてね。それから、ファードのことお願い」

「僕と弥祐さんも、すぐにパーキングエリアへ行くでしょう。ああ、そのまま構わないよ」カラは右手を差し出し、相手はグローブを外して応じようとしたが、構わず手を取った。「通信機のスイッチは入れておいてくれ」

ファードは了解すると、後ろ手に楽にそのスイッチを入れた。「残念ながら、私はここで留守番だ」ハマモトも右手を差し出し、ごわつく手と握手を交わした。「お前さんとフータに幸運を」

ファードは鞍に跨り、3点式の固定ベルトで鞍と自分をしっかりと繋いだ。額に上げたままだったゴーグルを両目に被せ、出発の準備は整った。

「ファード、フータ。行ってらっしゃい」

「ああ、行ってくる」

フータはぶるぶると頭を小刻みに、力強く振った。弥祐の言葉に、気持ちが入ったようだった。

「よし、上がるう」

ファードの合図と同時に、フータは空へ噴き上がった。風は今、ちょうど山の方からそよいでいる。フータはその向かい風を掻き分けはしなかった。自らの推進力に巻き込んで、一群となって山へ吹き返そうとするのだった。

## 第25回

目覚めてから思い出すまで少しかかったが、そう言えば、昨夜はリビングで眠り込んでしまったのだった。ソファとセットのクッションの一つを枕に、毛足の長いカーペットの上とはいえフロアリングの床に寝転がっていて、起きた時体がちよつと痛かった。碧はもつさりと身を起こした。掛けていた薄手の毛布を脇に寄せ、最初一気に入るうとして首筋に電流が走り、少し涙目になった後は徐々に慎重に伸びをした。

若草色の地に、圖案化された小鳥たちの姿が朗らかな遮光カーテンは、少し前の模様替えの際、その時の“主任コーディネーター”だった碧が両親から期待され、壁紙などとセットで選び抜いた物だった。それらの隙間から漏れ込んでくる光は明るい。少なくとも、夜は明けているようだった。

碧はキツチンのテーブルへ目をやった。ごく控えめに入ってくるだけの弱い光を頼りにしても、その上は昨夜整えたまま、手付かずになっているのが分かった。傘式の蠅帳を被せた下には、二人分の食事が用意されている。こうしてパジャマにも着替えず、リビングで眠りこけたままだった事からも容易に知れたが、やはり当人たちの意志に反し、昨夜両親は職場からの帰還を果たせなかったようだ。まあ余り重くない物、例えば旬の野菜のスープなんかは朝食でも構わないだろうから、朝の支度の方は幾分楽になった。

続いて壁に掛かった時計を見た。薄暗いのと、まだ両目がピントの合わせ方を思い出さないようなので読み取るのに手間取ったが、やがてそんな確認の無意味さに思い至り、慌ててリモコンを引き寄せる。テレビの電源を入れた。静寂に慣れた耳に、昨夜のままの音量が思いがけず大きく響いて、慌てて小さくした。ごく論理的に考えて、どの時間帯でも報道番組を放映しているのは国営放送という事になっており、実際碧は間違えなかった。画面には何かの会見の

模様が映し出されている。折良く、スタジオにいるらしいアナウンサーの声だけの説明が被せられ、HMLのフェンサリサ東支店にてたった今行われている会見の、生中継である事が分かった。端整な顔立ちのフォレステルフが、束ねられたたくさんのマイクの前に一人で座り、しつかりとした態度で話をしている。彼が語った一言に碧は安堵した。ファードが山越えに向かうのはこれから、この会見の後になるそうだった。気が済むと、急に喉の渴きを覚えた。彼女は周辺の空気を構成する全分子、すなわち音を伝える全てを欺く決意を固め、その通りの所作で立ち上がりかけた。にもかかわらず、すぐ傍らでむずかるような身動きがあつた。彼女はぎこちなく振り返る。幸いな事に、藍はただ寝返りを打っただけで、まだ深い眠りの中にいるようだった。

昨日の学校帰り、明日は祝日でもある訳だし、碧と藍は盛り場へ繰り出したのだった。普段の例に漏れず、昨日の言い出しっぺも藍だったが、クラス委員長の弥祐だけは移動教室がらみの仕事にぶんどられ、泣く泣く教室で別れなければならなかった。実際、藍は結構本気で弥祐に縋り、つまらないと言い立てているのが碧には分かったのだが、弥祐の方は一向本気にしてないようで、まわりついでくる藍の脳天に、軽くではあつても何発も、手刀を打ち下ろしている姿がちよつと鬼だった。

繁華街へ出た後は、いつもの街中探検だった。ブランドショップが軒を連ねる地下街を徘徊し、今年の夏物の傾向を把握したり、コーデイネイトの青写真を描きあつたりした。冷やかしに入ったレコードショップでは、二人がまだ生まれる前に活動し、新しい音楽の遺伝子を世に授けていった、四人組ロックバンドの全アルバム十数枚、例外なくリマスタリングされ同時発売された事を知った。店に入つてすぐの販促コーナーは広く、きらびやかに飾られ、足を止めさせる効果は大きかった。店内BGMに使われている曲に聞き覚えがあると思つていたら、表面の絵柄がよく見えるように並べられたレコードジャケットの中にも、見覚えのあるものが幾つか含まれて

いた。何処で見たのかは定かでないが、それらのアートワークは確かに二人の印象に深く刻まれていて、思いがけないオリジナルとの出会いを喜んだ。藍は実際に、このバンドに強く興味を持ったようだった。同じコーナーにはレコードやCD以外にも、様々な関連商品が並べられている。新しいファンのために、これらリマスターリングされたアルバムの内容解説や、まつわるエピソードなどをコンパクトにまとめた手頃なガイドブックがあり、ちょっと勉強してみると言っただけで1冊買い求めた。この店を出た後は、小腹が空いたのでクレープ屋の待ち行列に加わった。ベンチに腰掛け、先程のガイドブックを二人で見ながらのんびりしても、まだ探検の時間は残っていた。

「お」再びぶらつき始めて暫く、先にそれに目を留めたのは藍だった。「今日、何かの試合とかあったっけ？」

ど派手な電飾がまばゆい家電量販店の店先に、結構な人垣が出来ているのである。人々は一様に、夏の商戦へ向け何台も展示されている、各メーカーの最新型テレビに見入っていた。

「サッカーの試合とか？」碧があてずっぽうで言ってみる。

「代表の試合は無かったと思うけどなあ」「これくらい注目を集めるなら、やはり代表クラスの試合だろうと藍は踏んだのだった。

案に相違して、一斉に映し出されていたのは印象の薄い感じの、50歳前後の男だった。時折頭を動かすと、後頭部の辺りで髪が一房、ぴんと跳ね上がっているのが分かった。彼は何度も喉元に手をやる。その度に光沢のある品の良いネクタイは歪んでいたが、それでこのネクタイを選んだのは、きっと彼の奥さんなのだと思うせだ。彼が何らかの解釈を可能にしそうな表情や仕草をする度に、一斉にたかれたフラッシュで画面が白くなった。記者会見の模様だと分かったが、どこか殺気立っているような記者たちとは対照的に、この男は落ち着き払っている上に、良く気付く目には場を意のままに操っているような印象すら受けた。

こうして、ここでたまたま足を止めたので、藍と碧も例のゼン八

イズの会見を目に出来たのだった。ところで、二人はこの時、同じ日の昼過ぎに遠く離れたフェンサリサ大トンネルでどんな悲惨な事故が起きていたのか、まだ知らなかった。足を止めたまま、何となく複数のチャンネルからの情報に触れている内に、ようやく会見場やこの場に漂う緊張感の意味が飲み込め、顔色を変えたのだった。今ではすぐに立ち去るつもりだった事も忘れ、大勢の人に交じって会見の様子を見守った。そして再び、今度は事故を知った時以上にあっと驚かされたのだった。

「ちよっ！」藍は思わず、強く碧の右腕を掴んでいた。「この風乗りって、ファードさんちゃう!?」元HMLの風乗りで、今でも現役。ゼンハイズが言ったのはそれだけだが、彼女はファードが最後の風乗りなどと言われていることも知っている。そうとしか考えられなかった。

「うん…」言葉を濁しているような調子だったが、それは碧自身も、藍の言う可能性の高さに気を取られていたからだった。事情を知らない近くの人が何人か、藍の訴えに振り返り怪訝そうにしていたが、普段のようにすぐに気付いて友人の袖を引かないのも、別に藍を否定したのではなく、ただ考え込んでいる証拠だった。

「ああ、もう！」しかし、藍は相手の態度を焦れつたく思ったようだ。「ミュウんち行こっ！今ならファードさんも帰ってるやろうし」掴んでいた手を今度は絡めて、引きずるうと力を込めた。

「行っってどうするの?」しかし、柔らかく微笑んだ碧は人類として最も普通な立ち姿のまま、まるで自身が足下の石畳に打ち込まれた鋼の柱のごとく、力を込めた藍を逆に仰け反らせて、びくとも動かなかった。

「どうするって、そら」押したり引いたりを何度か試み、ようやく藍はここで打ち勝つのは言葉だと理解した。「色々詳しいこと聞きたいやん。今のテレビじゃいつ出掛けるのかも分からなかったし、手伝えることだっただけあるかも知らん」

「この風乗りさんが誰なのは、きつと藍ちゃんの言う通りだと思



うよ」碧は相手に頷いてから、テレビの画面を指さした。「なら今  
はこのおじさんの部下の人と、交渉中ってことなんじゃないかなあ」  
「じゃあミュウや！」藍はとにかく、推定よりも確定が欲しいよう  
だった。「あの子ならきつと、これから決まることかて知ってるし」  
「それは真ならしめること能わずかなー」碧は腕を組み、首を傾げ  
た。

「じゃあ何ならできるん？」藍はフリーハンドで引いた線みたいな  
目をして、思わず釣り込まれた。

「ミュウちゃんもきつと忙しいってこと」碧は躊躇わずに言った。

「だってファードさんが行くなら、ミュウちゃんだってきつとつい  
て行くもん」

「うつむ」相変わらず推定しか聞いてはいない。だが、こんな唸っ  
てる然とした唸り声が無意識に漏れてしまうくらい、確かに碧の言  
ったことは真ならしめられていた。藍は混乱した。「じゃあ、どな  
いせえつちゆうねん」

「明日はお休みであります！」碧は急に快活な声を上げて、親友が、  
その痛み一つ無い見事な金髪を掻きむしろうとする暴挙を止めたの  
だった。「と言う訳で、今日はうちでお泊まり会をやりましょー！」  
彼女の右手は振り上げられ、事は可決され、そうして脈絡はその尻  
尾すら見せないまま、姿をくらますことに成功したのだった。

「碧…」藍は急に口ごもる。

「いつもの気楽なご招待だよ。パパとママ、今日も遅くなるって  
言ってたし、もしかしたら帰ってこないかも知れないから」碧は全  
く清らかな様子でそう言った。

「そっか」藍は頷いた。碧は見た目と裏腹に結構芯の強い子で、そ  
れは長い付き合いで確信していたから心配はしていない。かと言っ  
て碧に人恋しい気持ちが無いわけないし、それにこの子の口からこ  
両親のこと聞きたんびに、なんやこつちも人恋しくなっただか  
らなあ。そんな訳で、状況が許す時はいつもそうしているように、  
今日も藍は誘いに応じることにした。「じゃ、お呼ばれしようかな

けどあんたんちで何すんの？」

「今日はテレビチェックかな」碧は自信を持って提案する。「そうすれば私たちが知りたいことも分かるし、やれることも出来るよ」「…そっか」。テレビの前で応援するくらいしかできんか」皆まで聞かずとも相手の意図を悟って、藍はちよっぴり気落ちした。

「大事なお役目だよ」碧は本当にそう思っている。「何かを成し遂げた後、あの時は頑張ったねって身近な人に褒められるの、嬉しくない？」

「すっごい嬉しい」藍はにっこりと笑った。「てことは、今日も夜更かしやね」

「うん」碧も満面の笑みで応えた。

「よし！じゃあさ、ちよっと着替え買いたいし、付き合ってくれら？」踵を返しながら藍は言った。

「一度お家に帰らないの？」

「時間をもつたいたいって。それにちよっど、そろそろ買い換えなきゃって思ってたところだし。家には後で電話するわ」

止める間も無く、藍はとっとうち行ってしまふ。実はこの時、碧には藍の判断を疑うところがあったのだが、仕方なしに後を追った。

「やっぱり一度、お家に帰った方が早かったと思います」

どこかメルヘンな意匠の木製のベンチに腰掛けた碧は、彼女には珍しく足を組み、腕も組んで胸を反らしていた。要するにとて無然としている。

「はい」そんな碧の前、タイル敷きの地面に直に正座するのは藍だった。大きな幾何学模様の一部を成している色タイルに額を擦り付け、要するに見間違えようのないくらい平伏している。

二人は今、とって返した地下街の中、あるランジェリーショップの店先でこんな事をしていた。立ち止まる者こそまだいないが、この光景を見て通行人の誰もが目を丸くしているのは言うまでもない。

一刻も早く落ち着いてファードらのことをチェックしたいし、学校帰りに急に決まった今日のお泊まり会、藍は現地調達で準備を済

ませお邪魔することにした。部屋着やタオルなんかは洗濯して返せば済むことやし、碧に借りればええやる。でも、こればっかはなあ。さつきも言ったように遅かれ早かれ買うつもりだったし、行きつけの店へ向かったのだった。

「そして藍ちゃん私は私が心配した通り、いつもの優柔不断さをとおつても発揮してくれたの」

普段は余り物事に拘らないようで、実は選択に臨み0から1まであらゆる可能性を脳内にリストアップ、それを徹底的に吟味し尽くすのが藍の

「だから決められない性格なんだよね？」

いつもの甘えたような声で断固と遮られ、藍は思わず身を縮めた。すると正座した膝の上に置いた手の甲に、何か冷たい物がふわりと落ちてくる。驚いて目を近付けると、それが体温で溶け切る前、確かに美しく対称的な六角状の形を認めた。驚くほど成長した結晶を多数含む、雪のひとひらだった。それはたった今、見下ろす碧が藍のつむじの上辺りに凝結させた物に違いなかったが、そうと分かっていても、なお藍には天からのお達しの手紙としか思えなかった。

「それにその言い方、よく考えると確率0も吟味してるって事じゃない」

「えろろ済んません」藍はごつごつとタイルに額を打ち付けた。「その代わり、晩ご飯は任せてや。確率1で碧を喜ばすさかい、メニューの選定から死ぬ気で行くわ」

藍はとても本気だった。碧は深く溜息をついた。

とにかく、昨日の学校帰りから様々な冒険があつて、碧は今朝りビングで正体を無くしていた自分を発見し、今は藍の寝息の調子に聞き耳を立てているのだった。昨夜の食事の用意は、その一コマだけで壮大な叙事詩が書けそうだった。そろそろとした動きの助けを借りながら碧は記憶を整理し、ようやく冷蔵庫に辿り着く。徹底的に気を遣い、力任せにドアを開けようとはせず、ドアと本体を密着させるパッキンの間に徐々に指先を差し込みながら、そつと引きは

がすようにドアを開けた。別に昨夜の内に藍に対して何かやましい所が出来たからではなく、単に彼女の性格から来た慎重さだった。2リットル入りのミネラルウォーターの容器に手をかける。容器やコップが冷蔵庫の縁やコップ立てと触れ合ったり、容器の中身をコップに注ぎ込んだりする時に、碧の口から何らかの物音が発せられた。器物が立てる硬く澄んだ音、水流が立るとくどくどという物音に、それらとは逆位相の音を口まねしてぶつけ、消音を試みているのだった。苦勞してコップを満たした彼女は、藍からは少し離れ、テレビにはずっと近い場所にふわりと舞い降りた。いわゆるトンビ座りで腰を落ち着け、一口冷たい水を含んでほっとしたのも束の間、またテレビに驚かされ、むせそうになった。

画面の中が俄に慌ただしくなったのである。碧は更に音量を絞らなければならなかった。そうして見守っていると、先程までの会場の場面が急にスタジオへ切り替わり、待機を解いたアナウンサーは、理解して伝えようとすれば次々と差し替えられる手元のメモ類を前に、止揚の適用を思い付いたようだった。彼はついに何事かを断片的に伝え、面目は保たれた。カメラは再びフェンサリサ東支店の現場へ戻された。もう一度会現場を映し出すのかと思いきや、今度のカメラは屋外にあった。それが急に上へ振り上げられる。ワントンポ遅れてカメラがぐっと寄れば、碧の胸は高鳴った。支店社屋の屋上よりも少し高く、スカーラル・シーに跨った男が浮遊している。サインを貰った時の印象とはまるで違っていたが、彼女にはすぐ、その男がフードだと認められた。「藍ちゃん！」画面を見たまま大きく呼んだ。既に別の気遣いが必要な段階だった。「フードさんだよ！」

ところが、碧は暫くもどかしい思いをさせられることになる。局の方でも何かと混乱があるらしく、慌ただしい遣り取りだけがマイクを通じて聞こえてくる事もあれば、カメラが無意味と思える頻度で切り替えられ、今の所は本当に意味の無い、お花畑の静止画も何度か挿入された。先程までフォレストルフが座っていたはずだが、

今は無人になつた会見席が一瞬、見た者に見たと意識させずに深い印象を残す、あのやり方で映された。カメラが支店の正門前へ戻ってくる。これだと碧は身を乗り出すが、カメラは屋上へ向けられなかつたし、彼女もそれに気付けなかつた。離れた社屋の正面玄関から、わらわらわらわら人が溢れ出して来る。皆一様に憑かれたような形相で、正門目掛け疾走して来る。守衛のような身なりの男性が転げるように道を譲り、それまでは固く閉じられていたはずの正門の巨大な鉄扉が、その場に像を残しながら開け放たれた。人は奔流となり、正門前にあつたカメラは揉みくちやにされた。でたらめに回転する世界の内から、怒号やタイヤの軋む音が断続的に聞こえてきた。世界は奇跡的に平衡を回復する。踏ん張つたカメラが、ようやく屋上の様子を捉えてくれた。すると、いつの間にか人影は4人に増えていて、中の一番小さなそれに、ぽかんと混乱を見守つていた碧は正気を呼び戻された。画面にかじりつくのと、ファードが鞍に跨つたらしいのが同時だった。やつぱりついてつたんだね、と小さく語りかけた少女と、短く言葉を交わしたようだった。彼と相棒の飛行妖精は、跳躍するように青空へ舞い上がった。そのまま真っ直ぐに、フェンサリサ目指して飛んでいった。

碧は余韻のようなものに浸つていたから、それに思い至つたのは余程経つてからだった。そおつと振り返る。藍はこちらに背を向け、かけてあげた綿毛布もどこかへ押しやり、ゆつたりとした野暮な部屋着に包まれていてもなお羨みたい、ウエストからヒップにかけての艶やかな曲線をあどけなく晒し、まだ安らかな寢息を立てていた。「私は起こしたよ？」背中に向かって、碧は言い訳した。「でも絶対、後で文句言われるんだよね」

胸躍るシーンを見たばかりだというのに、碧は少し憂鬱だった。

## 第26回

陽は畳んだ割烹着を棚の決まった場所に戻し、一息ついた。フードも弥祐も御山へ出掛けた今朝は、いつ家の仕事を始めても誰にも気兼ねがいらぬ訳だから、久々に彼女の自然に従い早くに床をあけていたし、特に食事は用意も片付けも一人分で、普段は店を開けた後に少しずつ済ませていくようなことまで全部終わらせてしまつても、なお開店にはまだ余裕があつた。それでも陽は構わなかつた。緑茶を淹れると、居間のテレビの前に腰を落ち着けた。

毎朝テレビを点けぬ彼女ではないが、それも都心の方へ出掛ける孫たちのために交通機関の状況を確認したり、ちよつと天気予報を見たいがためで、こんな風にその前に腰を落ち着けるなど、そもそも他にテレビを必要としない陽には珍しいことだつた。このような訳なので、知りたいことが知られれば拘りはなく、電源を入れて最初に映つた局でも山越えの話題を扱っているようだつたから、そのまま見ることにした。すぐに感じたのは、映し出される様子の中に漂うどこか不穏なもの、しかも予兆ではなく余韻だつた。何かのトラブルを想像させるが、映像からも音声からも筋道だつた情報はいづつかな提供されない。陽は遂にリモコンに手を伸ばそうとした。だが、一瞬早く叩き出された音声に打たれて、思わず手を止めてしまつた。

『あつ！』

画面には見えないが若い女性の叫び声で、レポーターが手にしたマイクを忘れ、うっかり口にしたのかと思われた。老いたりとは言え、陽の耳はまだまだ達者だつた。露骨に顔を顰め、少し手荒く音量を下げた。

『風乗りです！ 風乗りが今、飛び立ちました！』その女性レポーターは、喋ることだけは忘れていなかった。『HMLが談話の中で触れただけで、その姿は一向に見えませんでした。風乗りは確か

に、あのようにならなくても存在していたのです！」

ちゃんと聞いていたら、この最後のコメントには苦笑したところだろう。しかし陽は、もっと大事なことに気を取られていた。記憶に残る姿とは異なり、フェンサリサ東支店の社屋は木造2階建てだった彼女の現役当時から、もっと丈高く、頼りがいのある外観に様変わりしていた。その分暖かみは失われたようだが、社屋の上にも寿ぐよような青空は一杯に広がっている。そして澄み渡った新しい青さの中に、いのちを輝かせた白くしなやかな風が、待ち兼ねたように放たれたのだった。僅かに遅れ、カメラがフータの姿を大きく捉える。ああ、スカーラル・シーはやっぱり美しい生き物だ。そう思っ  
て直ぐ、随分久しぶりにそう感じたとき、少なからず驚いた。人の営みなどとは決して関係のない所で、フェンサリサは佇むようだった。御山に向かい、フールドとフータは真つ直ぐに駆けていったが、陽の目には些か気負いすぎのようにも見えた。

近年益々人口の集中化が進む首都では、例えば5階建てくらいの規模の集合住宅が複数棟集まって形作るような新興住宅地が、郊外へちよつと足を伸ばすと頻りに目につくようになっていく。こんな蜂の巣のような住居は、特に都心部に新しく仕事を持った新市民たちの、格好の我が家となっていた。故郷を一人遠く離れ、“時の三精霊”を職場とするファン・ミヨンも、そんな集合住宅の一戸に住んでいる。

祝日の今日も、彼女には仕事があった。世間が休みの日の出勤という、通勤は楽だけど来館者は多いでしょ、それがね。ままたらぬ現実を習慣的に嘆じてみたり、特に今朝のような上天気の場合も少し我が身を悲劇化して支度をするものだが、今この瞬間の彼女は既に仕事に臨むファン・ミヨンのように、活気と集中力にみちみちて、小走りに動きながらも髪をきれいにまとめられたし、弁当に詰める卵焼きの焼き加減と味付けは完璧、点けっぱなしのテレビも一語一句聞き取れていた。常よりは随分早起きした彼女は勿論、

今日行われることになるであろう、ファードの山越えに心浮き立たせているのだった。新たな混乱のタネにならないようにと配慮してか、HMLはファードやフータの詳しい個人情報やマスコミに公開しなかつたようで、各局各紙誌は彼らを“X”と呼び、中には実在を疑う声さえあるようだが、真実を知るファンは少なからずこの状況を楽しめた。いや、マスコミよりも気の毒なのは、幾らかでもファードらのことを知る“時の三精霊”の同僚たちだった。何人もの見知った顔が、後一步で真実という場所で立ち往生しているとしたら、意地が悪いのは承知の上で、それでも彼女は口元に、作家めいた笑みを浮かべずにはいらなかった。その時、聞きたいと思つていたことをはつきりと聞き取つた。現場で山越えの指揮を執るHMLの役員が、この会見が終わり次第風乗りは出発すると、テレビの中で明言したのだった。

その時までに残された時間が正確に読めるかのように、彼女は落ち着いた手付きで弁当の用意を終え、トースターにパンをセットし、ベーコンエッグを焼き始めた。いつものように丁寧にコーヒを淹れてもまだ余裕があるはずだったが、急に混乱した内容を喋り出したテレビに対し、彼女は自分の落ち着きを見習わせようと、暫くの間じつと右の掌をそれへ向けて突き出していた。テレビは物事の筋道を思い出す。満足げに頷き、小さな輪を描くようにコーヒの挽き粉に熱い湯を注ぎ始めたら、今度はそれが、唐突に絶頂に達してしまつた女性の叫ぶ、あの愛の神へのごく短い祝詞を真似たような気がして、真つ赤になつて睨み付けた。すると清らかな白さが、さつと彼女の疑念を払つたようだった。急いで寄つたために一瞬ピントが外れたが、カメラはすぐに、飛び立ったファードとフータを明瞭に捉えた。フェンサリサは東支店からもなお距離を置き、そうであつても覆い被さつてくるような威容を見せていた。朝日を浴び、その山頂付近の万年雪は白く燃え立つようで、しかし飛行妖精の白い体も、それを遠景に一層誇らしく目に映えた。南に大きく取られた窓へ、ファンは目をやった。首都の空も気持ちよく晴れ上がった



いる。遠いけれど一つに繋がった空の下で、たった今、風乗りが完全に息を吹き返そうとしていた。ファードと仕事をし、展示の企画や作製に関わり、風乗りの歴史に殊の外興味を持つ彼女の胸が、高鳴らない訳はなかった。

ファンの完璧な朝は、ここで遂にけちがついた。優雅に注ぎ足そうと視線を落としたその時だ。三穴のドリッパーから、お湯はとうの昔に落ちきってしまった。

南北二千数百kmを貫くフェンサリサ大山脈周辺の地形として、このような起伏のなだらかな、途方もなく広い草原は珍しいものではなかった。総面積で言えば、他の地域の同様な草原帯と比較して、この辺りの広がりには決して大きな方ではない。だが、それでも横切っていくとなると、一直線に空を行ってもかなりの時間が必要とされた。

ファードとフータは、草の海原を帆もかけずにすいすい渡っている。一枚の広がりである実際の海が、その面に様々おもてな表情を見せるあの不思議と同じに、足下の草の海も決して単調な緑の連なりではなかった。天然の芝地の広がりには、懐かしい眠気を誘うようだった。様々な色合いの草花には集団生活者も個人主義者もいて、比較的狭い区域に密生するもの、たなびく霞のように長く広がるもの、新天地へと果敢に点々と広がっていくもの、緑の宙そらの中の星団や星雲や個々の星々を思わせた。黒々とした灌木の小さな茂みが、所々に、忘れられた古い生き物のようにうずくまっている。更に希には、大木の姿もこちらに1本、あそこに1本とあって、それらの狼煙台は続く先に我が王国があることを示していた。草の丈が急に高くなった。昨夜渡ったマハージアナ川が、ここでは川幅も狭く、酷く蛇行して流れている。薄灰色の背と、黄色のくちばしを持った大きな水鳥たちが群れていた。点在する木の上に、彼らのものと思われる細枝で編んだ粗末な巣が見て取れ、適した木が少ないために、住宅事情は首都の利便な地域より余程逼迫しているようだった。三日月型

に行き場を失ってしまった水にも、どこか朗らかさが感じられた。上空を行くため直接目には出来ないが、足下の草原は無数の小さな世界に分かれていて、その世界の各々は、互いに違った小さな命を驚くべき数で隠している。生命の賑やかさは、風に薫るものだった。風乗りには手に取るように分かるのだった。

起伏のあつた地形が、いつの間にか緩やかに上るだけになっていた。フードとフータは、地表との間隔は一定に保つ感じで、標高が上がるなりに徐々に高度も上げていった。足下の景色が一変した。山裾の森林地帯へ差し掛かったのだが、この森は少し手前から次第に木立が増え始めて、というような始まり方をしない。本当に見事に、草原帯と一線を画していた。安全な高度を保って樹冠の上を飛翔していく。この高さをこのスピードで進んでいくと、それらの形や色合いを大きく捉えた変化が、分類写真を一枚一枚繰るように把握できた。標高が上がるにつれ、優勢な樹種も変化する見本だった。やがて樹冠から、沸き立つようだった緑が速やかに退いていく。代わって木々の枝先には、黄緑や赤や茶といった色合いが、細い絵筆で点々と打ったように目立ち始めた。全て今年生まれの葉の子供たちで、標高もここまで高くなると、今がようやく葉の開き始める季節なのだった。もつとも、遠くには葉に先立って花をつける木も見える。平地では花見の頃もとうに過ぎたが、白味の強い野生種の花もまた見事で、遠目に散る様は初夏の粉雪だった。

ぐんぐん進んで行く。陽の下にこぼれだしたばかりで、風にそよぐ色とりどりの稚魚のようだった若い葉の群れも、いつの間にか見られなくなってきた。この辺りでは、まだ固く冬芽の中に閉じこもっているのだった。だんだん木々の姿がみすばらしくなってくる。種類の違う木が優勢になってきたのかとも思うが、実際には少し手前から目にしてきていたのと同じ樹種が、標高の低い場所ではもつと堂々と天に突き出ていたはずなのに、この辺りでは十分に成長できないうちで枯れた木だらう。目立って白っぽいのは立ち枯れた木だろう、その数も増えてきた。やがて、丈の高い木はふいと姿を消してしま

う。入れ替わって現れたのは地を這うような樹種で、それらの合間に白けた灰色の岩がごろごろした、荒々しい山の素肌も覗くようになってきた。その平伏したような木々は、見掛け通り直ぐ岩場に場所を譲ってしまった。小さな影がちらつと目の端を動いて、顔を向けた時にはもう見えなかった。細長い姿に思えたから、ごろつく岩の隙間に獲物のネズミの姿を探す、小さなイタチの仲間かも知れなかった。植物は、そのような小動物や鳥の目ばかりを楽しませている、高山の草花が点在するだけになっている。森林限界線を越えたのだ。風の質が変わり、冷たく鋭くなってきた。フードはネツクガードをぐいと引き上げ、最後まで外気に晒していた顔の下半分もここで完全に覆った。少し下ろしてあったフライトジャケットのジツパーも、しっかりと閉め切った。

風で吹き千切れ、斜面を駆け下りてきた小さな雲の欠片を、何度か突っ切った後だった。単調なノイズを微かに漏らすだけだったイヤフォンに、確かに変化があったようだった。意識の必要なだけをそちらへ向ける。

『フード、聞こえるかい？』

カラの声だった。

## 第27回

『感度良好です』

カラの呼びかけに、ファードはそう応じてきた。カラは軽く驚いて、それから満足そうに頷いた。彼もファードと同じイヤフォンとマイクのセットを使って通信している。相手が躊躇せずに戻してきたのが分かったので、安心したのだった。

「このイヤフォンとマイク、便利だけでなく、性能も申し分なさそうだね」実際、相手が目の前にいるように話せばそれで済むようだったし、両手が自由になるのは、今は首から提げている双眼鏡を使う時以外にも、何かとありがたいはずだった。「それに感度だけでなく、今の所は視界も良好だ。ここからでも君たちが良く見える」カラの傍らには、キャンプ用の折りたたみ椅子に腰掛けた弥祐がいるが、時折双眼鏡を目に当てている彼女とは違い、彼はまだ肉眼でファードらの姿を追っていた。

「ところで、忙しくなる前に一つ伝えておきたいことがあるんだ」自然と微笑んでいたカラは、表情を改め言った。「この遣り取りだけどね、急に電波に乗ることになったんだ」カラの前には、やはり野外で使うような折りたたみ式のテーブルが置かれていて、その上には通信機本体と、丁度先程の会見場を再現したように、何本ものマイクが束ねられ設置されていた。通信機の二つの音声出力端子の内、勿論一つにはカラの使うイヤフォンが繋がれているが、他方からはただケーブルが伸びていて、それは一つの入力を多数の出力に振り分ける機器に接続されていた。カラの発言は、マイクを通してテレビやラジオの電波に乗る。一方ファードからの通信は、一本のケーブルから多数のケーブルに振り分けられ、やはり各局の電波に乗せられる。

カラの周辺は今喧噪に満ちている。全てはマスコミの群れが、活発に動き回っている結果だった。首を巡らせて見れば、大型の中継

車を含む何台もの車がずらりと鼻先を並べていて、壮観な眺めだった。無数のカメラも放列をしいている。一眼には長大な望遠レンズが取り付けられ、担がれたテレビカメラは元より大きく、それらが一心にファードらに向けられている様は、息を潜めて合図を待つ狙撃兵（しかも砲兵だ）たちを思わせて、どこか物騒だった。あちこちでレポーターの声高な調子が響くかと思えば、発電機の回る音も喧しい。そんな電力は、通信機からの微弱な入力を複数へ出力するため、増幅するのにも用いられていた。走り回っているのは主にラフな服装の若者で、裏方仕事に余念が無いのだろう。要するにこれは一つの巨大な熱意だった。この熱意がファードとの遣り取りを公開して欲しいと言ってきた時、別に他人に聞かれて困ることは無かったが、この場でのマスコミとの関わりを出来るだけ避けたいカラにしてみれば、出だしでのつまずきを思わせる事態だった。しかし、カラはここでもしぶとく交渉力を発揮して、その要求は受け入れるが、遣り取りを聞けるなら今何が起きているか賢明な諸氏には良く理解できるだろうし、自分は監督に集中したくもあるので、風乗りが山越えを試みている間の自分や他のスタッフへの取材は御免被りたいと、言葉巧みに相手を説得した。その上で、今朝方弥祐と一緒に本社からやってきた若いスタッフたちに、彼や弥祐の周りをそれとなく囲むように居てもらっている。今の所、共存はうまくいっているように見える。だが、それも表面上のことで、気詰まりな居心地の悪さに、常に背中を突かれているような気分だった。

「僕たちは予定通り、一号登山道のパーキングエリアにいる」気を取り直して、カラはそう告げた。「山開きが今週末で良かったよ。とにかく、君たちをカメラに収めたい人たちで、この広い駐車場もほぼ一杯だ」

一号登山道は、フェンサリサを形作る比較的低い一山へ入る道で、昔からトレッキングコースとして人気が高く、そのためその入り口に接する敷地には、大型の観光バスも含め数十台が駐車できる第1駐車場と、その周囲には宿泊施設や飲食店、土産物屋などが建ち並

んでいる。コンクリで一段高く土台を作った駐車場の、それを囲む手摺りに寄れば、足下には先程ファードらが越えて行った草原が一度なだらかに下り、再び高くなっていく先にフェンサリサの高い峰々が臨まれて、視界は申し分なく、落ち着いて山越えを見守るには都合の良い場所だった。ただ広さで言うと、今回の取材拠点となるには些か手狭だったようだ。山開きを数日後に控え、シーズン中にしては営業していない店舗も店を開けているようだが、目前の時ならぬ活況ぶりに、そういった人々も目を丸くしているに違いなかった。『そうですか』

しかし、カラからそう事情を聞いても、ファードの返事は普段通りだった。カラは頼もしさを感じた。重要な荷物を預かり、風乗りとしての晴れの舞台とも言える、あの高い峰々を久々に前にしても、ファードは非常に落ち着いていると思っただけからだ。

「今の状況を報告して欲しい」自分も端的に物を言うように努めることにして、カラはそう送った。

『時折鋭くなりますが、風はまだ大人しく、視界も良好です』

「二人とも体調はどうだい？」

『問題ありません』

もう豆粒ほどにしか見えないとしても、カラのすばらしく鋭い目には、岩肌の灰色と昨夜降ったばかりかも知れない雪の白さ、フェンサリサの屋根付近特有の単調な色彩の背景すら苦にせず、フータの白い輝きが紛れることなく見分けられていた。その姿を暫く追っている。すると、それまで順調に高みへ伸びていくだけだった飛跡が、急に右へ逸れ、一つ大きな輪を描いて再び上へ伸び始めた。かと思うと、今度はゆっくりと後ずさり、踏みとどまって揺らめき、押し戻すように前へ進み始める。いよいよ、1年を通して吹き荒れ続ける乾いた嵐の、その勢力帯の一端に触れかけたのだ。もうそろそろ、ファードとフータを煩わせるのは止した方が良かった。

「取り敢えず1時間だ」最後に念を押すことを忘れない。「そこにはきつと、まだ語られていない風も吹いているんだろうね。くれぐ

れも気を付けて」

『了解』

それきり、イヤフォンから漏れた微かなノイズが、粉雪のように耳底に降り積もっていく。

藍がどこからリビングに駆け込んできて、テレビの前に立った。これでもう何度目になるだろう。

碧に遅れて目を覚ました藍は、今が朝の支度において最も動きが活発な時である。すなわち顔を洗う。碧の両親がいつ帰宅するか分からないので、元の制服に着替える。その度に洗面所（風呂場と隣接して脱衣所も兼ねている）とテレビの前とを、ばたばたと往復しているようだった。しかし、その回数は尋常でなかった。彼女は普段から、素直な長い髪のことやあそこに三つ編みを散らばらせ、それは毎朝の気分次第で太さや本数が変わり、基礎のストレートヘアに効果的なアクセントを付け加えているが、見ているとリビングに駆け込んできてテレビの前に立つ度に、そのトレードマークは丁度一本ずつ加算され、数はいつもより多そうだった。碧から借りていたジャージの上下を何故か上だけ丁寧に畳んで持ってきて、同じく丁寧に畳まれた片割れを持ってきたのは、三つ編みが一本増えた後だった。かと思うと、何の脈絡もなく朝刊を手に戻ってきたりする。さつきから気になって仕方がなかったのだが、片方だけ履かれていた白いソックスがようやく揃ったのは、その後の事だった。

碧はというと、彼女の方はもうとつくに身支度を済ませ、今は親友の様子とテレビとを交互に見ながら、朝食の準備をしていた。ばたついている友人を見るとちょっと気の毒に思うが、また絡まれるのを恐れて余計な事は言えないでいる。藍が目覚めてから10分にも満たない間の一連の出来事は、碧の遺伝子に深く教訓の刻印を施すもので、彼女の後に続く子々孫々は、始原の直感からも明らかにある種の物事への対処を確実に他の血筋よりも上手くやれるようになったはずだった。始原の直感というのは自身の子宮がそう自覚し

ているという、根拠としては聖のものであってもちよつと気恥ずかしくて口には出しにくい、ある種の靈感を元にした確信だった。とにかく昨日から、エンタテイメント映画の、それも刺激への指向が最早怪物化してしまったようなそのヒロインに、突如抜擢されたような気分だった。碧はそこに救いがあると信じ、朝食の支度にいそしんでいた。すると背後で、藍がいきなり大声を出したのである。味見をしようとして少量すくった熱いスープをがっつと飲み込んでしまい、目の前が暗くなりかけた。

「見てみ！」

滲んだ涙を素早く拭って振り返った碧が目にしたのは、親友が普段から惜しげもなく見せてくれる、余人にはなかなか難しい無垢な笑顔だった。藍はテレビを指さして、とても上機嫌だった。

「フアードさん、もうあんな高い所まで行ったわ。これならけっこう楽に越えられるんとちゃう？」

藍は心から胸躍らせていた。その様子を見て、碧も急に気が楽になった。先程からどうしても納得がいかず、迷宮入りの様相を呈し始めていた昨夜の残りのスープの味の再調整が、突然上手くいった。

「藍ちゃん、運ぶの手伝って」頷いてガスコンロの火を止めると、碧は声をかけた。

「お。今日の元気の素、できたか」藍が駆け寄ってくる。

「うん。いっぱい食べて、いっぱいフアードさんのこと応援しよ」

今日が平日ならば、あと暫く時間が経てば、正面の広場を横切る通勤や通学の人々の姿が、ぐつと増えてくる頃合いだった。つまり、開館時間にはまだ早いはずなのだが、“時の三精霊”の正面玄関に当たる二列に並んだ回転ドアの一方から、当館の制服を着た男性が一人、忙しげに出入りしている。最初出てきた時、彼は入館口周辺をざつと確認してみた。一度引っ込んで出てきた時にはほつきと取り取りを持っていて、ここで働くようになって初めてのことだが、手近な所をざつと掃き清めた。満足すると、今度はコンセントの付



いたドラム型のコード巻き取り器を提げて現れる。コードを壁伝いに、または回転ドアの邪魔にならないよう工夫して引き伸ばし、ガムテープで地面に固定しながら、三度館内へ消えて行った。正面玄関脇のその場所で使う何かの機器のために、電源を延長しているようだった。

程なくして同じ建物正面の、しかし回転ドアからは少し離れた位置に設けられた搬入用の扉の鍵が、中から開けられた気配がした。普段は閉ざされているその観音開きの大扉が開くと、先程の男性スタッフが先ず現れ、続いて別の男性スタッフが大きな台車を押しながら出てきた。台車には、一般の家庭ではちよつとお目にかかれないう大画面の薄型テレビと適当な台座、縦に細長い2本のスピーカーが載せられていた。台車の脇では一人の女性スタッフが、進む荷物に合わせてそれらを両手で押さえている。他の二人と同様、生き生きとした表情で作業を進めている彼女は、ファン・ミヨンだった。

自宅で感じていたように、今朝の彼女は、今一番注目を集めている重要で繊細なプロジェクトに、細い線ながらも連なっている関係者だった。その誇りはささやかなものであっても彼女の足を軽くして、職場について初めて気が付いたが、いつもよりだいぶ早めに出勤していた。ところが、ちよつと浮かれ過ぎかな、と反省しかけた矢先に、彼女よりもつと早くに来ていたスタッフが何人もいたことを知って、ああやっぱりね、可笑しさが込み上げて反省気分など何処かへ行ってしまったのである。同僚たちは職員用通用口の前でどこか不安げな顔を向け合い、身の置き所がないといった様子で立ち尽くしていた。そのグループの中に真実と通用口の鍵を持ったものが居らず、そこでそうしている外なかったのだ。彼らも関係者の列に加えることについて、ファンは何の異存もなかった。あの風乗りはやっぱりファードさんだったんですね！ 事情を話した後、知りたくて仕方がなかったことを聞いた誰もが満足げな笑顔になり、困難な仕事に敢えて立ち向かった同僚の行いに目を輝かせた。風乗りの展示のある4階で、ファードをフロアリーダーとして働く若いス

タッフたちの反応は特に強く、随分勇気を得たようだった。彼らだけでなく、働くフロアや年齢性別に関係なく誰もが高揚している様子で、ファンの胸も自然と熱くなった。今日はファードさんが急にお休みすることになったけど、みんなで頑張りましょうね。異論はなかった。いつにない結束が生まれた。

そうして意気揚々といつもより早めの開館準備が始まったが、どうせなら大型テレビを正面玄関前に置いて、道行く人にも今回の山越えの様子を見てもらったらどうでしょう、出来るなら我々の解説付きで。スタッフの一人がそう提案した。風乗りの展示を展開する当館としては、久々に復活し、そして今後二度と目にする機会がないかも知れない山越えという事件には、当然期待される態度で臨まねばならなかった。テレビ中継を展示にしまおうというのは、そのほんの一例だ。外で解説をやるならシフトを作り直しますよ。その手を挙げたのは、今日はファードに代わって4階のリーダーを務めるベテランのスタッフだ。テレビの近くに告知板や、簡単な解説ボードが有った方が良くない？ 黒板POPなら任せてよ。解説ボードは白板に要点を書いて、細かい所はいつも配ってるプリントで補えるだろう。ねえ、チラシ作ろうよ。駅前とかで配れば、もっと人が来てくれるよ。それなら俺たちも手伝えるぞ。早めに始まった開館準備と言っても、今出たアイデアを全て形にしようとすれば人手は多いほど助かった。持ち場の準備を終えた4階以外の担当スタッフたちが、続々と応援に駆けつけた。あつ！ 映像資料の保存は？ 大丈夫ですよ、資料部の人たちがやってくれてますから。祝日の早朝だから、人通りがまばらであるのは否めない。しかし“緊急展示”を伝える、ガリ版刷りの急拵えのチラシを抱えた数名は、迷いのない駆け足で人通りのありそうな方面へ散っていった。大型テレビの周辺が、急ピッチで展示の形になっていく。電源が入れられた。ファードとフータが急斜面を駆け上がっていく様がすぐに大寫しにされ、2本の外部スピーカーが朗々と現場からのレポートを読み上げ始めた。準備が整ったと判断すると、ファンはもう一

人の女性スタッフと協力して、館前の広場を横切っていく人々に声をかけ始めた。展示の趣旨を説明すると、今日の山越えを知らない人もちらほらいたが、かつて風乗りがあの高空を飛翔していたことは誰もが知っていて、風乗りという職業を懐かしみ、その突然の復活に驚き、または期待し、風乗りを繰り手にして自身の記憶のページを暫しめくるのも例外がなかった。夜勤明けということでも疲れた表情をしていた中年の男性が、急に表情を蘇らせ、テレビに見入り始めてくれたのが特に印象的だった。

## 第28回

一旦カラとの通信を終了した直後くらいから、フータの体を軽く掬っていくような風が断続的に来始めた。この辺りで一番低い、つまりこの日の山越えの開始点として当然真っ先に選ばれるべき尾根は、目前だった。

HML時代に幾度も訪ねたその尾根までは、今も通い慣れた道だったし、風もこの程度なら何ら対処に困るものではなかった。小さな船を波間に浮かべて、ゆったりたゆたっているようなのどかさだ。斜面は次第に垂直に近い険しさとなり、それに連れてフータも徐々に垂直上昇の姿勢に近くなっていく。また似たような風が来た。フータ自身の内発的な風による上昇に、ゆっくりと外来の風が持ち上げを加え始める。その瞬間、フータの目の前にあるフータの首筋の毛が、ざつと一気に逆立った。フータはとてつもなく強い悪寒に背筋を貫かれて、あつと身を竦ませた。

その時には、もう岩の斜面に激突する寸前だったのである。斜面側の大気だけが一瞬で大部分抜き去られて、その極低圧の空間にひゅつと吸い込まれたみたいだった。ストローで小さな水滴を吸い取るのは容易いが、二人は丁度その水滴だった。フータが瞬発的に最大の能力を発揮して、飛膜の下に離脱のための大風を起こした。間一髪で墜落は免れたが、あれほどの離脱行動だったというのに、よくよく見れば岩壁はまだぞつとするほどの近くからもたれかかってくるようだった。フータは息を飲んだ。体を芯から揺さぶるような、低く重たい唸りが轟いている。フェンサリサもこの高所となれば、平地では汗ばむような季節になっても新雪が無くはない。雪崩か。フータは山頂を振り仰いだ。

雪崩れてきたのは雪ではなかった。信じがたいほど巨大で重い、空気のかたまりだ。この大気塊はどうしようもなく転がり落ち、岩壁を幾度も槌打ち、その深甚な嘆きの様が轟きとなって脊椎を軋ませ

るのだった。このままでは押しつぶされる。ファードは咄嗟にフータを横へ滑らせたが、とても躲ききれるものではなかった。乾いた大滝が二人を落下に巻き込んだ。案に相違して背中に伸し掛かる力が感じられず、一層肌が粟立った。むしろ体が浮き上がるようで、混乱していると今度こそ上から体を押さえつけられた。ただし、大気塊に潰されたのではなく、爆発的に吹き上げられたためだった。一体どんな理屈の風が、自身は轟然と落ち、飲み込んだ物は高く弾き飛ばせるというのか。フータはでたらめに体を振り回され、為す術が無かった。ファードもきつと相棒がそうしているように、歯を食いしばってこの状況をやり過ぎそうとした。その間、何が彼の左腕を強く掠め、弾いていったようだった。

酷い耳鳴りに襲われ、ファードはどんなに振り回されようとも握っていた鞍のアームレストから、思わず手を放しそうになった。そうしていたら煽られて上体を持ち上げられ、低く伏せた元の姿勢に戻るのに、常識では考えられない苦労を強いられていたかも知れない。苦痛を堪えるために自然と見開いた目は、光の霧雨が紗をかける、全くおとぎ話の挿絵のような青空や稜線を見ているが、彼を打ちのめさんとする耳鳴りや瞬間的に全力を出したための体の痛みは現実の領域で、五感が引き裂かれたような違和感が凄まじかった。時間が経つにつれて、空間を覆ってきらめく光の粒は、どうやら先程の空気雪崩で巻き上げられた、大量の粉雪らしいと考えられるようになった。そう思う頃には、耳鳴りもだいぶひいていた。

吹き飛ばされている間に何かが強く弾いていた、左の二の腕の辺りを確認した。丈夫な皮革製のフライトジャケットのその部分が鋭い刃物で一息になぎ払ったようにすっぱりと、10cm近くにわたって切り裂かれていた。風に吹き飛ばされた、角の鋭い小石か何かの仕業かも知れなかった。「フータ、怪我はないか」戦慄を隠せずには「ファードは相棒に問うた。フータは力強く首を横に振り、問題は無いと言ってきた。幸運に感謝せずにはいられなかった。

横殴りの強い風が、改めて二人の注意を呼び覚ました。周囲に目

を配れば、目指していた尾根もこの辺りで一番高い頂も既に斜めに  
見下ろせる高さで、一気に数百mを吹き上げられたのだと知った。  
彼らはこれから越えようとしている山の縁にいる訳だが、そうやっ  
て稜線の間近に身を置いて初めて、フールドは経験することの重さ  
を再確認するようだった。全身から冷たい汗が噴き出す。フールド  
とフータが、風乗りにも和睦不能であり続けてきた季節的な大嵐と  
フェンサリサ上空で直接対峙するのは今日が初めてである。そして  
その規模は、東支店屋上からの遠目の観察では、熟練したフールド  
の目すら誤らせるものだった。予想と現実の余りの落差に声を失っ  
た。先程の大気の雪崩など、まだほんの序の口だったのだ。この高  
い空を満たしているものは、大きすぎ、澄み切りすぎ、美しすぎる、  
全てにわたって物悲しい、純粹な力の奔流だった。感じられるのは、  
ただ畏怖と憧憬だった。フールドは身震いした。

この力はただひたすらに孤高なだけでなく、ただひたすらに盲目  
的でもあった。喩えれば山脈の奥深く、まだ誰にも知られていない  
空に爆発点があつて、この大風はいつも山脈の内から外へ、単調に  
しかし絶対的に、異物を遠ざける噴き出しであり続けているのだっ  
た。その本来の単調さが、思いも寄らぬ複雑な動きに転じてフアー  
ドらを翻弄するのは、単純でない地形と干渉しあつた結果だった。  
一体何という風なのか。過去、どんな風乗りも越えたことが無い。  
覆し得ない道理に思えた。

フータ共々全身で探つて慎重に吹きつけてくる風を読み、その場  
に危うい安定を保ちながら、しかし、とフールドは反論する。風に  
は吹き返しがあつた。地形効果でこれだけ複雑に風が巻いているの  
なら、ほんの一吹きでも、一途な噴き出しを割って山脈内へ突き通  
る、奔放な風が生まれるかも知れなかった。諦めるのはまだ早い。  
フールドとフータはその一瞬を探すため、雪に青く輝く岩壁に沿い、  
ゆっくりと進み始めた。

陽は、ほうっと、詰めていた息を大きく吐いた。それまで見入っ

ていたテレビも、同時に活気を取り戻したようだった。飛行する対象に錐揉みというと、普通は落ちて行くものの状態を指して言う言葉だが、先程のまるで逆回しの姿だったファードとフータを見て、陽は息を飲み、騒がしいテレビも一瞬言葉を失ったのだった。やがて稜線際でそろそろと動き始めた彼らを認め、この番組の女性レポーターは楽観的な判断をしたようだ。すっかり調子を取り戻した張りのある声で、結果的に一気に山頂付近まで達することが出来たのだから、幸先がいいというような趣旨のことを述べた。人生の大半を風乗りとして生きてきた陽は、無論、そんなもつともらしいだけの見解を見下した。ファードらの達したあの空に、楽観を許すような易しさなど何処にもありはしなかった。それにしても、勘のいいファードとフータをあも簡単に翻弄するとは、あれは一体どんな風だったのだろうか。経験を積んだ陽であっても、この時期のフェンサリサの、あんな山頂間際までは上がったことがない。両手に包んだ湯飲みの中身は、次第に冷めていくようだった。そんなことは気にも止めず、というよりも両手の中の物のことなどすっかり失念して、陽は画面を見詰め続ける。

ファードとフータは、ある狭い範囲を巡回するようにして吹き返しの風を探し続けていた。無線の通信範囲を考慮すれば、あまり捜索の範囲を広げられないのだった。この制約は不利なようにも有利なようにも思えたが、もし言われているように、本当に山脈の端から端までこの大風が吹いているのなら、考えても仕方のないことだった。結局、何処に突破の糸口を求めようとも、探索は困難を極めるに違いないのだ。

とにかく気流は荒々しく、一瞬たりとも安定していることが無いのであった。山脈深部から一途に吹き出してきた風は、山巒の明るい所、暗い所へと無心に滑り込み、そこからは悪意を持った無数のしなやかな砲弾となり、空中で弾道が交差する砲弾同士は更に予測不能な軌跡を描いて、時には渦にもなり、ファードとフータを破滅

させようと身も竦むような勢いで迫ってくるのだった。時には、稜線から遠く離れた所まで小石のように弾き飛ばされた。数百m、いやその倍以上も一気に叩き落とされた。その度に心臓を縮み上げさせ、全身の骨をガタガタギンギンいわせながら生き残ったが、巡回路である尾根近くまで戻ろうとする矢先に、また同じような目に遭う始末だった。確かにフータは風の妖精だ。彼は飛膜の下に自身の風を操り、何処までも滑空して行ける。しかし、如何に風を操れようと、ちっぽけな一個体がこの真に？み所の無い巨大な風を、御せる道理は何処にも無かった。自分の風を手放さず、飛行を続けているだけでも素晴らしかった。

ただ、そうは言ってもフータは今、恐らく生涯で初めて自身の限界を意識させられ、打ちのめされているだろう。彼の柔らかかな体毛は、今にも火花を散らしそうだった。フールドだって齒がみしていることにはかわりがない。だが、二人がいくら焦れようと、山は頑なに彼らを掻い潜らせようとしなかった。二人は遂に消耗を意識し始める。時間ばかりが徒に過ぎていく。

この様子を、今は彼も双眼鏡に目を押し当て、カラは見守っていた。無意識の内に口許が強く引き結ばれている。時折、彼の傍で同じように双眼鏡を覗いている弥祐が、鋭く息を飲む気配が伝わってきた。彼も肌にちりちりと不快な痛みを感じ続け、まったく安らぎとは程遠い気分だった。しかしその一方で、風乗りとしての彼の心には、恍惚とした痺れも広がっていくようだった。

フールドとフータは同じ思いを巡らせ、同じ入力を全身に得て同じ出力を外界へ返していた。そうしなければ生き残れない飛行を続ける中で、彼らの連携も急速に極限まで練り上げられていくようだった。双眼鏡の限られた視野の中、カラはその目で、風乗りの奇跡をありありと見ているのだ。彼の目に映るそれは、最早一個の飛翔生物と言った方が良いだろう。フールドとフータ、二人を隔つ固有名詞は淡雪のように溶け、混じり合った。彼の者は二にして一の



在り方をしている。すなわち、双子だった。

## 第29回

呼吸と心拍が完全に同じリズムで一致していた。当事者たちにも未だ知られていない、双子の顕著な特徴だった。

大いなる、そして複雑極まる大気の流れは、瞬間瞬間、絶え間なく双子によって分析されている。それに従い双子は風を見ているのである。それにしてもどうだ、この驚異的な立体透視図は！大地と平行な一つの平面内に、ベクトルの矢印が無数に、恐るべき無秩序さでとつちらかつている。全てその平面内での、ある瞬間の風の動きの視覚化である。同じような平面は、低きにも高きにも積み重なっている。俯いて見よ、振り仰いで見よ。どのようなイメージが脳内に浮かぶか。空間に乱雑に浮遊する長短様々の矢印が、ぞつとするような数、浮かび上がってくるだろう。これが今双子の瞳に映じている光景の、おおよその描写である。彼は空や山を、写真に写るようには見ていない。我々には努めてみても猶おぼろげな、観念というものそのものを極めて自然に見て取っている。そして双子も、その観念の場にあつては大きさを持った物体であることを止め、一本のベクトルとなつている。

双子のやるべき事は単純明快だった。要するに、山脈の内へ入り込める一つの合力を求めればそれで済むのだ。足し合わせるベクトルが星の数ほどで、微分的な時間を考えてみてもどうもそれらを不変と見なせなさそうな所が、少しばかり厄介なだけだった。この難問を前に、双子は試行錯誤などしていない。神がかり的な風向・風力演算器は常に正しい答えのみをはじき出しているのだが、如何せん、彼のいる空はそれが一瞬の未来には反故にされてしまうような場所だった。惑星の運行ほどには単純化できないこの現象の中に放り込まれ、そこで双子は確たる未来を計算しなければならないが、実際は風は尻込みしなかった。彼は恐るべき演算器であるが、実際は風に生きるもつと精妙なもので、根拠はそれで充分だった。もう何

度目か、稜線際であえなく裏返され落下しかけた時、反転する視界が爆光に満たされ、確信に心が沸き立つようだった。次の解を得るまでに初めてプロセスが無く、彼はそれを一？みに得ていたようだった。今から12秒後、ここから約113m離れたあの稜線へ向けて、一本の太い風が確かに吹き返した。

これを渴望していた。姿勢を立て直す間も惜しかった。裏返された時、僅かでも動力が途切れたことで無数の風に群がり寄られたが、咆哮一声、半ばねじれた体勢のまま爆発的に加速し、それらを全て引き千切つて突進した。こうして押し通るのは勿論体力を余計に使う。だが今は、あの太い風が吹き返すその瞬間に、その力の中に身を置くことが何よりも大切だった。

太い力が悠然と稜線へ向けて進み始めた。双子はその先陣に、斜め後方から滑り込む様にして加わった。その直後、全身の骨がぎつと軋んで一斉に後へずれたのが分かるくらいの、凄まじい加速が起きた。彼は辛うじて姿勢を保ち、その力に乗った。目指す先に岩で出来た稜線は勿論無い。ただ、その上に伸し掛かかって在る大気の巨塊も、阻むという点では岩壁と大差ない重厚さだった。身を竦ませる暇も無い。双子は見えない岩壁に、吹き返しの風もろとも突っ込んで行った。

水飴の中にも飛び込んだ様だった。突進の勢いがみるみる殺がれていくだけでなく、呼吸を奪われそうな錯覚すらあった。そんな中で双子はより以上に集中しようとしている。まだ稜線から、ほんの数歩山脈内に入り込んだだけだった。それだけで噴き出してくる風は勢いに拍車をかけ、一層嵩にかかって岩壁の間を跳ね回り始めた。双子の目的はただ一つ、乱雑さを倍加させた風の守りを突き抜けて、山向こうに達することだ。迷っている暇は無い。下手を打てば、また稜線の外からやり直した。こんなにも難しい次の一手は何処へ打つべきか。感覚は全方位へ広げ、意志は解を得るために針先よりも細くその一点へ絞り込んだ。肉眼では見えるはずのない山向こうの景色が、ぱつと目の前に広がった。

凄まじい郷愁に惹かれ、左上方へ行きかけた。ところがすぐに、このまま正面へ、と誰かが賢しげに叱咤した。その時、双子の意識は明瞭な二つに剥離し、個々へ還ったのだ。一つがー？みに感じ取った奇跡的な無風状態は、最初行きかけた方に確かにあった。だが、どちらかが最後の一瞬に、理性のくびきに捉えられてしまったのだ。最初、その正面突破も比較的易しそうだった。しめたと思ったのも束の間、突如、進む先の風が一点に収縮した。ファードとフータは愕然とした。もう次に起こった風の大爆発を、避ける手立てはなかった。

一号登山道のパーキングエリア、草原に面した鉄製の手摺りに押し掛かるようにして鈴なりになっている人々が、一斉にどよめいた。彼方に見上げる山頂付近の状況がどのようなものであるかは、今はもう、騒がしいレポーターたちですら言葉を無くし、固唾を呑むほどの明らかさだった。だから、風乗りが急に力を得、真っ直ぐ突き通すように頂の陰に隠れていった時は、遂に西側へ抜ける道を見付けたかと、彼らが勝利を思ったのも無理はなかった。だがそれもほんの束の間、明るい響きが、まだ高い空へ吸い込まれてしまう前だったのである。笑顔で見守っていた同じ頂の陰から、全く思い掛けず、風乗りがきりきり舞いしなから飛び出してきたのだ。まるで山の体内から鋭く吐き出されたみたいで、本当に力を消化されてしまったのか、一瞬前とは打って変わり朽ち葉のように吹かれる頼りない飛び姿になっていた。何が起こったのかは誰にも分からなかったが、次に起こりそうなことは誰にも予感できた。

「ファード！」  
カラは思わず立ち上がっていた。マイクへ向け、声を限りに怒鳴っていた。

ファードはそれを、風の嘲笑う声だと思っていた。  
しかし違う。本当はカラの大声で、それは耳元、相変わらず明瞭

な音声を伝えてくるイヤフォンから聞こえてきている。そんな理解もままならないほど、ファードの心は乱れていた。胸の悪くなりそうなめまいが続き、口の中はからからだった。恐らくは相棒も同じような状態だろう。破滅的な風は渦巻き続け、厭わしい呪いは執拗に二人に絡みついてくる。それだけが今、二人にとって真実のようであった。何か全身に圧力を感じ始め、そのために、二人はどちらとも無く考えを先に進ませることができた。本当に、これが世界の全てか。

間一髪、二人は同時に気が付いたのである。自分はまだ飛んでいる、今はそれが全てなのだ。

目前に岩壁が迫っていた。たとえ意識が混濁していても、空を行く者のそれとして鍛え上げられてきた全神経は、災いの急速な接近を圧力として感じ取り、警報を発し続けていたのだった。咄嗟に身を翻し、押す風と戻す風の隙間に滑り込み、更に身をよじって戻す風の中に飛び込んだ。肌がちりちりと焼け、目の前が暗くなりかけた。飛ぶ自分という、二人にとっての全てを思い出したファードとフータは、風の舌打ちを尻目に、しぶとく生き残った。

その時、カラの呼びかけが聞こえてきたのである。ファードは先ずそう理解し、応じねばと思い、ふと何かを勘違いしていたような、そう思うのが勘違いのような、はつきりしない感覚に襲われた。呼吸を整える。ようやく応答した。

「はい」

存外弱々しい声で、自分でも驚いた。

カラは最初、イヤフォンの故障だと思った。それくらい酷く掠れ、弱々しいファードの返事だった。

「…何が起こったんだい？」焦りで詰問調とならないよう、努めて気を遣いながらカラは問うた。先程と同じように、返答まで長い間があった。

『道を見付けたと思ったのですが…』ファードはまた黙る。『しか

し、行き止まりでした。すぐに押し返されてしまった』

遠目に見たことの説明にはなっているようだが、相手の声の憔悴ぶりから、言葉に出来る以上の何か深刻な事態があったようにも思える。それは彼らが双子だったことに関係しているのだろうか。双眼鏡の狭い視野の中で、今は何とか平衡を保つのがやっとのようなファードとフータは、最早双子ではなかった。山頂の陰に飛び込む時までの、彼らの信じ難いような一体感には風乗りの恍惚を感じたカラであったが、その状態であった二人がここまで打ちのめされているとなると、さすがに戦慄の方が先に立ってくる。

『一旦戻るかい？』

それが賢明なように思えた。

『一旦戻るかい？』

カラはそう聞いてきた。ファードもこの時までにはだいぶ落ち着きを取り戻していたから、相手が冷静に、事実上の続行不可をほめかしたとしても、特に驚くことはなかった。むしろ、己の全責任で客観的な判断を下さねばと感じた。ファードとフータ、二人とも呼吸も忘れるような飛行を続け、気力、体力共に酷使してはいたが、それほどの長時間でなければ、まだ同じレベルの飛行をする余裕はあった。次に時刻を確認する。鞍の前部に埋め込みの、シンプルな構造に完璧な防水・防塵、とにかく頑丈さが売りの飛行時計は、今もこの悪条件の中、愚直に時を刻み続けている。与えられた持ち時間である1時間には、まだ早かった。そして何より、風は一向に勢いを衰えさせていないのである。気力と体力の余裕を根拠に、ファードはこの事実を困難ではなく、可能性の高さと受け取った。先程のような太い吹き返しが再び生まれる可能性は、確かに低くないのだった。

『もう少しやらせてください』しっかりとした口調でそう言えた。今度は相手の方が、返答まで少し間を置いた。

『…ファード、正直に答えて欲しい』カラには珍しい、硬い声だと

思った。『君とフータに、その余裕はあるのかい？』

「それは問題ありません」長く空で生き残ってきた二人であるから、そこは見誤っていないと思った。「正直、ここまで風に翻弄されたのは初めてです。ですが、まだ迎え撃てています」実際、困難は痛感していても意地や見栄とは無縁で、ファードにもフータにも、心に恐れや諦めの曇りは一点も無かった。

迎え撃てている、とはつきり言い切ったファードに対して、カラはそれでも迷う所があった。あの場所が、荒れてはいてもカラも知っているような空だったのなら、ファードの言葉を疑う理由は何処にもなかっただろう。遠目では、確かにファードとフータはあの高い空で、見守るこちらも吹き倒されそうな、身の毛もよだつ酷い風と渡り合っていた。今は返答に力強さを感じられ、消耗も一時的なものかと思わせた。しかし、それでも、自分は続行を許しているのか。

### 第30回

カヲは躊躇しているらしい。続行を願い出た後でイヤフォンに続く沈黙に、ファードは歯？みをした。稜線をほんの僅かでも越えたあの時、何故風の直観に従って、左上方へ抜けようとしなかったのだろう。何故人の迷いを正答と信じて、正面から押し通ろうとしたのだろう。吹き返しを探し、容赦ない大風にいつ自分の風を手放すか、一先ず心許ない飛跡で巡回を再開しながら、ファードは堂々巡りをし、苛立った。

イヤフォンが溜息をついたようだった。不機嫌な考えに沈みかけていたファードは、そちらへ意識を移した。ががつと硬く短いノイズが走る。と思った次の瞬間には、頭の真ん中に弾丸を叩き込まれたかのような、物凄い衝撃がきた。ファードは反射的にイヤフォンをむしり取ろうとした。しかし、小さなそれは飛行帽の耳覆いの下、結局は右手を添え、堪えることしかできなかった。

耳を聳せんばかりの酷いノイズは断続的に続いた。何度目か、それが耳の奥で爆ぜた後、今度は恐ろしく低く重たい轟きに、内蔵を直接揺さぶられた。フータが鋭く唸り、警告を発した。ファードもそれを目にした。

行く手の峰に、でたらめな勢いで上昇気流が発生している。それが、まるでフィルム早回しを見るような急激さで雲を太らせているのである。瞬く間に、雲は見上げること遙かな、目では追えないほどの高さまで立ち上がった。その下にフェンサリサの名だたる頂を幾つも従える、広い広い天蓋となった。それでもなお沸き上がり、広がり続ける雲の巨柱のあちこちに、頻繁に強い光が不規則に走っては消え、目に焼き付く。またイヤフォンが爆ぜた、重爆音が轟いた。この時の気象現象が観測史上例を見ず、特に発達早さと規模の点で希有なものであったことは、後日判明することである。それほど途方もない雷雲が、今、発生しつつあった。



ファードは色を失った。大風が何度もぶつ叩き、振り上げても微動だにしなかった心が、初めて軋んだようだった。それくらい目前の変化は急で、思いも寄らないものだった。危険を忘れ、思わず鞍の上で上体を起こしてしまふ。途端に後へ煽られ、左手をアームレストから放してしまった。舌打ちし、伏せた姿勢に戻そうと右手だけで上体を引き始める。またしても驚くことが起こった。右手をも放してしまった。

フータが、額から伸びる柔らかな触角状の器官を打つように飛ばし、ファードの右手を絡め取ったのだ。余りの意外さに強張って手を放してしまい、思い出したように伸ばした左手も、アームレストを掴む前にもう一本の器官に絡め取られてしまった。フータは万力のように両手首を締め上げてくる。その行為は、何か強い暗示のようであった。この状況での判断停止は危険極まりないものであるにもかかわらず、ファードは鞍の上で、墓石のように上体を突っ立てた。飛行は完全に、フーター一人の意志に委ねられることになった。

突き上げるような突風だ、右下から襲ってくる。ファードはその危険を察知するが、体は竦んだように動かない。フータは避けようとせず、むしろ何でもないのであるようにその突き上げに乗ってしまった。全身の毛が逆立ち、首だけを巡らせて見れば、鬣の一つ一つを剃刀の刃のように並べた岩壁に、恐ろしい豪腕で投げつけられている。しかしファードは、穏やかに引く波に連れ戻されるような柔らかな印象を直後に感じるのであった。気が付けば、フータはいつの間にか、元いた場所を再び飛んでいる。先程突き上げてきた風が抜けた空間を補填するため、静かに滑り落ちてきた上方の空気塊に乗って、実に巧みに危険をやり過ごしたのだ。事の意外さに目を見張っているのも束の間、ファードの体が前のめりになった。真後ろから手酷く蹴つ飛ばされそうになったのだ。今度も回避行動など、フータは積極的な動きを見せず、ただ自分のへらのような尻尾を咄嗟に軽く持ち上げて、やや下向きに、身を委ねるように蹴られてしまった。ところがすぐ下の空気の層には、少し前から逆の流れが生

じていて、フータはとつくに気が付いていたのである。彼はその層に飛び込むと、すぐに飛膜を調節して斜め上向きの揚力を発生させ、今は直下の層とのせめぎ合いで勢いを失った、元いた空気層の元いた場所に、またしても難なく戻ってしまった。ああ、そうか。ファードは悟ったのだった。

今はもう、ファードは墓石ではなくなっている。再び血は巡り始め、その律動の中に己を見出している。途方もない力の奔流の只中にあることは今だって変わりはない、けれども、ファードは確かに安らぎを感じつつあった。相棒の不可解な行動の謎はもう解けている。彼には伝えたいことがあり、それは伝わったのだ。相棒の2本の触角は手首に巻き付いているから、指先は自由になる。ファードはそつと、伸ばされてぴんと張り詰めているそれらを握りしめた。「そうだったな、相棒」穏やかな中にも、感謝を込めて語りかける。「風は御すものじゃなかった。乗るものだったな」まだ迎え撃っている、先程カラに言った自身の言葉が、なんだか滑稽に思い返された。

『どうした、ファード？ ノイズが酷くて良く聞こえない』カラの声で、随分久しぶりに聞いたようだった。途切れ途切れではあったが、焦りを滲ませ確かにそう言ってきた。『なんて上昇気流だ…山越えは中止だ。すぐに戻ってこい』

「…カラさん」対して、ファードの声はとても静かだった。力強く、穏やかに包み込むようでもある静けさだった。「我々は何故、風乗りと呼ばれるんでしょう」

『なんだって？』鉄を噛み砕くような、身の毛もよだつノイズの中で、カラの澄んだ声がかくようだ。『もう通信も無理だ。戻れ、早く！』

『ファード？ ねえ、どうしたの？』

「さつきは、風を御そうとして失敗しました」カラの傍で思わず言ったのをマイクが拾ったのだろう、元々弱い入力レベルが更に掻き消されそうになっていたが、弥祐の声も確かに聞こえた。酷くうる

たえている様子に、一瞬胸が震えそうになった。それでもフアードは言い切った。自分自身に言い聞かせるように。

「乗れば良かったんです。感じたままに」

辛うじて聞こえたその言葉へ、どういふ事が聞き返そうとした。

だがその前に、それ自身が破裂したかと思うような、凄まじい爆裂音がイヤフォンから噴き出した。堪らず、カラはそれを右耳からむしり取っていた。

フータの触角が体を前に引いた。鞍を挟む両膝と上半身に一気に力を込め、風に抗い、フアードはアームレストに両手を戻した。フータの束縛がするりと解けていく。二人の乗るべき風、こんな寄り辺なき空にそんなものはあるのか。それに乗れさえすれば、間違いはないのだ。

その風はあつた。今だからあつた。幾らかでもその方向へ吹く傾向が強い、そんな読みを一切許さない真に乱数的な風向の在り方の中、その風だけは太く堅牢で、1分間の持続も恒常的と言って良いこの空で、もう永遠に近い間、たった一つの方向へ吹いているようだった。その風は懐かしく、切ないようだった。何の疑問も感じずに二人して空を飛んでいた頃を、胸を打つような唐突さで思い出させた。二人が乗るべき風はこれだった。吸い寄せられるように、その風に合流した。

途端、静寂に包まれ、波一つ無い水面を行くみたい飛行が安定した。場所は移さずに空を移ったのだった。そんな見知らぬ空で得られた安寧の只中で、フアードとフータの呼吸と鼓動が、徐々に重なり合っていく。双子は、知っていたのにこの風に乗った。これは逃げ場のない一本道だ、激しく上昇する気流の形を取った、あの滅びへと惹かれゆく…

比するものなど無い強大な力が、双子を高く引つ張り上げたのだ。先に意識が吸い上げられた、続けて重い肉体が、僅かに遅れ

それについてきた。

一号登山道のパーキングエリアに、複数の悲鳴が響き渡る。人々は、風乗りと現場責任者の無線での遣り取りにどこか不穏な空気を感じ、息を潜めていた。すると突然、風乗りが目を疑うような滑らかさで空を進み始め、あつと思う間に、遠く離れた麓にいても頭上が不安になる、あの巨大な雲の塊に吸い上げられ始めたのである。ありとあらゆる回転運動が重なり合った、信じ難い有様で振り回されながら、上昇速度は却ってスローモーションのように、彼らは雷雲の底へと引き寄せられていった。カラは身を乗り出し、目の前のアウトドア・テーブルを大きく揺らした。その傍らで、気が気でなく既に立ち上がっていた弥祐は、声にならない声を上げていた。双眼鏡を取り落とし、折れそうになった膝で踏ん張って、短く柔らかな髪を、波打つように逆立てた。

ファードとフータは見えなくなった。あの莫大な雲の巨柱の中へ、為す術もなく消えていった。

だんっ！ と激しく両手をテーブルについて、陽は腰を浮かしかけた。その拍子に湯飲みがひっくり返り、殆ど口も付けずに残っていた、すっかり冷めた緑茶がテーブルの上に薄く広がった。テレビの画面は時折乱れる。恐らくあの雷雲の影響だろうが、長く生きている陽でも、あんな尋常でない雲は見たことがなかった。あれはもう、雲ではなく未知だった。そんな未知の中へ、ファードとフータは消えていったのだ。

陽は腰を下ろした。揃えた膝の上に緑茶が滴り落ち、着物を濡らす。彼女は一向構いつけない。

ただ瞬きもせず、テレビを凝視し続けていた。

“時の三精霊” 正面玄関前に急拵えで設置された展示は、当館スタッフたちのやる気が周りに伝染したみたいに、まだ人出のピークに

は早い休日のこの時間帯にしては、なかなかの盛況ぶりを見せていた。その大画面テレビの前には、列の前に陣取る人々は自主的にしやがむなどして、何重もの半円形の人垣が出来ている。

その人々が、今、一斉に身を乗り出した。悲痛な叫び声が幾つも上がった。この時間、画面に合わせて適当な解説を加えたり、集まった人々からの質問に答えていた担当の男性スタッフも、見る見る顔を青ざめさせた。と、視界の端でその動きを捉え、テレビ脇に立っていた彼は画面の前に慌てて飛び出し、彼女の体を受け止めた。力を失ったファン・ミヨンの体は、土のように重く、冷たく感じられた。彼女も、彼とは反対側のテレビ脇で解説を務めていたのであるが、息を飲んで口許を押さえ、よろめくように2歩、3歩、フェンサリサに近付くと、声も音も無く、ふっとくずおれたのだった。

痛い。

藍が物凄い力で、碧の左の二の腕を掴んでいた。碧は咄嗟に、空いている手を掴んでくるその手の甲に添えた。ぎゅっと握りしめてここに居るって事を伝えるためだった。そう伝えられたと自分も相手に縋って、一人じゃないって事を納得するためだった。どこかへ吹き飛ばされてしまってもおかしくなかった、今の一瞬。その恐ろしい時を、言葉の助けも借りられなかった二人は、身を寄せ合ってやり過ごした。

彼らを完全に吸い込んでしまっても、いや、彼らに養われたのか、雷雲は益々太っていくようだった。惚けたように暫くその様子を映していたカメラが、急に大きく横に振られた。時間が溶けて人々が動きを取り戻し、事情の説明を求め始めたのだ。人々は、それが出来そうな人の元へ殺到しようとした。その騒ぎの中心に、カメラは向けられたのだ。

藍と碧は鋭く息を飲んだ。カメラは少し離れた所から、現場責任者として無線で遣り取りしていたフォレストルフを捉えていた。その人の向こうに、偶然、親友の姿を見付けたのだった。

「ミュウちゃん…！」

立ち尽くして目を見開き、波打つように髪を逆立てた彼女を見ても、碧はそれ以上言葉をかけられなかった。ぞっとするほど胸が締め付けられ、別な物が喉元へせり上がってきて、言葉は押し潰されたのだ。

息を押し殺して苦痛に耐えていると、今度は脇腹に固い物が押しつけられるのを感じた。碧も藍も、リビングの床に敷かれたカーペットに直に座り、ソファに寄り掛かってテレビを見守っていたのであるが、藍が碧の背とソファとの隙間に、髪をくしゃくしゃにしながら頭をねじ込もうとしてきたのだ。掌に捕らえられた穴掘り虫が、思い掛けない力強さで捕らえた人の指の間をこじ開けるようだったが、碧は親友のそんな仕草を見ても、余計に悲しくなるだけだった。背を浮かしてやると、藍は飛び込むように倒れてきた。両腕できつく碧の腰の辺りを抱きしめ、両膝を深く曲げて嬰兒のように丸まった。碧の背に押しつけた額を、嫌々するように振っている。碧の背の後なんて、本当に小さな逃げ場所だった。でも今の藍には、そこにしか逃げる場所が無いのだった。

碧は藍の両腕を抱え込み、立てた両膝の間に顔を埋めた、そして喉の奥から絞り出すように、ごめんね、ミュウちゃんと呟いた。藍は碧に、碧は藍に逃げ込めた。でも、あんな酷薄な山の麓に、ああしてたった一人、立ち尽くしている彼女の親友は。自分もあの場において、彼女を庇う背中や温もりになれたのなら、私はずるいなんて申し訳なく思うこともなかったのに。

二つの名前が強く叫ばれた。でもそれは、吸い込まれていく先の空の高みで次第に吹き千切られながら、とうとう、自分が誰を呼ぶものだったか、自身を忘れ去ってしまったのではなかったか。

### 第31回

吸い上げられ、なお吸い上げられる。

いや、双子を喰ったこの雷雲は、余りにも巨大すぎたのだ。手応えなど何も無い空の只中に、実は双子は静止している。雷雲は彼の内部に静止した双子を置いたまま、自重で隕石のように落下している。双子は吸い上げられているのかも知れない。そう思うのは錯覚なのかも知れない。

大噴火が星の空近くまで吹き上げた墨色の噴煙、あの闇を胚胎するのである。う長い子宮と思えば、この黒雲の奥深くは未だ光を知らない、耳鳴りが始まるほどの暗さだと思いついていた。しかし周辺は、存外薄明の世界だった。

その薄明かりが突然爆ぜた。幾筋もが鋭利な尾を引いて虚空へ散り、消えていく。雷光に目を焼かれた訳ではなかった。もしそうならば、彼の目は数瞬前の過去の光をまだ見ている、双子が感じたのは完全なる暗転だった。彼はでたらめなやり方で振り回され続けている。今の回転の微妙な作用は、双子の頭から血を抜き去ってしまった。そこから一番遠くに当たる所で、ひしめき合う血液が陰気に呻いていた。

かと思うと、視界が真っ赤に輝く。錐揉みなのか、宙返りなのか、体をめっちゃくちゃに転がされ続けていることには何も変わりが無いように思える。けれども、その作用には何か捉えがたい平衡があるようで、呻いていた血液は今ももう、場面の切り替わりのように反対端へ、一瞬の内に頭の中で溺れ死にしそうになっていた。

体が粉々になりそうだが、まだ許していない。双子の一方は守る姿勢を取りやすく、他方は難しかった。余計にままたぬ思いをさせられる後者の方が、特に頑強に抗っていた。前肢後肢の間に張られた柔らかな飛膜は、狂った大風の格好の玩具だった。いいようにされたくないのなら閉じてしまえばいい、無論そんな事は分かって

いた、分かつてはいるが閉じなかった。大風がそれを宙に縫い付けてしまい、閉じたくても閉じられないのではない。飛翔の際、それは誇らしく開かれてあるものだ。彼は飛翔を続けている。すなわちまだ風に乗っている。意地でも閉じてやらないのであった。

その気高いはずの飛膜が、酷く安っぽくばたつくようである。その様は哀れさえ感じさせた。店舗の軒先で色が褪せ、端のすり切れるままになった商売用の幟が、それでも必死に人の気を引こうとばたばた喚いているようなのである。それを嫌った。別の方法でなぶってきた。蛙の喉袋みたいに、飛膜が不格好に膨らんだ。破裂寸前になると、大風は一層無邪気に笑った。楽しくて仕方のない表情で、なお吹き込む息に力を込めた。

全身の軋みが、骨を伝う内に複雑に干渉しあい強め合って、体が内側から崩れていきそうだった。良くブラシがけをしてくれる少女が、通りの良さをその度に羨む自慢の体毛も、全てが針のように硬く逆立っていた。時折、体のあちこちで火花が散った、信じ難い様子で帯電してるのだ。彼は憎々しげに吼えた。どうやったらこの忌々しさを蹴散らせるのか、大風も竦み上がりそうな凄まじさで吼えた。

膜ヲ閉ジロ。体ヲ小サクシロ。

その時、耳を疑うことを感じ取ったのだった。今の怒りの火が、一遍に酸素を受け取った。白熱が一瞬体力を十倍させた。我が身を苛み続ける狂風を、おぞましい狂気ではね除けた。その数瞬だけ双子は自由に飛んだ。そして、それだけのことだった。

チガウ。諦メルンジャナイ。

話しかけられる度に、頭の中の何処とも言えない部分がむずむずした。言葉を司る部分に、直接息を吹きかけられているのに違いなかった。

風八自由力。

…そうだ。

常二自由力。



その通りだ！

ソレハナゼダ？

何故？ 意外に思い、言葉を探すように途切れさせた。それが、人間とスカーラル・シーの時間感覚が溶け合う、その新しい時計での数秒になった。背に負うた双子のもう一方が、ゆっくりと続けた。ソレハ、受け入レラレルカラダ。

何を馬鹿な！ 再び狂気によって、体力の熾火を不用意に掻き立てそうになった。踏み止まったのは、思う所もあったからだ。彼は、フェンサリサの頂で彼をさんざん手こずらせた、あの風たちのことを思ってみた。あの兄弟たちは最初愚直だった、生まれ出た山脈深部から外縁へ、ただ一つの線に沿って突き進むだけだった。高く重たい一塊の波頭となつて、兄弟たちはひたすらに重なる稜線を突破してくる。ひとたび最後の稜線を越えるや、波頭を崩し、斜面を震わせながら雪崩れていくのだ。そうなると、兄弟たちの猛進は阻まれ始める。たちまちの内に、山肌の凹凸が彼らの足並みを乱し始める。それでも兄弟たちは、生まれた頃からの狂気じみた陽気さを失わない、それどころか益々得意になるようだ。今や、当初の突進一点張りという稚拙さは、影を潜めてしまった。兄弟たちは、宇宙に存在しうるあらゆる曲線表現を身につけてしまっている。双子を追い詰めた、あの途方もなく自在な巻き方が出来るようになってる。それは何故だ。兄弟たちは、なんの拘りもなくさっぱりとした心持ちで、本来なら邪魔なはずの地形をも、むしろ自然に受け入れてしまったのではなかったか。受け入れて阻まれてみることで、却って何一つ阻むものの無い、真の自由になったのではなかったか。今ハ、風二乗ル以上ノコトガ必要ダ。

それは何だ。

バカバカシイコトサ。

確かにそうだった。正気の沙汰とは思えない。しかし？

受け入レヨウ。

思われた言葉が、乾いた砂に水が染み込むように、すうっと思い

になつていく。同時に嘘みたく、心にしなやかさが蘇ってくる。

疲れ切つた体にも自然と活力が戻るようだった。双子を取り巻く莫大な力の奔流は、常に広範囲に密度濃く渦巻くようで、その瞬間瞬間に、避け難く無風の断片を生み出しているのが理解され始めた。数瞬の間だけ儂く揺らいで在るそんな欠片の一つに、するりと滑り込む。そして尾を腹の方へ引き寄せ、それを抱え込むように、今は何のためらいも無く飛膜を閉じた。鞍に束縛されている体を、可能な限り、胎児のように丸くした。

優しい欠片が吹き消される。双子は再び力の渦の中へ巻き込まれるが、丸くした姿勢はそのまま、気泡のように頼りなく押し流され、けれど周囲とは確固として己を画し、上へ上へと動いていく。今、双子の輪郭は不自然に明瞭だった。雲の冷たい細胞に厚く取り巻かれ、ぼんやり滲むようだったのが、双子自身がこの場のピントを正しく合わせ、かつちりとした姿を見せたようだった。そんなふうだったから、鞍の角張つた部分に激しく当たっていた風が、遂に八方へ雲を引き始めた。その数は次第に増えていく。やがては、余り引つ掛かりのありそうにない、双子の体のあちこちからも細く濃く雲が尾を引き始めた。常軌を逸した状況の中、それはただ風の見せた、よく説明のつく悪戯だったか。

違う。それは風のせいではない、双子の意志だった。いや、それも正しくない。受け入れて意志や知性といった軀からも自由になつた、風の双子の自然だった。双子は今、あなたとは違う純粹に对称的な在り方をして、あなたがそこにしか居られないのと同様に、相異なる世界の境界を跨いで立つた、薄明の層にしか居られないのだった。双子が体からたなびかせる筋雲の数が、見る見る増えていく。それらは彼の体を覆い隠し、やがて輪郭の代わりになった。双子は安らいでいる、軋む骨の痛み、身を切るような冷氣、あらゆる苦しみは自身との関係から消えていき、例えば重力よりも、浮力との関係が濃くなった。その時、肉体に嵌り込んでいた心が、ふっと自由に動き出した。最初、一つのものようだったそれは、一瞬の律動

の後自身を無限小片の集まりとしてしまい、なお小魚の群のように天与の原理に指導され、結局元と同じ、一つの心のままの流動体となったのだった。それは言わば心の智慧だった。正気の沙汰とは思えないことを、可能にするための……

双子が濃くたなびかせていた筋雲が、今度は徐々に薄れていくようだった。それは1本1本、双子の体から切り離され、切り離されるや曲線に還って霧散していく。双子の輪郭を仮に形作っていたそれらが、全て剥がれ落ちた。そして彼は姿を現した、まるで蛹から新しい在り方が生まれ出たようだった。双子の形。それは最早、血肉を基礎としてはいかなかった。温かく柔らかかなものは、この場にはそぐわないと捨て去られた。曲率や長さを一時も一定させない、無数の流線が組み上げている。互いに打ち消し合おうとする渦の一組の、途方もない羅列が組み上げている。双子の形は、今はそういった現象が保存して、空に混じり始めた無数の細かな氷の粒を巻き込み、辛うじて可視化しているのだった。心だけではない、肉体も智慧を身につけたのだ。不意に一条の稲妻が閃き、双子の体までジグザグに伸びた。それを通り抜け、虚空へ消えた。

風だった。双子は今、風なのだ。風は一体、何処へ行くだろう。上ダ。

そう、上へ。感じたままに乗り、行き着く先の、高い所へ？

### 第32回

一号登山道のパーキングエリアは、今が緊張と興奮の極みにあつた。未だに立ち上がりつつある異形の大雲は、穏やかな日差しの溢れる、何でもない青空に重々しく起立して、この場で見守る人の現実感や常識といったものまで、空の高みへ攫っていくようだった。そのような悪夢の中へ、山越えを試みた風乗りたちは消えていったのだった。

カラはマスコミに追い詰められたようになっていた。こうなつた以上、事前に認めさせた取材拒否の方針など、聞き入れられるはずも無かつた。ひしめき合い歯を？いた取材者たちの顔、顔、顔という最前線と、彼は直ぐの距離で向かい合つて立っている。正直、何度も後ずさりそうになつた。その度に腹に力を入れて踏み止まつた。顔はすっかり青ざめている。それでもカラは、しっかりとした口調で、各記者からの矢継ぎ早の質問に応じていた。

「あの風乗りは一体どうなつたのですか？」

カラは答える。「我々がたつた今見たことが全てです。あの雲の中でどうなるのかは、私にも想像がつきません」

「元風乗りとして推測出来ることもあるのでは？」その声には苛立ちが滲んでいる。努めてはいるのだけれど、どうにも隠しきれない。「あれほどの上昇気流は私自身も経験したことはありません。出会つたとしても、普通は避けるべきものです」

「では、あの風乗りは……」

「今は、憶測で物を言うべきでは無いと思います」

「そちらの無線機に通信はありませんか？」この問いが人垣の中程から聞こえると、取材者たちの間に同情と非難相半ばする空気がさつと広がつた。

「テレビやラジオの皆さんと事情は同じです」カラにはその質問者の気持ちが良い分かつた。この場がこれ以上荒むのを考えなくても

避けていた。だから、言葉に角立った所がないように気を付け、続けた。「あの雷雲が全ての電波を殺してしまっています」

「救助を要請する考えはお有りですか？」

「既に要請はしました」同行していた若いスタッフに指示して、東支店で待機中のハマモトに電話で連絡を入れさせている。「ですが、現時点では空からは勿論、徒歩でも現場に近付くのは難しいでしょう。詳細は救助隊が到着後、協議してからとなります」

「今回の件について、責任の在り方をお聞かせくださいませんか」若い記者からの、真摯な口調での質問だった。

カラは相手の目を真っ直ぐに見、頷く。「現場の責任者は私です。今は出来得る限りの手を打って、万が一の場合は、本社や当局の判断を仰ぐことになるでしょう」

「風乗りに戻るよう指示されたタイミングは、適切なものだったとお考えですか？」パンツスタイルのスーツを一分の隙も無く着こなした女性記者が、良く通る声で、語りかけるように問うた。

「思います」

「では、元から危険と分かっていたあの場所に、風乗りを向かわせることはどうだったのでしょうか？ ためらいはお有りでなかった？」

人垣から微かに溜息が漏れた。今、山向こうでは、小さな町を中心に多くの人々が危険な伝染病の脅威に晒されている。それ故に、この山越えの試みも急遽企てられた、多数の命と一人の命、本来はどちらも天秤にかけられるものではないという議論も、殆どの人々が思い付けないほど急に。この女性記者自身、ずっとわだかまりを持っていて、それを今、改めて衆目の集まる場所へ差し出したのだと思われた。

ここまで毅然と、澱みの無い受け答えをしていたカラが、初めて言葉を詰まらせたようだった。俯いて唇を噛む。相手の目を見た時、その面は一層青ざめていた。

「…今回の依頼にあたり、弊社は事前に危険についての十分な説明を行い、風乗りも了承した上で契約を交しています」

「あなたご自身はどう思われるのですか」

「…察してください」追いつがる女性記者に、カラはそう言うのがやっとだった。

「あの風乗りはあ、自殺したんじゃないんですかねえ？」

間延びした言い方であったのに、場の主導権は一瞬で掻っ攫っていった。実際、その場の誰もが人垣の後ろの方、背の低い男に目を遣った。

「…先程、憶測で物を言うべきでは無い、と申したはずですが」気さくで紳士的な普段の彼からはとうてい想像できないような厳しさが、カラの目付きにすっと表れる。

「しかしですね」別な男が応じた。火もつけずにくわえた煙草を喋る度に細かく上下させて、少し言葉が不明瞭だ。「あの風乗りにしちゃ、ガードが固いのはそちらの方でして。憶測も仕方がないのですよ」

「噂じゃあの風乗りさん、今は二等雇業者だそうですね」また別の男が話し出す。黒と白の細い縞柄のネクタイを形ばかりに締め、カラを振り向かせるのに犬を招くような手付きを見せて。「そして元々は、貴社の一等雇業者だったらしいと…こりゃ子供だって、何か符合するように感じると思いますがね」

カラの中性的で整った顔に、何処に隠れていたのかと目を見張るような憤怒の形相が浮かび上がってくる。しかし、彼が声を荒げるよりも先に、その年配の男性記者の方が我慢しきれなくなったようだった。彼は黒々とした眉を怒らせて、肩幅の広い体をぐるりと回す。この業界で働いているなら、彼の顔を知らぬ者は少なかった。全世界を取材対象とするバイタリティを身につけた、フリーランスのベテラン記者だった。彼は腹の底から声を張り上げた。「おい！人の命がかかってるんだらう。下らんゴシップが欲しいなら、お前ら取材場所を間違ってるんじゃないのか！」

「ふん」わざとらしく肩を竦める、薄ら笑いをしてみせる、態度は三者三様だが、全員が柳に風と聞き流している。最初に場の空気を

悪くした小柄な男は、さも小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。そして男性記者も、カラも見ずに言うのである。「埒が明かないようですし、そっちのお嬢さんにも伺いませうか。どうやら、あの風乗りの関係者のようだ」急に鋭い目で、弥祐を捉えた。

すぐ傍で行われている人間的な遣り取りにも、弥祐は顔を顰めた。りしなかった。彼女はマイクとイヤフォンのセットを、カラがむしり取り、アウトドア・テーブルの上へ放っておいたそれを拾い上げると、そつと慈しむように右耳に当てた。後はただ、時折表面を走る稲光で微かな変化を見せるものの、無為という言葉の光学的な表れであるようなあの大雲を、じつと見据えて立ち尽くしている。あんなものを凝視している内に、彼女はすつと、自分と世界との関係を組み替えてしまったようだった。今の彼女は、煩わしい人の言葉とは没交渉だった。あの大雲とだけ向き合っている。

イヤフォンから聞こえてくる、と言うより雪崩れてくるのは、無数の波がもつれ合って押し寄せる圧倒的な振動と、時折撃ち出される、身も竦むような破裂音だけだった。本来なら、こんなものともではないが耳に当てていられない。それでも弥祐は、表情一つ変えずに大雲の言葉に耳を傾け続けていた。あれが彼らを吸い込んだ信じ難い瞬間があつて、再び鼓動を感じられるようになってから、弥祐は自身のさざ波一つ無い内面を、ごく当たり前と受け入れている。祈りでもない、諦めたのでもない、安心してある訳でもない。強いて言えば、常軌を逸して客観的になつてきているのだった。空へ繋がるくらい大きな大きな自分が小さな自分を見下ろし、そつと背中を支えている、もし感じられたならば、彼女はそんな風に表現したかも知れなかった。

「！」

彼女がはつと目を見開いたのは、そんな時だった。全く奇跡的に、その一瞬だけ電波が届いたのだらうか。弥祐など呑んでかかろうとする大雲の怒声の只中に、彼女は間違いようもなくそれを聞き取っ

た。大雲の恫喝よりなお恐ろしい、彼女は未だかつて、これほどまでに怒っている彼を知らなかった。フータの咆哮だった。懐かしい彼の向こう気の強さが、火花となって彼女の耳に散ったのだった。

『フールドは、空では王様なんだね』

あの切なくなるくらい夕空の中で、神様だと感じた見渡す限りの山の前で、口にした自分の言葉が不意に思い出された。そうなのだ、誰もが破滅だと嘆いていたが、あの大雲へと吸い上げられる道は他でもない、その王様と、彼の一番の相棒が信じ選び取った道ではないか。余人の懸念など、そもそも最初から一切受け付けない絶対的な正しさは、もう彼女の掌に暖かく、気付いてみれば載せられているのだった。

ばか。信じるって言ったのは自分じゃない。

弥祐は握りしめた手を胸に引き寄せ、忘れていた瞬きを償うようにそつと目を閉じ、俯いた。見る見る涙が溢れ出してくる。まさか自分が泣いてるなんて、彼女は夢にも思っていない。それくらい静かに、ただ大地の我が家へ帰るような涙だった。

その少女は泣いていた。感情の揺れなどそよとも感じさせない、静かに力強く、人を打つ泣き姿だった。人々は息を飲んで押し黙った。現状すら飯の種としか思っていないゴシップ記者たちも、口を噤まざるを得なかった。付け入る事しかできない連中は、付け入れない心に敏感だ。今度は彼らが追い詰められる番だった。舌打ちくらはして見せて、ゴシップ記者たちはこの場を立ち去った。

「映像はまだ回復しませんか？」

個人としてのカラと話をしたかった、あの女性記者だった。彼女の穏やかな声で、人々は軽い放心から覚めたようだった。少し離れた場所で、テレビ局のアシスタントらしい若い女性が、慌ててそれまで見守っていたモニターに目を戻した。そして悲しげに首を振った。

「駄目です…画も音も、全然回復していません」



彼らの目は自然と空へ向いた。つい先程まで縦横無尽にその場所を駆け回っていた、白く輝く姿は無論見えない。目につくのは神々しい山並みと、禍々しい大雲ばかり。こぼれるしかなかった重々しい溜息が、一つ、誰かの胸からこぼれ落ちた。

### 第33回

そこは、世界ではあつた。空間が一方向に進み時は物に確固たる足がかりを与える。今を豊かにも豊かにした遙かに幽かなる個、系の最初の場所だつた。

先に目覚めたのはファードの方だつたらうか。彼は鞍に突つ伏していた。目を開けた自分をしっかりと認識してから、そつと頭だけを持ち上げた。先ず正面を見据える。続いて右、左と、届く範囲全てにじっくりと視線を投げる。これといったものは何も見えない、仄暗いような眩しいような、四方八方何処までも一様で無縫の広がりが見えるだけだつた。急に視力が鋭くなつたな、と実感する。そう思うと、他の感覚も同様に鋭くなっているのが確信できた。五感には混線する事で鋭くなっている。目は光の和音の豊かな響きを聞き取れた。耳は引き立て合う音を良く見分けるための、色相環のように吸い込んだ馥郁たる温もりは舌ですつと溶けて、心地よい酸味に、一層意識の覚醒が促されるようだつた。

ファードはゆつくりと身を起こし、ゴーグルを額に押し上げた。体の節々が少々痛んだが、そんな事ではさざ波一つ立てられないほど、心は快活で満ち足りていた。不思議とこの世界の在り方を記憶しているような気がする。懐かしさで一杯になるのだった。

一つの小さな人影を、数歩先に見ていた。これといったものは何も見えない、と確認した事実もまだ生きている。映画は一場面に過去に生きる男、今を生きる子供、未来に生きる女を包含して、その時見る我々は本当は時間の落ち着き場所を失っているはずなのだが、そんな事を気にかける人は誰もいない。同じ様な事が、ファードの生きた経験の中で起きているに過ぎなかつた。

小さな人影は疾風のように、ごく水平に後退りして、今では手を伸ばせば届きそうな所まで近寄つていた。自身の自然な目線より少し低い所からその動きを追い始めたファードは、その動きを難無く、

少し顔を上げるだけで見届けている。この遍在性と思われるもの、普通なら仰天するような小さな人影の在り方にも、ファードが感じるのは親しみばかりで、眼は若干細められたままだった。

「ついにここまで来たんだね。ファード」

その人影から、この意味深い響きが和して広がるのを見て初めて、ファードは目を見開いたのだった。この古い顔なじみを懐かしく思い出したのは当然だろう、けれど何故この親しい人影は、自分の名を呼べるのか。相手はかつて名を交換した事の無い知己だった、ファードはそこに思い至ったのだった。名は事物の区別に先立ち、“ファード”と得る事で彼を世界から唯一と切り取る自然に従っているのは、小さな人影の方だ。ファードこそ名というナイフを振るうのを忘れたまま、小さな人影を世界から切り出してしまっているようだった。

「そんなにびつくりしないでよ」

ファードの頬を、芽吹き頃の穏やかで朗らかな風が、すつと撫でていく。言葉が伝える意味よりも、言葉の息遣いのようなその一吹きが、相手の心持ちを余程良くファードに分からせた。小さな人影はファードを歓迎している、この対面を、大人の事の運び方に時折子供っぽい乱数を混ぜ込んで、楽しくしようとしている。心身の身構えたところが、微かな風に容易くほどこかれていった。

ファードは一人の少年と向かい合っているように思っているが、それは相手の小柄さと喋り方からただ見当を付けてみただけで、実の所ははつきりしていない。小さな人影は、その余りにも密度の濃い凝縮の仕方ですらファードを絶えず引き寄せるし、輪郭も掠めた光束から箔を削り出すほど明瞭鋭利に、とにかくその在り方は圧倒的だった。それでいて、この小さな人影は自身の存在の芯に、どうにも抜きがたい希薄さも抱え込んでいるようなのである。しかしながら、この分裂はむしろ小さな人影という建築の要石で、そこに感付けた時、ファードは急に相手の適当と思われる箇所、相手の両目を認めただった。これが両目？ それを目と呼ぶには、形状などその

器官が本来所有している様々な属性が、一つを除きあまりにも大胆に捨象されてしまっているようだった。これは両目だ。最後に残ったその一つの属性が、この像をそれとファードに識別させる。彼は相手の虹彩の色だけを理解していた。彼には馴染み深い、潤んだレモンイエローだった。ああ、風に連なる連中と同じだな。

ただ、この小さな人影は太くまとめられた糸束の内のどれか1本ではなくて、その糸束を元で結わえる、束にたった一つの結び目なのだ。それは、風の系譜の始まり。つまりこの小さな人影は、風の“精霊”で…

恍惚と物思うようだったファードはここで我に返り、愕然とした。馬鹿な、打ち消そうとして固まった。当の小さな人影が、既に押し止めていたのだ。虹彩の色だけしか残されていないはずの両目が、確かに微笑んでいる。ファードが筋道も何もなく得てしまった結論を、励ますように肯定していた。

「人は言葉で、上手に僕らを世界から切り出してしまった」小さな人影―風の精霊は続ける。「切り出された僕はフータというのだったね。君の相棒とおなじだ」

全くどうしたものか、その相棒の背の上にした事を、ファードは指摘されるまで失念していたのだ。今度は精霊自身が、言葉以前の不分明さを僅かばかり減らしたみたく、まだ輪郭が少し荒削りな、現れたばかりの様子で相棒がそこに在った。鞍越しに覗いてみると、フータも既に目覚めている。彼はまだあの大雲の中で、ひしめき合う狂風に巻かれたままだった。咆哮の形のまま歯を剥き出し、誇示するように大きく飛膜を広げていた。そして怒りに濁った黄色で、精霊のレモンイエローを凝視していた。

「風にあてられたんだね」

精霊は、一本の大木に茂る全ての葉一枚一枚が陽光を享受できるように、枝をそよがせてやろうとしたのだ。フータに向かっては、誰かの優しい掌が伸びてくるようだった。彼は避けようと思えば却ってこの待ち侘びていた慈悲に従順になる。フータは希望の

地へと船を運ぶ、命のために暑熱から寒冷への傾きをなだらかにする、そして何よりも彼に大空を許す、周囲を埋め尽くした祝福の鳴り音を聞いた。鼻の頭がその源になって、心地よい戦慄が頭から胸へ、フータの自在な各点を順々に震わせていった。その波は最後に尻尾の先へ押し寄せる、ぼふつと音を立てて末端の毛全てを逆立たせ、戦慄の波は反射もせず、体の外へ駆け去っていった。

ファードは鞍の上で、相棒を伝わっていった震えに揺さぶられた。前から進んできたうねりを追って後ろへ振り向き、相棒の尻尾の先が冪みたくなるのを見た。逆立った毛が次第に元通りになり始めて、呆然と顔を戻す。相棒が、長い付き合いても見せた事のないような、とても穏やかな目をしていた。思わず笑みがこぼれた。

「風はね」精霊の虹彩は、今はもう一對の同じ色を映し込み、益々澄み渡るようだった。「陸おかの何処にだって吹いている。だから僕は君たちを知っている。君たちだけじゃない、陸に暮らしているなら、どんな命だって僕の顔なじみだ」

真つ直ぐな道理が吹き抜けていく。その晴れやかな流れの中に佇み、ファードは聞き入っている。

「これが大事な荷物だね…うん、全く平気だ。君たちとおんなじで、呆れるくらい丈夫だね、この箱は」

精霊は全く不動のように見える、ファードはその虹彩から目を離せない。一方で精霊はいつものように行為を、この世界での静止、ファードらの惑星ひんざくを隈無く駆けて常在する事、その二項を満たすため自然遍在させて、不動でありながら俊敏にファードの背後へ回り込みもし、鞍の後ろの保護ケースの蓋を持ち上げて、請け負った荷の無事を確認してくれたりする。ファードはそれを聞いて安心した。あの大雲の中、積荷は双子と一緒に風と化したのだった。やむを得ない事だったにせよ、大事な荷物を前代未聞の実験にかけてしまったのだ。しかしその物質は、こうして何事もなく風の世界にある。

まだ戻りの行程もあるのだが、その未知も、まあ何とかなるだろう。「でもね、一番呆れるのは君だよ。ファード」

唐突に話題にされファードははつとした。小さく巻いた風が、飛行帽の覆いの上から耳をくすぐるようだった。精霊のあの特徴的な目が、今度は悪戯っぽく笑っている。

「本当は、御山を越えられなくても良かったはずだよ。でも君は一念を通じた。相棒を巻き込んだ。そして遂に、我が風の座まで来ちゃった」

突然、小さな巻き風の数が増えた。踊り、ファードの顔の周囲を巡り始める。

「ホント、君は変わった人間だよ」

ファードは言葉を探す事すら思い付けなかった。精霊に変人扱いされて、一体何と答えれば気が利いているというのだろう。それは、前人未到の経験だった。

「しょうがない頑固者とか、ただそれだけじゃないんだ」精霊が、人との会話の妙を心得ているようなのは何故だろう。「もつと根本的にね…君は古い。そう、とても古い人間だから、風の座に立ち寄る事が出来たんだ」

「古い…」気付いたら、ファードはその言葉を繰り返している。

「そうだね。深い深い受容と共感。古すぎて、大抵の人は開け方を忘れてしまった内なる小箱。君の小箱は開いている、故に飛行妖精、ましてや風、そんな人以外の存在と深く繋がれる。人がいつ、小箱の鍵を無くしてしまったのかは僕も知らない。神話と暮らしていた頃だって、それは限られた人にだけ許された持ち物だったのだから…」

精霊は滔々と語る。ファードは固唾を呑んで聞いている。

「合理性の時代とやらを生きるには、結構辛いんじゃないのかい？ 僕の旧友は」

出し抜けの親しい呼びかけだった。ファードの胸を強く打つ。

「でもね、嘆く事なんてないよ。人が好きな数字なんて、所詮は広い世界に向けた小さな覗き窓でしかないんだ。ほんの一部分しか見えはしない。君の方が、ずっと広い世界を知ってるんだ」

「それでいいんでしょうか？」はっとして、ファードは早口に質問していた。

「じゃあ、聞いてみようか」微風が磁力線のようなものにぴっと沿った、そんな気配があつて、精霊の口調が些か改まったのに気付く。「風は御すものじゃない、乗るものだ。君はそう言つたね」

「ええ」ファードははつきりと頷いた。

「それならば、君は今まで、一体どんな風に乗ってきたのかな？」その問い掛けは揚力であつて、答えは心の表面になんの思考の跡も無く、すつと上つてきたのだった。まるで与えられたような現れ方であつたが、それが上昇しようとして心の根元から離れる際の軽微な抵抗は感じている。だから、これはやはりファードの答えだった。しかも、これだけが風を？まえられたのだから、きつと正しに違いなかつた。ためらう必要な無く、彼はこう言つた。

「健やかな風です」

「ああ」

ファードは、肺に取り込もうとしたものの方が何かを一杯に吸い込んで、満ち足りた様子であるのを感じた。

「分かつてるなら心配ないじゃないか。いいかい、精霊はお構いなしなんだ。数字の模型が大成功を収めた、人間が僕らを忘れた、けれど精霊は死にはしないのさ。君の場合もおんなじだ。誰かの都合や周りの事なんて関係無い、君のいい風はいつだって吹いている。君がそれを忘れたり、捨て去つたりしてしまわない限りはね」

精霊の言葉は安らかな忘却の場所、時の暴力も決して及ばない、とても深い記憶の核へ直接届けられたようだった。

「健やかな風は良い関係の始まりだね。種子は飛び、森は育ち、無数の生の営みは織り目になって、掛け替えの無い意匠の素敵な織物を織り上げるんだ」

注意深く聞き取ろうと心持ち頭を動かし、ファードは相棒も、同じ様に耳を傾けているらしいのを見た。そしてこんな事を思い付く。ファードは精霊と対話している。実はもう一つの対話が、これと並

行的に行われてもいる。フータはフータで精霊から、何かここから持ち帰るべきものを得ている。

「生命いのちは分け隔てなく結び合う。だって君の相棒は、命懸けで背を貸してくれるだろう？」

だとしたらこの言葉は、フータには彼が主語になって聞こえているのかも知れなかった。フータが眼を細め、体を軽く揺さぶった。フールドも肩を揺らした。お互いに頷き合い、しょうがないな、といった感じの笑みだった。

「ああ、いけない。急ぎの旅を長く引き止めちゃったね」

フールドは心持ち居住まいを正した。自分の周囲から滑るように笑みが引いていく。会見の終わりを悟ったのだった。

「さ、二人とも。帰るべきへ帰ろう」蜘蛛の子らの門出を祝う、戻りの無い風は吹いたのだ。「君たちも健やかな風、結び合いの模様を織り続ける織工なんだ。吹いていかなくちやいけない。織り上げてきたものが、織り上げられるものが、きつと待っているから」

フールドは背に、フータは尻の辺りに、太い風が突然生まれたのを感じた。帆をかけた快速船になって、二人はぐうんと滑り出す。

遍く在るはずの精霊が、視界の外へ初めて後退した。フールドは慌てて振り返った。

「また会おうよ、二人とも」驚いた事に、小さな人影は実に人間臭く、手を振って別れを告げているようだった。「次はエレ様のお屋敷で会えるかも知れないね」

聞き違いかと思わず身を乗り出そうとして、フールドは進む方へ向かせた左の耳に、恐ろしい勢いで迫る圧力を聞き取った。顔を戻す、フータが警告の唸りを発した。進むにつれて、世界が無限の滑らかさで手触りあるものになっていく。無の変化の速やかに積み重なる彼方、あれが風の座の果てだと直感する。そこはまた、大気の海の始まりでもあった。吹かなくちやいけない、精霊がそう諭した、二人を待つ者たちが見上げるあの大空の始まり…

咄嗟に額のゴーグルに手を伸ばし、ぐいと引き下げた。飛行体勢



を取った上にも頭を低くして、備えた。予感した通りの重たい衝撃がくる。待ち構えていたのは、無尽の嵩の最も静かな表面だった。鏡のように静止していたそれが、急な攪乱に抵抗したのだった。

集中のため、ファードはいつも通り息を大きく吸おうとした。愕然として目を見開いた。自分が求めるものは周り一杯にあるのに、何故か息が吸えなかった。彼は空気の中で溺れようとしている、それが生体に拒絶されるような物質を含んでいるからではなくて、自身が別な何かを要求し、暴れているようだった。ファードは恐怖を感じ、鞍の上でもがいた。肺が酷く震える。激しく咳き込んだ。

その“呼吸”は、空気の中で全て無色透明の泡の群れとなった。それらは薄明へと流れ去る。二人が掻き乱した渦に壊れもせず、真っ直ぐな行き方すら乱されず、ただ速やかに、音も無く――

### 第34回

生身のものも、機械のそれも、たくさん目の目が不安げに空を見上げていた。ただし、こちらは弥祐やカラがいるのとは反対側、ファードとフータが山越えを果たして辿り着こうとした街、リアテリアのある側の山腹である。

人々は、企てが成功裏に運べばファードらが丁度その辺りに姿を現すであろう山の鞍部を、今は雲に隠されて見えないその“風乗りの門”を胸に思い描きながら、各自の見当で雲の底を睨んでいる。“風乗りの門”をずっと下った門前には、標高2000m付近まで車で上れる一山があつて、その高原のパーキングエリアには、一号登山道のあの場所よりもずっと多くの人々が集まっているようだった。

その多くは、山越えが成った瞬間を絶好の場所で取材しようとして待ち構える、様々なメディアの関係者たちだったが、一般人とおぼしき人々の姿も少なからず見受けられた。言ってしまうえば野次馬なのだろうが、今の場合彼らに、当事者を苛つかせるような態度は少しも感じられない。むしろ、全員が打ちひしがれた様子で空を仰いでいる。肩を抱かれ慰められながら泣きじゃくる者もあるし、この大山脈の何処かに住まうと言い伝えられる、女神エレナに一心に祈る者もいた。彼らこそ、感染力と死亡率、共に高い病の音無き爆発を足下の揺れに感じ、目下対処に必要な薬品の欠乏に見舞われている。その当事者たちなのだ。自分の明日を不安に思い、大切な誰かの無事を願い、そしてきつとまた元気になると信じて已まず、当事者の間でも事情は様々であるうが、躊躇いがちにも不安に駆られやってくる、やはり身の置き所が無いような思いをしているのは誰も同じだった。そしてそんな彼らが目にしたのは、彼らはテレビ局が急遽用意したモニターの映像によってだが、あの悪夢のような大雲の腹に飲み下されていく、風乗りと薬品の映像だった。落胆、生々しい

事故の瞬間に立ち会ってしまった事、無情な両手に握り潰されてしまっ  
まいそうだった。

「まだ復旧せんのか」

あるテレビ局の撮影隊チーフが、苛立った声でついさっき聞いた  
事を繰り返した。彼らは山の反対側での出来事を、ノイズに途切れ  
がちな映像で辛うじて確認した。息を飲んだ直後、山向こうからの  
映像が途絶えてしまった。あの雷雲は彼らから風乗りと薬品だけで  
なく、情報も奪おうとしている。誰にとっても、分からないという  
のは恐ろしい事だった。

「まだ無理ですね」機器担当のエンジニアが、ノイズばかりの画面  
を恨みの籠もった目で睨んでいる。「凄い影響ですよ。電波だけじ  
やなく、機器そのものもおかしくなりそうだ」

「しかしあの雲、案外早く崩れ始めてるぞ」その中年の男性は、肩  
に担いだカメラで抜け目なく空を観察し続けていたのだった。「ほ  
ら、見るよ。てっぺんの方がどんどん広がってる」

「ゴロゴロってんのも、少しは静かになってきましたかね」機器  
担当者が耳を澄ました。

「それだけ、まだ上の方じゃ気流の動きが激しいってことだ」上手  
くいかねえな、まったく。「山向こうの連中も、今はこっちの様子  
を知りたいだろう。早く現状復帰するのは歓迎だが…」あれほどす  
ばしこかった風乗りを？まえ、今も隠したままなのは、やはりその  
変化の激しさなのだ。

「あの連中も平気なんですかね？」商売道具からちらりと目を離し  
て、カメラマンが心配そうに聞いた。

「カメラ、ずっと構えてなくても平気だぞ。どうせここからの画は  
局に送れてないんだからな」そう言った後、チーフは更に苛立った  
様子で空を見上げた。頭上すぐには、はぐれた雲片が時折足早に過  
ぎていくだけの、穏やかな空が広がっている。そこを越して高く見  
据える先には、光の侵入を許さない、幾層にも不安のわだかまる空  
があった。

「平気でいてくれなきゃ困るんだよ…これであの連中にまで何かあったら、それこそ洒落にならん」

「おいつ、お前は戻れ！ 何度も言わせるなっ！」

「いやだっ！ まだ大丈夫です！」

撮影隊のチーフが高く見上げた、厚く雲に閉ざされた空での事だ。猛り狂う風に翻弄され続け、最早天地も分からなくなりかけていた山の斜面が、切り立つ余り雪の化粧も不味くなりがちなその岩壁が、全天から全地上へ、全地上から全天へ、彼らの世界全てを球に囲って折り重なっている。くるりと凹んで“風乗りの門”が彼らのすぐ近くに連なっている。風に負けないよう怒鳴り合うのは無駄な消耗だし、余計に苛立つが、お互いそうすることで正気を保っているらしかつた。この空には彼らも知らない風があつた。と言うのも、彼らは風乗りだつた。二人いた。

ゴーグルに耳覆いのある飛行帽、鼻まで隠れるよう引き上げたネツクガード、彼らも身を切る冷氣からの守りを第一としているから、顔立ちとは全く分からない。ただ体付きと声の高低から判断して、一人は成年の男性、もう一方は男か女か、とにかく子供のようだつた。それにしてもなんとという風の吹く、なんとという空なのか。風乗りには恐怖を感じさせる風、そんな風があつたことに二人は衝撃を受け、持ち直せないまま押され、返され、叩き落とされ、いつ岩壁に激突するか知れたものではない飛行を続けていた。そしてわけても凄まじい、上昇の大風が吹き始める。二人はこの場からの離脱もままならない、風の牢獄に遂に捕らえられた。しかしそれはそれで、二人に却って腹を括らせたようだつた。元々彼らは、ここで持っていたのだから。

「木偶が、大丈夫に見えるかよ！」男は一喝した。尋常ならざるこの空で、相手はずっと全身に全力を命じ続けていたのだ。誰の目にも明らかに、すっかり体が強張ってしまっている。「そんな硬い乗り方でこの風が捌けるか！ こんなんじゃ向こうだつて山越えなん

ざ出来っこねえ。待つてたつてしようがないんだよ！」

「なら、なんで親父さんは残るの？」声は幼くとも、調子には一歩も引かない気の強さが表れている。「これだけ風が巻いてる、隙を突いて飛び込んで、こっちに抜けてこないとも限らない。そう思ってるんでしょ！」

凶星だった。親父さんと呼ばれた男は、苦々しく舌打ちする。

この二人の風乗りは、ファードとフータのように重い仕事を請け負ったとか、そのような理由が有つてこの場にいるのではなかった。誰かに何を頼まれた訳でもなく、ただ単に自らの意志でこんな空にいる。何故か。

彼らも昨夜のHML社長の記者会見を、旧式の小型テレビで見っていたのだった。彼らはそこで、あの不吉な病に一刻も早く対応すべく、今の時期の山越えが敢えて企てられていることを知った。その計画は風乗りの虚を衝くよう二人を驚かせたが、より意外だったのは、山を挟んだ大陸の反対側に、彼らと同じ風乗りがまだ存在していたという事実だった。この二人の風乗りが生計を立てているのは、本来の居場所である空ではなかった。形だけでも風乗りとして辛うじて生き残ってきたのだった。山向こうの事情には詳しくないが、彼の地で風乗りがどのように扱われているか、自身と比べ推し量ってみてもまず差し支えはないだろう。山越えを試みようとしている東の風乗りも、きつと孤独なのだと確信できた。そんな連中が遠くの地で起こった災いのために、風乗り本来の役割を、知らぬはずのない危険を承知で果たそうというのである。自分も山へ向かうべきだと、命じられたように男は感じた。行ってどうする、何が出る、反論する声も同時に聞き取つてはいたが、それでもじつとしてはいられなかった。

「俺も山へ行つてくる」自分が風乗りのイロハを教えた、弟子とも言える相手に男は告げた。「今の山を単独飛行なんざ正気の沙汰じゃない。上手く合流できればよし、出来なくても、そんな風乗りに出迎えの一つも無いとあっちゃやっぱ悲しいからな。お前は留守番

して……」

「自分も行きます！」

椅子を弾き飛ばすように立ち上がって弟子は言うのである。男はしまったと思つた。全く誰に似たものか、この弟子は昔気質というか、とかく心意気にほだされやすい所があるのだつた。今の時期のフェンサリサは、遙かな昔から風乗りの通過を拒み続けている。彼自身、何故そうなのかの実体験はまだ無かつた。易しい時期にしていた山越えの経験は役立ちそうになく、山頂では自分の身すら持て余すかも知れない。ましてや弟子は、そもそも山越え自体まだ未経験なのだつた。連れて行く訳にはいかなかつた。

「いや、ちよつと待て」

と言ひ終わる前に、彼の頭の上でどたばた人の動き回る気配が始まる。階上は丁度弟子の自室で、風乗りの慣習に従い、仕立てるだけは仕立てさせておいた山越えの装備一式を、初めて袖を通せる期待に胸膨らませ引つ張り出しているのに違ひなかつた。男は慌てた下手をすると自分の方が置き去りにされ兼ねなかつた。ああ、ちくしょう。男も急いで準備するため、足を踏み鳴らして部屋を出て行った。

彼らは日付が変わる少し前によやく住み慣れた家から飛び立ち、今朝方早く“風乗りの門”をはつきり眺める所までやって来た。出発が遅れたのは結局不慣れな弟子が手間取つたからだし、男も面倒を見ない訳にはいかず、東の風乗りがどのルートで山を越えるつもりかなど、肝心な情報は知らないままの旅だつた。とは言つても、男は迷わず一直線にここへの進路を取っている。東側から病のある地域まで最短で行く場合、HMLが絡むなら向こうの拠点はフェンサリサ東支店だろうし、それならば東の風乗りは、“風乗りの門”を通つてこちらに訪れるはずだつた。

そのまま近付いていくと、眼下の高原に中継車とおぼしき大型車両を含む、多数の車が駐車している。ほれ見ろ、俺の言つた通りだろう。二人は集まっていた人々の真ん中に半ば強引に着地し、場を

驚かせた。弟子の方は注目を浴びて小さくなったが、男はさつさと鞍を降り、堂々と人を掻き分けて歩いて行く。彼が目指すのは情報だ、よし、あの男なら色々知ってそうだ。そうしてあの撮影隊チーフの腕をいきなり？み、拙速なのに上首尾で、知りたいことを聞き出したのだった。東の風乗りは、既にあちらの山頂に達している。アタックの制限は1時間。制止の声も聞かず、彼らは再び高みへと舞い上がった。

山頂付近は、ただ風の在る世界だった。風の置く曲率多様な軸群は時間の関数で、定義される空間は崩壊と新生を飽くこと無く繰り返す。そもそも根本の時間そのものが風なのだ、絶えず渦巻き、返し、突進し、風は精妙な一刻み毎にそれを押し流し続けている。その時計で1時間程も経っただろうか、男と弟子がこの素世界で質点として振る舞い続けられているのは、殆ど奇跡のように思えた。大声を出し合ってはいるが、それも限界に近かった。

男は弟子に向かい更に何か言おうとする。もしそれが発せられ、自身聞き取る機会があったのなら、これじゃまるでベテランの相方に声をかけてみたいじゃないか、彼自身驚いたことだろう。だが実際には、弟子に目を遣った男は言葉を飲み込んでいた。相手の様子が尋常でない、鞍の上で恐ろしく静かで、相棒の飛行妖精にも静止を要求しているようだった。この乱流の只中でホバリングだった？ 弟子の相棒と一瞬目が合った。背に負った荷物の鬼気迫る様子に、一番困惑しているのが彼だろう。弟子は身を低く伏せたまま、肩から上を精一杯ねじ曲げている。そうやって高みの一点を、ずっと凝視し続けていた。

「風乗りだあ!!!」

弟子は出し抜けに叫ぶと、今度は相棒に急上昇をやらせようとした。一体何を、男は怒鳴りかけ、結局は啞然とする。弟子は急に弾け飛び、自分の相棒を偽りの限界に縛り付けていた鎖をも、一瞬で断ち切ったようだった。ただ風が在るだけだった世界に、真っ直ぐな風穴が開けられていく。生身の砲弾が一直線に、分厚い風の層を

打ち抜いていくのだった。



### 第35回

弟子を追って見上げた先、世界は相変わらず激しく動揺し続けていたけれども、男は辛うじてそれを認めた。巨大な雲のドームの下で、はぐれ雲たちが心ゆくまで疾走の遊技に興じている。遮られ乏しい光、渦巻く雲片の紗、それでも黒雲を背景にその異質は目についた。見間違えつこない、あれは確かにスカーラル・シーの白く輝く毛並みだ。鳥肌が立つのを感じる。自制の手綱に苛立ちながら、男も弟子の後を追った。

弟子とは対照的に、男はきりきりするような思いで上昇する風の梯子だけを瞬間的慎重さで選び選び、目標へ近付いた。弟子が打ち抜いていった後をすぐに追えば苦労も少なかっただろうが、とても頭が追いつかなかった。もどかしく距離が詰まる、飛膜を大きく広げ下降してくるスカーラル・シーの姿が、次第に細部まで見て取れるようになってくる。希な長さで現れた上昇の梯子にきわどく縋って、男は一気に未知の飛行妖精の少し上まで出た。野生じゃない、鞍を負っている。その中央に力無く伏せてしまっている風乗りの姿、後端には荷を保護するとおぼしき、堅固なケースが固定されていた。状況を考え合わせ、あれが大切な薬品を収めたケースだと判断する。自身と弟子の有様を思えば、実に信じ難いことだった。山越えは果たされたのだ。

しかし、男の目に感嘆の色は無かった。この風乗りは、何故山頂を遙かに超えた、あんな高い空から落ちてきたのか。一瞬よぎった疑問も、今の戦慄にすぐさま掻き消されてしまう。山越えの風乗りは、意識を失っているらしかった。鞍上に安らかに身を横たえていた。空には今だって大風が雪崩れ噴火し、男も弟子も、抗いようもなく攪拌され続けていた。それなのに山越えの風乗りは、その力の抜けた手足さえそよとも揺らすことが無い。有り得ない場所に、完全な安らかさが見出されるのだった。山越えの風乗りは、その異常

の上にとゆたっている。

異様な安定はその風乗りを負った飛行妖精にも及んでいる。と言うより、この飛行妖精こそが異常の土台となっているように思える。飛行妖精も目をしっかりと閉じ、口許はきつく引き結ばれているように、苦しい様子に安否が気遣われた。そして静かの海を、鏡のように凧いだ空気の薄層が一枚一枚、無限に積み重なる無動の一筋を、鏡を音も無く優しく割りながら、撫でるように降下していくのだった。男と弟子を苛み続ける、大風の気の遠くなるようなうねりを、この飛行妖精は完全に擦り抜けて滑空している。その体は硬直し、あらゆる回転軸に対し不動、毛足の長く柔らかな体毛の一本すらそよがすことが無い。山越えの風乗りと相棒は、点として落下している。もしくは固まった時間を身に纏い落下している。ただ重力と飛膜が受ける抵抗の争うまま、言い表し難い様子で落ちている。

男の背筋を冷たい汗が伝った。この連中は本当に風乗りか？ この世のものならぬ悪霊、あるいは時間の途轍もなく古い記憶から今に滲み出てきた、太古の始妖精ではないのか。

「しっかりとしてください！」

甲高い弟子の声が耳朶を打ち、男は我に返った。弟子は未だに身じろぎ一つしない山越えの風乗りに、必死になって声をかけ続けていたらしい。相手の力無い様子に動転したのか、その沈黙に安否は気遣っても、不気味とは捉えていないようだった。何とかしてもつと相手の傍に寄ろうとしては失敗し、表情は見えないが、きつと悔し涙を滲ませながら繰り返して挑んでいるのが男には分かった。しかし度重なる失敗は、この酷い飛行環境のせいばかりではなかった。弟子の相棒の方はこの異様を察知している。危険を感じ、近寄ろうとしたがらないのだった。

「言うことを聞けえ！！」

風と相棒、双方をねじ伏せて、弟子は遂に静寂の飛行妖精の左後肢の先を、右手の指先で？んだ。グローブを嵌めた指先が毛並みに滑る、弟子はこんな時でも爪を立てないように再度力を込め、各指

の真ん中の関節だけをきつく折り曲げ、その真つ白になった関節が、ごついオーバーグローブを通して男には見えるようだった。弟子はしつかりと後肢を？み直し、右腕に力を込めた。そうやって自分と相手を引き寄せ、こちらの飛膜を相手のそのの下へ差し入れて、自分の身を介抱が必要な者の隣へ運ぼうとしているのだった。その時である、静寂の飛行妖精に固着していた時間が、一部ではあるが不意に剥がれ、風に散ったようだった。目許のみが生を思い出している。突然、その目が見開かれたのだった。

「危ねえ！ やめろっ！！」

男は咄嗟に叫んでいた。我が身を省みない弟子を窘めたのではなかった。男は見開かれた飛行妖精の目に心臓を鷲？みにされている。それは何も映してはいなかった、限界まで開かれ、晒されたのは、不気味な空ろな穴だった。これから起こると予感されたことに、男の肌は焼け付くようだった。

静寂が恐るべき咆哮を打ち放った。鼓膜を打つ様が余りにも激しすぎ、結局は無に帰するその始まりの音。二人はまだ、激しい目覚めと同時に彼の飛行妖精が爆発させ、吹き飛ばした巨岩の如き風塊の表面に、ちよつと触れただけに過ぎない。即座に飲み込まれる。その桁外れの衝撃に、他愛も無く弾き飛ばされた。

少しでも身構えられた、男の方はまだ良かった。弟子は全く不意に、しかも至近で爆発を受けたのだった。男と彼の相棒は、辛くも衝撃を受け流した。失速と紙一重ではあったが、故意の錐揉み状態でこの危機をやり過ぎた。必死の上目遣いで何とか弟子の行方を追おうとする。弟子は飛行を取り戻せずに飛ばされる、いくらでも纏い付こうとする周辺の風全てを引き千切り、ただ一直線に山頂へ落ちていく。男は思わず顔を背けそうになった。だが、山脈の奥から吹きだし続ける風が、この時期に風乗りを閉め出し続けてきたその風が、今は弟子とその相棒を救った。山頂の岩肌の直上で、重たい風の突き出しがずうんと来た。弟子たちはそれに横殴りにされた。男は今度こそ全く色を失った。2度も無防備のまま重たい風に打

たれたために、弟子たちは気を失っていた。相棒は様々な外力に転がされるまま、複雑に回転して落ちていく。弟子は全身を弛緩させ、その小さな体が鞍から放り出されそうになっては安全ベルトに引き戻される、時折胸や額を、強く鞍に打ち付けているようだった。男は叫ぼうとし、声が喉に張り付いてしまっているのを知る。頼む！彼は歯ぎしりした。落ちる前にどうか気が付いてくれ。

恐るべき飛行妖精が爆発させ続けている風の一応の圏外に、男はやっと逃げ延びた。鬼の形相で下方に目を走らせる。ずっと低い斜面、所々灰色の地が剥き出しになった岩棚の上辺りで、白い輝点が丁度滑空をし始めたように見えた。なんてことだ！あいつらあんな所まで岩肌に出会わずに落ちて、最後の最後で息を吹き返しやがった。弟子とその相棒の強運に驚嘆し、束の間頭の中が白くなった。だが突風に煽られて反転、飛行を再開した弟子たちの姿もくると掻き消えた。彼の方はまだ事件に巻き込まれている。爆発し続ける風が、あの飛行妖精の緩やかな落下と共に再び迫っている。背を向けた挙げ句に捕まれば、それこそ為す術がなかった。だから男は、敢えて限界と思える所まで爆心に近付いた。そして球状に広がる爆風の、その点を含む表面上をきわどく滑り、爆心の周囲を巡るように飛ばうと試みた。

「おいつ！」

男は風の爆流に逆らう無理を承知で、それでも出せる限りの大声で、山越えの風乗りに向かって叫ぶのである。

「目を覚ませ！相棒を落ち着かせる！」

人々の目から山頂付近を隠し沸き立ち続けていた雲塊の一部が、突然爆発四散した。高原のパーキングエリアを埋める多くの人々が、一斉にどよめく。

無数の雲片は最初重厚な滑らかさで球状に大輪の花を開きかけたが、すぐにそれぞれが一つとして同じでない酩酊の飛跡を描いて疾走し、やがて力を散じたみたいに薄く広がって、最後は消えていっ

た。まさに奇風だった。人々は初めてあの高い空を身近に感じ、呆然と見守った。

一時休んでいたカメラというカメラが、咄嗟に空へ向けられた。今は陽光に照らされるようになった高い斜面を背景に、雲片とは異なる三つの白い輝きを、彼らはすぐに見付けるだろう。

「……っ!!」

アウトドア・テーブルが大きく揺れ、見放されたように置いてあった通信機本体やマイクの束が、天板をごとくと踏み鳴らし、小さく回る。

弥祐は体の支えを求めて、咄嗟に左手をテーブルについたのだった。右手は耳許を押さえ、顔を強く顰めている。今、何かの爆発が重く頭蓋から脊柱の末端まで駆け抜け、殴られたように膝を折ったのだった。爆発は右耳に装着したままだったイヤフォンから、全く不意の鉄砲水のように突出してきた。そして一向に威力を衰えさせる気配が無い。彼女は衝撃の滝に頭から打たれていた。イヤフォンを、これまで雷障害のどんな恫喝にも取り合わず、頑なにつけたままだったそれを、遂に外してしまった。訳が分からずじつと見詰める。イヤフォンは彼女の掌で、燃えるように震え続けていた。

「おい、今のっ!」

横合いからの誰かの大声で、膝を折る様なことがあったばかりだから、弥祐は過敏に反応した。びくっとして振り返る。

「一瞬、何か映らなかつたか?」

少し離れた所に人だけが出来ている。山向こうからの映像を入れているモニターの前に、集まっている人々だった。撮影隊ばかりが陣取っているこの場所には、モニターと言っても確認用の小さなものしかない。このような人ばかりはあちこちに来ていた。今、弥祐の傍には誰もいない。カラヤ、二人をマスコミからさりげなくブロックしてくれていたスタッフたちは、様々な対応のために散ってしまった。彼女だけがただ一人、ずっと同じ場所から、同じ

空を見上げ続けていたのだった。

「何だった？」

「分からん。山頂を仰いだ画みたいだったけど……」

「ああ、くそつ。もうちょっとなだけだな」

遣り取りから察するに、あの大雲が、天頂までそり立つ電波塔でもあったあれが勢いを弱め始め、山向こうからの中継を再び受信できるようになっているらしかった。そう理解して弥祐ははっとする。テレビは復旧しつつある、では無線は。手の中にある、このマイクとイヤフォンはどうなのか。

「ファード……？」

イヤフォンは相変わらず爆発を吐き出し続け、滾るようにケースを激しく振動させている。弥祐は意を決してスピーカーの開口部を掌で包み、ぎゅっと握りしめた。途端にそこから肩の辺りまで、むず痒さが骨を走る。そうしてマイクの自由管を真っ直ぐに伸ばし、恐る恐る、その名を呼んでみたのだった。

「……」

でも、仮に彼女の声が届いたとして、彼はどうやってこの爆発のノイズに打ち勝ち、返事を伝えられるだろう。弥祐は俯いた。爆発のノイズ？　そしてふと、今自分が思ったことに引っ掛かった。

……そうだ。

無意識的には、既に理解していたのだった。彼女の勘の良さがそれを意識化した。この爆音は今までの、雷障害由来のノイズなんかじゃない。地面を見詰め、もっと詳しく思い直してみた。きっとそう、この轟音は雷雲の邪魔立てじゃない、無線機は正しく相手方の今も空の何処かにいる二人の経験を私に伝えている。

胸に強い痛みを感じた。拳を打ち付けられたみたいだった。じゃあ、この止まない爆発は一体なんなの？　なんでこんなに胸が痛いのに、懐かしさまで一緒に感じるの？　痛切な焦燥感心が、懐かしさはイヤフォンを握りしめる、彼女の右手が感じている。誰が自分をくすぐったく揺すぶるのか、彼女の骨は知っていた。どれほど

恐ろしい叫び声になったって凍りっこないよ、彼女の血は微笑んだ。だってしよっちゆうその体を撫でてあげた家族なんだもん、間違えっこないよ。ねえ…

「ファードっ!!」

弾かれたように、もう迷いも何も無く、弥祐はマイクに向かって叫んでいた。

「ファード！ お願い、返事して！ ファードっ!!」

誰もが気遣ってそっと思っておこうと思っていた少女が、突然狂ったように叫び出したのである。近くにいて気付いた人々は驚き、ぞつとした。弥祐には人の目が感じられない、感じられたとしても構ってはいられない。彼が助けを求めている。そして助けられるのは、名を呼ぶその人しかないのだ。

### 第36回

跳ねるように痙攣した。水中を必死に浮上していて、遂に水面を突き破った人のようだった。意識が消失点の彼方から跳躍し、内から弾け裂けたように、荒々しくまぶたを開いたのだった。

体は芯が燃え、それでいて噴き出す冷たい汗に、表面からは凍り付いていくようだった。訳も分からずにただひたすら酸素を貪っている。まぶたは開き、視覚は長い眠りの床から起き上がろうとし、けれどどつと雪崩れ込む光の重みに、再びくずおれた。

要するに、目覚めてからの暫くは人の生理機能があるだけだった。だがその声が、ここに彼を呼び戻したのだった。

『フールド！』

無性に懐かしい声だった。その声が自分の名前を強く呼んでいる。風乗りの靈感が再び血流に乗って巡り始めた、細胞の隅々まで速やかに行き渡る。風乗りの思考が、感覚が、有るべき所に一気に収束し、働き始めた。

水平と静止。フールドの平衡感覚はそう判断する。だが落ち着きを取り戻した視覚は、彼に明らかな落下も告げている。鞍は何かに激しく共鳴するように、強く細かな振動を伝えていた。この微妙な釣り合いが条件になる希な落下状態と、偶然呼び合い最大化したような振動は何か。フールドは理由を探ろうとした。

フータの様子を見ようとして偶然目の端に引っかけたものに、たちまち心を吸い寄せられた。しっかり見据えてみてもなお信じ難い。フールドとフータは、ずっと最後の風乗りではないかと言われ続けてきた。彼らは空で孤独なはずだった。それが少し離れた空を、距離と安定を保つためのなのか、何処か衛星が巡るのに似て見知らぬ風乗りが飛行している。彼らは極限の所で、この空を埋め尽くす乱流を捌いているようだった。そして時折こちらを振り返り、危うく体勢を立て直す、幾度となく繰り返す。ゴーグルと引き上げたネック



ガードが表情を隠し、ただ振り返るばかりで他に身振りはなく、相手の意図は判然としない。声を囁らし、何かを呼びかけているようにも見えた。だがそうだとしても、この狂奔する風に引き千切られぬ言葉など、人が持つはずもなかった。

『ファード！ 聞いているの？ 聞こえてるなら返事してっ！』

彼女の声ならば、先程からはつきりと聞こえていたのだ。やっとマイクとイヤフォンのことを思い出す。

「…弥祐か？」

分かりきったことを聞いている。自分は鏡に悪戯されてるんじゃないのか、そんな通らない考えに、ファードは抗い難く捕らえられてしまっている。

弥祐は鋭く息を飲んだ。ファードがすぐ耳許で囁いたようだったのだ。イヤフォンは今でも石の巨輪の大地を蹴立てる轟きを噴き出し続け、疎ましく右手で覆い塞がれてしまっている。無線を通じ、聞こえたのでは有り得なかった。

浮かびかかった馬鹿げた考えは、頭を強く振って即刻追い払う。彼の相棒は取り敢えず無事と言って良かった、それは彼女の右手が知っていた。ならばファードだって、きっとなんでもなかったのに違いなかった。

目を一杯に見開いて振り返り、飛び出しそうになった心臓に身を竦ませたのも束の間だ。彼女は再び山を、空を見上げた。異形の大雲は、既に雲頂部分から崩れ始めているらしかった。それはあたかも自然の摂理に反した自身の成長を償い、速やかに自壊しているようだったが、それでも“非ず”の立ち姿であるようなその様に、変化は先刻から少しも無かった。あの二人はこの世界から一度消えて、また元通り戻ってきたんだ。耳許で確かに聞いたファードの返事は、イヤフォンがこんな有様では彼の応答をどう受信したもののか心配する彼女をファードが気遣って、彼が風に囁かせたものなのか

も知れなかった。

弥祐は表情を引き締めた。そして応じた。

「そう、弥祐！」

相手はこの世界に再び生まれ落ちてきたばかりなのだ。そう理解した。落ち着いて、分かり易く。でも急いで。

「ファード。今から言うことを、良く聞いて」

『フータがさつきから助けを呼んでるみたいなの。お願い、見てあげて』

ただの眠りでは有り得ない、未だに不安の拭えない不可解な状態から急に目覚め、やはりまだ完全に頭が働いていなかったとファードは悟る。弥祐に教えられ、ようやくこの形ある全てを塵に返すような轟きの正体を知ったのだった。

フータは叫んでいた。自身を滑空させ続けるために通常飛膜の下に巻かせる風の、それに比したら無限大とも言える規模の風を、局所的な台風のように巻いていた。彼は常軌を逸した怒りに囚われ、こんな風に叫んでいるのか。否、彼からは何の感情も感じられない。フータは目覚め損なったのだ。双子は風になったあの時、明瞭に隔てられた両界の普段は跨ぎ越せない境を跨いで立ち、薄明として在ったのだった。その繊細微妙な在り方から、ファードの方は今し方本来両足をつけているべき世界へと転倒して、故に元通り目覚められた。然るにフータは未だ境の上で揺らいで居る。生態系の成員中でもとりわけ風に親しい風の妖精であるから、もう殆どフータなのに、精霊と細糸のような緒でまだ繋がっているらしかった。フータという個体の、一番奥深い核心はまだ風のままだった。言わば血の通った、小さな“風の座”であった。

見知らぬ風乗りが、突き放されまい、落とされまい、全力でその場に在ろうとして、痙攣的に跳ね回るような飛び方をしている。その狂乱の風の只中に在って、しかし自身は無動で落ち続けていることに、ファードは暫し感銘を受けた。“風の座”とは、この世界に

可能な風の吹き方が全て保存された、言わば虚空に漂う記憶なのかも知れなかった。記憶は風に吹かれることが無い。風たちを擦り抜けさせながら、気付かれることもなく、ただ吹かすだけだった。

フアードはアームレストから両手を放し、体を更に前へ屈めさせた。丁度フータの両耳の下辺りで、彼の頭を挟むように手を添えた。今の相棒を正気に戻す方法など、フアードとて知るはずはない。ただ、もし相棒が風の記憶を夢に見ているのなら、起こしてやればいいと単純に思っただけだった。毎朝目覚め、先ず身支度を整え、次にフータの様子を見に行く。嗅ぎ慣れたにおい、大きな窓から差し込む明るい光に、舞い踊る銀色の粒子。フアードは相棒の部屋に立っている。こいつ、今日は朝寝坊だな。彼は起床の言葉をかけた。いつもの何でもない文句に、伝えなくてはいけない言葉も添えて。「さあ、フータ。もう起きる時間だ」

ここは風の始まる場所だから、囁くだけでも充分だった。

「俺達は戻ってきた。山を越えたんだ。もう『馬鹿馬鹿しいこと』を、やる必要はないんだ」

もうとつくに声が噎れてしまっているのにも気付かずに、一体何度目か、男は山越えの風乗りの方へ振り返った。繰り返してきたことを叫びかけ、目敏く見付けたその変化に口を閉じる。彼を悩ますあの化け物の目が、落ちた光を二度と戻さない、底知れぬ空ろだったそれが、その表面に光を止め始めたようだった。上半分に光差す大空、下半分に眼下の複雑な地形が、おもちゃのように小さく、丸く歪んで浮かび上がってくる。その像が急速にはつきりしていけば、同じ速やかさで風の爆発も萎んでいった。山越えの飛行妖精が、二、三度瞬きした。何処か自問自答しているような仕草に見えた。そして男は、突然静寂に包まれていたことを知り、息を飲んだ。

風が無くなっていた。山越えの飛行妖精の爆発だけでなく、元から吹き狂っていた山頂の風さえも、嘘のように消えていた。編集したフィルムを見るような鮮やかさで、世界が入れ替わってしまっ

いたのだった。だが狼狽はほんの一瞬、したたかな男は、下界へ向け直ぐさま相棒を駆り立てた。もうこんな場所に留まっている理由など無いのである。風の牢獄から抜け出すのに、またと無い機会だった。

煮え立つ鞍が急に熱を失い始めたかと思うと、さざ波の余韻一つ残さず、ふっと凪いでしまった。ファードははっとして顔を上げると同時に、両手を放した。それまで進む時間すら擦り抜けて静止するようだったフータが、もぞりと頭を動かしたのだ。こちらに少し不自然な様子で、鞍を負っているからそれは仕方ないのだが、首を曲げた相棒と目が合う。いつものフータだった。目を頻りにしばたたかせ、少しぼんやりしたようなのはファードにも覚えのあることで、心配は無さそうだった。とにかく思ったままの、確証も何も無いにわか処置だったが、功を奏したようでファードは安堵した。フータもこの世界へ、自分の空のあるこの世界へ、無事に戻ってこれたのだ。

視界の端を矢のように掠めた影があった。難しい状況の中でもこちらと並んで飛ぼうとしていた、見知らぬ風乗りだった。易しい空を行くようにぐんぐん高度を下げていく。それでファードも、この高みが今は全くの無風であるという、驚くべき事実を知ったのだった。しかしこの奇跡も、長くは続かないと察せられる。風は一時的に呆けているだけなのだ。この空は、フータという特異な“風の座”の突然の出現と、同様の消失を経験した。ほんの束の間、局所的ではあってもこの場の風は特異な記憶に思い出され、そして突然忘れられたのだ。風は今、呆然と立ち尽くしている。けれど再びの狂奔に、もぞもぞと体を揺すり始めてもいる。

「フータ」ファードにはその様子が見える。見上げ睨み付けながら、アームレストに手を戻した。「今の内に下りよう。行けるか？」

フータはぶるぶると頭を振った。返事の代わりに、飛膜を広げ落下傘のようだった姿勢を前傾させ、何の不安も感じさせない加速で

下界を目指し始めた。

程なくして、重く低く、大波が岩に砕け散った。風が再び疾走を始め、偶然二つの大きなうねりとなり、破滅的に波頭を打ち付け合い、進って、静寂の空に再び無数の奇風の種をばらまいたのだった。ファードは肩越しに振り返った。たった今砕け散って生まれた風たちの、特に目敏い連中が、岩壁を軋ませ雪崩れ追ってくる。しかしフータの方が遙かに速い。もう一度なぶってやろうと膏にかかつて寄せ来る風を、軽やかに置き去りにした。難無く高度を下げ、風の無法な王国を後にした。

### 第37回

時折強く吹くことはあるものの、風はもう驚異ではない。ファードとフータは山を越え、越えた向こうの斜面をそこまで下ってきた。緊張は器の縁よりも高く盛り上がり、自らの性質で零れ落ちるのを拒んでいたようだったが、今は必要とされても安んじていられたのだ。ファードは、顔の下半分を覆っていたネックガードを引き下ろした。一度に大きく息を吸い、清冷な空気に肺を痛めてみた。束の間風を、空を、無心に満喫するようだった。

それぞれに峰を持つ、二つの山塊に挟まれた深く広い谷の間を抜け、氷河に沿って下るため右へ旋回した。フータの体が傾ぎ、普段は飛膜の死角になる下方が開けてくる。ファードはまたしても意外な物を目にした。その場所は、下る氷河が一時垂直に数十m落ちる崖の、丁度縁の辺りだとファードの記憶は言っている。背景の白い輝きに紛れそうになりながら、しかし見間違いようもないのは、ホバリングをしているらしい風乗りの姿だった。その輝く影が一つだったのなら、山頂で見かけた風乗りだろうと直ぐ合点がいっただろう。今は同じ影がもう一つ認められるのである、あれほど厚く重く着氷するようだった孤独が、完全に晴れはしないものの急に霧がまつわるくらいになって、ファードは徐々に背筋を伸ばし、その感覚に戸惑うようだった。

二つの影がこちらに気付いたようだった。高度を上げてくる。ファードは相棒に速度を緩めさせ、出迎えようとした。上がってくる風乗りたちも、ずっと左右に分かれつつ速度を合わせようとする。やがてファードを中央に一列に並んだ時、彼らは自然、ホバリングの体勢を取っていた。

「よお」

ファードの右手から気取らない挨拶がやってくる。男の声は囁れていた。体格から見ても、山頂で出会ったのはこちらの方だと判断

できた。相手もネックガードを引き下ろし、日に焼けた口許を晒してはいるが歳の程は分らない。自分と同じくらいかと、ファードは一応の見当を付けた。ただ、たった今声をかけられてみて、人の遣り取りの際には体裁とか、いい意味で細かいことには頓着しないタイプのようだった。好ましい気楽さが感じられた。

「今日、向こうから山越えしようとしたのは、あんたでいいんだよな？」

その打ち解けた物言いに、ファードは懐かしさを覚えた。それはかつて、大勢の仲間たちと働いていた時にはいつも感じられた温かさだった。相手のこの気安さが、彼の元々の性格に由来する以上のものであったことが、今はファードにも良く分かる。それでファードも、自然旧知の仲間に対するように答えていた。

「ああ、そうだ」

「かーっ！」

先程から持て余していたものを一気に吐き出すように、男は快哉を叫んだのだった。その気持ちの良い感情表現に、ファードも思わず頬を緩ませる。

「全くたまげたぜ！ あんた、本当に今の山を越えちまったんだな！」男はぐつと身を乗り出し、目でファードの鞍の後ろを指した。

「ってことは、そいつが運んできてくれた薬だな。相当に揺られたと思うが、大丈夫なのかい？」

一瞬戸惑ったのを気取られはしなかったかと、ファードは心配した。あの高い高い、事物の境が曖昧になるほど高い空の果てで、何に出会ったか、何を経験したか、それを彼は血流に、恐らくは相棒も同様に、思い返す必要も無い記憶として刻みつけている。ならば正直に、荷の安否は既に風の精霊が確認してくれている、そう答えれば良かっただろうか。いくら相手が風乗りであっても、この場でそれは穏当な発言ではない。あの狂風を越えてきたばかりの今、間違ひなく正気を疑われるだけだった。そう素早く思い巡らせ、カラに聞いたことを元に説明する。「10mの高さからコンクリの上に

落としても中身を守るケースだそう。きつと大丈夫だろう」

「そうか！」ゴーグルのガラス面が光って表情の一部が隠されていても、男が破顔したのは良く分かった。「あんたらも無事、荷物も無事。本当に良かったぜ」

「ところで、そっちは？」話の切れ目にすかさず聞いてみた。フードとしては、さつきからそれを知りたいと思っていたのだ。

「ご覧の通り、ただの風乗りさ」男は胸を反らす。仕草はおどけているようだが、その際の一笑は誇らしげだ。「こっちでまあ、細々と生き残ってきたんだが、テレビであんたたちのことを知ってね。出迎えようと待ってたんだ。全くひで空だったが、そいつがあんたたちを見付けてくれたよ」そう言っつて顎をしゃくる。

視線を左へ移す。もう一人の風乗りが、慌てた様子で頭を下げた。「こんにちは」少し上擦っていたが、ガラスが涼やかに触れ合うような、耳に心地よい声だった。

「そうだったのか」  
フードは感心と驚きが入り交じったような声で言った。例によって顔立ちは良く分からないが、声の感じといい、小柄で細い体といい、この風乗りはかなり若い。世界から自然死を宣告された後も、山の西側では風乗りが育っていた証拠だった。暫し、思いに喉が塞がった。

「色々世話になったみたいだ。礼を言うよ、少年」

男に対したのと同じ礼儀で、若い仲間へも親しみを込めて言っつつもりだった。それなのにどうした訳か、若者の表情が見る見る歪んでいくのである。ゴーグルに引き上げたままのネックガード、視線からはほぼ完全に遮られているのに、それでも手に取るように分かる変化だった。右手で男が笑いを爆発させた。それでフードは、手痛いミスを犯したのだと悟った。

「やっぱ間違われやがったか」笑いの発作の合間に何とか言葉を挟み込もうと、男は必死だ。「大将！ そいつは女だよ。いや、そんな棒っ切れみたいない体じゃなあ。無理もないがなあ」なお笑う。



「お、親父さんは笑い過ぎっつー!!」

声の表情まで蒼白になっっている。ファードは大いにうるたえた。

「ああ、済まなかった。勘違いして悪かった」

「あう…いえ、気にしないでください」少女は急に萎んでしまった。

「でも…」俯いてぼそつと付け加える。「今年でやっと16なんだし…成長だつて、まだまだこれからなんですからね」

最後の方は自分に言い聞かせているみたいだったが、ファードにもちゃんと届いていた。16歳というと弥祐と同じだった。急に身近に感じられるようだった。

「さて、それはそれとしてだな」ファードが顔を戻すと、男はまだ可笑しそうに、ゴーグルを持ち上げ目許を拭っていた。ファードの側頭部を掠め2本の熱線が鋭く走るようだが、受け止めても全く動じる風がない。「そろそろ急ごうか。リアテリアじゃ、あんたたちのことを首を長くして待つてるんだ」

「いや、もうちょっとゆっくりさせてくれ」後ろ手で背中の通信機を軽く叩きながら、ファードは言った。「山向こうの連中とちょっと話がしたい」

「通じるのか？」

男の懸念はもつともだった。一度限りの成功かも知れないが、風乗りに越えられないフェンサリサは遂に無くなった。けれど電波にとつてそれは、なお絶対の障壁だった。中継設備の整ったテレビの電波なら、山を迂回し伝えられる。個人利用のちっぽけな通信機には、無論出来ない相談だった。

「さつきは通じた」今、自分とフータが静かな喜びに浸っていられるのも、弥祐とのその短い会話に救われたからだろう。しかしその時、両者は既に山に隔てられていた。今はもう吹き崩されていくばかりのようだが、あの大雲が人為の電波を狩らんとする様もまだまだ過酷だった。「理由は分からないが」それでも、その通信はあったのだ。「それで目が覚めたんだ。山頂から結構下ったし、今度こそ使えないかも知れないが…」

「そうか」男は肩を竦めて見せたが、それだけだった。「それじゃ俺たちは先に行くよ。吉報はちよつとでも早いほうがいいからな」片手を上げて挨拶をした。さつと体を緊張させると、素晴らしい加速で遠ざかっていった。

「あの」少女が遠慮がちに声をかけてくる。ファードが振り向くと、勢い良く頭を下げた。「本当に、お疲れ様でした！」

「ああ、ありがとう」

「はい！」少女は声を弾ませ、直ぐにあつと慌ててネックガードを引き下ろし、ゴーグルも額に押し上げた。精悍な童顔と言おうか、実に希な案配で整った顔立ちが露わになった。「私はシユンフォン・ハヤカつていいいます。よろしければ、お名前を教えてくださいませんか？」

「ファールボグ・ファールディアだ。ファードでいい」

「ファードさん」ちよつと上目遣いに視線を外し、繰り返し、小さく頷いた。そして内気な嬉しさに少し弛緩させた全身を、再び緊張させる。「あの、リアテリアに着いて、お疲れでなかったらでいいんです」

「うん？」

「山越えの様子をお話しして頂けませんか？ 私、風乗りとしてはまだまだ半人前で、もつとたくさん勉強したいんです」

さつぱりとした前向きさだった。きつと素直な子なんだろうと思いい、ファードは気持ち良かった。「約束するよ。HMLの西支店は分かるか？ 取り敢えず、そこを訪ねてみてくれ」

「ありがとうございます！」一瞬ハヤカの目が見開かれ、黒い瞳がぱつと光を散らし、すぐ弓形に絞られた。「西支店なら分かります。後できつとお伺いします。よろしくお願ひしますっ！」早口に言うのと、もう一度深々と頭を下げた。

「さ、二一フォン。追いかけてよ」ハヤカは相棒に声をかけた。軽く一礼してゴーグルだけかけ直すと、先行する白い影を目指し、師匠と同程度、もしかしたらそれ以上の、鮮やかな加速で駆け始めた。

## 最終回（織り終わり・織り始める）

急に静かになった。傍の岩角と戯れて、時折風が鳴る。遠くでは眠たげな雷鳴。

『友達に会えて良かったね、ファード』

すると出し抜けに、弥祐が話しかけてきたのだった。良好な受信状態に先ず驚き、次いで弥祐の言い方に、小さな疑問を感じる。

『そっちにもテレビが来てるんだよ』飲み込めていないのが伝わったのか、種明かしをする弥祐は可笑しそうだ。『下の方に車がたくさん見えない？ そこから撮っててね、ずっと駄目だったのが、さつき映るようになったんだ』少しの間。『…びっくりしちゃった。だって風乗りがいたんだよ、ファードとフータの他にも』

「同感だ」ファードは短く答え、先程の弥祐の言い方を理解した。風乗りとしてのファードとフータの孤独を、無論彼女は知っている。今、彼女の言葉を聞いてむしろ思うのは、もしかしたら彼女は思うだけでなく、自分なりに二人の孤独を生きることさえしていたのかも知れなかった。弥祐自身、思い掛けない時と所で、知らずにいた友に出会ったのかも知れなかった。

『この無線、通じてるね』

「またしても同感だ」感慨深げな相手に、ファードも同じ心持ちで答える。

『もしかしたら、あのおつきな雲が鏡みたくなってるのかも。そう言うことって無いのかな？』

「どうだろうなあ」ファードは山頂を見上げながら言った。異形の大雲は、頂と根元が逆の方向に吹き流され、余計速やかに、地響きを立てて崩れるようだった。形状だけで言えば、平たくなりつつある姿は確かに鏡だ。だが雲が電波の反射鏡になり得るのか、それは知識も無く、ファードにも何とも言えない。

『それからさ、これは一番最初に言うべきだったんだけど』

「ああ」

『お帰りなさい、二人とも』

それは、例えば日課の短い飛行を終え、ファードとフータが風野商店に戻ればほぼ欠かさず聞いている、いつものお帰りなさいだった。ファードはふつと寛ぐようだった。「まあ、まだ仕事は終わってないけどな」自然、軽口を叩いていた。

『そうじゃなくてね』静かに首を振る気配が伝わってくる。『二人は私の知らない何処かへ行って、戻ってきたんでしょう？ だからお帰りなさい』

穏やかに降り続く春の雨に耳を傾けるようで、だからこそファードは驚き、より深くは感動しているようだった。一呼吸置く。慎重に言葉を選び、問うた。

「この無線、ずっと生きてたのか？」

『ううん』間の取り方にも、言い方にも、不自然さは少しも無い。

『二人がああ雲に吸い込まれてすぐ、一度だけフータの声が聞こえたけど…後はずっと雑音というか、爆音しか聞こえなかったよ』

弥祐がどのような筋道からそのような結論に至ったのか、ファードには皆目見当がつかない。ただ、彼女は何かを含んでそう言っているのではなく、何も知らないけれど信じている、そんな風に思われた。彼女は、ファードらが雷雲に吸われる様を見た衝撃から、単純に喩えているだけなのかも知れない。それとも彼女らしい心の働きで、何かを―？みに感じ取ったのかも知れない。ともかくも、精霊とのあの会話が、聞かれていた訳では無さそうだった。

物思いに黙ってしまうが、怪しまれた気遣いはない。丁度ファードの沈黙を余所にするようにして、イヤフォンの向こうで楽しげな遣り取りが始まったらしかった。弥祐はマイクを手で押さえているのか、内容は聞き取れない。時折、彼女の細い指を突破して、弾む気持ちはこちらにも転がりだしてくるだけだった。

『今ね、カラさんが戻ってきてね。お話ししてたの』硬い擦過音がしたかと思うと、弥祐が状況を伝えてきた。『とにかく無事で何よ

りだ、報告は君たちがこつちに戻ってきただけで構わないから、今日はリアテリアでゆっくり休んで欲しいって。カラさんがそう言うてたよ』

弾むものをわっと一遍に放り投げてきた時には、もう距離を感じさせない、いつもの快活でちよつと世話焼きな弥祐だった。彼女は続ける。

『私は学校あるから今日帰らなくちゃだけど、カラさんの言う通り、ファードはゆっくり休んで…』不自然な間が空く。あつと叫び声。

『大変！ 泊まるなら着替えどうしよう？ 私が持ったままだよね』大勢の笑い声がどつとマイクに割り込んできた。考えてみれば、この通信はマスコミも聞いているのではなかったか。今度はマイクが押さえられることはなく、そういった物の手配も請け合っているらしいカラの声を背景に、弥祐があわあわ言っているのはつきりと聞こえた。

どおん、高く、遠い彼方で、重い響きが一打ちされた。目を向けると、あの大雲が完全に横倒しになったように見え、その巨大な質量で、峰の連なりを槌打ったのかと思われた。同時に、イヤフォンに唸るような雑音が入り込んでくる。それは弥祐の声を小虫の羽音みたく変調し、急に遠くへ退かせた。

「そろそろ電波が届かなくなりそうだ」ファードは頃合いを悟り、急いで話しかけた。「弥祐、心配をかけて済まなかった。それからカラさんやハマモトさん、お世話になった人たちに、出来るようなお礼を言っておいてくれないか」

『うん、分かった』機器が鼻詰まりを起こしたみたいだ。不明瞭さで自分の言うこともこんな風に聞こえているんだらうなと思う。今はもう片方の耳を塞ぎながら話す、弥祐の姿が想像できた。『フータにもよろしくね。じゃあ…』

何かを言いかけていたらしいが、それきり弥祐の声も、唸るような雑音さえも、ふつと途切れてしまった。暫くはそのままで聞いている。単調で微かなノイズ以外、もう何も聞こえてきそうにはな

かった。

「弥祐がお前によるしくと言ってたぞ」

後ろ手に通信機のスイッチを切りながら、ファードは相棒に告げた。フータは眼を細めて小さく唸り、首を軽く縦に振った。

「よし、俺達も行こうか。仕事を終わらせることにしよう」

フータの飛膜の下で停止を保っていた風が、再び速やかな滑空のための巻き方に変えられた。ファードは遠退く山頂に目を遣った。険しい稜線を見、今も満ちて逆巻く風の大海を見透かし、今ではあれを越えたのを信じ難く思った。弥祐が言った、知らない何処かへ二人を運んだ大雲は、今はもう有り触れた、山頂に差し掛けられた長い傘になっていた。

不意に足下が騒がしくなる。覗いてみると大型小型、何台もの車が屋根を並べ、それに見合った数の人々の姿も見えた。様々なカメラのレンズが時折光っている。手の空いた人たちは、誰も彼もがこちらを見上げ、一心に手を振っていた。人波の上に小刻みに絶え間ない、そのレンズの反射以上に強いきらめきに、ファードは目が眩み吸い込まれそうになった。驚いている内に人波は後へ遠くなる。

今度はけたたましいクラクションの音だ、何度か繰り返し鳴らされる。ファードらは山脈の高い所を過ぎ、今は丁度リアテリアへ続く国道を近くに見下ろしつつ、飛んでいるところだった。その国道を一台のワゴン車がかなりの速度で駆けている。ファードが目を向けると、すかさずクラクションが繰り返された。ファードたちを追いかけているのだった。

ワゴン車はサンルーフを開け、二人の男が身を乗り出している。一人はテレビカメラを肩に担ぎ、一心にファードらを狙っていた。もう一人はそんな彼を腰の辺りで支え、疾走に伴う様々な悪条件の中、こちらも一心にカメラマンの安定を確保しようとしていた。何処か滑稽に通じる熱心さが感じられ、ファードは思わず苦笑する。だが、何気なくワゴン車の後にも目を遣った時、彼は目を丸くしたのだった。このワゴン車は長い車列の先頭だった。同じ様なマスク

ミの車両だけでなく、一般の車も多いようだった。あらゆる窓から、サンルーフから、強風に一樣に髪を乱した笑顔が見える。ファードが目を向けたと見るや、彼らも待つてましたとばかりに、歓声を上げ手を振り、口笛を吹き鳴らす者もあった。

「ありがとう！」

風に吹き流されるはずだった誰かの声が、偶然届いたようだった。ファードの耳は、この一言に偽りの無い気持ちを聞き取った。彼はようやく戸惑いから覚めた。自分とフータに、確かに感謝の気持ちが向けられている。そう思った時にはもう、ファードも大きく手を振り返していた。ばらばらだった歓声が一気にまとまって、空気を大きく震わせた。

やがて進路を大きく右へ変える時が来る。リアテリアへ真っ直ぐに行くならば、ここで国道から逸れるのは仕方のないことだった。意外さを第一波にして、後は落胆の波が次々と追ってきた。ファードとしても断つてから行けないのが心苦しかった。車列とのランデブーは終わりを告げる。後は、本当に一直線だった。

眼下に広大な穀倉地帯が広がり始める。伸び盛りの緑が、休まされていく土の色が、それらを縁取る野の花々の様々な色合いが、速やかに流れ去つても目に優しい。ファードとフータは、小さな町や村の上も幾度か通り過ぎた。そして出迎えられている、何処でも出迎えられている。

自宅の門の前、2階のベランダ、時には屋根の上で。長い坂道を上り切り、空が開けた所で。中央に噴水のある、煉瓦敷きの広場に集まって。または祝日の学校や役場、病院、多分そのような高い建物の屋上から。幾多の人々が、ファードとフータの通過を予想し、待つていてくれたようだった。慌てて家から飛び出してきたり、窓を開け放つ人の姿も大勢見かけた。陽気に何かを叫ぶ、かざしていた手を弾かれたように振りだす、でも誰もが、例外なく笑顔でいてくれた。ファードとフータは温かく出迎えられ、見送られるのだった。先を急ぐのが惜しまれた。けれどその気持ちはぐっと抑え、応

じる態度は真摯に、二人は飛行を続けた。

健やかな風が空を渡って行く。

彼らが関係の、事物を織り目に織り上げていく営みの、いつもその端緒だというならば、結局、彼らは常に孤独だろうか。

大気の厚い層がゆるゆると洗い、石やコンクリ、ガラスの膨大な堆積物を、少し漂白してしまったようにも思える。彼方にリアテリアの街が、遂に見えてきたのだった。

その時街の高い所、一番高い観光電波塔の丁度先端辺りに、青空の薄白さが不意に、瞬き一つの間凝縮したように見えた。その白い輝点はひらひらと、塔の先端をくすぐるように舞っている。かと思うと、巨大な引力に巻き込まれるようにしてぐうんと旋回加速、こちらを目指して、転げるように飛び始めた。

ハヤカと名乗った、あの小さな風乗りかも知れないな。

その飛び姿に、自然と笑みがこぼれてくるようだった。

(了)



## 最終回（織り終わり・織り始める）（後書き）

8ヶ月にわたる長い連載でしたが、無事終了することが出来ました。最後までお付き合いくださった方々にお礼申し上げます。連載終了に合わせて感想などをたまわれるようにしました。後学のため、よろしければ思ったことをお聞かせください。後学ではありません、また別の作品でお目にかかりたいと思います。

### 【文書データ】

（設定作成）：2009年2月～3月

（プロットを兼ねた下書き作成）：2009年3月～5月、400字詰め換算約288枚、87575文字

（本文執筆）：2009年5月～2010年4月4日（日）（途中2ヶ月ほど中断有り）

（本文見直し終了）：2010年7月6日（火）

本文最終枚数400字詰め換算550枚、179440文字、升目を埋めた割合81.6%、全38回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8035k/>

---

風はあるから ~風の双子の物語~

2010年12月10日21時40分発行